

教養・文化論集

第3巻 第2号 (通巻第5号)

講演

シンポジウム「観光立県と人材育成」

基調講演「観光学は秋田を変える」	小 道	沢 端	健 忠	市 孝
パネルディスカッション「観光の振興と人材の育成」	小 泉	小 泉	正 健	史 市
	小 本	山 口	茂 久	樹 義

鼎談「中国との関係について」	小 泉	福 岡	政 行	好
	石 川			

男と女の生病老死

テレビドラマに見る生き方、死に方	内 館	牧 子
------------------	-----	-----

2008年 日本の国はどうか	福 岡	政 行
----------------	-----	-----

資料紹介

セミヨーノフ連隊叛乱顛末

(メシチェルスキーよりキセリョフ少将への書簡)	松 村	岳 志
-------------------------	-----	-----

論文

Comparative Studies on the Masked and Costumed Visitors: The Formative Background to the Rituals of the Namahage Type	平 辰	彦
--	-----	---

実践報告

地域ぐるみの健康づくり活動機運を盛り上げるために行った

住民聞き取り調査と報告会の実施効果(下)

横手市増田町西成瀬地域における「健康の駅」活動の普及に向けた取り組みを事例に	高 橋	和 幸
	願 法	廣 典
	佐 藤	学
	松 川	敬

論文

地球温暖化防止策による地域づくり

秋田県内の取り組みを検証	奈 良	洋
--------------	-----	---

研究ノート

秋田県の高齢者施設および福祉施設における栄養支援の実態調査

	法 吉	千佳子
--	-----	-----

2008年3月

ノースアジア大学総合研究センター教養・文化研究所

目 次

講 演

シンポジウム「観光立県と人材育成」

基調講演「観光学は秋田を変える」.....	小 沢 健 市 (1)
パネルディスカッション「観光の振興と人材の育成」	道 端 忠 孝
	小 泉 健
	泉 正 史
	小 沢 健 市
	本 山 茂 樹
	田 口 久 義 (17)

鼎談「中国との関係について」	小 泉 健
	福 岡 政 行
	石 川 好 (31)

男と女の生病老死

テレビドラマに見る生き方、死に方	内 館 牧 子 (59)
------------------------	--------------

2008年 日本の国はどうか	福 岡 政 行 (81)
----------------------	--------------

資料紹介

セミヨーノフ連隊叛乱顛末

(メシチェルスキーよりキセリョフ少将への書簡)	松 村 岳 志 (99)
-------------------------------	--------------

論 文

Comparative Studies on the Masked and Costumed Visitors :

The Formative Background to the Rituals of the Namahage Type...	平 辰 彦 (105)
---	-------------

実践報告

地域ぐるみの健康づくり活動機運を盛り上げるために行った

住民聞き取り調査と報告会の実施効果(下)

横手市増田町西成瀬地域における「健康の駅」活動の普及に向けた取り組みを事例に

.....	高 橋 和 幸
	願 法 廣 典
	佐 藤 学
	松 川 敬 (123)

論 文

地球温暖化防止策による地域づくり

秋田県内の取り組みを検証	奈 良 洋 (129)
--------------------	-------------

研究ノート

秋田県の高齢者施設および福祉施設における栄養支援の実態調査

.....	法 吉 千佳子 (143)
-------	---------------

[講演]

ノースアジア大学 総合研究センター 国際観光研究所主催
シンポジウム「観光立県と人材育成」

基調講演

「観光学は秋田を変える」

講 師	立教大学観光研究所長・観光学部教授	小 沢 健 市
挨 拶	学校法人ノースアジア大学理事長・学長 本学総合研究センター長	小 泉 健
司 会	ノースアジア大学総合研究センター副参与	橋 元 志 保
日 時	平成19年10月13日 午後1時～	
会 場	ノースアジア大学 40周年記念館 講堂	

橋 元 本日は、ノースアジア大学総合研究センター国際観光研究所主催のシンポジウム「観光立県と人材育成」にお越し頂きまして、誠にありがとうございます。シンポジウムの開催に先立ちまして、学校法人ノースアジア大学理事長・学長 小泉 健先生よりご挨拶がございます。どうぞご静聴下さいませ。

小 泉 ご紹介頂きました、小泉でございます。この総合研究センターのシティカレッジは、日頃から皆様の大変なご支援を頂いておりまして、心から感謝申し上げる次第でございます。シティカレッジは、本年で満3年になります。最初は頼りなかったのですけれども、何とかここまで来ることが出来ましたのも、皆様のご支援のおかげだと、感謝致しておる次第でございます。

今日は立教大学の小沢健市先生によりまして、基調講演がでございます。観光学で大変権威のある方でございます、「観光学は秋田を変える」と題しましてご講演いただきます。その後、小沢先生を交えまして、私も入りますが、数名のパネリストの先生方によるディスカッションということになっております。よろしくお願い致します。

今、東北地方は、秋田県もそうでありまして、東京都、関東地方とは違っておりまして、経済的にはまだまだ疲弊している状況です。人口減少、少子高齢化をはじめとする問題が山積しております。秋田県が、東北地方が、これからどうなってしまうのかということにつきまして、私はそういう専門家ではございませんけれども、憂えている一人でございます。しかし、秋田県をはじめ、東北地方には、まだまだ大変素晴らしい観光資源がありますし、開発されていない自然もたくさん残っています。その中で私達がこれからどう進んでいったらいいのか、進むべき方向を先生方に語って頂けるのではないかとこの風に、私は思っております。厳しい現状の中で私達がどうあるべきか、ぜひ具体的施策をご教授頂ければと思っております。そして、皆様共々、考えていきたいと思っております。

最後になりますが、本学の総合研究センターは、皆様方に支えられてここまで来たわけでありまして、遠方からも先生方がお見えになって下さりまして、本当に感謝致しております。今日の講演会、シンポジウムを設営してくれた総合研究センターの教職員スタッフに御礼を申しまして、簡単ではありますが、開会の挨拶とさせていただきます。本当にありがとうございます。

橋 元 小泉学長、ありがとうございました。それでは続きまして、来年度、開設予定の本学法学部観光学科のご紹介のDVDを上映させていただきます。15分程ですので、どうぞごゆっくりご鑑賞下さい。

DVD 上映

橋 元 それでは続きまして、基調講演「観光学は秋田を変える」の講師でいらっしゃいます、小沢健市先生をご紹介させていただきます。

小沢先生は東洋大学大学院経済研究科博士課程を修了され、経済学博士を取得されています。その後、東洋大学短期大学観光学科専任講師、助教授、教授を歴任され、現在は立教大学観光学部教授および観光研究所長を務めていらっしゃいます。また日本経済学会、日本観光学会、日本国際観光学会でもご活躍され、ご著書、ご論文も『観光を経済学する』『観光学』『tourist

の経済モデル：新しい消費者理論と教育の経済学の観光への適用』をはじめとして、多数執筆されていらっしゃる。まさに観光研究の分野の第一人者と申し上げて、差し支えない方だと思います。

本日は「観光学は秋田を変える」と題しましてご講演頂きますが、その豊富な知識とご経験から、秋田県の観光に対する率直なご見解、また有益なご提言を頂けるものと思います。それでは、小沢先生どうぞよろしくお願い致します。

小 沢 本日は、皆様お忙しい中おいで頂きまして、ありがとうございます。それから、理事長・学長先生でいらっしゃいます小泉先生、法学部長の道端先生、関係者の方々、スタッフの方々に厚く御礼申し上げます。

今日のこのテーマについて、道端学部長から「これでいかがでしょうか」とメールを頂いたのですが、どっきり致しました。「観光学は秋田を変えられるのか」と思ったのですが、「それなら変えてみようじゃないか」という気持ちになりました。「やれないなあ」ということをやってみるのが楽しい。それは観光客に通じるかもしれませんし、あるいは何かのフロンティアに通じるかもしれないというのがあります。好奇心が旺盛なところもあるのですが、与えられたテーマで「観光学は秋田を変える」、あるいは「変えられるはずだ」そのためには「どうしたら変えられるだろうか」というところをお話ししていこうと思っております。

これをご覧になってお分かりかと思いますが、実は今日の講演タイトルを頂いた時に、秋田県のことをインターネットで調べてみようと思ひまして、そうしたらこういうものが出てきたんです。(パワーポイントを使用しながら、説明)(スクリーン) 左側にあるのは、秋田市が作成した報告書だと思ひますが、その表紙になっているものです。それで、(スクリーン) 右側は秋田県の地図でございます。これをご覧になって頂きますとお分かりになるかもしれませんが、秋田県は南北に長くて、また東西にも広いという感じでしょうか。それから、観光地は山側の岩手県、青森県、あるいは南にあります山形県との県境、そういった他県に接しているようなところに多くある、と言ってもいいくらいだと思います。もう一つは海側に面したところに位置している。これは、これから何かを考える上で大事なポイントになるのではないかと、しばらくこの地図を眺めておりまして感じたわけです。今日はその一端をご紹介しようと思ひて参りました。

私はかねがね、「観光はインパクトである」という風に思ひてきておりました。最近は特にそういう要望と申しますか、「こういう内容で、それに近いようなタイトルで原稿を書いて頂けませんでしょうか」という依頼を、市町村であるとか県であるとか、そういうところから頂きます。それで、観光には3つくらいインパクトというものがあるのではないかと申しております。そのインパクトの中でも、特に最近観光を手段にして、と言ったらいいのでしょうか、その地域の活性化のために観光を役に立てたい、あるいは観光で地域を活性化したい、その様にお考えのところ、かなりの地域であるのではないかと申します。

どこの都道府県へ行ってもそうなのですが、観光立国を推進するための法律（「観光立国推進基本法」）が出来上がって、今年の1月1日に施行されたわけですので、その法律に従って観光を何とかしたいと考えている。それも今までとちょっと違って、日本人が海外へ行く、いわゆるアウトバウンドではなくて、海外から日本へ人々をお招きしたいという意味合いが強いのではないかと申します。他所から来てくれる人の力を借りて、何とか経済的にも発展をさせ

たいというところが、最近の傾向ではないかと思えます。

それからもう1つ、我々はよく聞きますけれども、イノベーションという言葉が第二次産業で多く使われているように思われます。もちろん、これは第一次産業にもあるわけで、品種の改良であるとか、そういった意味でイノベーションが起きているわけですが、第三次産業、特に観光産業におけるイノベーションはいったい何を意味しているのだろうか。あるいは、そもそも観光産業におけるイノベーションとは存在するのだろうか。例えば、飛行機が速いスピードで飛べるようになる。これは第二次産業のイノベーションのおかげだろうと思えます。けれども、それを利用するのは多くの利用者といいますが、観光客が多いわけです。それを考えますと第二次産業で出来上がったものを、観光産業はただ使っているだけではないのか、と考えられないところはないわけではないのですけれども、それでも観光産業におけるイノベーションというのは、存在しているのではないかと思えます。あるいは、それが我々に与えられた、これからの重要な課題ではないかと思っております。

今日は、2番目に観光産業におけるイノベーションについてお話ししたいと思っております。それから3番目は、観光教育と人材育成、特に私達の観光学部で行っている観光教育と人材育成について若干ご説明をして、最後にまとめてみたいと思っております。

本題に入る前に、これは時々使わせて頂くのですが、2004年に出版されたハワイ大学のジェームズ・マック先生がお書きになった本があります。その先生の授業を3年前に受けさせて頂いたことがあります。1年間ハワイ大学に行っておりました時に、たまたま日本人の大学院生から「こういう先生がこういう授業をするようですよ」ということを聞きまして、私は3月に帰らなければならなかったものですから、1月から2ヵ月半くらいでしょうか、その間に授業に出席させて頂きまして、お話を聞きました。この先生は何年か前に、観光に関する論文を書いた先生方の中で素晴らしい論文を書いたということで、アメリカでも権威がある賞を貰っている方です。その先生が経済学部の授業の中で、「観光と経済～観光の経済学を理解するために～」というタイトルで学部の学生に講義をしていました。なかなかユーモアがある、楽しく教えてくれる先生でした。

そして、その本の13章であったと思いますが、「観光と自然環境」という章がありまして、誰が書いたかは書いてありませんでしたが、ツーリストモットーというものがあるらしいのです。これはこれからお話をすることとは違うのではないかと私は思うのですが、こんな風に書いてありました。「観光客は何も取らないが、写真だけを撮る。」後半は当たっているかもしれませんが、本当に何も取らないだろうか。何か取ってしまうのではないだろうか、というような気がするのです。それから、「何も残さないが、足跡だけを残す。」とんでもない、足跡以外にも何か残してくるだろう。例えば、ゴミを残すのではないだろうかとか、色々考えるわけです。それから、「何も殺さないが、時間だけを費やす。」そうでもないでしょう。何かを殺しています。例えば、野生生物であるとか、動物であるとか、動植物を殺しています。ある名目の下にスポーツとして行われていることもあります。それから、時間だけを費やすというのは当たっているとは思いますが、ただ「何々だけ」というのを取ればいいだけだとは思いますが、もしかしたら前半は当たっていないのではないのでしょうか。

もしこれが本当だったら、観光を使って地域興しをしようとは思わない。何かがあるから、観光を使おうと、あるいは観光の力を借りて地域や町を何とかしたい、より良くしたいと思っている。そのためには、前半の部分はひょっとしたら嘘かもしれないと思ったわけです。

たぶん、これを書いた時、考えた時は、1950年代とかそういう年代であったのかもしれませんが。いわゆる観光がクリーンで非常に良いものであり、これはもう諸手を挙げて賛成だという時期であったのではないかと思います。最近はずしもそうではないわけです。前半の部分、何でも取ってやろう、何でも残してやろうとか、あるいは何か自分でやれることがあったら外から持ってきたい、時には法律に触れるようなこともする人がいるというようなことになってしまふわけです。このように考えると、おそらく観光はそれによって何らかの影響がどこかに出るのではないかと思います。

では、どういうところに影響が出るかといいますと、ここにも書きましたように3つくらい考えてもいいのではないかと、いう風に思っております。1つは経済的なインパクト、もう1つは社会文化的なインパクト、それからもう1つは最近やかましく言われている環境へのインパクトです。これらのインパクトがあるからこそ、この部分に着目して何かに役立てようと考えている人が多いのではないかと思います。

ここにも書いておきましたけれども、観光による経済活性化に期待を寄せているところがほとんどだろうと思います。それは秋田県が出した『秋田花まるっ観光振興プラン』の中の文章ですが、「観光は地域経済への波及効果が極めて高く、裾野の広い産業とされています」と、このように書かれていました。「言われています」というのはきっと誰かが言ったんですね。でも、本当かどうか確かめたのか。本当に広いのだろうか。本当にそれほど経済効果があるのだろうか。これを考えてみる必要があるのです。あるいは、これを実際に確かめてみる必要があるのです。誰かが言ったのであればそれが正しいとは言えないのです。実際に確かめてみる必要があります。自分がよって立つ足下をしっかりと踏み固めておかないと、「本当に言われています」と言ってもいいのかわからない。もし私でしたら、「観光は地域経済への波及効果が極めて高いと言ってもいい」と、そんな風にも書くとします。これは断定しているわけではないです。この文章を書いた人が持っている見解でもない。「言われています」ですから、どなたか別の方がいて私もそう思う、という風な程度で書いたのではないかと思います。

でも、実際にこれを確かめるとそうなのか。多くの都道府県はそれを確かめようとしています。国も何年か前にやりましたし、私もメンバーに加わってWTO型のツーリズム・サテライト・アカウントというものを日本で初めてやりました。これはJNTOが中心になってやりましたけれども、その時に問題になったのはここです。ここには文章でさらっと書いてありますが、裾野の広い産業とは本当だろうか。どのくらいの産業がここに含まれるのだろうか。『日本標準産業分類』という本がありますけれども、観光産業は、大分類全部が入ってしまうのか、あるいは中分類からいくつか、小分類、細目、という具合に段々と広がっていくわけですが、その中でどのくらいの産業が観光に関わりを持つと言われるのだろうか。

1つ考えなければいけないのは、ここで言っている裾野の広い産業というのは、どちら側から、産業側から捉えているのか、あるいは観光客の側から捉えているのかということです。先程、私が言いました『日本標準産業分類』では、どういう生産物を生産しているのかによって産業を区別しています。でも、観光産業と我々が呼ぶ場合には、多くの場合観光客の視点から見ようとしています。つまり、生産物ではないのです。そこで何が生産されているのではなくて、観光客は何を買ったか、何を必要としたか、そこから産業を分けようとしています。そうすると、例えば観光客がたまたま病気になって、お医者さんにかかったので、お

医者さんは観光産業となる。普通、我々はそうは思いません。でも、そうになってしまう。つまり、お医者さんが提供してくれるのは医療サービスですけども、その医療サービスは観光サービス、あるいは観光の生産物として考えると不自然ではないだろうか。もしかしたら、当たり前のことなのかもしれないですけども、我々は得てして、誰かが言ったことに惑わされる場合が多いのです。

実際に WTO 型のツーリズム・サテライト・アカウントでは、12、13の産業しか取り上げられておりません。本当に僅かです。日本の場合にはもっと広く考えています。WTO 型のツーリズム・サテライト・アカウントを国連の統計委員会は認めたわけですから、世界標準なのです。その世界標準を使って、計量してみると波及効果は小さくなってしまいます。そんなに高いとは言えません。これは日本の国の中で解決すべき問題です。つまり、世界標準に合わせてもう一度考えてみるとか、あるいは今まで日本の国内でやってきたようなやり方に基づいてこれからも計量していくのか。そのためには観光産業というのはどういう産業であるのか、もう少しはっきりさせないといけないという課題がまだ残っています。

それから (スクリーン) 左の方を見て下さい。こちらの方には、これも観光振興プランからですけども、色々なことが書かれています。観光振興が地域経済の活性化に繋がるとか、アンケートを採ったようなのですが、これは後ほど私も話をしたいとは思いますが、二次交通の不備、それから観光施設のホスピタリティの不足が挙げられています。こういう点で秋田県はまだやるべきことがいっぱいあるというような報告書の内容です。しかし、日本のホスピタリティというのは、私は今でも最高だと思っています。もう変えなくてもいいじゃないかと思ってるくらいです。どこの国に行ってもホスピタリティがないので、サービス料を取らないで欲しい、チップを取らないで欲しいといつも思うのですけれども、日本のホスピタリティそのものは明らかに優位に立っていると思います。ただし、ホスピタリティに直接関わりを持つようなマネジメントの方はアメリカ、ヨーロッパの方が進んでいるかもしれません。そういう点をこれから学生諸君は一生懸命勉強しなければいけないと思うのですが、ホスピタリティに関しては勉強する必要はないのではないかと考えているくらいです。非常に素晴らしいホスピタリティを日本は提供しているのではないかと考えております。

それからもう1つ、別の問題がここに書いてあります。観光客、宿泊客とも目標値と現実の乖離がみられる。これは結果から見て仕方がないことなのですが、何故その乖離を生じさせてしまったのか、まさに見直しが必要です。見直しではなくて、反省と言った方がいいのかもしれませんが、何故そういう予測が出て、それが当たらなかったのかということも、もう少ししっかりと見る必要があるかと思えます。それから、行政の地域や観光産業に対するサポートの実現等々と書かれているのですが、これは現在も、また過去からもやってきたことではないかと思えますので、私は少しやり方を変えてみてはどうかと思っています。とりわけ財政上も厳しい状態にありますので、その厳しい中でどういう風にすれば最も効率的にサポート出来るのか、もう一度考えるべきだろう、あるいはそういう時期に来ているのだらうと認識しております。

先程、観光産業は裾野の広い産業であると言ったのですが、本当にそうでしょうか。変な話ですが、(スクリーンを指して) ツーリストはこれを全部消費しているのです。もちろん、人によってはこの辺を消費しなかったり、こちらを消費しなかったりということはあるかもしれませんが、多くの場合、この全てで、経済学的には財の分類が終わってしまうのです。資源の分類です。つまり、分類上はほとんどあらゆるものを消費しています。個別になると、例えば、

先程お話ししました医療サービスのような問題も出てきますけれども、こういうものを全部消費していることは事実なのです。ですから、それだけ裾野が広いといえば、広いのです。

しかし、実際にはツーリストの内でのどのくらいの人がどこまでを消費しているかということになると、これもまた非常に難しい問題があります。とりわけマーケットが中心の経済では何が大事かと言いますと、市場で取引されないといけないということです。取引されないとその企業の売り上げにもならないのです。市場で取引される財・サービスというのはどういうものがあるのか、どういう産業がそこには含まれているのだろうか、そういうことをしっかりと見ていく必要があります。

これは（スクリーン）真ん中にあるのが一番古いもので、その種類の経済的な波及効果を求めるために色々な方式や方法があるのですけれども、まとまったものでは最も古いものであると言っても良いと思います。イギリスにサレー大学というのがあります。そこの先生をしておりました、ブライアン・H・アーチャーが1977年に書いた、大学叢書のようなものです。その何冊目かですけれど、これが観光の波及効果を考える上での理論的なバックグラウンドを提供してくれた、最初の書物ではないかと思います。その次はアメリカの人が書いた書物ですけれど、地域の経済をどんな風に計画していったり、何かをやったりすることによって、この地域の経済活性化がどう達成されるのか、そのための分析手法等が示されています。これは比較的最近の書物です。これもなかなか良い本だと思います。ただ、ここには観光のインパクトと書かれております。ですから経済的な効果だけではなくて、先程言いました、社会的、文化的影響、あるいは環境への影響、そういうものが全部含まれていると言えます。読みやすいので学生諸君は必ず読んで欲しいなと思う本の1冊です。

では、どういう具合にして波及効果が出てくるかと言いますと、まず観光客が支出をします。それはある産業、ある企業の売上高になります。その売上高の中から所得が生み出されたり、支払われたり、新たに雇用が生じたり、税収が増加したり、あるいはその企業の新規投資が行われたりということが最初の効果として出てきます。その次に、それが他の企業へ、他の産業へ波及していきます。

例えば、ある観光産業の売り上げが急に増加したために、ここと取引関係にある企業も生産を増加する。ちょうど中間財のような形で扱っている場合です。そうすると、最初の売上高の増加が別の企業へ波及していく。それで、この企業が他の企業と取引をしていけば、その企業の売上高は増大するわけですから、他企業への需要が高まります。したがって、その他の企業も売上高を増加させるという具合にずっと取引が行われていって、最終的にその取引がある大きさを生み出す。それは最初に支出された、観光客が支出した金額に比べるとその何倍かになる場合もあります。もちろん、ならない場合もあります。ならない場合というのは、例えば観光客が100支出をしたとして、最終的な波及効果のところから出てくるのが90であるといったようなケースが存在しないとは言えないからです。それを100から110にしたり、120にしたりするにはどうしなければいけないのか、ということを考えないといけない。それが観光を使って波及効果を生み出そうとする、その場合に必要な作業と書いてあります。

それについて少し話をしてみたいと思います。これが今、波及効果を表しています。ずっと辿っていきますと、これが観光客の支出で第1ラウンドから始まって、第2ラウンド、第3ラウンドと、どこまでも続いていくわけです。最終的には、これは無限回続くと考えられていますが、本来は無限回も続かないわけです。取引はどこかで終わってしまう。例えば、その地域

の経済規模が小さければ小さいほど、取引される回数は少なくなるからです。ですから、ある有限の数、それも非常に少ない取引の数で終わってしまうわけです。そうすると、最初に考えた理論上考えられる結果と現実に生じる結果が違ってまいります。理論上考えられる結果の方がたぶん大きい。先程言いました、見込みというものです。理論的にはこれだけ生じているはずだが、実際には大きくない。でも、大きくした方がいいのだと思えば、大きくするために何かをしなければならぬ。では、何をしたらいいのか。

その前に少し話が古くなるのですが、ちょうど私がハワイに行っていた時に、たまたま私のところに来ていた大学院生が学会で発表するのに、「こういうことをやりたい」とメールを送ってきた。「じゃあ、やりましょう」ということで2004年の12月だったと思います。その時に彼が発表したものがこれです。ただ、タイトルが観光の経済効果そのものではないのです。「産業連関表による観光経済効果の測定と包絡分析法による定量的評価の試み」というもので、つまり、どこの地域が観光というものを効率的に利用しているか、言い換えると効果を上げているかという相対的な評価なのです。そのために、どうしても観光の経済効果をやらなければならないくて、産業連関表を使ってやったものですが、ただ統計は古いものです。2002年のものでしたでしょうか。それと入込客数と国交省の2003年のデータを使って推計をしました。

ここに4点ほど出ています。私達がやろうとしたのは、北海道と沖縄でした。でも、それだけでは足りないの、その周りのところも関係があるだろうということで、今日は北海道に近いところしか持ってきませんでした。沖縄に近い九州も何県か計量しました。今日は秋田県をやりますので、秋田県を除くわけにはいきませんので書いてきました。これは2002年の入込客数であるご理解して頂ければいいのですが、これだけの入込客数です。この年の沖縄県と比べると1桁違っています。沖縄の方が少ないです。それでも、直接効果のところを見ると沖縄の方が大きいのです。さらに、一次波及効果を見ると沖縄はもっと大きくなる。二次に至っては倍近くになる。何故こんなことが生じるのだろうか。ここが問題になる。大きくするためには何かがあるのです。何か要因があるので大きくなる。その要因とは何か。その要因が分かれば、例えば、ある県でも波及効果を大きくしようとしたら、同じようなことをしてあげないといけない。そうでないといつまでたっても大きくなりません。つまり、観光客を誘致しても、その結果としてそれほど目立った活性化には繋がらないという結果が出てきます。それをお見せするための表ですので、細かくはこの論文を読んで頂ければ分かるかと思えます。では、いったい、何故その中身が小さく、それほど波及効果が大きくなかったのか。考えられる要因は3つくらいあると思います。

直接効果（有効消費額）が小さかった要因としては、まずは地域外の宿泊観光客の誘致が思うように出来なかった、あるいは日帰り観光客が非常に多かったためではないだろうかと思えます。そのため、宿泊観光客、あるいは宿泊者を増やすことによって経済波及効果は高まり、日帰り観光客よりも高くなります。平均値で支出金額も倍以上になります。それほど大きな効果を持つということです。そのための努力をしないとダメです。ここに、2005年と2006年を比較したもので、秋田県についての統計があります。見てみますと、2005年よりも2006年の方が、県外から来て宿泊してくれるお客さんの数が減少している。おそらく、これは元になる金額が小さくなっていくはずですから、たぶん波及効果も期待出来ないという結果が出てくるのではないかと。これを何とか食い止めないといけない。あるいは、反転させて、増加させるという風にしないとダメです。でも、県外の宿泊客を増加させるためには、また何かが必要になるので

はないか。

2番目は第一次波及効果です。これは生産誘発効果と呼ばれているものですが、これを大きくするには、域内、例えば秋田県内の産業間の連関を密にしてあげる。つまり、秋田県内での企業間の取引をもっともっと増やしてあげないといけない。秋田県内にある企業は、他の県と、他の地域と取引があるけれども、県内の企業とはあまり取引をしていないかもしれない。それを大きくしてあげないといけない。それから、もう1つは産業間で連携を図ることも大事かと思えます。これは異業種だからあまり関係はないということではなくて、何かにつけて産業間で連携を維持しておく。何かあった時には取引が出来るようにしておく。そういった仕組みを作っておくことが、効果を大きくする要因になるだろうと思えます。

それから、3番目は雇用誘発効果が小さい。この誘発効果が小さかったという理由は、おそらくそれほど波及効果が大きくなかったので、雇用される人達も、ここから生み出される雇用も、あまり大きくなかったのではないかとということです。

いずれにしても全て関係がないわけではないので、この中の1番目と2番目が大きい要因だと思うのですが、これを上手く改善してあげることによって、より大きな総合効果、直接効果と一次、二次の波及効果を加えたものを大きくしてあげることが出来るのではないかと思います。おそらく、秋田県にはまだまだその余地があると言っても過言ではないと思えます。では、どうすればいいのかと言いますと、これから示するのがその具体的な例です。

1番目は当然ですが、観光客の誘致をすることです。そして、その人達が地域内でどれだけ消費してくれるのかということが大事な要因です。

2番目は人的資源も含めて地域内の資源を活用して下さいということです。地域外の資源をあまり活用しないで下さい。そうすると、地域間の連携が上手くいかないとか、色々な問題も出てくるかもしれませんが、なるべく地域にある資源を利用して下さい。それを使って、何かツーリストに提供してあげて下さい。お土産を見ますと、その観光地で売られているお土産は、そこで作られた物ではない物がたくさんあります。どこか違うところで、全く関係のないところで作られたりしています。それは止めましょうということです。そこで無理して出来ない物は、作らなくてもいい。そこで作れる資源が存在していて、その資源を使える技術があって、なおかつ、製品にすることが可能であるならば、そういうことをして下さいということです。他から持ってくるのは、あまりよろしくありませんということです。

3番目はこの2番目にも関係があるのですが、自分が住んでいる地域外から移入をしてくる、何かを持ってくると、その移入先にその地域からお金を払わないといけない。つまり、ツーリストがお金を落としていってきても、その地域内に残るお金はほんの僅かになってしまいます。そんなことは止めましょう。一方で市場規模を大きくしようとしているにもかかわらず、一向に大きくなれないというパラドックスのような状況に陥ってしまう。これは地域経済への波及効果をあまり大きくはしませんということです。

4番目は先に述べたことと全て関係があるのですが、産業間連関、産業構造をもう一度見直してみる必要があるのではないかとということです。これは観光と直接的な関わりがないかもしれませんが、地域で現在まで作られてきた産業構造というものをもう一度見直してあげて、もう少し違った産業構造にしていくような取り組みが必要だろうと思えます。そういう意味では、単に波及効果と言われているものも、単年度だけではなく非常に長い時間をかけないと、波及効果そのものは大きくなっていかない可能性を多分に含んでいるという気がしていま

す。ですから、「いっぱい来てくれて良かった」という年があれば、その翌年は「駄目だった」というケースが往々にしてあるのです。それは、おそらくこのどこかに欠陥があるからだ、と思っていいのではないかと思います。

一昨日、ある先生と話していて気が付いたのですが、最初に言いましたように秋田県は南北に長く、観光地は東西南北に点在しています。先程言いました秋田県の観光振興プランにも提言があったのですが、二次交通機関を整備してあげない限りツーリストは動けない。動けないと1泊して帰る。あるいは、もう1泊しようと思っても行かれない。だから、もう少し二次交通機関を整備していきましょうということは、当然といえば当然のことだろうと思います。まだまだ日本の場合には、観光地に着いてそこからレンタカーを借りてというような形態にはなっていないようなところが多分に見受けられます。アメリカなんかですと、すぐに空港からレンタカーを借りて目的地へ向かうというケースが多く見られます。日本でも、そこまではいなくても、公共交通機関のようなものを考えてあげてもいいのではないだろうかと思います。つまり、アクセスするための手段がなければ、ツーリストはいくら行きたいと言ってもアクセス出来ない。そのアクセスを少し良くしてあげる。その努力がツーリストを増加させ、なおかつ、もう1泊出来るように、泊まりたいと思わせる、そういう要因になるのではないかと思います。

もう1つは、数年後に函館まで新幹線が延長されるそうです。そうすると、東京から一直線で函館まで行くことが出来るようになります。ツーリストは、横へはほとんど動かないと思います。そうすると、秋田へは新幹線は来ていますけれども、むしろ航空機の利用を促進した方がいいかもしれない。その方が上手くいくかもしれない。これは私のアイデアで、実験もされていないから分かりません。JRに頼ることも大事ですが、頼る以上にこちらを整備してあげたらどうでしょうか。例えば、羽田からの便数を何とかして増やす。それから先程、韓国まで便があるという話がありましたけれども、その便の枠を広げていく。国も広げていく。これは空の自由化が段々行いやすくなってきていますから、もしかしたら可能であるかもしれない。そういう意味では、陸上交通だけに頼らないほうがいいかもしれません。

別の視点でもう一度、秋田県を見てみます。それに一番いいのが、先程の地図を見ることだと思います。そうすると何かが見えてきます。これは思いつきの段階ですけれども、全ては思いつきから始まるわけですから、それをもう少し論理的に、あるいは証拠を探しながら補強していけばいいのです。例えば、その努力を観光学科の学生はしていかなければならないと思います。もしこれが可能で、なおかつ、空港からの二次交通手段、アクセスが整備されれば、観光客数を増加させることが、それから宿泊者数を増加させることが出来ると思います。増加させることが出来れば、今のままの産業構造であったとしても、波及効果は少し大きくなると期待してもいいのではないかと思います。一度お話し頂ければという風に思っていますが、これはアイデアですから、実際に現場で携わっている人の意見を聞いて、「もしかしたらいけるんじゃないか」というような意見があれば、試してみるということはいいいのではないかと思います。

それでは、2番目の話題へ移ろうと思います。我々の大学には立教アミューズメントリサーチセンター (RARC) というのがあります。ここでは、もう1冊これからアミューズメントに関する本を出しますが、こちらはその1冊目になります。このタイトルをご覧頂きたいのですが、『観光地を磨くセンスアップのイノベーション』と書いてあります。そこで、この本から少し観光地のイノベーションというものを考えてみたいと思います。あるいは、この中で何

人かの先生が主張されているような見解というものを、私なりに改めてご提供申し上げて、議論の材料にして頂ければと思っております。

イノベーションについては先程も言いましたが、「第二次産業だけではないんだ、我々もやるんだ」という気概が必要だということです。しかし、気概だけでは何も出来ません。では、第三次産業、特に観光産業におけるイノベーションとは何なのか、どういうものをイノベーションと呼ぶのだろうか。ここにも書いたのですが、第二次産業のイノベーションとは性質を異にするという点だろうと思います。これは、私がこの本を読んで感じたことです。いわゆる全く新たな物を作り出すということではない。何かを組み合わせた、あるいはその時代にあったように少し形を変えてあげたりする。あるいは、ツーリストの見方を変えてあげるような、何かインセンティブを与えてあげれば良い。それが新しい物に見えたりする。つまり、全く無かった物のように見えるということなのです。その点がおそらく重要な点だろうという風に思っています。

いったいその中身は何なのか、もう少し詳しく見ていきます。これは余談ですが、地域の力だけでは無理な点があるかもしれないということです。そして、今、言いましたように資源に新たな命を吹き込むと言いますか、価値付けをしてあげる。あるいは、この資源のストーリーを新たに作り出してあげる。そういったことをすることによって、価値を高めることが出来ます。つまり、今までは見なかったような視点、あるいは見えなかったような部分が見えてくるというような仕組みに、現在の仕組みを変えてあげる。そうすることによって、新たな価値を付与することが出来ます。

また、そういうことを出来る人材を育てることが、観光教育の目標の1つだろうと思います。つまり、イノベーターを作り出す。一時期よく言われましたが、ベンチャービジネスと同じようなものです。ベンチャービジネスと言ってもそれほど新しいものではないので、今まで無かったところに、いわゆる、ニッチインダストリーと呼ばれるようなものを作り出す。そのニッチだったものがメジャーになるのです。メジャーを目指す必要はないかもしれませんが、「ニッチとしてやってみよう」というところに意味があるのではなかろうかと思えます。これは観光教育の意義なのですが。

そういった観光教育を通じて、旅行に関する記事の掲載や報道をテレビや雑誌等でいっぱい行って、こういう人達があります。イノベーターオブコンサンプションと呼んでもいいかもしれませんが、消費のイノベーターと呼ばれる人達です。つまり、流行を作り出している人達です。このような人達はどの地域にもいるのではないかと思います。よく言われるように、東京にはもはや今ここに書いたような消費のイノベーターはいない、地方にいるのではないかと。そうすると、地方からそういうものが生み出される、あるいは提案される。でも、それは地方だけに留まらないで、そこから情報を発信していかなければならない。このようなものも含めて、マネジメントしていかなければならない。そして、そういう人達を作るのも、観光学教育の課題の1つかもしれません。

フランスで「パリコレ」をやっています。これはパリから発信しています。例えば、人間の体が変わらない限り、身に付ける物の形はそんなに変わりません。自動車もそうです。人間の形も変われば、自動車の形も即変わりますが、ほとんど変わらない。(四角)にするか(丸)にするか、大きくするか狭くするか、そんなに変わっていないのです。自動車のエンジンそのものは技術進歩で、非常にいい物になってきている。あるいはCO₂(二酸化炭素)を出

さないようなものになってきている。そういう点では、目覚ましい技術進歩やイノベーションが生じていますが、形自体は変わっていない。それは、観光も同じではないかなという気がしています。そんなに変わりはないのではないかな。でも、何かそこに意味付けをしてあげることによって、今までツーリストの側に伝わらなかった面も、こういう風に見てもいいんだということを見せてあげる。それが観光の「パリコレ」ではないかと思います。ただし、発信しなければ意味がありません。地元だけでみんなで万歳しても、これは意味がありませんので、とにかく発信してあげる。その発信の仕方も、おそらく観光学において学ぶような気がします。そうすると、ここにも書きましたが発想の転換が出来ます。これは若い人の特権かもしれませんが、発想の転換は若い人だからこそ出来る。若い人達にそれを期待することが出来るというのも観光教育のいいところだろう、という風に私は思っています。

ではいったい、観光学を学ぶとどんなことが出来るのかということなのですが、こんなことが出来そうじゃないかなと思います。つまり、観光における技術革新とネットワークを可能にする人材、こういう人材を養成することが出来るのではないだろうか。それから、既存の資源の再利用であるとか、地域文化を見直して新たな意味付けを与えたりとか、そういうことが出来るのではないだろうか。そういうことは新たな価値を創造し、そういう意味ではイノベーションと呼んでもいいのではないかなと思います。

それから、もう1つは観光事業のことです。事業化を可能にする。先程、ベンチャーと言いましたが、どうしたら自分達が考えたものを事業化していくことが出来るか、そういうことを学べれば役に立つのではないかな、という風に思っています。そういうことが総合されて、ひとつになって、観光による地域の再生とか、観光による地域興しが可能になる。それはイノベーションがあったからと考えていいのではないのでしょうか。

そこで、イノベーションとは何であるのかということをもう少し詳しく言いますと、これは先程ご紹介しました『観光地を磨くセンスアップのイノベーション』という書物の中で論じられていることです。その中から大きなところを4つほど取り出しましたが、まず「差異化をなさなさい。他と同じものをやるな」ということです。これは何故かと言いますと、観光客はすぐに飽きてしまいます。ディズニーランドは何故、飽きられないのか。3年から4年に一度、アトラクションを交換しているからなのです。スクラップアンドビルドをしているわけです。観光地もそれが必要だろうというのが最初のところです。

2番目は今、存在している資源があったとして、それを上手く見せてあげる演出が必要です。古くていいものがある、「お寺です」と言われて、「なるほど、良いですね」で終わるのではなくて、そこに何か見せ方を、「こういう風に見せたら」とか、そういうものを加えてあげますと、先程も言いましたように何か新しさが出てくるのではないかなと思います。「ああ、こんなことも」というようなところです。それが新たな価値の創造に繋がります。それから、もう1つは地域の演出です。その上に、これは大事な点なのですが、これは1つ考えてもいいと思います。どなたが言っていたのかは覚えていないのですが、地域の最重要観光資源の存在に蓋をする。つまり、「我々の町には、この地域には、この資源があるから大丈夫だよ」と言わずに、「では、その資源が無くなっちゃったら」という風に考えたらどうしたらいいのか。その資源は存在しないということになったら、いったいどこに活路を見出したらいいのか、ということを考えて欲しいということです。そうすると、その資源があればもっとツーリストを呼ぶことが出来るかもしれません。ツーリストをアトラクティブに惹き付けることが出来るかもし

れません。

3番目は個性の演出です。これは、見直しをして伝統的なライフスタイルなんかを新たに甦らせて下さいということです。私はハワイ大学に1年お世話になりましたので、夏の間はアロハシャツをよく着ます。このアロハシャツは日本人が作り出したものでしたが、ああいう風に綺麗な形にしようと思って作ったわけではなく、作業着として和服をどういう風に作り替えたらいいかと考ただけなのです。和服では不便ですから、さとうきびを刈ったりするには不向きです。それに暑い。でも、昔は持っていつている物はそんなに多くはない。また、今のようどこでも自由で買えるというわけではありませんでしたので、持っている物を使って、それを別の形にして、自分達が働きやすいようにはどうすればいいのか考えて作った。だから、アロハシャツは派手でもいいのです。日本の和服で派手なものがありますね、冠婚葬祭で着るような。いくら派手でも構わないと言われているのは、それが起源だからです。そういうことを考えると、観光でもやっぱり同じことが言えるのではないかと思います。

4番目は社会の価値観の変化を素早く捉えるということです。消費のイノベーターと呼ばれるような人達は、これをいち早く察知します。あるいはそれを自分で作り出そうとする人、そういう人達を観光学を学ばせることによって養成していくことが出来れば、と私自身は思っています。

これからは私の大学の紹介をさせて頂きたいと思います。(スクリーンの)左側は観光学部がある新座キャンパスです。ここではどんな観光教育、どんな人間を育てようとしているのかと言いますと、国際的な視野を持った人材、先程これは理事長先生がおっしゃったように、同じところがあります。国際的な人を育てたい。そして、観光産業を変革し、リード可能な人材、また先程も言いましたイノベーション出来るような人達を育てたい。

それから、これを達成するために何が必要かと言いますと、理論と実践の両方が必要です。実践だけでは足りないかもしれません。つまり、論理的に物事を考えられる人間を育てて、なおかつ、それを実践出来るような人間を育てたい。では、そのために何をしているのかと言いますと、交流文化学科というところでは、「早期体験フィールドワーク」というものを実施しております。中国と東南アジアの何ヵ国かに行っております。今年で2年目ですけど、今年は120名くらいが参加します。教員が大変ですので、それぞれのチームは12名か13名くらい、多くても15名くらいと絞っておりますけれども、夏休み中に学生達は自分達でお金を出して行くわけです。8月、9月ですから、東南アジアは暑いです。この11月にもどこかの島で行われますけれども、あと3月にもう1回実施されるかもしれません。

そこへ行って何を見るかと言いますと、観光の現場を見ます。観光の現場というのは、観光客のいるところです。その観光客がいるところで、観光客がどんな動き方をするのかということをつぶさに見てまいります。それからもう1つは、調査の仕方をそこで勉強してきます。ベトナムのハノイの旧市街を暑い中、入り組んだところを回りながら聞き取り調査をしていきます。それによってツーリストの動態が分かったりします。あるいは、どういう物を購入しているのかも分かります。そういうことをやっています。それを帰ってきて、まとめさせます。

この「早期体験フィールドワーク」というのは、「鉄は熱い内に打て」ということわざがありますけれども、1年生に入った段階で行います。まだ熱いわけです。高校を卒業して「やるぞっ」と思って来ているわけです。2年生、3年生になると、こんなことを言ったら失礼ですけど、やる気が少しずつ無くなってきて、冷めてきてしまうんです。ですから、熱いうちに打

とうということで、1年生の最初に行きます。そしたら、最近は「2年生でもやってくれ」という学生が出てきています。こういうことを私達はやっております。

それから観光学部には昨年、交流文化学科というのが出来て2年生までおります。前からあったのは、伝統的な社会学部の時代からあった観光学科です。どこがどう違うかと言いますと、観光学科というのは従来通りのカリキュラムといいですか、観光産業の経営、経済的なこと、あるいは観光地計画、こういったものを主として学びます。観光事業に主として力点を置いているようなところがあります。それから交流文化学科の方は、文化という文字が入っているせいもあるのですが、観光というものを通じて社会とか文化がどういう風が変わっていくか、もう少し言えば、人の移動によって社会や文化がどう変化していくのか、というところに力点を置いて作られたものです。観光というのは楽しみを目的にした移動と滞在の全てですから、それを全部見るということは非常に難しいわけです。ですから、ある側面から見る方が手取り早いかもしれませんが、正確に見られるかもしれません。ただ、それには欠点があります。観光はそれだけではないということです。まだ色々なものを含んでいます。非常に複雑な様相を呈しているのが観光です。

全部を見ようとすることも一方では大事です。それは自分で不足している部分をどこかで補うということも必要なのですけれども、全部を最初からやろうとしても見えてきません。今日も飛行機に乗せて頂きましたけれども、飛行機が7,000メートルとか8,000メートルとか、高い時には1万メートルくらいでしょうか、飛んでいるわけです。でも、「『地球は青かった』って言えないよな」という話を学生にしました。だいたい、雲が邪魔している。何故、人工衛星から見ると「地球は青かった」と言えるのだろうか。200kmくらい上に行かないといけないのだろうか。つまり、全部見られないのです。低いところでは全部見られませんが、でも高いところではよく見えるわけです。最近インターネットでも地図を拡大していくと、色々な物が見えるわけです。「あっ、自分の家もあった」というくらいなんです。でも、最初はぼやーとしていて何だか分からない。それが多分、観光なのではないか。

どちらを先にしたらいいのか、というのは分かりませんが、最終的には全部見えるように、見られるように自分で自分を鍛える必要があります。最初は個別に見ていった方が、私としては経験からはいいかなという感じがしています。それから両学科ともそうなのですが、先程も言いましたように、理論と実践のバランスのとれた人間を育てたいと思っています。一方に長けたというのもいいのですが、両方ないと長続きしないと私は思っています。一方だけではすぐに行き詰まってしまう。ですから、バランスの取り方というのは重要なことである、という風に私自身は考えています。

それからもう一つ、人材育成というわけではないのですが、こういう講座を研究所でやっています。「旅行業講座」これは昔からありまして、「旅行業取扱主任者試験の講座」という風に言われていました。これは4月の末くらいに応募を締め切って、5月の連休中くらいに始まっているのかもしれませんが。これはどちらかと言いますと、国家試験用です。したがってこちらの方は、70、80名が受講しておりますが、7割くらいの受講生が大学生で、社会人の方は比較的少ないです。興味があって受講している方とか、主婦の方が多いです。あるいは、今こういう仕事をしているのだけれども、もしかしたらそっちへ行きたいと考えているので、旅行業務の知識が必要であるということである、OLの方、あるいは男性の方が来ています。それからこの「ホスピタリティマネジメント講座」というのは立教大学の伝統らしいのですが、

「ホテル講座」から始まったというのもあるのですが、その「ホテル講座」から始まったものを色濃く残している。

実際に講義をしてくれる先生方は、ほとんどがホテル、旅館、あるいはレストラン、いわゆるホスピタリティ業界の方々です。最近はそのホスピタリティだけではホテルや旅館、レストランも濟まなくなってきましたので、いわゆる投資関係、ファイナンスの問題ですとか、そういうことをお話して下さる講師の先生方は、全員外部から来て下さる方です。段々、東京にも外資の新しいホテルが出来てきましたので、そこにもお願いしています。普段、私自身もお目にかかれなような人達ばかりで、そういう人達が来て受講生に話をしてくれます。

この受講生の方々には社会人の方が半数ということです。時には半数を超えます。学生の数は少なくなっていました。実際にホテルで働いている人もいます。あるいは家業が旅館であるとか、「親から言われて継がなきゃいけないんです」と言って受講する人もいます。それから面白いのが、この前、日本で一番の国立大学の学生から電話があつて、全くやっていることは本人の専攻と違うのですけれども、何故か興味を持って「一度聞かせて下さい」ということで来たらしいのです。私のところに電話がかかってきて、「よろしいんじゃないですか」と話をして聞かせてあげたら、その帰った日にメールが来て、「次の授業から受講させて下さい」というメールが来た。「それはいい話ですね」と言って、すぐOKを出しました。いずれにしても多士済々と言いますか、色々な職業の方がここには集まっています。

まとめですが、足下を見つめ直して下さい。それは事実確認のために必要です。1番目には、事実確認のためには計量した方がよろしいです。数字に表してみるということです。これはどこの都道府県でも持っていると思いますので、産業連関表を使えば計算することは不可能ではない。2番目には、先程も言いましたが、観光におけるイノベーションというものをもう一度考えてみて下さい。そんなにイノベーションを難しく捉えずに、「何かを変えてみようじゃないか」、「ちょっと視点をずらしてみようじゃないか」とか、そういうことから始めてみていいと思います。それが本来の意味でのイノベーションに繋がっていくのではないかと考えられるからです。そして、これにチャレンジ出来るような、トライ出来るような人材を育てて下さい。以上が観光学科に申し上げたい私の要望です。それから3番目は、こういう人達を作るのは観光学科（観光教育）であろう、という風に先程から言っているのですが、それが可能であれば、あるいはそれが実現されれば、秋田は変えられます。観光によって秋田を変えることが出来ます。これが一番大きな点だろうと思います。多くの方々が見ていることであろう、観光による地域興しとはこういうものであるということ、秋田県は他の都道府県に見せることが出来ます。つまり、秋田県は国内だけではなくてアジアへも広がっていく、という風に言ってもいいのではないのでしょうか。そのためには、観光教育というものをしっかりとしたものにしておく必要があるだろう、というのが私の考え方です。本日はどうもありがとうございました。

橋 元 小沢先生、素晴らしいご講演を誠にありがとうございました。また、秋田県の観光産業に対する、たいへん有意義なご提言を頂けたものと確信しております。先生には、この後のパネルディスカッション「観光の振興と人材の育成」にも、パネリストとしてご参加いただきます。（拍手）

[講演]

ノースアジア大学 総合研究センター 国際観光研究所主催
シンポジウム「観光立県と人材育成」

パネルディスカッション 「観光の振興と人材の育成」

コーディネーター	ノースアジア大学法学部長 本学総合研究センター国際観光研究所長	道 端 忠 孝
パネリスト	学校法人ノースアジア大学理事長・学長 本学総合研究センター長	小 泉 健
	立教大学観光研究所長・観光学部教授	小 沢 健 市
	(株)ANA総合研究所取締役副社長	泉 正 史
	(財)日本オリンピック委員会評議員・総務常任委員	本 山 茂 樹
	秋田県グリーンツーリズムコーディネーター	田 口 久 義
日 時	平成19年10月13日 午後1時～	
会 場	ノースアジア大学 40周年記念館 講堂	

橋 元 それではこれより、パネルディスカッション「観光の振興と人材の育成」を始めさせていただきます。コーディネーターは本学法学部長・国際観光研究所長、道端忠孝先生です。道端先生、どうぞよろしくお願い致します。

道 端 ただ今、ご紹介を頂きました道端と申します。観光の基礎というのはホスピタリティ、おもてなしの心だと言われたりします。今日は著名なパネリストをお招きしており、上手くおもてなしが出来るか心配ですけれども、どうかよろしくお願い致します。

先程、立教大学の小沢先生から「観光学は秋田を変える」というテーマでお話を伺いましたけれども、秋田県の観光振興への提言や観光教育、あるいは人材育成について等広範囲に渡ってご講演頂き、本当にありがとうございました。

パネルディスカッションは、「観光の振興と人材の育成」というテーマで進めて参りたいと思いますが、小沢先生の基調講演にもありましたけれども、観光教育というのは秋田県民のまなざしを変える、あるいは秋田の地域に力を与えるということでした。また、観光産業の起爆剤になるというようなお話を伺ったんですけれども、まずは観光を支える人材の育成という点に絞って進めて参りたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い致します。

それではまず、パネリストのご紹介を申し上げたいと思います。先程基調講演を頂きました、立教大学教授・観光研究所長、そして経済学博士の小沢健市先生です。そのお隣ですけれども、ANA 総合研究所副社長で、本学の国際観光研究所顧問をお願いしております、泉正史副社長です。そのお隣は本学理事長・学長の小泉健先生です。そのお隣ですけれども、日本オリンピック委員会の評議員・総務常任委員、日本ホッケー協会理事を務められ、本学国際観光研究所の客員教授も務められております、本山茂樹先生です。最後になりましたけれども、観光カリスマということで、県内への修学旅行の受入れで有名な秋田県グリーンツーリズムコーディネーター、そして本学国際観光研究所顧問の田口久義先生です。どうぞよろしくお願い致します。

ただ今ご紹介しましたパネリストの皆様が進めさせて頂きたいと思っておりますけれども、先ほどもお話を致しました通り、まずそれぞれの業界から、今、どのような人材が求められているかをお伺いしたいと思います。それでは、まず航空業界から、ANA 総合研究所の泉正史副社長お願い致します。

泉 ご紹介頂きました、泉でございます。今回のテーマは、観光を軸にして地域興しをするための人材づくりということで、どういう人材が求められているのかということだと理解しております。

航空業界と言いますのは、観光と非常に密接に関連する業界ですが、広い意味では観光産業を形作る重要な一翼を担っているというように認識しています。それで、私ども航空業界の中で、現在直面している問題等から、今、どのような人材を必要としているかということが、観光産業において共通性があるだろうと思います。それで、まずは私ども航空業界の現状について、それから今何をやろうとしているのか、どんな人が欲しいのかといった点についてお話をしたいと思います。

今、航空会社は非常に困難な状況にあります。ひとつは、燃料油の値段がものすごい勢いで上がっているということがあります。皆さんもご存知の通り、ガソリン代は少し前まで、夏あたりでしたらレギュラー1ℓ100円少々くらいだったものが、今では140円から150円くらいにな

りました。なかなか、車で気楽にどこかへ行くというわけにもいなくなってしまう。そんな状況の中で、飛行機は油を使って動きます。飛行機が使うのはガソリンではなくて、家庭用の灯油と同じようなケロシンという油です。これが2003年くらいですと、1バーレルあたり30ドルくらいだったものが、つい最近は80ドルくらいになってしまっています。

そうかと言って、こういった金額をそのまま運賃に転嫁出来るかという、そういう状況はありません。全日空でも、4月から6月の間に、予想より約100億円多く燃料代がかかってしまいました。そのために、あらゆる経費節減の努力をしていますけれども、なかなか超過分を吸収しきれません。これにどう対処するかという問題があります。

それから環境問題、温暖化の問題があります。飛行機は油を燃やして飛びますから、二酸化炭素を排出します。航空会社に出来ることとして、この二酸化炭素をどうやって減らしていくのかということがあります。

それから、二酸化炭素排出権という問題があります。二酸化炭素の総排出量を抑制するために、排出枠を定め、排出する企業間でその権利を売買する仕組みがこれから導入されようとしています。その場合、それに対するコストへの対応があります。

それから、何と言っても航空業界の自由化が進んできています。全日空はもともと民間会社ですが、世界中を見回しますと、皆さんもニュースでご覧になっているように、ヨーロッパやアメリカでは、有名な会社も次々と破たんし、集約化・吸収されてしまい、競争が非常に激しくなっています。

他にも、情報化への対応といった問題があります。ただ、何故こういった状況が起きているのか、何故これだけ競争が激しくなっているのかという問題は、航空業界に限ったことではありません。実は、皆さんの地域が困難に直面している遠因のひとつはグローバル化、世界中が同じ土俵で競争することになってしまったということです。これは、私ども航空業界も同じです。例えば、身近に色々な商品がある中で、中国製品が非常に多いと思います。それは、人件費においても格段の差がある中国と、我々は知らないうちに競争をしているということです。

現在の航空業界は、まだ自由化が不十分です。ただ、いずれは完全な自由化となっていくでしょう。こうした流れに逆らって、国に助けを求めたりしていたら、我々自身が生き残っていきません。ですから、これはもうやるしかないのです。

それで、まずは今までやってきたことで、何が良くないのかを考えました。これはゼロから見直しをしなければなりません。ですから、昨日までやったことを今日やって、また明日もやるうなんていう人間は、必要としてはいません。そうではなくて、先程の小沢先生のお話にもありましたけれども、これだけ変化が激しい時代においては、もう一度原点に立ち戻って考え、行動する必要があります。航空会社の側ではなく、実際に利用する側の立場に立って、どのような商品、サービスが好まれるか、どうしたらそれを買ってもらえるかを考えるんです。そういう視点でいつも自分の業務を見直し、新しい提案・チャレンジをしていく、そういった人材が欲しいと思っています。ANAの人事担当者のインタビュー記事にもありましたが、今年の採用計画の中では変革・チャレンジの精神に富み、また好奇心旺盛で、何か困難なことがあっても、どうしたら乗り越えられるかという気持ちを持って、立ち向かっていく人を求めています。そして、気持ちだけではだめです。さらに、これをやり遂げる根気・努力が必要だと思います。こういった人はなかなかいませんけれども、このような人材が欲しいと思っています。

また、私どもは競争が激しくなってきた時に、サービスの差別化ということを考えなければいけません。航空業について考えてみますと、昔は需給バランスが崩れていて、飛行機の席よりもお客様のほうが多かった。特に夏場や暮れはお客様の数が多いので、航空会社は殿様商売で、私ども営業の人間がやっていたことは、今では信じられませんが、お客様を断るんです。また、予約が取れたらお客様のほうがお礼をして下さるとい、信じられない状況でした。私は、これは絶対に間違いだと思っていました。

今は航空業界も競争が激しくなり、特に2010年には、羽田空港にもう1本滑走路が出来ますと、羽田空港の発着能力が、今は30万回くらいですけれども、40万回以上になり、大幅に増えます。その時には、国際線も当然増えるでしょう。つい先日、羽田から上海まで飛ぶようになりましたけれども、2010年以降はさらに色々なところに飛ぶでしょう。もちろん、国内の便数も増えると思います。ということは、さらに競争が激しくなるということです。

ただ、先程も申し上げた通り、グローバル化が進んだ結果、日本の中の競争相手のことだけ考えていけば良いわけではありません。私どもの競争相手は世界中です。その中でどうやって競争していくか、そのためにサービスの差別化をするんです。

これについて、全日空が航空会社の中で競争力を持つためにはどうしたら良いのかということ、社員の間で考えました。そして、CMにもしましたが、ひとつのスローガンとして「安心・あったか・明るく元気」を掲げました。非常に分かりやすい単純なことなんですが、まず飛行機というのは空を飛ぶものです。もともと、空気より重いものが空を飛ぶというのはおかしいわけで、やはり安全が第一です。お客様にあたたかい気持ちで、安心して乗って頂けるサービスを提供出来る、そんな人材が欲しいと思っています。

道 端 ありがとうございます。次に、旅行業界から、元阪急交通社でご活躍されておりました本山先生、お願い致します。

本 山 先程の小沢先生の基調講演を、私も一緒に聞かせて頂きました。その理論をお聞きする中で、少々困ったなと思う部分があります。私も旅行業界にいましたが、その中で、今までずっと思ってきたのは、観光というのは、多くの産業に関係する日本の基幹産業だということです。雇用や経済、この他に期待が持たれている自治体においても、地域の活性化や産業振興のために、重要な政策テーマに取り組んでいるのではないかと感じていたのですが、先生のお話を聞いて、それは違うのではないかと思った次第です。

先程ご紹介して頂いたように、私は現在、日本オリンピック委員会におります。しかしながら、その前は40年ほど旅行会社におりました。現場一本でしたので、少々泥くさい話になるかもしれませんが、この観光教育による地域のリーダーの育成の重要性を前提とした、旅行業で求められる人材像についてお話ししたいと思います。

基本的に、旅行業というのはサービス業であり、お客様にいかに良い商品・サービスを提供し、ご満足頂くかが究極の目的であります。

旅行業では、ツアーの企画・販売、それから添乗まで、旅行に関する全ての業務を経験出来るわけですが、その間に得るものというのは、お客様との接点をはじめ、日本・外国における地理や歴史といった旅行に関する知識や、いかにして儲けるかという企業に対する責任です。それからベンダーと言いまして、交通機関や施設、地方自治体との接点等、たくさんの財産の

蓄積が行われます。そして、どの企業でも同じなんです、KY、要するに風を読める人間になることが重要なわけです。

ところが近年の旅行業界においては、仕事の分業化が進んできました。派遣社員の導入ですとか、あるいは社会のアウトソーシングの動き等、本来旅行業を象徴する分野の仕事にまで、こういったものが進出し、新しいビジネスモデルを構築する必要性が生じてきました。そんな中、浮上したのが地域ビジネスです。要するに、地域の活性化のために、旅行会社として何が出来るかということです。メーカーのように工場を誘致して、産業人口を呼び込むということではなく、我々旅行会社が出来るとは、交流人口を増やすということなのです。

「観光の振興と人材の育成」というテーマの中で強く意識しなければいけないのが、秋田における地域の再生です。これは、地域の活性化という視点から行動を起こすことの必要性です。それから地域づくりです。地域の認識と、住民参加への留意、こういったものが必要となりまして、ここでは経験に基づきたいかに多くの切り口、要するにポケットを持っているかということが求められると思います。

前回、私がノースアジア大学で講演させて頂いた時に、秋田を観光において活性化するためにはどうしたら良いかという質問がありまして、実は困りましたが、「今年の夏はどこに行ったの?」という質問をした時に、「うん、秋田に行ったんだ」という答えが、多くの方から返ってくる必要があるのではないのでしょうかと答えました。要するに、秋田というところを認知させることが必要です。これは、大都市圏から地方へどれだけ多くの観光客を集めるかということが至上命令である、従来の旅行ビジネスの流れに乗ることが必要ではないかと思います。大量送客による来客の増加こそ、その地域における貴重な観光資源になるばかりでなく、地域の再生・活性化の起爆剤ともなるわけです。

ここに至る過程というのは、極めて難しいものです。まず、プロモーション的な低価格の設定が必要になります。これは常に安いというわけではないのですが、これを強く意識しなければいけないというのは、お客様がツアーを購入する動機の75%以上が値段であるからなんです。それから送客手段についてですが、先ほども言いましたけれども、航空便の増強、あるいはJR やバス、こういった交通手段の増強、そのほか旅行者の送客増システム等を、よく研究する必要がありますのではないかと思います。

旅行会社というのは、最初から高い良い商品売っているわけではありません。まず手始めに販売するのは、だいたい5,000円以下の、日帰りのバスツアー等です。それで何千人、何万人というお客様を集め、それからお客様を運び、その次に10,000円程度の国内一泊旅行を売って、順々に高額な国内旅行から、最後は海外旅行、終局は1,000万円のクルーズ、そういったものを徐々に販売していくようなシステムがあるわけです。そういったものを研究していくことが必要だろうと思います。そして、これらを吸収するためのOJT（オンザジョブトレーニング）の重要性を認識し、これを観光学科の授業の一環として採用するべきではないかと考えます。

同時に、これに当たる人材というのは、観光振興のための観光地づくりに際し、来訪者が満足して再訪を考え、さらにその体験を広く宣伝してくれるコンセプトを考えなければいけないと思います。そこにはいくつかのキーワードがあります。

まずはリピートです。どのような観光地でも、一度訪れた人が再訪を考えない観光地は、いずれ衰退してしまいます。それから観光客の分散化ですとか、あるいは高い名声のある観光地

を訪れたことを自慢に思ってもらい、周囲に宣伝してもらおうということがあります。このようなことを認識するリーダーを育てるのが、旅行業において期待されるリーダーであると思います。

道 端 どうもありがとうございました。次に、グリーンツーリズムという観点から、観光カリスマの田口先生、お願い致します。

田 口 ただ今ご紹介に預かりました、田口と申します。今は合併して仙北市になりましたけれども、秋田県田沢湖から参りました。

それで、グリーンツーリズムという言葉は、最近になってようやく土俵に出た言葉なので、時代背景等も含めながらお話したいと思います。

私が民宿を始めたのは昭和46年です。今、秋田は国体の真っ最中ですが、たまたま冬季国体が昭和46年に田沢湖で行われました。それで、あの頃の新聞にも出ましたが、宿泊する施設が少なく、40軒近い農家が民泊として受け入れた結果、私の家が第1号の民宿をやるようにということで、現在民宿を続けております。

さらに昭和57年、今は秋田まで線路が伸びていますが、大宮～盛岡間で東北新幹線が暫定開業しました。それと同時に、首都圏から農業体験をしたいという修学旅行生が入ってきました。入ってくる人数も、5～10人ではないんです。現在、文部科学省が認可している公立高校1クラスは40人ですが、実際は45人くらい入学するそうです、それが12クラスですと、だいたい540人になります。そういった人数で、毎日のように4～5校が4泊5日でスキー修学旅行に入ってきました。

そして、冬はホワイトツーリズムということでスキー修学旅行をやりまして、春は田植え、秋は稲刈りです。こうして、首都圏の中学生や高校生が入ってきました。

ところが、最初はグリーンツーリズムという聞こえの良い名前ではなかったんです。体験学習修学旅行という名前だったんですけれども、それが平成5年頃から、農林水産省も含め、マスメディアがグリーンツーリズムという名前を使い始めたので、今はこの名前が普通になっています。

昭和57年から活動を始めて、本年でだいたい26年になったそうです。最初の10年くらいは、マニュアルも何もない農林漁業体験を夢中でやってきまして、その結果、現在は爆発的に伸びています。そして、需要と供給という経済の原則から見ますとパンク状態で、供給側の受け皿がほとんど整っていません。

それを、今度は国が黙って見てはいられないということで、義務教育に取り入れようということが8月30日に発表になりまして、翌日にはほとんどの新聞に載りました。来年度から、試験的に全国40カ所で1学年、おそらく5年生になるだろうという国の説明でしたけれども、5年後には1学年120万人が、1週間程度の農林漁業体験を義務教育として行うことが決まりました。

それで、たまたま私どもがやっていたことが国で取り上げられるということで、大変喜ばしいのですが、農業は今、皆さんもご存知のように、米の値段が昭和60年のピーク時の半分近くになりました。稲作に軸足を置いていた人達が、第2の軸足としてこの辺りを少し目指して欲しいと思っていますけれども、省庁の指導機関がマニュアルのない部分で、なかなか動かない

というのが現状です。当然、これには相当数の省庁が絡まなければ実現しない話で、4年前に7省の連盟で「オーライ！日本会議」が中心となって、現在はこのように動いています。

道 端 どうもありがとうございました。今、お三方から求められる人材ということでお話を伺いました。次に、先程もお話して頂いたんですけれども、立教大学の小沢先生から、今どのような人材教育をしていくのかという点について、要点をお話し頂ければと思います。どうぞよろしくお願い致します。

小 沢 私は、自分で問題を設定出来て、なおかつそれに対する解を与えられる人間、あるいは導き出せる人間を育てるべきだと思います。先ほど泉副社長からもお話がありましたけれども、そうでなければ、これからの社会を生きていくことが出来ません。与えられた問題を解決していくだけでは受け身ですので、自分で何が問題かを探し出して、それに対する解答を導き出せるような人材を育てていくべきです。そのためには、理論と実践の両方が必要だと考えています。

道 端 ありがとうございます。先程、色々と細かくご紹介頂きましたので、それを踏まえてポイントをお話しして頂きました。

次に、本学理事長の小泉先生から、今、本学では色々な改革をしていますが、そのことについてお願い致します。

小 泉 ご承知のように、今、大学は全入・少子化という、非常に厳しい時を迎えているわけです。最近でも、中央教育審議会が大変な中間答申をしました。すんなり卒業させてはいけない、とにかく出口を厳しくということを、新聞でご覧になった方もいらっしゃると思います。そういうことで、私どもも全国に先駆けて卒業試験を導入し、ただ単位を取っただけでは卒業させないという、厳しい対応をしたいと考えています。

今日のテーマが「観光立県と人材育成」ということで、大学としては観光産業に寄与出来る人材を育成するということになるかと思いますが、ここで考えなくてはならないのは、最近の学生は考える力がなくなってきているということです。文学者の小林秀雄氏が、考える力について「今の学生は一つのことを集中して考えることが出来ない。もってせいぜい15分くらいである」と書かれています。私は、常々そういうことではいけないと思っておりまして、一つのテーマを1日中でも考えていけるような力を、学生には付けさせたいと思っております。

もう一つは、観光もそうですけれども、将来職に就いた時には、当然色々な障害があります。条件が全て整った中で決断するという事は難しいわけですが、その中でも、果敢に、かつ迅速に決断が出来る。間違っても構わない、そういった決断が出来る学生を育てていきたいと思っています。

それから観光においては、特に秋田県は3つの問題点を抱えています。北に位置している、そして非常に寒いということと、先程小沢先生のお話にもありましたけれども、日本海に面しており、新幹線が出来ても脇道になってしまうということです。私は、それであれば尚更、この秋田の地から国際人を育てていきたいと思っています。アジアの中の日本、アジアの中の秋田ということで、世界に雄飛出来る人材を育てていきたいと思っております。

道 端 ありがとうございます。私からも、本学の観光学科開設についてお話をさせて頂きたいと思います。

法学部に観光学科を開設するのは、これが日本で初めてになります。法学部と言いますと、行政ですとか、そういったものの関わりがあります。そういった点で、本学ではまず地方自治体と連携していくということなのですが、秋田は少子高齢化ということで、ご存知の通り、30年後には78万人に人口が減ることが言われております。特にこれからの地方自治体は、こういった厳しい現実が差し迫ってくるだろうと思います。

観光という点からいくと、中国や韓国、あるいは台湾からの観光客が増えておりますけれども、さらに観光客を増やす必要がありますし、交流を深める必要もあると思います。そういった観点から、アジアに目を向けるということで、大学名をノースアジア大学と改めるきっかけとなった観光学科が開設されることになりました。現在、特に観光奨学生という制度を導入していますが、中国・韓国・台湾に1年間留学するというので、学生を観光奨学生として教育しているところです。地域づくりが出来る人材を育てていきたいと思っておりますが、これについては各地域において、中国・韓国・台湾の方々をおもてなし出来るというような観点で考えております。

それから将来の秋田県、あるいは東北全体、日本全体についても言えることですが、少子高齢化時代を迎えて人材育成はどうあるべきかということも課題となるだろうと思っております。

それでは、パネリストの皆様からご意見がありましたらお願い致します。

小 沢 私は、先程の本山先生のお話とは意見が違いますが、旅行商品というのはどうしても値段が問題になります。それはもう既に分かっていることですが、旅行商品は値段に関わりがないとも思えます。もう少し言えば、関わりがないのではなくて、高額であっても良いのではないかということです。

商品それ自体は、経済学で言えば需要の価格弾力性が非常に高いので、競争的になりやすいんです。そのため、自分で自分を追い込んでいってしまいます。しかし、そういった商品を作るのではなくて、これからは違う商品が作れるような人材、商品の中身をよく理解し、それに見合った料金を設定可能で、さらにそれを顧客に説明出来るような人材を育てるべきです。そのための訓練をすることが、旅行業界では大事ではないかと思っております。

道 端 本山先生、この点はいかがでしょう。

本 山 確かに、それは究極の目標であると思います。旅行会社も日々努力はしていますが、なかなかそこに近付くことが出来ないというのが現状です。

道 端 ありがとうございます。

小 沢 それと、最近は顧客、つまり消費者のほうが、代理店の店頭で販売している販売員よりも、自分の行きたい観光地のことをよく知っています。それは何故かということ、商品を売るだけになってしまい、人材をきちんと育成しなかったつげが、今まわってきているんだと思います。観光地について知りたいと思えば、インターネットでかなりのところまで知ることが出来ま

す。写真も見ることが出来、あるところでは動画も見ることが出来ます。それを超えるような知識、あるいは経験、そういうものを持たせるような人材教育をしていかないと、おそらく顧客に対応出来ないであろうし、インターネットに軍配が上がってしまうのではないかというふうに感じています。

道 端 ありがとうございます。他にご意見のある方はいらっしゃいますか。

泉 先程の続きとなりますが、航空業はサービス業です。サービスというのは、「これ、サービスしておきますね」という言葉の通り、皆さんの中では無料だという概念があるかもしれませんが、本来はきちんとお金を頂くものです。

今まで秋田は農業等の一次産業や、一部二次産業で地域興しを図ってきたのだと思いますが、それが限界となり、第三次産業の一つである観光で生きていこうとお考えのようです。その場合、観光は先程お話があった通り、コンテンツと、ソフトウェアが極めて重要です。その基本となるのがいわゆるホスピタリティ、皆さんが既にお持ちの「おもてなし」の心です。お客様の喜ぶ顔を見て嬉しいと思い、もっと何かしてあげたいと思う心、それが一番の原点です。

航空会社のサービスもそれが原点ですが、それだけでは評価して頂けません。それを、商品として磨き上げていくことが重要となります。そして、私どもの長年の経験の中で築き上げてきた知識、あるいはノウハウ・プログラムというものが、こちらのホスピタリティ教育に役立つのではないかということで、私ども ANA グループもノースアジア大学にご協力させて頂いております。

我々の教育は、単なるマナー等には留まりません。実はビジネスをやっていく上で、先程も言った通り世界中を相手に競争するには、きちんとした戦略、企画立案が必要であり、特に自由競争の中ではマーケティングが重要です。今もお話があった通り、価格だけの競争というのは、必ず負ける戦略です。今のお客様は、インターネットや情報を持ち、知識も豊富で、しかも気まぐれです。ですから、そういうお客様の動向をどのように認識するか、どういうお客様をターゲットにして、どういうサービスをするのか。そのプログラム作りが、極めて重要です。それで、それを実現するためのプランをする人間、それから、きちんとマネジメント出来る人間、そして実際にサービスをするフロントの人間が必要です。いくら良いプランを立てても、それを実行出来ないといけません。私どもの航空会社にも、色々なサービスを担当している人間がいます。空港でも、客室でもそうです。それぞれの人達がおもてなしの心を持って、統一された基準でサービスが出来るようにしなければなりません。

こういった3種類の人材が必要ですが、その共通項の一つは、ホスピタリティかもしれません。今、日本中が観光、観光と言って大変なんです、観光は魔法ではありません。それを支えるのは人材です。ですからノースアジア大学でも、あるいは立教大学でも、どこでも同じだと思ってしまうのですが、観光教育ではホスピタリティのほか、一般論として、経営そのものについてのマネジメントであったり、戦略であったり、アカウントिंगであったり、あるいは法律的な知識といったものが全部必要です。ただ、出口の問題を考えた場合に、その強弱があると思います。

道 端 ありがとうございます。本当に人材育成には様々な困難が伴いますが、これをどう考え、

乗り越えていくか。そしてどう行動し、地域興しをしていくのかということがイメージ出来たかと思います。他にご意見のある方はいらっしゃいますか。

本 山 一つだけ皆様にご提案があります。今、旅行の話をしていますが、旅行と同時にもう一つ見過ごせないものに、競技スポーツというものがあります。これは人類の創造的な文化活動の一つです。観光と全く同じようで、皆さん選手達の活躍をテレビで観て、大いに感動なされたことだと思えます。

先般閉幕致しました、「君のハートよ位置につけ」ということで始まりました秋田わか杉国体でも、19市町村に37競技をお引き受け頂いたわけです。この10日間足らずで、2万5千人の選手と役員が秋田を訪れました。観光で2万5千人を10日間と呼ぶというのは、大変なことです。それと同時に、これだけの交流人口があったということは、観光地や受入施設等も潤うわけで、私は観光と同様であると考えています。

昨今有名なJリーグに見られるように、スポーツによる交流人口の増加も見逃せません。秋田のノーザンブレッツというラグビーチームは、日本のトップリーグに加入しています。また、バスケットボールで有名な能代市等も、可能性を含んだ候補地ですので、観光と一緒にスポーツによる交流を増やすといったことも、ぜひ考えて頂きたいと思えます。今日は、日本オリンピック委員会から参りましたということで、旅行と同時にスポーツも考えて頂きたいと思えました。

道 端 ありがとうございます。それでは、観光振興と人材育成のどちらでも、観光に関する事について長年研究されている先生方ですので、質問等がありましたら受けたいと思えます。どなたかいらっしゃいますでしょうか。それでは、本学の堀川先生お願いします。

堀 川 教養部の堀川と申します。今日は貴重なお話をありがとうございました。先程のディスカッションの中で、ホスピタリティという言葉が何度か出てきましたけれども、以前にもこのようなシンポジウムで、何故秋田県が他の県に比べて観光が振るわないのかということについて伺ったんです。すると、必ず返ってくる答えが、秋田県民のホスピタリティに問題があるということでした。

ところが、『秋田魁新報』で秋田わか杉国体の記事を読みますと、どの県の監督も「この20～30年の間にいろいろな国体に参加したけれども、秋田ほど歓迎してくれたところはない」と言うんです。それで、私が思うに、秋田県民はホスピタリティがないのではなくて、今までそれを表現する機会がなかったり、表現の仕方が下手なだけではないかというように感じるんです。私も秋田県出身ですけれども、秋田県が沈滞するのは秋田県民の性格が原因だという、朝日新聞の記事がありましたように、秋田県民は性格的にマイナスのイメージで見られているのではないかと思います。

先生方にお伺いしたいのは、ホスピタリティ以外の問題についてです。判で押したように、秋田県の観光が振るわないのは秋田県民のホスピタリティに問題があるからだと言われますが、私はそうではないと思っています。何か別の問題があると思うのですが、いかがなものでしょうか。

道 端 ありがとうございます。この点について、どなたかご意見はありますか。

本 山 私どもは送客をする立場だったのですが、私は決して朝日新聞に出ていたような、県民性のせいではないと思います。

私は、秋田県は他の県に比べて、情報発信が不十分だと思います。もっと情報発信をすれば、秋田県というものが一般に認知されますし、こんなことを書かれなくて済むようになると思うんです。宿泊施設についても、確かに受入の施設等は改善されていますが、その情報がきちんと発信されて、消費者のもとに届いているかということを見直さなければいけないのではないかと思います。

ですから、例えば秋田の親善観光大使等を作ると良いと思います。同じ朝日新聞に、先般出ていましたけれども、現在は自然写真家として活躍されている、バスケットボールでトップを極められた小松ひとみさんという方がいらっしゃいます。出来ればそういった方になって頂きたいのです。有名な俳優の柳葉敏郎さんですとか、演歌歌手の藤あや子さんですとか、そういった秋田県にかかわり合いの深い方々に観光大使となってもらい、秋田の宣伝をして頂ければと思います。そうすれば、新聞にあるように売込みが下手だ等と言われずに済むと思います。その辺りの情報発信をもう少し充実させれば、立派な観光地もたくさんありますので、観光振興となるのではないかと考えています。

道 端 ありがとうございました。宣伝・情報発信についてのお話でしたが、他にご意見のある方はいらっしゃいますか。

小 沢 先程本山先生のお話の中にありましたけれども、スポーツで訪れている選手や団体の方々は、秋田県民と交流しています。しかし、批評を書いているツーリストは交流してこなかったのではないかと思います。つまり、ツーリストは気が付いていないんです。秋田県民の優しさですとか、良い面を見られなかったのだと思います。

先程から話には出ていますが、交流人口という言葉があります。今もそうかもしれませんが、昔はoneWAYの観光です。ツーリストの視点でのみ記事が書かれます。しかし、交流をすれば何か違った面が見えてきます。その交流をするためには、どのような仕組みが必要かということも、秋田県の人達にお考え頂きたいと思います。

道 端 どうもありがとうございました。他にご質問のある方はいらっしゃいますか。はい、どうぞ。

上 西 法学部4年の上西と申します。私は、ホスピタリティという面で、先程の質問とは反対の意見を持つ者です。観光業界や他の方々が一流のサービスを持つのは義務というか、当たり前のことだと思います。それから、これは他県でもあることだとは思いますが、私が秋田県内で観光旅行をし、見知らぬ土地で迷った際、秋田県の方々の対応が冷たいと感じました。

それで、私が秋田で4年間過ごしていくうちに、秋田県の方々の対応を見た上での考えなのですが、今回のテーマである人材育成という点で、人材を育成したとしても、その他の観光に関わらない秋田市民の方々に対して、どのようなアプローチをしていけば秋田県として発展していくのかということについて、どのようなかたちで伝えていけば良いのかお聞きしたいと思

います。

道 端 この点についてはいかがでしょうか。観光立国推進基本法という法律が出来まして、日本人全員が観光立国に向けて取り組むようにという法律の条文が出てきております。当然秋田県民も、全員が観光立国に向けて努力するようにということでもあります。秋田県民に、広くおもてなしの心を持ってもらうということでしょうか。そのためにはどうしたら良いかということだと思いますが。

本 山 先程少しだけ触れたのですが、ここで教育を受けてリーダーとなっていく方に、常に意識して頂きたいのは、地域の再生です。これは、地域の活性化という視点から行動を起こす必要性ということなんです。ですから、行動を起こして、周囲の人にもどんどん参加してもらいたいということです。それから地域づくりにおいては、地域の認識と地域住民の参画への留意も必要です。

リーダーは、こういったことを心がけながらやっていく他はないと思います。ですから、リーダーの立場になれる方は、ぜひそういったことに留意して頂ければ、徐々に活動が広がっていくのではないかと思います。

道 端 ありがとうございます。他にご意見のある方はいらっしゃいますか。

泉 私も基本的に同じ意見です。ただ、重ねて申し上げますが、秋田県の方にホスピタリティがないとは全く思いません。ただ、そのような記事を読んで、それにうなずいてしまっているのではないかと思います。地道ではありますが、皆さんが農業との両立も考えながら、本当に観光で生きていくんだという真剣さのもとに、そのためにはどうしたら良いかということ自分で考えていくべきです。その場合、例えばノースアジア大学で育った人が中核となって、最初はなかなか上手くいかないかもしれませんが、少しでも良いから地域の人達のリード役となって、その先導的な役割を担って仲間づくりをして欲しい。それが、遠回りかもしれませんが、一番着実な方法ではないかと思います。私はずっと東京にいますが、都会に比べれば、秋田は地域の繋がりが強いと思います。そういう繋がりを意識して、さらにもう一度、中核になる変革者が誠意を持って動き回る。それしかないのではないかと思います。

それともう一つは、自分だけでは駄目だということです。周りの仲間を増やし、共存共栄の努力が必要です。これは市町村同士、あるいは秋田県の中だけではなくて東北全体、そして日本全体でも同じです。その中で、秋田へ世界中の人に来てもらいたいのであれば、秋田を世界中の人に知らせ、秋田にはこんな良いところがあるんだなということに来てもらい、やっぱり来て良かったなと言ってもらえるようなものを、自分達で作らないといけません。これがプログラムです。映画の脚本と同じで、行ってみたい、面白そうだというストーリー作りが大事です。世界中の観光地には成功例、あるいは逆の失敗例もあります。これらを調べてみればよく分かるのではないかと思います。

道 端 ありがとうございます。

本山 今、秋田の県民性の問題が出ていますが、記事をお読みになっていない方もいらっしゃると思いますので、誤解があるといけませんのでご紹介します。秋田の県民性として、「横並び意識が強い、売込みが下手である」等というように書かれています。これを県の総合政策課が変えようということで、秋田県民の変身プロジェクトが、今立ち上がったわけです。ですから、秋田がこれから変わるわけです。

彼らは何をするかということ、まずは企業や行政のリーダーを対象に、性格を変える研修会を開くということです。徐々に秋田県民を変えていこうということで、県が立ち上がったわけですから、そういうかたちで変えていけば、非常にチャンスがあるのではないかと考えています。

道端 ありがとうございます。

小沢 もし出来れば、上からではなくて、一般の人から変わっていけるような、あるいは変わろうとするようなことのほうが上手くいくと思います。行政は今、大変な状態で、お金もありません。ですから、皆さんそれぞれが、周りの友達同士でも結構ですので、例えば大学で文化祭をやる時に、地域の人達にも来てもらって、来てもらうだけではなくて、地域の宣伝か何かをしてもらおうです。そういったことを通じて地域との結び付きを深めたり、自分達は地域のために何か貢献することは出来るのか、あるいは地域の人達がノースアジア大学のために何が出来ののだろうかということ、少しずつ考えてもらえればいいのではないかと考えています。

それから、リーダーというように、あまり構えてやる必要はないと思います。皆さんにはホスピタリティがあると、私は信じております。

泉 私も全く同感で、お上にあまり頼らずに、本当に自分から立ち上がって頂きたいと思います。役所頼みとなると、タイミングも逸します。まずは自分で動いて、後から役所に応援してもらって、巻き込んでいく、今はこういったやり方しかないと思います。

道端 どうもありがとうございます。観光は大切だということを啓蒙すると言いますか、また、それだけではなくて、参加型の事業といったものを増やして地域づくりをすることにより、地域の広い人達が、観光に対する考え方やホスピタリティを持って頂けるのではないかと趣旨の発言だったかと思いますが、この辺りではよろしいでしょうか。それでは、拙いコーディネーターでしたけれども、パネルディスカッションを終了させていただきます。どうもありがとうございました。

橋元 先生方、素晴らしいディスカッションを誠にありがとうございました。それではこれをもって、シンポジウム「観光立県と人材育成」を終了させていただきます。

この秋も、ノースアジア大学シティカレッジは、多彩なイベントで皆様をお待ちしております。私達のささやかな試みが、少しでも皆様の心を潤し、また、秋田県の活性化のために役立つことを、心から願っております。どうぞ皆様、ノースアジア大学をよろしくお願い致します。本日は誠にありがとうございました。(拍手)

[講 演]

ノースアジア大学 総合研究センター主催

鼎談 「中国との関係について」

講 師	白鷗大学教授・立命館大学客員教授 ノースアジア大学総合研究センター客員教授	福 岡 政 行
講 師	前秋田公立美術工芸短期大学学長 ノースアジア大学総合研究センター客員教授	石 川 好
司 会	学校法人ノースアジア大学理事長・学長 本学総合研究センター長	小 泉 健
日 時	平成19年11月11日 午後1時～	
会 場	カレッジプラザ講堂 (秋田市中通)	

橋 元 本日は、ノースアジア大学総合研究センター主催のシティカレッジにお越し頂きまして、誠にありがとうございます。鼎談「中国との関係について」の開催に先立ちまして、学校法人ノースアジア大学理事長・学長 小泉 健先生よりご挨拶がございます。どうぞご静聴下さいませ。

小 泉 小泉でございます。本日はこの総合研究センターのシティカレッジの講演会に、本当にたくさんの方にご来場頂きまして、心からお礼を申し上げたいと思っております。前にもお話致しましたけれども、このシティカレッジは全く何もないところから、一から作りまして、三年目になります。おかげさまで磐石な体制が出来てきたかなということで、私も作ったメンバーの一人として、非常にうれしい思いでいっぱいでございます。本日は、作家の石川 好先生、政治学者の福岡政行先生という大変豪華なメンバーによる講演会でございます。おそらく、前にも後にもこんな講演会はないのではないかと私は思っております。

先生方につきましては、私の方からあらためてご紹介するまでもないのですが、石川先生は作家の傍ら、新日中友好21世紀委員会の日本側代表を務められておまして、中国に非常に詳しい方でございます。天津市をはじめとする中央人民政府において政策顧問等々を務められている方でございます。ですから、日本人としてだけではなく、中国側から日本がどのように見えるかということも考えて、お話頂けることと思っております。

福岡先生は、テレビ等でいつも皆さんが良くご覧になっている方ですので、私の方からご紹介することはほとんどないのですが、鋭い切り口で現代の政治について、しかも非常に実践的な、現場に即した裏付けのあるお話を色々として頂けるのではないかと、思っております。

そういうことで、今日の私の役目はもっぱら聞き役ですので、鼎談になっても私が話すのは、「そうですね」という相槌位になってしまいそうな感じですが、よろしくお願い致します。それでは、まず福岡先生のご講演、その後、石川先生のご講演を頂きまして、鼎談としたいと思います。最後までご静聴下さいませよう、よろしくお願い致します。本日は本当にありがとうございます。

福 岡 こんにちは。ノースアジア大学総合研究センターの講義に来て、2年目になります。前回の講義は、平成19年7月28日でした。翌日が投票日ということで、きっと自由民主党が30議席台に落ちて、投票日の夕方、つまり、29日の夜の番組で安倍総理大臣が辞任をするだろうと勝手に予測をしました。ところが、29日の午後5時過ぎ、当時の外務大臣の麻生太郎が総理公邸に入りました。出口調査の結果をもう全て知っておりまして、テレビ朝日系列、朝日新聞は36プラス・マイナス3でした。各社とも大体同じ数字で、結果は37だったと思います。そんなことで、麻生太郎は「今、辞めるわけにはいかないだろう」ということを言って、安倍晋三は続投を宣言すると言いました。その後、潰瘍性大腸炎で下痢をしている8月に、東南アジアに行き、インドの首相からカレーライスを勧められて食べました。それで、また下痢をして体調が悪くなったのを見て、某ジャイアンツ系の新聞社の会長さんが、もう長くないと思って密かに動き出した、というその前段までお話をしました。

しかし、私事ですが、8月のお盆期間中に、東京大学医学部附属病院へ人間ドックで入院しました。嫌な検査は、今まで全て逃げてきましたが、ついに内視鏡をお尻から挿すということになりました。これまで、50歳の時には聖路加病院、55歳の時には立正佼成会病院で、全ての検査を逃げてきたんです。「そんなことまでして自分は生きたくない」と言って、見栄を張っ

て、今回ついに、61歳でやりました。内視鏡を入れられて3分も経たないうちに、後輩の医学部の男が「ああ、先生、ガンですから。切ります」と言いました。もう少し、きちんとした告知をしてもらいたいのには、女性の研修医2人を含めて5人も6人もいるところで、私はお尻を出して内視鏡を入れられて、後輩は何を言っているんだと思っていました。

初期ガンで、4ステージのうちの1でしたが、お腹をどうしても切りたい、と訳の分からないまま切られてしまったため、秋の講座の1回はパスしました。今日は、中国との関係という話と、今の政局のことだけ少し触れてお話をしていきます。

大学の同じクラスから、十数人新聞記者が出たという話は毎回していますが、そのうちの1人が、10月3日に退院した後に連絡をしてきて、「12月に忘年会か何かやろう」と言ってきました。この友人は、東京地方検察庁を担当して20年であります。守屋前防衛省事務次官のXデーは分かりませんが、この男が電話をしてくる時は、政治家が逮捕される時で、12月上旬というのは1つのポイントになりますが、これは、防衛省の大臣経験者かどうか、1人か2人かはコメントしませんが、今週の証人喚問で既に証言法違反が出てきておりますので、11月15日は動きがあると思います。

冒頭、1点目は政局です。今日の本論ではないので簡単に触れますが、全ては渡辺恒雄と小沢一郎という2人の人物の傲慢、不遜、単に「わがまま」というだけです。逆に、福田さんは御輿が出来なければ乗らない人です。ですから、総理になった時も、野中広務、古賀誠が福田さんと7月のある日に会って、「安倍はもたない、おそらく7月29日に辞めるかもしれないし、体調ももたないからいずれ数ヶ月以内だ」と言って、さらに8月中旬から、どうも下痢をしていることが分かって、密かに動き出しました。これがいわゆる、中国との関係を重んじるグループであり、中国との関係は、小泉さんは靖国問題、安倍さんは基本的にトヨタを含めた経済界からの強い要請で進んでいきました。また、昨年10月上旬の北朝鮮の核実験の失敗など色々ありましたが、その関係で流れは、中国との関係を上手くやれるような人ということで、野中さんがかなり早い段階で動いたと言われています。たまたま、7月のある日に京都の立命館大学の講義が終わった後、京都駅で野中さんとばったり会いました。私は福井県出身で、野中さんは京都の出身で近いこともあって、普段から結構話をする関係ですが、その時の最後の別れ際、「先生、麻生だけはダメですよ」と野中さんが言われました。麻生外務大臣が次だということは、何となく雰囲気では分かっていたこと、私が麻生さんと若干の付き合いがあるということもあって、そう言われたのが分かりませんが、これが一つの流れです。

同時に、山崎拓さんと加藤紘一さんが、日本テレビ氏家議長と日本テレビで会って、当然、渡辺恒雄さんが関わり、このグループが軸になって動いていた。また、安倍さんが辞めると言った9月12日の午前9時30分頃、シーファー米国駐日大使が、30分足らずですが、総理官邸に入っています。9月13日の秋田魁新聞を見れば分かります。この時、アメリカは六者協議をどんどん進めていくこと、核の無能力化もあと数ヶ月以内に決めるので、いつまでも拉致問題等々を安倍さんは言わないで欲しいということで、アメリカも中国も経済支援や重油を送るという最後通告が、この日の朝に、どうもアメリカ側から安倍さんに伝えられたようです。それまでは、体力が落ちてきていましたが、やる気満々でした。もう少しと思っていた時に、アメリカから言われました。それが司馬遼太郎先生の言う、「日本のリーダーは自分の成功体験を唯一の価値判断にする」というものです。

安倍晋三の唯一の成功体験は拉致問題で、福田康夫官房長官と安倍晋三官房副長官でやって

いた、2001年10月のある日、地村さん夫妻、蓮池さん夫妻、曾我さんの5人が日本に戻って来た時、1週間で北朝鮮の平壤に戻す約束でしたが、安倍晋三官房副長官が「憲法上も自然法上も、誘拐された5人の子供達が大きくなって、今、日本に戻りたいと言っている。平壤に返す理由はない」と言い、福田康夫官房長官は「1週間の約束である」という激しいやりとりが、総理官邸の官房長官室でありました。これが飯島勲という、小泉さんの秘書が書いた『小泉官邸秘録』の中に出ています。当時から有名です。結局、最後の判断はこのお父さん、お母さん達に任せました。この時、安倍晋三は「日本政府は責任を持って子供達を連れ戻してくる」と言いました。地村さん、蓮池さんにしてみれば、子供達が北朝鮮に残っているから、いつ、いかなる理由で殺されるか分かりませんでした。しかし、この安倍晋三の言葉を信じた結果、半年後、羽田空港に政府専用機から子供達が降りてきました。これが安倍晋三の人気を作った強行突破論でした。

そして、9月12日にシーファーマメリカ駐日大使に言われました。おそらくブツンと切れて、「小沢さんが会ってくれない」と訳の分からない、駄々っ子のような発言をして、安倍晋三は政界を去りませんが、このことが前提になり、慶応大学の病院に入院をしました。その背景には、やはり、財界で大きな動きがありました。特に渡辺恒雄さんです。即座に小沢一郎をホテルオークラ等呼んで話をしました。あの性格ですから、最後に小沢一郎も乗りました。乗って、森喜朗と会いました。

数日前にテレビで言ったらかなり反発はありましたが、今日は、読売の記者がいなくて言います。読売新聞は尽く自分のところの会長の話を聞いて、1面トップで書き続けました。そのこと自体、私はジャーナリストとして恥ずかしい行為だと思っています。

そんなことで焦りながら、私は大連立をしてもいいと思います。しかし、それは批判勢力を封じ込めるといことですから、ある程度、国民の合意とか、政策協議で何をやるのかを決めてもらわないと、このようなことを2、3人の人間で、まして政界の関係者ではない、メディアの関係者が介入するということは、恥ずべき行為であると思っています。数日前、退院後に初めてテレビに出ましたら、少し余計なことを言いましたけれども、実を言うとそんなことが前提で、解散は来月だと思っています。総選挙は1月20日だと思っています。予算編成の前に選挙をして、おそらく自民党も民主党も勝てないので、そこでもう1回、小沢さんは大連立の話をしたいんだと思います。だから、渡辺恒雄の言葉は1つも言いません。周りで皆言っているのに言いません。あの頭の下げ方では本当に謝っているとは誰も思いません。このようなことを含めて、冒頭、その点だけ触れました。

2点目です。これから石川好先生もお話されると思いますが、中国という国の内情について、日本にとって大きな問題があります。私は中国に4回行きました。1回目はTBS報道特集の仕事で天安門事件の時に、一生懸命、あの弾圧を受けながら戦っている人達の取材で入り、報道特集の中で報告をしました。それから十数年が経ち、その時、中国で知り合った友人が東京大学に来て入学をしたら、急に亡くなってしまいました。奥さん達を呼べないということだったので、私はお金がありませんでしたが、今でいう10万円の金額を亡くなった友人のために使い、奥さん達が日本に遺体を引き取りに来られるようにしました。それからの関係で、北京大学で2週間程、日本語で集中講義をすることがありました。その後は、山形出身の友人が上海に4000人の工場を持っていて、そこに2回行ってききましたので、中国に合計4回行きました。天安門事件の厳しい弾圧の時代から、今の上海の姿はもう皆さんがテレビで見えていますように、

わずか十数年の間に、このように時代の変化に対応出来るというのは、日本人を凌いでいると思う程のパワーを感じました。変化への対応力は日本人も凄いけれども、やはり中国の人は凄い、というのを感じました。

「BRICs」という言葉があります。経済が伸びているのは、ブラジル、ロシア、インド、中国、台湾ということです。「BRICs」の株は、手を出しても難しいです。北京オリンピックまで、上海万博までと言われます。「VISTA」にはベトナムも入っています。もっと先には、「NEXT11」というのがあります。今日は、株の話ではないので言いませんけれども、中国は「BRICs」の1つになったので、これからの日本経済との関係は非常に大きいです。

その中で、外交評論家の岡本行夫という元外務省北米一課の課長が、私の同級生で、今も付き合いがありますが、私が病気で講演が出来ない時、彼に代打ちをしてもらったこともあります。ある時、その彼がパソコンからトランプゲームを出してきたんです。「5枚カードがあります。見て下さい」そして、それを消して、パッとまた別のカードが並んで、「この5枚のカードのうち、どのカードがなくなりましたか」と聞きました。でも「これは中国の人が考えたゲームなんです」話された瞬間に、私はたった5秒で、「元々、元のカードは1枚もないんじゃないか」と答えました。全く別のカードを並べておいて、前のカードでなくなったカードはどれですか、ということ、岡本行夫は2時間半考えました。外務省の人達も皆、30分、40分も考えました。でも、私は「中国」という言葉を聞いた瞬間に、5秒で当てました。このようなことから、中国には、かなりインチキの物が多いと分かります。

上海に行って、凄い人の数だなあと感じましたが、中国の人口は13億2000万人と言われてます。もしかすると14億人いるとも言われています。また、2番目の子供に戸籍のない可能性もあります。この時に「福岡、簡単に考えれば、10倍だよ。日本の約1億2760万人の10倍の13億人が中国だ。10倍と考えたら、インチキでもごまかしでも簡単に出来るんだ」ということを言われたことがあります。半年前の上海では、大体年収200万円以上の方が、5000万人から6000万人いました。それは、日本の昭和41年、42年位の経済力だということです。当時、日本は人口1億人を越えていて、世帯数でいけば4000万世帯でした。5000万人の人が年収200万円というのは、日本の昭和41年の平均所得なんです。ミゼットを買ったり、電気冷蔵庫を買ったり、いわゆる、その家庭の中に色々なものを買うという時代に、中国がこの1年か2年位前から入ってきたということです。ですから、蜜の入ったリンゴが青森から輸送されて高く売れるとか、そういうようなことにもなってきたと言います。日本の10倍です。13億、14億のうちの、たった5000万人といっても日本の世帯数位のマーケットがあります。それは沿岸の方にはほぼ集中しているということです。中国の奥の方には行っていませんが、海側のところには、ほとんどそのような印象を持ちました。

3点目は、中国の光と影です。2008年の北京オリンピックまでは、あと1年もありません。昨日、中国で行われた女子フィギュアスケートで、ショートプログラム1番であったイタリアの選手が最後に演技をして、転んで結局3位になりました。金妍兒（キム・ヨナ）さんという韓国の選手が圧倒的人気で拍手も多かったようです。しかし、この1番の選手が最後に演技を終わらせて、ポーズを取っても会場の拍手はありません。これがやはり、中国のホームタウン実情と言うか、重慶でのサッカーとは言いませんが、なかなかきついものがあります。どんなことがあっても、どの国でも、演技を終わった後は拍手をする位の礼儀はあってもいいだろうと思います。全部は見えていませんが、その印象を持ちました。だけれども、中国にとって、オ

オリンピックと万博、この2つで日本を越えてアジアの雄になり、米中の時代を作りたいと思っています。日本で言うと、東京オリンピックと大阪万博の後に、日本がアジアのリーダーになり、高度成長から跳ね上がって行くときに日米の時代を築いてきました。今、この位置に、中国がいます。

しかし、その関係の中で、影の部分は、環境問題、大気汚染の問題です。そして、昨日、一昨日とニュースになっている中国製の玩具の問題、鉛の問題等です。一方で、この講義でも言ったように、ユニクロの柳井は私の大学の4期後輩です。100円ショップ・ダイソー産業は私の友人が社長をしています。彼らと話をしていれば、世界の工場として、もう「Made in 中国」という言葉が圧倒的です。この、日中の経済協力というのは、やはり日本の今の繁栄にとって重要です。今年、石川県に4回位講演に行きました。この後、まだ行きます。それは小松製作所です。やはり、何だかんだ言っても、それは中国でブルドーザーや、色々なものが馬鹿売れして、中古製品までも間に合わないの、買い付けに来ているという実態であります。

そのようなことを考えていくと、この中国の光の部分はたくさんありますが、影の部分というのもたくさんあります。それをどのように考えていくのかです。京都議定書にサインをしなかった国は、アメリカと中国です。アル・ゴアがあのような形でノーベル賞を取ったことで、中国国民が本気になって動き出したのは事実です。また、高度成長で4年連続経済成長率10%を越えている中国は、これから玩具の監視機構や環境問題のチェック機関が出来るなど、色々言われていますが、それをやれば経済成長はどうしても鈍化します。13億人がまとまっていくかどうかという問題もあります。

4点目です。日中関係は経済主導で動きますが、小泉さんの時代は様々ありました。私は元々、小泉さんのプレーンを最初に2年程して途中で辞めましたけれども、小泉さんの靖国への思いというのは、横須賀のご出身ということでアメリカへの軸足が重かったのか、これは分かりません。ただ彼の場合は、何となく政治的な争点として靖国を使ったのかなという雰囲気があります。ただ、小泉さんは鹿児島県の知覧町に行って、特攻隊のあのような文書を読んだ話を聞いたことがあります。彼のお父様が鹿児島のご出身で、上京して小泉又次郎の娘に惚れて、大変ハンサムな方で、駆け落ちをして結婚されて生まれた長男が小泉純一郎です。お父様は防衛庁長官もやられていた方です。お父様がお国入りする時に、一緒になって中学生、高校生の時に鹿児島に行っていた小泉純一郎には、その特攻隊の文書が頭の中に入っていました。「靖国で会おう」という部分です。これが、やはり彼が総裁選に出る時を含めて、大きなトラウマと言うか、頭の中に残っていたというのは事実だと思います。その関係で、小泉さん、安倍さんになった昨年8月末位に外務省側は、実を言うと、中国の北京に行って、今年中に胡錦濤さんを日本に呼ぶという方向でしたが、とにかく日中関係を新しくするという動きが、安倍さんの頭の中にはあったんです。それで、動き始めて色々な今年のイベントもおそらくあったのだと思います。しかし、小泉さんから安倍さんになって外務省が本当に変わってきたのは事実ですが、色々な動きが水面下であったのも事実です。

それで、その背景にあるのは、元々は田中角栄であります。これはもう日中友好の問題で、早坂茂三さんが亡くなる前、私が聞いたのは「あの時、田中は死ぬ覚悟だった」という話です。大平正芳さんと赤坂の中川という料亭で、3人で飲んでいた時、これで日中友好をやれば右翼にやられるかもしれないけれども、日本にとってはもうアメリカが米中でやっているから、やらざるを得ないし、これは日本の国益だと言って2人が握手をしながら、その外務大臣が大平

さんだと思いますけれども、これでいきましょうという話を、実を言うと聞いたことがあります。

だから、親中国派には旧田中派、竹下派のグループが非常に多いと言います。小泉さんは、安倍さん、森さん、福田康夫という岸信介のラインですから、何となくこの中国とは疎遠であったということもありました。今回の福田政権を動かしたのは野中さんであり、古賀誠であり、二階俊博であれば、これは中国としょっちゅう行き来しているグループ、谷垣禎一もこのグループの中、加藤紘一は外務省の元中国課です。それで、山崎拓さんも、もちろんそのグループです。このグループが、あの9月12日から13日の短い時間で、麻生太郎をつぶして福田康夫にするというのは、このような背景もあったかもしれません。麻生さんになったとしても、やはり靖国にきちんと行くでしょう。ただ、麻生太郎は私にかつてこう言いました。「クリスチャンの方もいますから、靖国に眠っている約240万の柱のうちの、何万人かは別ですが、ほとんどの人達は靖国で会おうと言って、南の海に沈んでいった方々です。やはり、時の総理よりも天皇陛下にご親拝をして頂きたいという気持ちではないか。天皇陛下が行けるような状況を作るべきだ」というような発言をしたことがあります。これもまた大事な点で、この靖国の問題も日中にとっては大きいと思います。

5点目ですが、歴史認識、これはなかなか難しいものがあります。特に、南京と重慶の反日感情の問題があります。日本の中国大陸への侵略戦争の問題があったり、沖縄の集団自決については大江健三郎さんがあのような証言をされました。しかし、決定的にどちらがどうこうというのも難しいです。住民が手榴弾をくれと言ったのか、それを手渡されたのかは、何十年も前なので分かりません。このことを考えていくと、この歴史認識をどこかできちんとやらなければいけません。ただ、安倍政権が出来て、今、この段階でタカ派の論客の発言はかなり減りました。何となく中国とは上手くやっっていこう、という雰囲気が出ているのは事実ですが、また、そのタカ派の中川昭一さん達がグループを作り出しました。平沼さんが自民党に戻れば、このような動きも出てくるということを含めて、実を言うと、この歴史認識の問題は非常に大きいような気がしています。侵略戦争の問題も、日中の中でやはり喉に刺さったトゲのような問題として、後程議論があらうかと思っています。

最後になりますが、私はやはり日中関係というものを、もっと色々な形で広げて行かなければいけないと思います。特に私は北朝鮮の問題というものに関心を持っていて、既に北朝鮮には2回入国していますが、当時、私を担当した通訳が、今の対日全権大使の宋日昊でした。また、大きなニュースにはなっていませんが、田原総一朗さんが先々週、行かれたそうです。この北朝鮮問題というのは、おそらく中国が判断することで、かなり良い方向に動くか、このまま閉ざされるかは分かりませんが、色々な動きがあると思います。そうなってくると、中国と北朝鮮と日本ということを見ると、どうでしょう。日本海時代がここに生まれてきます。北朝鮮や中国に行くと、両国から撮ったような地図が随分出てきます。そうなると、日本海とは書いておりませんが、やはりこの日本海が大きな接点の場所になっています。もちろん、韓国の問題もありますが、そのことを考えていくと、中国との関係は単に経済的な問題ではなく、日本の外交や防衛という問題を含めて非常に大きなものになっていくと思っています。

もう1点、それをきちんと踏まえながらも、なおかつ、この中国という国と付き合っていくのは難しいんです。それは数が多いし、基本的には中華思想という、世界の真ん中に自分達がいるのだというこの感覚があるからです。そのことを考えていった時に、今、問題になってい

る玩具の問題を含めて、中国製品というのはもう少し、赤ちゃんや子供達のことを考えて作って欲しいと言いたくなります。口の中に入れて、麻酔がかかったように眠りこけてしまった子供達が何人も出てきてから、慌ててチェックするのではなく、中国から製品を出す時に、中国国内で安全基準か何かをきちんと作ってもらいたいと思います。

それから、ミャンマーです。あの様に女性を軟禁するような問題もありますが、どう考えてもミャンマーと中国との間に麻薬の問題が関わってきます。そのことをきちんと中国が言ってくれば、あの軍事政権を倒すことも出来ます。パキスタンも今、問題になっていますが、ミャンマーの問題は大きいです。それから、あまり日本ではニュースになりませんが、スーダンという国の部族対立の犠牲者の数は、半端な数ではありません。でも、ここには石油の問題があって、中国は軍隊を送っています。石油の利権には日本は鈍臭いです。1バーレルが97ドル、98ドルになって、あまり言えませんがゴールドマン・サックスのレポートに3年前から1バーレル105ドルという話が出ているんです。だから、サブプライムローンがこういう風になって焦げ付いて、野村証券やみずほ証券が約1000億円の焦げ付きで、おかしくなってきたということを含めると、サブプライムに流れていたお金が原油1バーレル98ドル、100ドルになるとというのは、それは中国はスーダンまで手を出しているということです。日本はもう少しやったほうが良いと思うけれども、卑怯なやり方はして欲しくないと思います。人道問題があります。そう考えると、ミャンマーやスーダン、アメリカでも中国でも同じですが、きちんと「ダメなものはダメ」と、言うべきことは言うべきです。

でも中国の友人と付き合っていて、素晴らしい感性の人がいます。日本の大学生の10倍の中国人がアメリカでPhD（博士号）を取得するそうです。その人達が、ウォールストリートやシリコンバレーに行ってお金を築いて中国に戻り、米中の時代を作ろうとします。こういう戦略を見ると、やはり中国の人は凄いと思います。これに負けないで良い意味で切磋琢磨するためにも、私はこの中国との付き合い方は、はっきりと言うべきことは言いながら、友好関係をもっと深めていくべきだと思います。私はハト派ですので、南京の問題でも侵略戦争でも、反省すべき問題はきちんと反省をすべきであると思っています。ご静聴ありがとうございました。（拍手）

橋 元 福岡先生、誠にありがとうございました。それでは続きまして、前秋田公立美術工芸短期大学学長、本学総合研究センター客員教授の石川 好先生にご講演頂きます。石川先生、どうぞよろしくお願い致します。

石 川 石川でございます。今、福岡先生が大変大事な問題点を、非常に歯切れの良い話し方で、いくつか述べられたと思います。福岡先生が述べられたことにつきましては、後ほど3人で話をする時に、私もいくつかコメントをしてみたいこともあります。私はもっと違う点から、中国について少し語ってみたいと思っています。中国にはたくさん問題がありますが、一体なぜそれが問題なのかということ、私は申し上げたいと思っています。

例えば、我々は一言で「中国」や「中国人」という言葉を使いますが、日本では、「日本人ですか」と聞くと、「そうです、日本人です」と言います。ところが今、中国には大体13億ないし14億人の人がいたとしても、自分は中国人だとはっきり言える中国人というのはおそらく半分位だと思います。未だに、例えば、「魯」の国、「楚」の国、「漢」の国などがあつた時代

の感覚で生きている人が、間違いなく数億はいます。また、日本ではよく農民の問題がありましたけれども、中国では農民というのは、日本で言うお百姓さんという意味ではないんです。

例えば、内陸に延安と言うところがあります。毛沢東が立て籠ったところから、更に内陸に入ったところには、本当にいわゆる農民しかいませんけれども、彼らに名前を聞いても「農民」と言うんです。つまり、もちろん名前は付いているんですけども、ある特定の名前を付けられるよりも、「農民」という言葉の方がしっくりくるような人達なんです。つまり、中国という国の中には、古来2000年前、3000年前の意識で生きている人と、今のグローバル化した中で生きている人が、同じ時間帯、同じ大陸に生きている。このような国は、おそらく世界中を探してもありません。日本人の中には、例えば「自分は奈良県なので、大和の人間である」と冗談めかして言う人もいるかもしれませんが、本当に「楚」の国や「魯」の国という言い方が日本にあって、同時に「魯」でも何でもなく、名前もない、ただの農民が億単位でいるということになるんです。しかし、その最も貧しい農民と言われる方々が、どんな生活をしているかというのは、日本人はなかなか中に入って見て覗いたことがないんです。

本当の貧しい農民というのは、例えば、蓮根が泥の中にあって、それを出して拭いて塩を振って食べたりするのが主食です。農具は金具ではなく板きれです。そして目の前にある貧しい土地を耕して、種を植えて何かが出てきたらそれで終わりです。あとはその辺の生のネギなどに塩を振って食べます。それで十分なんです。それで幸せなんです。そのような人がまだ億単位いて、これが1番下のレベルの農民です。「北京で金持ちがたくさん出たらしい。我々はお天道様が出たから、朝起きた。沈んだから寝る。北京で悪いことをした人がたくさんいる。でもそんなことは関係ない」というような人達が、今でも億単位いるんですよ。このような現実、その風景を見ないと分かりません。多くの人が、北京でオリンピックが終わったら、株が暴落するとか、簡単に言いますが、間違いなくそうした株価予想に限らず全部間違えます。そのような予測が成立するわけがないからです。

今の中国が凄惨というものは、全土で初めて「中国人になろう」あるいは「中国人にするんだ」という運動が起きているということなんです。「あなた達は中国人です」というところまでは、距離的には、北海道から沖縄までの距離でも、時差が何百年もあるという距離があるんです。しかも、あそこには多民族がたくさんいます。つまり、中国とは何かと言ったら、今、中国人になるための運動を起こしているという視点をもつことが大事なんです。共産党がやっていることというのは、実はそういうことなんです。共産党を批判するのは簡単ですが、中国の歴史で初めて、毛沢東が作った中華人民共和国というものは、中国人というものを作っています。それは、「楚」でも「魯」でも「殷」の国でもありません。1つの中国にするということです。もっと分かり易く言えば、この20年程で中国で起こった1番大きな変化は何でしょうか。ある人は「金持ちがたくさん生まれたことだ」と言いますが、私の見方は違います。中国大陸と言われているところに住んでいる人達が、陸で生活するようになったことです。

どういうことかと言うと、例えば、皆さんは20年位前に香港、長江周辺に行ったことがありますか。つい20年、30年前までは、壮大な黄河流域、長江流域、江南などの湖や沼に数千万人が住んでいました。これを全部、共産党が陸に上げてしまいました。古代以来、新疆ウイグルなど、西の方には、「胡」が付く民族がたくさんいました。大半、馬に乗って生活をしている人達を、全部下馬させてしまいました。今、新疆ウイグルとか、あちらの方に行っても、遊牧という馬に乗った生活をしている人は極めて少なくなってしまいました。やはり陸に降り出し

たんです。もう1つ、山の中に住んでいる民族も数千万人いました。これも山から全部、出てきてしまいました。つまり、国家も王朝も関係なく、「明王朝も秦王朝も私は知らん」という人達が、海上に、山の中に、馬の上に、億近い単位でいたはずなんです。これを、山の中に住んでいる54の認定されている少数民族は別ですが、中国共産党の革命で全部陸に降ろしてしまっただんです。それで今、中国は「開放改革」や「文革になっている」と色々な言い方がありますが、全ては「1つの中国にしていこう」という運動なんです。

ですから、今の中国では何が起きているかと言うと、日本の明治維新と高度成長とバブル経済と戦後復興と、あるいは室町時代と平安時代が同じ時間帯で同じエネルギーで共存しているということなんです。こんなことが起こった国は、世界の歴史ではありません。1つの国の中で、しかも、ある国民になるんだという運動が一方にあり、生活圏も、山の中の人、馬の上の人、川の上の人、全部出てこいと言っています。それを、あの広大な中国大陸と言われている中で陸上に住まわせるようにしながら、なおかつ、地域によっては室町時代だったり、古代の秦の始皇帝がいた時代の生活の意識である人達と一緒に、ウォールストリートや日本のバブル時代で儲けた、想像も出来ないようなバブルで遊び呆けて狂っている連中が、数十万人単位でいるわけです。つまり、1つの国にそれだけ多様なものを抱え込んでいるわけです。これを統治するというのが、中国共産党の仕事です。

共産党は何をやっているかと言うと、たった1つです。色々と渦巻いているもの、人の動き、時代が違っているものを1つにしているんだ、という風に無理矢理し向けているわけです。2000年前の感覚で生きている農民を西暦2000年のハイテクの時代の農民にするという、極めて無謀な、つまり歴史上かつてないような運動を中華人民共和国、共産党がやっているのです。

今、日本の新聞論争などを見るとよく分かりますが、腐敗、汚職が凄まじいです。秋田県の食糧費問題なんか、話にならないような汚職があります。中国共産党が凄いのは汚職です。中国共産党に刃向かう者は戦車を出してでも踏みつづし、中国共産党を倒そうとする勢力は、電光石火、どんな手を使っても潰します。実は、これだけが中国共産党のやっている唯一の論理です。中国共産党が滅びれば、この国は大反乱、混乱が起きるだろうと思います。先程言ったような、古代や中世の山の民、海の民、明朝時代の感覚で生きている人達が全部、同じ時間帯に生きています。あっという間に、共産党が崩壊したら何かが起こるなというような気がします。

毛沢東さんがやったことについては、色々な批判がありますが、私は大きな話をしているんですけれども、毛沢東が歴史上、1番凄いとされたことはたった1つで、中国の武器を全部1箇所に集めてしまったことです。人民解放軍という場所に中国のあらゆる軍事組織、軍隊勢力というのを一本化したのは、中国の歴史、仮に4000年あるとすれば、彼が初めてです。つまり、中国共産党が、1番危険な軍事的勢力というものを、全部1個にしてしまったということなんです。毛沢東が評価されることは何かと言うと、豊臣秀吉のように刀狩りをしたことなんです。

ですから、中国共産党においては、党本部、党中央よりも1番権力があるのは、人民解放軍です。中国の理屈では、その方が安心なんです。何かあった時、武力勢力がたった1つしかないということは、武力闘争が起こせないからです。これが毛沢東の天才の由縁なんです。だから日本のような民主主義国から見ると、人民解放軍がやっていることは訳が分からないし、情報開示もない、と言うのはその通りです。胡錦濤さん、毛沢東さん、鄧小平さん達よりも上に、

人民解放軍という巨大な軍があるような国とは何だと言いますが、しかし、中国の理屈から言えば、それが1番安心なんです。これが壊れた瞬間にあつという間に中国は怒るわけです。例えば、あの毛沢東さんが、全盛の頃でも、林彪さんの300万、彭徳懐の200万の軍隊がありました。たった1人の元帥の下に兵隊が100万、200万と控えていたんです。

あの「文化大革命」。「プロレタリア文化大革命」という時代に下手をすれば1000万人が殺された。しかしその中で、今言ったような文脈で穿った見方をすると、あの時は最後の刀狩りだったと言う人がいるんです。なぜかと言うと、「文化大革命」が起きた1960年代の頃に、もちろん資本主義の劉少奇一派を倒したとか、色々あるんですけども、そこにはまだ武力勢力が眠っていました。中国共産党が、全土に人民解放軍という軍隊を作ったのにも関わらず、武器が残っていました。それで、劉少奇一派などが資本主義に流れるのをあぶり出すということで、毛沢東が、工兵をあぶり出しました。民兵まで戦線に出ると言ったわけです。つまり、人民解放軍以外に民兵が出たんですよ。それがどういうことであるかと言うと、隠されていた武器が出てきたわけです。それまで、工兵、民兵組織、人民解放軍の3つがあったわけなんですけれども、その民兵が上海なんか、万の単位でどこから持ってきたか分からないような鉄砲を持って出てきたわけです。つまり、そこを潰すことによって、中国の中から完璧に1つの武力勢力を追放しました。もちろん、毛沢東という人については色々な評価が出来るわけで、そんなに甘い人ではないのですが、たった1つ、その視点からだけ見ても、武器を根こそぎ取ってしまうとか、1箇所に集めさえすれば、中国は分裂しないんだという考え方があったのです。

ですから、何を言いたかったかと言うと、そのように中国というのは、古代、中世、現代が一緒になって、今を生きています。やり方も、資本主義的なこともやりながら、共産主義も同じ場所で全部一緒にやっています。ある人から見れば、中国は来年、崩壊するというのは当然なんです。今のグローバルなキャピタリズムという資本主義の理屈から見れば、中国がやっている株式マーケット、あんなものは誰が見ても潰れるに決まっているんです。だから、プロのエコノミストが言うのは正しいんです。そういう経済学者が言っているのは、経済学という勉強した範囲で言っているから正しいのであって、それを中国に当てはめると、全部間違えます。なぜかと言うと中国では世界とやっていることが違うからです。やっていることが違うものを、政治学や経済学などの学問の望遠鏡だかレンズかは分かりませんが、それで眺めてもその予測は全部失敗するに決まっているんです。中国に関する予測は、良い方の予測も、悪い方の予測も、当てはまりません。そういう言い方は少なくとも出来るだろうと思います。

もう1点、中国について申し上げたいのは、なぜ中国が強いのかということです。色々な問題があるにも関わらず、なぜ中国が、経済やエネルギーが凄いかというのは、これは簡単に言えば、あの広大な大陸のオーナー、土地地主が1人になったからなんです。結局、富というものは人間社会でどうやって生まれるかと言うと、全て土地にかかっています。工場を増やすことが出来ても、土地は増やすことが出来ません。資本主義を資本主義にたらしめているのは、土地の値段です。ところが、中国は、あの広大な大陸をわずか60年前に全部没収して、たった1人共産党が土地のオーナーになった。中国共産党の毛沢東は、豊臣秀吉の検地と刀狩りをやったわけなんです。

今、毎日のように農民暴動の話を書くことがあると思います。それは中国の歴史に出てきた農民暴動とは全然違います。土地のことであって、農民暴動ではありません。それを間違えて、昔から毎年のように、中国の6万件、7万件の農民が騒ぎを起こしている、ということを使う

これは間違いです。それは中国の歴史で起きてきた農民問題とは違うんです。これは、不動産絡みなんです。なぜかと言うと、先程申し上げました通り、共産党が60年前に、この広大な土地のオーナーを共産党1人にしてしまったからです。どのような問題かと言うと、仮に、ある大きさのところを、農民が一応土地を持っていることとします。しかし、国から「1万元で買うから、よこせ」と言われます。もちろん農民は、国が言うものですから、仕方がないので1万元で売ります。共産党のオーナーは、1万元で買い取ったこの土地を、平均15万元で業者に売ってしまいます。つまり、1円で買い取った土地を15円というように、平均すれば、15倍で業者に売っているということです。上海や北京などは違いますが、農民騒動が起きているところは、大体、平均するとそういう水準の値段構成になっています。農民は当然そういう構造を知らないのだから「国のものだから、まあ1円でいいや」となりますが、そこで業者と国とが契約を結べば、当然、国が15円で売ったんだと、農民が気付くわけです。その差額をめぐって、デモをやっているんです。今の農民暴動というのは、このことを言っているんです。中国の歴史にある王朝を転覆させるような農民の問題というのは、腹が減った農民が暴動を起こしているのであって、今のそれは、土地の売り買いが原因となる土地問題なんです。

先程、私が申し上げましたように、中国の資本主義の絡繰りが、経済学上は成り立たないというのはなぜかと言うと、この1円の土地を、15円にしていることが絡繰りであり、ここに中国の不良債権などを全部、流し込む構造を作っているからです。全部ここで処理出来るような、非常に頭の良い人達が共産党の経営をしているんです。だから、中国でバブルがあっても、大手の銀行が不良債権をたくさん抱えていて、それがとんでもない比率でも、あっという間に解決することが出来ました。その絡繰りの中に全部、入れ込むことが出来るからです。世界中の株は下がるのに、中国の株だけは絶対に下がらないのは、下がらないような仕組みをしっかりと作っているからです。国が株価の操作をしている。

今、土地のことで申し上げたいのは、そこなんです。我々、日本の土地はもう何代も色々な人が手を付けて、30回転、40回転しています。大概の国はそうです。それに対して中国は、広大な土地の半分が、ようやく1回転しようとしています。もちろん、上海とかの沿岸部の土地は、東京並みに値段が高くなっています。ある一角だけは、30回転、40回転も土地転がしをしているからです。しかし、あの広大な土地の半分以上は、土地の値段が60年ぶりに、初めて付きました。まだ1回転です。そして、土地を1円で国に取られ、国が15円である企業に貸してしまいます。国は貸しただけで、売ってはいないんですから。途中で、農民から土地を没収して、25円だと言って企業に貸します。3回転、4回転という風に、つまり、お金を生むマシーンを国は持っているわけです。土地のオーナーを国1人でしているので、そういう構造が出来るんです。だから、お金の操作なんて簡単に出来るようになっていきます。1円の土地が15円に上がる、すぐ15倍になる国ですから、世界中のバブルマネーがとんでもない勢いで中国に流れています。もちろん、貿易収入も凄いですが、そういった金融の巨大なお金、オイルマネーでも中国になだれ込んでくるというのは、土地の値段がまだ1回転、2回転しかしていないからです。放っておけば10元のものが、すぐに20元になりますが、そんなことは大したことはありません。次に30元になるのは決まっていますから。こういう絡繰りを、中国2000年の歴史の中で、初めて共産党がやりました。だから、やられた側の土地地主は「全部よこせ」と言われて、一党独裁の共産党に取られたのですから、大変です。今、申し上げたように、土地の値段をチャラにして、1から、初めて値段を付けてやり出したんですから、富は溜まるに決まって

います。秋田の市街地の値段は、もう上がることはありません。しかし、中国の土地は回転したことがないので、いくらでも上がります。実は、これが中国の強さの秘密で、色々と中国製品がおかしなものだと言われながらも、強いのはそのためです。

もう1点。1つ違った問題を出します。例えば、今、我々が中国と言うと、心配するのは中国の公害、それから大気汚染等々です。これは誰が作っているかと言うと、中国が作っているのではなくて、世界が作っています。そして、中国で作られたものには、先程、福岡先生が言われたように毒や農薬が入ったりしています。確かに現場は、中国大陸です。作っている人も中国人です。しかし、作らせているのは誰か、それを必要としているのは誰かと言うと、世界なんです。ここを忘れてこの議論は出来ません。なぜでしょうか。

例えば、ある1つのモデルとして、最近、中国で問題になった会社があります。日本の企業は中国に行き、そこでほとんどの農村の人達を1日、日本円で200円か300円位で、3交代位のローテーションで働かせている。全て蛸部屋のようなアパートに住まわせて、700人から800人を3交代で働かせて、玩具を作っています。100%日本企業の出資でも、日本人の従業員は1人位しかいません。労働者は嫌になれば、次から次と内陸から入ってきます。1日働いて日本円で200円位の給料ですから、桁違いに安い値段で働かせることが出来るわけです。全部、日本の企業が作らせて、それをアメリカに売ります。何もかも安いわけですから、安く売れるし、給料も安いので、当然、チェックも出来ません。毒が混ざったり、壊れたりするのも、当然です。しかもそういう安いものを買いたがっているという消費者が、アメリカなど世界中にたくさんいるわけです。つまりそれは、世界が中国という場所を借りて、そういう構造でやっているということなんです。ここのところを抜きにして、中国政府が悪いという言い方は正しくないんです。そのお金を出しているのは誰なのか、作らせているのは誰なのか、ほとんど未熟な労働者を、安い賃金で雇っているのは誰なのかと言うと、これはほとんど外国企業なんです。つまり、中国問題というのは、中国という場所、安い労働力を借りて、ほとんど訓練や教育をすることもなく、検査機能、チェック機能も作ることもなく、世界が、中国でやっていることなのです。それで、中国大陸が汚染されているわけです。そういう矛盾があります。だから、中国の問題というのは中国の問題ではなく、世界の問題であるというのは、そういうことです。アメリカのマーケットに行けば、あらゆるものが「Made in China」です。みんな作らせているんです。

当然、中国の人達から言わせると、自分達のところに来て、安く作れと24時間働かせる。その結果、毒も入ってしまうのは当然ではないか、という考えです。そういう論法に対して我々はどのように考えるか、つまり、我々の日本の富といえども、中国のそういう現場を使って、どれだけの利益を上げているのか、ということを外れたところで、中国の問題ということ論じなければならぬと思います。私は、世界が中国に対して批判をする中で、あらゆる国が胸に手を当てて考えなければならないことだと思います。自分達がそこで作らせて、自分達の利益のためにそういうことをやっている、という現実があるということです。もちろん、中国共産党という党組織が、出て行くものに対するチェック機能を強化したり、監視することも必要です。しかし、同時に中国という工場を世界が作っていて、あの大陸を汚染しながらやっているという、世界の資本主義という問題も忘れてはいけません。

最後に時間がなくなりましたが、もう1点だけ申し上げたいことがあります。日中の交流についてですが、我々がよく中国に行くと、必ず、日中友好の歴史は2000年の長きに渡っ

ているが、戦争というある一時の不幸があっただけだ、という枕詞で始まります。しかし、それは嘘なんです。本当に日中交流を人が動くレベルでやったことがあるのは、古代以来、本当に限られた、文武の勉強をした人だけです。後は、日露戦争が終わった前後の7、8年の間に1万人位の中国の留学生が来て、日本を学んで帰ったという、交流の歴史が1つあるだけです。このように、日中の友好の歴史というのは、ほとんどありませんでしたが、この数年前から突然、始まりました。先程、小泉学長の紹介にもありましたけれども、私達は新日中友好21世紀委員会や、国交正常化35周年実行委員会を作って、政府の仕事をやっていますが、今やっと交流が始まったんです。

日中両国の政府の合意で交流が始まったんです。小泉さんも安倍さんも、口ではものすごく反中国的なことをやりましたが、この2人は、そこについて、画期的なことをやったんです。とにかく、「新しい青年交流をやりましょう」と。それから、日本は「日本のお金で新しい時代の将来の親中派を育てましょう」と。中国は「中国のお金で日本に人を送って、親日派を育てる」と、こういう合意事項を作りまして、今、秋田にも高校生が来ています。来週も、また来ます。秋田高校や秋田中央高校に来たりしています。現在、秋田県はホームステイなどを積極的に引き受けてくれているんです。これが、3ヶ月に1回位の頻度で、約400人が、ずっと来始めていて、逆に、日本からも送り出しています。

今、中国では、日本を体験した集まりのグループが組織化されているんです。毎回来る300人、400人の高校生は、中国の重点校から世界の超一流に行くスーパーエリート、あるいは予備軍なんです。当然、中国にいれば、お互いに会うことはありません。なぜかと言うと、新疆ウイグル、あるいは雲南省、浙江省、黒竜江省、こういう様々なところから選抜されてくるからです。中国にいれば、お互いが絶対に知り合うこともなかったスーパーエリート達が、日本に来て一緒に団体行動をすることで、お互いが友達になっているわけです。しかも、日本を媒介にしているという、不思議な現象が起こっています。つまり、中国人の中に、初めてそういう層が生まれている。時々、ノースアジア大学にも、国際教養大学にも、留学生は1人とか2人が来ています。しかし、日本を一緒に旅して同じ高校に通って、同じグループが3ヶ月に1回ずつ、約400人という単位で、中国の内部にそうした学生たちが生まれているんです。同じように、日本にも生まれているんです。中国には共産主義者青年同盟という、共青团と呼ばれるものと、共産党の幹部子弟である太子党があります。つまり二世議員と言うか、お父さんや誰かが、共産党で偉かった人達の息子たちです。共青团か太子党が、中国を指導をしていくエリートになっていきます。ここにもしかすると、その第3の極として、日本体験グループ派閥が出来るのではないかと考えています。

先程、小沢一郎さんの話が出ましたけれども、李克強という方がいます。この方は、遼寧省の書記長、河南省の書記長、共青团の書記長をやっていた方です。52歳で政治局の常務委員になった党内序列、ナンバー4になるはずが5番目になりましたけれども、ポスト胡錦濤の1番手と言われる人です。この人はかつて青年交流で小沢一郎さんの家にホームステイしていました。小沢さんがもし天下を取っていて、李克強さんも天下を取ったら凄いことです。あるいは、菅直人さんも昔、30年位前の青年交流があった時に、その時にまだ政治家にならない弁理士として行きました。その時の受け入れ先が誰であったかと言うと、後に地方政治の幹部になった家庭でした。

つまり、何を言いたいかと言うと、本当の友好というのは、やはり人と人とが知り合わなけ

ればいけません。家の中に泊まったり、友人を持たなければいけません。そういうことで、初めてこういうプログラムが始まったのです。ですから、秋田にも来週、高校たちがやって来る。秋田は非常によく受け入れてくれています。もしかすると、秋田にホームステイした若者が、30年後には、中国共産党の総理になるかもしれません。そういうレベルの人達を選びすぐって、中国は3ヶ月に1回、400人ずつを送っているんです。逆に日本もそれをやっている。そういう点で言うと、日中は実は今こそ新しい時代に入っているんだということも申し上げたくて、今、この話を紹介致しました。

しかし、中国には、色々な話があって、2000年生活している中で、「共産党なんて聞いたことはない」という農民も何万何千人という国ですから、私が申し上げたようなことは、日中に関わるたった1つの小さなエピソードかもしれませんが、そこにもそういう可能性があるという、そういうニュースもあるんだということもご紹介したくて、お話した次第です。秋田に高校生が来て、皆さんの中でホームステイを下さる方がいれば、やがて、「私は、日本の秋田で、何とかさんの家にお世話になったんです」という向こうの国家主席や総理大臣が生まれるかもしれませんので、期待したいと思います。以上です。ありがとうございます。(拍手)

橋元 石川 好先生、誠にありがとうございました。それではこれより、10分間の休憩に入ります。鼎談の開始時刻は、午後2時25分を予定しております。それまで、どうぞごゆっくりご休憩ください。

(休憩10分)

小泉 第2部に入ります。私が司会をさせて頂きまして、鼎談に移らせて頂きたいと思います。よろしくお願ひ致します。

先生方の大変貴重なお話を、しかも違った角度からお話を聞かせて頂きまして、大変勉強になりました。控え室で先生方とお話していたんですが、中国は非常に広いという話になりまして、石川先生から、温家宝さんが農村を回った時のエピソードを聞かせて頂いたんですが、温家宝さんが農村を回ったら、「毛沢東さん、随分若くなりましたね」と言われたというような話があったそうです。つまり、中国が非常に広くて、今、中国共産党中央委員会や党大会で、どういう人が中央委員や政治局員、あるいは政治局常務委員になっているのかということが、地方に行くとほとんど分からなくなっているといえます。ある意味では無関心だというような話も、少し先生から伺ったんですが、この点はいかがでしょうか。

石川 中国は歴史的に、政治家を民衆レベルでは信用していないんです。今の中国というのは、共産党が本気になって、中国という国があるんだということを、国民に分からせようとやっています。「中国という国があるんだ、あなた達は中国人なんだ」という風に、つまり英語で言うと「nation state」と言いますが、そのような運動をしているということが大前提です。ですから、先程の温家宝さんの話というのは、中国では小さい単位を「県」と言いますが、キャンペーンをするように、中国の全県を回り歩いています。もう、行ってないというところはないという位回ります。彼は帰ってきて、そういう農村に行くと、毛沢東の古い写真やポスターだけを貼っていた、と我々に言うんです。要するに農民にとって、毛沢東だけは神様な

んです。温家宝さんが入って来るのを見て、「毛先生、随分お若くなりましたね」と言われることは、彼にとってうれしいことであったわけです。そのような話です。

小 泉 先日、中国共産党の党大会が5年ぶりに開かれたということで、胡錦濤さんが第2期目に入ってきたわけですが、これまでの中国共産党と言いますと、どちらかと言うと、この清華大学など、モノを作るところの出身の方が中心を占めてきました。しかし、今回見てみますと、弁護士、エコノミスト、経済学ご出身者ということなので、モノから人へ、人主義から法治主義へ、というような芽が見られるのかな、という感じも受けたのですが、いかがでしょうか。

石 川 そのことを少し申し上げると、例えば毛沢東や鄧小平、この辺りまでは、政治局中央委員というのは大卒が少ないんです。胡錦濤さんの1期目辺りから、政治局常務委員、党の書記長、各長は、例えば PhD という学位を持っている人が多い。ほとんどが大卒になってしまいました。それから先程お話ししましたが、どちらかと言うと、当時は自然科学系、理工系が多かったんです。例えば江沢民さんも専門は電子工学です。それから、胡錦濤さんは、水力エネルギー、ダムなどが専門です。温家宝首相は地質学者です。今回引退しましたけれど、曾慶紅さんは北京化学院出身です。そのように、どちらかと言うと技術畑が多かったんです。ところが今回、党大会においては、小泉先生がおっしゃったように、法・文系の法律の専門家や金融のプロ、それから行政法が得意だとか、刑事法が得意だ、そういう人が各省庁にまたがって入ってくるというのは、さすがの中国といえども、ある種の法律とか、そういうことを重視しないとイケないんだという風になっている、ということが言えると思います。

小 泉 福岡先生、今の点はいかがでしょうか。

福 岡 先程、石川先生の話聞きながら、やはり、中国という国は相当広いというだけではなく、奥が深いと思いました。石川先生は、長い間アメリカにいて、最初の賞を取ったのもアメリカの本ですけれども、アメリカと中国は、やはり広さと奥の深さが凄いです。アメリカも西海岸と東海岸で異なり、南と北でも違います。中国は、沿岸地域と奥では全く異なり、それも漢民族を含めて50いくつもあるという話や、まだ農民だという風にしか言わないという話を聞きながら、しみじみ感じます。小泉先生が言うように、やはりモノ作りから法治主義になり、経済や法学系の人が多くなったのは、これからは経済や法律で治めるといふ部分が、今度の胡錦濤体制でかなりはっきり出てきたからだと思います。昔は、もう喧嘩が強くて革命が出来る人の方が、秀才のような人間よりも優秀でした。

ただもう1つ、モノ作りを基本的にやってきて、もちろん、まだモノを作っているけれども、やはりその財テクを含めて、上海の姿を見るとアメリカのファンドとよく似ているところがあります。先程、石川好先生の話の中で、不良債権を飲み込んでしまう、ずるさみたいなものがあるという話が出ました。経済学者やエコノミストや特に石原慎太郎さんなんかの、中国を嫌いな人達は、中国は間違いなく、北京オリンピックが終わって上海万博までの間に潰れるんだとか、民族対立が出てくるなどと言いますが、今の石川さんの話を聞くと、そういうエコノミストや学者達の発想よりも、この国のぼあっとした部分の奥の深さが、そういうトラブルがあっても対応する能力が高いだろうと思いました。天安門から上海までの十何年間を見てきて、や

はり、その対応能力は凄いなと感じました。モノ作りから法治主義やエコノミストが出てきて、特にアメリカで PhD を取った人は、毎年、数千人単位で中国に戻ると言います。これには少し驚異を感じます。

石川 実は、モノ作りとの問題があって、中国は今、懸命にある面で人作りをしています。これは中国共産党の内部の話で、どういったことかと言いますと、この10年位の間に、外資系の企業に就職すると、年俸が良いので、北京大学や清華大学を出た人は、共産党に入らないんです。共産党の党員は、全部面倒を見るので給料が安い。優秀な人ほど外資に行くものですから、共産党が焦りまして、共産党の給料を上げたんですね。すると、どのようなことが起きるかと言うと、党に入れば、ある程度給料を貰って、権限をもっているから賄賂、汚職がたくさん出来ますから、こんないいところはないんです。それで、中国共産党は共産党に入った1番優秀な人をハーバード大学に、毎年、60名ずつ留学させている。あるいは、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学、そういうところにも送っています。これは、人材養成とアメリカにネットワークを作るためです。

それでもう1点、福岡先生が言っていた、アメリカと中国が似ているということを1つ申し上げますと、金融の上でもそうなんですが、中国は金融工学などが確かに遅れています。金融商品これを発明したアメリカで言う、デリバティブなどです。元は日本から始まったのですが、今、世界中で問題になっているサブプライムローンというのは、エイズウイルスのように潜り込んで、世界中の金融機関に、分からないかたちで全部売ったのです。それによる被害総額は何十兆円もあります。要するに、アメリカは、そんな新しい金融商品を作って、しかも、それを世界中に分からないような形で組み合わせ、売ってしまったわけです。そのモノが戻らないようにモノの姿を変えて、分からないように売ってしまいました。そうやって、アメリカの資本主義は儲けていました。それで、今回は破綻しました。中国も同じなんです。先程申し上げたように、土地の中に絡繰り（からくり）があり、全ての不良債権をそこで処理しているわけです。アメリカと言うと先送りです。資本主義というのは先送りするということで、特にアメリカは先送りすることが上手いです。だから、中国も問題に全部絡繰り（からくり）を作って、先送りする能力に長けているという意味で、アメリカと中国は非常に似ているんです。

福岡 今の話に関連して、最近感じたことがあります。私が退院をしてから、財務省の友人と何人かで食事をしました。その時に、国家公務員試験に合格した1番から10番までの東京大学法学部、経済学部出身者は、最近、財務省に来ないということを聞きました。それで、どこに行くかと言うと、六本木ヒルズのファンドに行くんです。ゴールドマン・サックスを中心に、モルガン・スタンレーなどです。つまり、国家公務員種、昔の上級職ですが、例えば「4番」というのを持っていくと、そのアメリカのファンドが「では、月給50万円、年間600万円、これで雇いましょう」と言うんです。せいぜい、国家公務員は年間300万円ですから、後はもう財テクに頼ります。世界で2万7000人、日本にも800人いる、このゴールドマン・サックスの平均給与は、なんと年間7000万円なんです。だから、それはもう35歳位で5000万円位の給料を貰っています。だから、1年目が600万円で、片方が300万円で、まして、東京大学法学部を卒業して財務官僚になっても、秋田銀行や北都銀行にすら行きません。天下り先がないからです。そうすると、彼らは優秀だからもう行きません。もっと言うならば、東京大学にたくさん入学す

るような、名門の麻布高校、開成高校、灘高校、女子では桜蔭女子学院の生徒達は、もう東京大学を受けません。ハーバード大学、プリンストン大学に行きます。同じように中国は、人作りでハーバード大学に共産党党员だったら行かせますが、それが今の日本社会の人作りにはありません。

石川 ここで、学校のことで申し上げますと、皆さんご存知と思いますが、中国の国営企業の場合、開放革命以前は、職業選択の自由はありませんでした。どういうことかと言うと、大学を出ると「福岡さん、あなたはこの職場にいきなさい」という風に、職業を選べなかったんです。あるいは「小泉さん、あなたは雲南省だ」と、国が全部決めます。また、中国の戸籍というのは、都市戸籍と農村戸籍に分かれています。農村戸籍ですと、その農村から出られないので、悲劇です。今、中国はずるいし、うまいですよ。例えば、農村にいる人達に「北京大学に入れたら、都市戸籍を与えるよ」と言ったら、それはもう、信じられないような勉強をします。農村から永遠に出られないという、農民に対して、世界でもっとも難しい大学の1つである清華大学などに合格すれば、農村戸籍から都市戸籍になると言えば、グリーンカードを得られるように、勉強に対してのインセンティブが上がるようになります。その結果、とんでもない勉強をするから、とんでもない頭脳が集まってくるのは当然です。「秋田県から出てはいけない。だけど、秋田県から出たかったら、東京大学に受かればいい」と言ったら、もっと勉強するかもしれないですよ。そういうとんでもない、絡繰りを中国はたくさん作っています。

福岡 日本有数のソフト関係の会社である、インテックというのが富山県にあります。その会長の中尾哲雄さんと一緒に富山県魚津市でやっている「森のゆめ市民大学」というのがあります。学長が筑紫哲也、私が副学長でインテックが協力してやっています。中尾さんは瀋陽の大学の客員教授をしていますが、今の石川先生の話にあるように、やはり、夜に消灯時間を設けないと、学生は3時、4時、朝方まで勉強して、みんな目が悪くなったり、栄養失調になってしまうので、夜12時になったら電気は全部消すそうです。それをぜひ、ノースアジア大学でやったほうがいいです。大学は秋田大学だけではありませんので。

石川 せっかくですので、ノースアジア大学と中国の大学のことを言います。私も福岡先生も、小泉先生に義理があって、ノースアジア大学の客員教授をやっています。しかし、私は、実は客員教授を中国で3つやっています。日本ではノースアジア大学だけです。中国は湖南大学や大連の大学などですが、中国の大学は原則全寮制です。1番大きい大学は、吉林大学と言いますが、生徒数が6万人位います。万の単位の大学はたくさんありますけれども、そのほとんどが全寮制になっていますので、24時間、勉強させる体制になっています。寮を出る時というのは、夏休みなどで両親に会いに行くという程度で、それ以外は、寮から出ないで24時間勉強しています。ノースアジア大学もその方針でやって欲しいですね。

小泉 ありがとうございます。ぜひ、今日の講演を、学生に聞かせたかったという思いでいっぱいです。石川先生が、中国人にこういう意識を持たせようということで、今、中国共産党は一生懸命やっているということをおっしゃられましたけれども、私は、中国という国以前に中国人という人達に関心を持っています。日本人と中国人は、顔が似ているだけで、考え方がまるっ

きり違うと思っています。中国は、農耕民族というより、騎馬民族、狩猟民族なんでしょうか。そういう、長い伝統を持っている中国人は国家をあまり信用していないように感じられます。今までの中国の長い歴史を見てみると、1つの統治国家が統治出来た期間というのは、50年、60年という時間で、めまぐるしく変わってきました。そのことを踏まえて考えると、国家を意識しているとは思えませんし、国家もあまり信用していないと思います。どこに関心があるかと言うと、もちろん経済、お金など色々あると思いますが、どうも中国人が個人主義で、所属している国家にあまり関心を持たないような感じがします。そういう中で、中国が持っているエネルギーを、共産党が制御することは可能なのでしょうか。また、どちらの方向へ行ってしまうのかという、誰にも分からないような不気味さも感じるのですが、その辺りはいかがでしょうか。

石川 小泉先生がおっしゃる通り、中国の場合はそこが一番難しい問題だと思います。なぜかと言うと、結局、儒教が根本にあるからです。今、中国の胡錦濤政権のスローガンの「和諧社会」というのは、これは儒教の孔子の言葉からきています。共産党は毛沢東の時に、徹底的に儒教を批判をしました。また、秦の始皇帝の時も、「焚書坑儒」ということがあって、儒者を穴に埋めました。でも、原則的に中国は儒教社会なんです。

儒教社会は何か、というのが一連のグローバル資本主義の中で、一番問題にされるところです。お金儲けだけではいけないということで、中国政府は、よって立つ精神的なものは何かと考えました。結局、儒教だということで、「孔子学園」という名前で、世界中に中国語の学校を作り、儒教の孔子の言葉や儒教を読ませるということが始まったんです。のみならず、例えば胡錦濤さんの演説とか、温家宝さんの演説、中国共産党中央政治局の局長の文言をきちんと整理して読むと、やはり儒教の言葉を非常に散りばめているんです。

問題はそこにありまして、儒教とは何かと言うと自律です。自分の身を立てて、自分で律する。今、中国では賄賂などの色々な問題があり、ある人は考えたんです。「俺はまだ大丈夫だ。もう少し儲けたら、悪いことをするのを止めよう、自律社会なんだから」、「もう1人愛人を作っても、まだ、ばれないだろう」とか。儒教というのは、自分を自ら律する方の自律です。他方、キリスト教などは他律です。つまり、他が神が律するわけです。人間が自分を律することが出来ないから、神様が律するんです。西洋の資本主義というのは、常にブレーキがかかるようになっています。だから、徹底して自分を律しなさいということが、民族集団、国家集団の中の基本の言葉であるとする、これは、今のようなグローバル資本主義に火が付いて、金儲け万能になってしまいます。対立ではないので、どうやって止めるかというのが、最大の問題になると思います。

福岡 今話を聞いて、守屋さんに、ほどほどにしろと言ってやりたい気がします。アメリカの場合、やはり「United States of America」という、色々な国の人達が集まってアメリカ合衆国を作ったために、常に星条旗があります。プロ野球、メジャーリーグでも、きちんと国歌を歌いますが、そういうことは、基本的に中国にはありません。1949年から今までの60年間、軍事力で他民族を支配してきました。日中の国交回復から35年になりますが、何となく抑えてきたものが、毛沢東という神話、そして、胡錦濤の新しい体制になり、経済が活発になった今、人々は内陸から沿岸地域に出てきました。

中国の首都に私の友人の会社があります。以前は3000人、中国人が働いていました。ある時から、これを6000人に増やしました。2交代にしたそうです。朝6時から午後3時まで働く人は、朝8時から30分の間に朝ご飯を食べ、もちろん、昼ご飯は12時から午後1時までの間に食べる。午後3時15分から夜の10時45分まで、また別の3000人がそこで働きます。入れ替わりは、その15分の間にするわけです。

日本で勉強したという30歳位の女性が、私の通訳を担当したことがありました。その時、彼女は「自転車で通勤しています」と話していましたが、その2年後、彼女に会った時「車を買ったんです。先生」と言いました。今、中国では車が50万円位で売られているそうです。当時、日本でミゼットが売り出した時と同じようなものです。もの凄い向上心が中国の人にあります。将来的にはやはり、資生堂の化粧品を使うとか、日本の車を買うとか、中古車ではなく、新車を買いたいというのがあるようです。

今、中国経済の高まっていくその部分に、日本企業は海外工場を作ってモノを売っているということもあるんですが、中国の人口の13億人の10分の1、1億何千万人というマーケットが、今まさに出てきたとも言われています。アメリカのファンドでは、先に話したようにサブプライムローンの予測通り、原油1バーレル100ドルまでになってしまいました。投資信託は皆さん持っていると思いますけれども、そこに訳の分からない形で、全部組み込まれていたということが、証券会社の中で良く分かってきたんです。それを、中国が自律という儒教の精神で出来るかと言うと簡単ではありません。

立命館大学も「孔子学院」の関係で協定をしました。今、立命館大学は儒教を全面的にやっていますが、これは中国からの留学生の数が多く、APU（立命館アジア太平洋大学）という大学を作ったことも関係しています。しかし、この自律という言葉自身はそんなに難しくありません。経済というのは儲かれば良いという部分があります。自分で自分を律するというのは簡単そうで、簡単ではありません。それはもう、守屋さんの遊び方を赤坂で見た瞬間に、こいつは何なんだと思ったのは数年前です。もちろん、彼は防衛省の人間で言いにくいけれども、東北の宮城の出身だとも、東北大学の出身についても触れません。今の中国では、欲望と上海の姿を見て、共産党にも行かなくて、パソコンでお金がこれだけ儲かって、あれだけ投資に入っている人達を見たら、律するというのは簡単ではありません。間違いなく、今は前年対比で株は2割から3割儲かっています。儒教というのは中国でも、それほど浸透していないという部分はあるかもしれません。

小 泉 ありがとうございます。今、公害が非常に問題になっています。石油の問題について言えば、先生方がおっしゃっているように投資の問題もありますが、一方で、中国の文化水準が段々に上がるにつれて、石油の消費は後戻り出来ない位、その消費量が増えてくるのではないかという感じがします。これは直接的に、ガソリン、暖房に関わりますし、石油製品の消費も多くなると思います。こういう問題の行方は、地球規模でどうなってしまうのか、という問題があるんですが、先生方は、どのようにお考えになっていますでしょうか。

福 岡 今、中国のGDPは、約300兆円で、日本が約500兆円です。でも、本当に10年前は、日本のせいぜい5分の1の100何十兆円だったといえます。10%単位でGDPと言うか経済成長があり、もう5年経つと、200兆円や100何十兆円があつという間に倍になってしまうといえます。

その中には当然のことながら、中国マーケットが出来てきます。今、沿岸地域は自転車ではなく、単車や車になってきています。その人口が7%から1割弱位まで増えてきました。それが1億人です。そして自動車の消費だけではなく、工場のエネルギーが7割位なので、石油やガソリンを使って色々なものが動いていきます。

「BRICs」という中のインドも同じで、インドはおそらく中国よりも10年位遅れてきて、2015年から2020年位の間、中国の人口をインドが抜くと言われていました。今、インドの人口は11億何千万人、中国の人口は13億何千万人ですが、お分かりのとおり「1人っ子政策」のためです。ブラジルという国もあります。このような国がどんどん出てきて、ベトナムやインドネシアは「VISTA」と呼ばれています。

そうなることや、そこに目を付けたゴールドマン・サックスのレポートというのは、2年半も前です。1バーレル105ドルと書いています。それは間違いなく、そうなるからと。アラブでの1バーレルの採掘経費は、実費5ドルしかかからないんです。だけれども、それが40ドル位だろうと思っていたのが、あれよ、あれよという間に、この1年半で、約90ドルになりました。同時に、サブプライムローンでお金の行き場がなくなりました。皆さんのお金です。円キャリートレードですから、日本の円を運んで行って商売する、それが投資信託になります。まして、今日は1ドル110円ですよ。アメリカから戻ってきたファンドの後輩達が、大学の客員教授になっているけれども、なぜ1ドル115円とか117円で外貨立ての投資信託を日本人が買うのだらうと言っています。ドルと円のいわゆる、力関係は、せいぜい103円とか105円と言われていたのが、今は110円になりました。その瞬間、FXの札幌と東京のどこかが、倒産してしまいました。

それを考えていった背景に、今の原油高というのは、もちろん中国、インド、ブラジル、こういうような部分があります。日本の場合は、1リットルのガソリンでどれだけのエネルギーを出すかという率は、圧倒的に高いんです。中国やアメリカは、日本の5分の1とか3分の1なので、日本の燃費の良さとか、その科学技術というものを大事にすると言います。でも、中国の人は分かっているんで、日本の経済産業省に全部、情報を取りに来ています。中国でも、あの露天掘りは少なくなってきました。6年前に穴を掘っていてもものすごく事故が増えた時に、経済産業省の友人が、中国から要請があったと言っていました。日本の三池炭鉱などもありますが、もうほとんど閉めていますから、結局、知っているのは経済産業省なので、そこに「どうすれば事故が起きないかの対策を教えてください」と言ったそうです。こういう努力は、実を言うと中国人にはものすごく多いです。私は変化の対応力と情報の収集力というのは、おそらく日本人は量でも質でも、きっと負けてしまうので、良い意味でのライバルになったほうが良いと思います。ただ私は、石油の問題は厳しいと思います。ただ、それがファンドで動いているということだけは、皆さんにはぜひ知ってもらいたいと思っています。

小 泉 せっかくの機会ですので、もし会場の方で質問等がありましたら、それをきっかけにまた先生方のお話を続けさせて頂きたいと思いますが、いかがでしょうか。

質問者 秋田市の者です。安倍前首相が入院した件ですが、まだ病院から退院出来ない状態なんだろうと思いますが、その辺はいかがなのでしょう。それから、北朝鮮の問題ですが、今の金正日が亡くなった場合に、あの国をどこが管理をするのか、後継者がちゃんといるのか、という

ことが気になります。東ドイツを西ドイツが面倒を見るようになって、西ドイツは経済的に非常に苦しくなったという事実があります。1つの考え方として、あの国が破綻した場合、国連が出てきて中国に面倒を見させるという方法もあるのではないのでしょうか。その点をどうお考えか、両先生にご質問したいと思います。

福岡 分かりました。1番目の質問は私が答えまして、2番目の方は私が少し話した後、石川先生に補足をしてもらいますが、安倍さんは既に退院をしています。そして、既に政治活動を始めていると言うか、色々な人と会っています。あくまでも潰瘍性大腸炎です。メンタルに落ち込んで辛いのに、何日も東南アジアを旅行して、辛い香辛料を食べたということで、下痢をして慶応大学の病院に、点滴をしたのは8月の中旬位で、9月の中旬に一緒に食事をしたある人が、皆がちゃんと食事しているのに、自分は中華料理のお粥だけで、後は杏仁豆腐だけを最後に食べたという、こういう事情です。彼の場合は、どうしても続投をして、環境に関わる来年の洞爺湖サミットに行きたいという気持ちがありました。ただ、9月12日の朝、シーファー大使に言われて、プツンと切れてしまったということは確かです。おそらく政治活動を再開し、中川昭一さんと組んで、この後、再起を期して、再チャレンジをしたいと思います。

2点目の方ですが、金正日がどれだけ長生きするか分かりませんが、この間、韓国の大統領の盧武鉉が行っても、ほとんど相手にされずに戻ってきたという、映像が映りましたけれども、この方に万が一の事態があって、いなくなった段階でどうなるかということですが、ポスト金正日というのは、名前が何人か挙がっています。子供3人も、本家筋、分家筋とか、色々ありますけれども、やはり今のところは、誰という決定打はおそらくないと言われています。

問題はご質問の内容の国連が出てくるという部分ですが、国連と言うか、おそらく、アメリカです。国連の力というのは、今のパキスタンやミャンマーを見ても「もう少し何とかしろよ」と言いたくなります。ミャンマーは、数千人の僧侶が捕まったまま、まだ戻ってきていないので、まともな僧侶は皆、タイや他の国に逃げたという話があります。これはもちろん、CIA情報も含めて確認は出来ていません。この人達にきちんとしたご飯が与えられていないとか、怪我をしている人が段々と弱っていくというようなことであれば、人道的には大変な問題だと思っています。国連の力というのは、「国連至上主義」と言うか、「国連中心主義」と小沢さんが言いますが、そんな絶対的な力は今、持っているとは思えません。そうすると、国連(アメリカ)が「中国、何とかしろ」と言うのは、間違いのないような気がします。その時に、おそらく中国は、日本にお金、韓国には少し技術をと、両国に話をしてくると思います。そのような段階を考えていて、六者協議がハイテンポで核の無能力化に進んだ時、9月12日にシーファー大使が言ってきたのは、「その拉致問題でやっていっても無理だよ」ということでした。その後、高村さんが、何人か戻してくれば話が出来るという趣旨のことを言って、町村さん等々官房長官以下は少し横を向いたけれども、おそらく水面下で、何人かの人が折衝しているんじゃないかと思っています。この辺りは本当に闇の中ですが、そんなことを含めて、中国が大きな関わりをしてくるということだけは、間違いのないと思っています。

石川 ご質問の主旨に関して、福岡先生のお話と、安倍さんの件も大体似ています。10日程前に、安倍さんと直接電話で話をしました。本人から電話が掛かってきまして、前から縁があったものですから、少し電話で長く話はしたんですけれども、福岡先生がおっしゃっているように、

早ければ今月中にも国会に出てくるという話を自ら言っていました。だから、彼が辞めたのは、本当に病気がずっと長引いていたせいです。元々、本人は政治家になろうと思った人ではないんです。それ位、胃腸が弱くて政治家になる気がなかった人なんです。たまたま、政治家になってあのようなことになりました。だから、本当に背中を押すようなことというのは、シーファーさんとの件が、9割5分位、1番体力が弱っている時に、プツンときたことだと私は思います。もう1つ、5%位は別の理由があるかと思います。大体、福岡先生がおっしゃっていることと同じです。それから政治活動も中川さんと同じように、右系の結集ということでもう1回やるということになるのは間違いないだろうと思います。

北朝鮮の問題ですけれども、私は前から北朝鮮は崩壊しないと思っています。我々はどうも誤解し易いですが、兵糧攻めにしても、あのような国は駄目です。兵糧攻めにすればするほど強いんです。食料攻めをすれば滅びますが、腹を減っている人に、兵糧攻めをすると余計強くなるんです。食べ物のないところを滅ぼすには、食料を逆にたくさん与えるしかないんです。

それはともかくとして、北朝鮮の問題は、金正日というあのような体制ですが、あのような存在の仕方が世界構造の中で必要とされているから、あのような存在の仕方をしているということを忘れてはいけません。それはなぜかと言うと、北東アジアにおける政治力学、地政学があのような国家の存在を必要としているからです。つまり、ロシアにとっても北朝鮮があのような形で存在していることは必要なんです。中国にとっても同じです。アメリカにとっても、これまでの北朝鮮があのような形で存在することは、皆の理解が一致しているんです。もちろん、金正日体制が作った国家なんですけれども、あの体制が作った国家があのような形で存在しているということが、その周辺諸国の政治力学、利害にとって必要とされているから、あのような形で存在してきたわけです。

これからも、歴史的にあの地域はそうなんです。なぜかと言うと、北朝鮮と中国では、あの朝鮮戦争での色々な問題以外に解決していない問題があるんです。皆さん、ご存じかどうか分かりませんが、北朝鮮と中国の国境というのは確定していないんです。まだ、国境問題が残っているんです。暫定的に、あの豆満江で線を引っ張って、この辺だと言っているのであって、あの中国の吉林省とか東北三省では朝鮮族と言われている人が、約300万人暮らしています。中国政府は、今、北朝鮮の国境沿いにある吉林省の朝鮮自治区の人達を強制移住させているんです。何かがあった時、例えば北朝鮮が崩壊した時に多くの朝鮮人が中国国内に入ってきます。そしたら、東北三省や吉林省にいる朝鮮族と連合、合体する可能性があります。そこで、吉林省の延吉地区のことを言いますが、吉林省にある朝鮮自治区で朝鮮族が朝鮮語を話して、バイリンガルで常駐して住んでいます。だから、南に強制移住をさせているんです。

それで、我々は北朝鮮問題を、拉致問題や、核の問題という見方でしか見ていませんけれども、中国の側、ロシアの側から見ると、北朝鮮の領域が何だということ、満州以前から朝鮮族がいて、昔から朝鮮族の領土なんです。高句麗や渤海も、皆そうなんです。だから中国は先制攻撃をして、高句麗は中国の古代王朝だと言っています。そうしたら、南も北も大喧嘩になってしまって、中国のお偉いさんが北にも南にも、わずかその問題だけで何度も入っているんです。拉致問題や核問題ではなくて、中国にとっては北朝鮮問題というのは、民族問題と国境問題なんです。ですから、北朝鮮のあのような問題と中国というのは、あのような形でも存続させなければいけません。だから、見る場所によって北朝鮮の意味というのは全然違ってくるん

です。アメリカから見ると、北朝鮮があのような形で存在することは、どのような必要性があるのか。ロシアから見ると、対中国との関係で北朝鮮のあの存在の仕方によどのような意味があるのか。韓国から見ると、今、北朝鮮が中国と突っ張っているということは、望ましいことなんです。韓国にとっての1番の悪夢は、北朝鮮が朝鮮自治区として、中国の32省の1つに併合されることなんです。だから、北朝鮮については、国によって思惑が全部違うんです。その思惑の違いが、北朝鮮という国家を存在させている、ということをお忘れはいけません。

ヒマラヤのように、地震で太平洋プレートか何かがあぶつかって、持ち上がったというものがありますが、北朝鮮というのはそういう国なんです。中国の歴史が迫り出している、韓国の歴史が迫り出している、それからロシアの歴史が迫り出している、そこに北朝鮮というのは、国家が迫り出して、出来ています。金日成体制、拉致問題、核問題の議論しているのは、日本だけです。

小 泉 よろしいでしょうか。他にございましたら、お願い致します。

質問者 原と申します。今日の課題は中国関係ということで、国益の絡んだトピックスとして、主にガソリンや油田の問題は、相変わらず共同開発の妥協点が出ていないということで、外務省を中心にやっているところだと思います。

ここで、投資残高の数字を見ると、2006年末で中国向けの投資額は303億ドル位です。それで、中国からの日本向けの額というのは1億ドル、要するに300対1です。例えば今、中国は対外的な投資額が多少増えていて、主にアフリカ、中近東、カナダ辺りで増えています。しかし、まだ圧倒的に少ないと思います。日本は、自動車においては圧倒的に海外に投資しています。今、自動車業界に至っては、生産の50%以上が海外で作っています。それで、業界によっても違いますけれども、特に10億円以上の会社の所得の源泉というのは、海外に相当な部分が移ります。日本から出て行った企業というのは、ほとんど現地で材料、電力、ガスなどを使わせてもらっているわけです。だから、中国に行っても、それを日本の企業は大きく使えるということだと思いますが、その辺りのインタレストの問題について、ご見解がありましたらお聞かせ下さい。

福 岡 私が答えて、石川先生に補足をして頂きますが、先程、石川先生の説明の中にあつたように、確かに危ない玩具を作るといっても、日本の従業員はせいぜい1人から3人です。そこには900人から2000人が働く工場があり、そこで作らせて、効率が良くて安くて、それこそ1日何十円か何百円、月にすると4000円から5000円位の給料で、16歳から17歳位が働いていて、内陸の人達をたくさん入れ替えて、新陳代謝をどんどん良くしていけば、賃金は高騰しません。しかし、さすがに今は人手が不足してきましたが、それをやらせているのは世界であり、日本の企業もチェックすることが必要です。ただ、企業が利潤を追求していくことになれば、トヨタ、ホンダ、日産、スズキも海外に出て行きましたが、日本から行けるのは、せいぜい5人から10人です。それで4000人、5000人の企業をやっているんです。

もちろん、そこで使っている石油は、中国の石油です。そして、1億ドルと300億ドルを超える、1対300で、日本のお金が世界中に行き渡っています。それを背後で動かしているのは、インターナショナルグローバルファンドです。いわゆるハゲタカファンドです。スティーラーパー

トナースもそうです。でも、もっと大きいのがあります。そこをきちんと踏まえてやらないと、日本という国は、中国との本当の友好は出来ないというのが、おそらく答えだと思います。

それでもう1つは、今のご質問と石川先生の話聞きながら、日本はきちんとした外交戦略がないと思いました。つまり、拉致問題でやるのはいいけれども、「それだけなのか」ということを、私は安倍さんにも言ったことがあります。蓮池さんや横田さん、皆さんのことを考えたら、日本人としては、拉致問題は大事です。ただ、それを政治的な道具として使ってきた節があります。外交 (diplomacy) というのは、陰謀、はかりごと、とも言えますから。そう考えて、石川先生の話聞いたら、中国としては、これは解決しない方がいいのだろうと思います。おそらく、ロシアも国境の問題や満州のこともあります。吉林省と朝鮮族のことを考えても、なるほどという部分があります。外務省の関係者にご飯を食べて話をしても、「この人達はもう少し利口に、中国やインドと付き合えばいいのに」と思います。たまたま私は、浜松でスズキ自動車と付き合いきて、私はぜひ、秋田県にスズキ自動車の新しい工場でも作ってもらいたいと思っていますけれども、スズキがインドに行ったのは、20年前なんだそうです。インドの車の52%がスズキなんだそうです。今、トヨタもホンダも全部やっていますけれども、燃費がいいから日本の車に乗りたいんです。このようなことを考えると、あらゆる意味で外交と経済とインタレストの国益をうまく繋げて、戦略を考えられる日本の政治家は、経済方面にはいるような気がするけれども、外交政治家はいないなという気がします。

石川 国益と政治については、福岡先生がおっしゃる通り、何をやる時も、ある種の陰謀と言うか、先を見てやっている形跡がほとんどないです。今、インドの話が出ましたけれども、私もインドは年に何回も行くことがあります。ここ数年間は、インド政府のアドバイザーのようなことをやっておりましたので、よく分かります。

例えば、これから中国と並んで、経済的に凄いことがあるかもしれないと言って、インドに目を向けているわけです。しかし、世界の中でインドが注目されるというのは、それぞれの国によって、全く事情が違ふんです。先程言いました、北朝鮮のこともそうです。我々はどうも、日本のメディアとか、体験者を通した目だけでしか、中国問題を論じないし、北朝鮮問題も見ないので、ほとんど間違いを起こしています。

つまり、先程の拉致問題も大変で気の毒な問題ですが、この問題を出したらあの周辺諸国が1つも乗らないということは、多少、外交が分かる人から見れば言えるんです。これを出した瞬間に、6カ国協議で他の国が一切乗れないということは、これは外交のプロが考えれば、常識的なことなんです。だから、この問題を出した瞬間で、残念ながら、日本はもう終わっているんです。つまり、皆の前で話されているようなテーマではないんです。誰にも知られないような形で処理し、解決するしかありません。これを外交のテーマとして抱いた瞬間から、6カ国とは一緒にやれない、ということを自ら言ってしまったようなものなんです。これは解決する場所が違ふんです。テーブルの表で解決するのではなくて、闇の世界で解決するしかない問題なんです。それをあえて、安倍さんが言ってしまった瞬間に、これは出来なくなった、というケースはこの問題以外にもたくさんあります。我々とすれば、そういうことで、日本の外交府を批判しても仕方ないし、もう、私はそんなことを言うのは嫌になっています。そういうところなんです。

小 泉 よろしいでしょうか。時間の関係で、最後お一人の方をお願いしたいと思います。はい、どうぞ。

質問者 小坂町の成田と申します。石川先生のご提案のおかげで、今年6月に小坂町で、新日中友好21世紀委員会というのを開催することが出来ました。これで私達の町が、中国の報道等を通じて、中国の方にも知って頂けたのではないかと考えております。また、ノースアジア大学さんとは、観光協定を結ばせて頂いて、これから、色々な面で協力させて頂きたいと考えております。今、米やりんごなどを、新たに中国をマーケットとして照準を合わせたいと思っています。そこで観光面から、中国をマーケットとしましたら、どのような可能性があるのか、ということについて、ご意見を伺えたらと思っています。

石 川 来月の12月8日に、私は北京にその件で行きます。これは冬柴大臣、二階さん、森さん、それから観光・航空会社も行きます。日中2万人交流計画というのを今年やったわけです。2万人の旅行者が、お互い相互訪問しようというのがあって、さらに日中韓の間に旅行者を拡大しようということで、最後の締めめのフォーラムのために、12月8日に行くんです。これは、ある条件をつければ、中国からの観光客はいくらでも呼ぶことが出来ます。ご存知のように、中国人が日本に入国するためには、まだビザの規制があるわけです。ビザが取れるところは、北京、瀋陽、上海など、数カ所の領事館の周辺だけです。ですから、これを解禁した瞬間に、年間何百万人が日本に入ってくると思います。

ご存知のように、銀座ティファニーでもルイ・ヴィトンなどの、50万円や100万円のバッグは、全部、中国から来た旅行者が買っているんです。丸の内のバブリーなOLさんは、中国から来た旅行者達が100万円のバッグをキャッシュで買っているのを、指をくわえて見えています。つまり、銀座辺りのブランドショップというのは、中国人が支えているんです。高い旅館や一流ホテルも中国人です。5万円のペニンシュラやリッツ・カールトンのようなところにしか、中国人は泊まりません。いくらでも来るんです。だから、発想を変えなければいけません。中国人なら安い旅行でなければいけない、という風に思っているところには来ません。高いところ、おいしいものを食べさせる、1泊5万円のところ、凄いものがある、そのようなところにしか、今の中国の旅行者は来ないんです。「秋田に来れば、きりたんぼが安いですよ」と言われた瞬間に、中国の一流の観光客は来ません。もう、そのような時代は終わったんです。安いというのは関係ありません。「ここに来れば、ブランド物がいくらでもあるよ」というところにしか来ません。

日本人は、ビザなしで中国に入れるようになっていきます。日本からは、たくさんの方が中国に行っていますけれども、中国からは、ビザの規制をしています。その規制を一気に開放すると、いくら入ってくるか分からないので、閉めているんです。それでも、観光協定を作りまして、東京・上海、上海・韓国、1日4便のシャトルの便があって、非常に好調なんです。だから、これからはいくらでも、中国の観光客は増えると思います。

先程、秋田の件が出たので申し上げますと、新日中友好21世紀委員会を秋田の小坂町で開催したことについて、中国の外務大臣から礼状が来ました。「こんなに素晴らしい、環境に留意した町づくりを見て、衝撃を受けた」ということでした。「環境やリサイクルの問題等を含めて、非常に参考にしないといけない」ということが書かれておりました。秋田と中国が、何か観光

の面でやれないかというのを、日本の外務省でも研究をしています。ただ、秋田から中国への飛行機の便がないのが問題です。こんなところでよろしいでしょうか。

小 泉 ありがとうございます。時間になりましたので、ここで終わりにしたいと思います。先生方には、本当に大変お忙しいところを調整して頂いて、ノースアジア大学シティカレッジのために来て頂きました。本当にありがとうございます。

橋 元 先生方、すばらしい鼎談を本当にありがとうございました。ご来場の皆様、ご静聴、誠にありがとうございました。(拍手)

[講演]

ノースアジア大学 総合研究センター主催 講演会

「男と女の生病老死 ～テレビドラマに見る生き方、死に方～」

講 師	脚本家・ノースアジア大学総合研究センター客員教授	内 館 牧 子
挨 拶	学校法人ノースアジア大学理事長・学長 本学総合研究センター長	小 泉 健
司 会	ノースアジア大学経済学部長代理	阿 部 時 男
日 時	平成19年10月30日 午後1時～	
会 場	ノースアジア大学 40周年記念館 271番教場	

阿 部 それでは講演会を開催したいと思います。私、ノースアジア大学経済学部の阿部と申します。どうぞよろしくお願い致します。

今日は、本学総合研究センター客員教授 内館牧子先生によるご講演でございます。テーマは既にご存じのことと思いますが、「男と女の生病老死～テレビドラマに見る生き方、死に方～」ということでございます。このテーマについてのご講演は、何回かに分けてされるそうです。今回はテレビドラマ『白虎隊』を取り上げて、ご講演して頂くということになっております。

それでは先生のご講演に先立ちまして、本学理事長・学長 小泉 健先生より内館先生のご紹介をお願い致します。

小 泉 ただいまご紹介頂きました、小泉でございます。今日は満席でございます、この会場にはたくさんの方々、しかも内館文学のファンばかりがお見えになっているということで、私どもも感激すると共に、皆様方に心より御礼申し上げたいと思います。

今日のご講演のテーマでございますけれども、内館先生の「男と女の生病老死」というテーマでございます。人生、四苦八苦と申しますけれども、この「生まれいづる苦しみ」、「病む苦しみ」、「老いる苦しみ」、そして「死ぬ苦しみ」という、四つの苦しみはどんな人でも避けて通れない、そういう意味で非常に平凡なことではあります、人間が背負っている大変な、人生最大の苦難でございます。先生がこの問題にどういうお考えをお持ちになり、またどのようなお話を頂けるか、私も期待しております。

先生について、改めてご紹介するまでもないと思われそうですが、実は昨年、先生とお会いした時に「小泉さん、今『白虎隊』を書いているんですよ」と言われまして、白虎隊というのは皆様もご承知の通り、「死」が主要なテーマでございます。私達は「先生がお書きになっているのであれば、今年の教職員の慰安旅行はぜひ会津に行こう」ということになりまして、行ってまいりました。暗闇迫る頃に少年達が、何も食べないで湖から暗い洞穴に戻ってきます。そして飯盛山で自刃するところを、ずっと回ってまいりまして、私は暗い中で松平容保の詩も写してまいりました。こんな形で死なせてしまってお両親に対して済まない、そういう内容の詩だったと記憶しています。そういうものを見て、そしていよいよ正月に先生のテレビドラマ『白虎隊』の放映があったわけで、職員達も待ちに待ったドラマでしたので、皆さん涙を流して感動して見ました、ということをお聞きしております。

今日はその白虎隊について、「死」の問題でありますけれども、人生の四苦の「生病老死」について、ぜひ先生から私達が窺い知れないような、様々なお話を伺い出来ればと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

阿 部 小泉先生、どうもありがとうございました。

今回のご講演は、前回と同様、遠隔講義システムで秋田大学と秋田県立大学に流されております。この場をお借りして、両大学の関係者、データコアさん、フォーラックス教育さんの皆様に御礼申し上げたいと思います。

それでは大変お待たせ致しました。内館先生、よろしくお願い致します。

内 館 内館牧子でございます。こんなにたくさんの方にお集まり頂きまして、ありがとうございます。

す。前回までは2回、相撲史をやりました。まだまだ相撲史もやることはいっぱいあるんですけども、ちょっと趣向を変えて、ここ何回かはテレビドラマに見る「生病老死」をテーマにやっていきたいと思います。これは、「生病老死」という「病」が先に来る場合と、「生老病死」という「老」が先に来る場合と両方ありますが、調べたところ両方使えるようです。元々は仏教用語で人間が逃れることが出来ない四つの苦しみ、誰にも平等に来る苦しみということなんですけれども、それについて私が書いたテレビドラマを通しながら、お話していこうと思いました。今回は第1回目ということで『白虎隊』を選びまして、台本を持って参りました。講演で使った後、大学に残していきますので、ご覧になりたい方は見て下さい。

(台本を持って説明) これは『白虎隊』5時間分の台本です。開きますとまず脚本と書いてありまして、制作統括とあります。これはプロデューサーの事です。次のページにはアシスタントプロデューサーの名前も書いてありまして、音楽家の名前があって、監督の名前があって、そして「協力 財団法人白虎隊記念館 早川廣中」とあります。さらに「撮影協力 会津若松市 会津若松フィルムコミッション 会津藩校日新館」と、これらは撮影に協力してくれた人達の名前が全部入っています。後でご説明しますけれども、撮影、照明、録音とかの名前がずっと書いてあって、これは京都の太秦にある東映の撮影所で撮ったので、京都撮影所の地図とアクセスが書いてあって、前編とあります。この『白虎隊』は1回が2時間30分でしたから、1時間ものが400字詰め原稿用紙で60枚くらいになりますので、この台本の枚数はその5倍半くらいになります。そして、ここに「登場人物 白虎隊士 酒井峰治 山下智久 (ジャニーズ)、白虎隊士 篠田儀三郎 田中聖 (ジャニーズ)、白虎隊士 伊藤又八 藤ヶ谷太輔 (ジャニーズ)」と、主役から順に名前が続いて書かれます。

それで、この中にある台詞とト書きというのを脚本家は書くんですけども、この後、出来る限り多くのドラマで「生病老死」についてお話ししたいと思うので、その前に一度皆さんにぜひお話ししておきたいのが、テレビドラマがどうやってお茶の間に届けられるのかということなんです。それを知っておいて頂くと、この後テレビドラマを見る上で非常に役に立つのではないかと思います。

まず、テレビドラマは誰が作るのかというと、脚本家とプロデューサーとディレクターとデザイナーという、この4人が最初の4本柱になります。脚本家というのは私の仕事で、脚本を書く人間です。脚本を書くというのは全く書き方が小説とは違うんです。例えば、夏目漱石の『坊ちゃん』という原作があって、原作の文庫本なりを全部の俳優さん、スタッフに渡して、「はい、撮影します」とカチンコが鳴っても、これはどうにもならないんですね。と言いますのは、夏目漱石の『吾輩は猫である』は小説ですから文章なんです。「吾輩は猫である。名前はまだない……」と書いてあると、このままでは撮影出来ません。ところが映画も舞台もテレビも全部そうですが、誰がしゃべって、誰がどういう演技をするのかということがあります。ですから、常に登場人物で書いていくんです。テレビドラマも映画もそうですが、シーンというのとト書きと台詞で構成されます。ですから、私達シナリオライターはいわゆる文章力はいらないんです。文体というのは全然必要ないんです。勝負は台詞です。それと構成ですね。

(板書しながら説明) それで、例えばシーンというのはどういうのかというと、「ノースアジア大学の教室 (夜)」これがシーンです。つまり第1シーンはノースアジア大学の教室で夜のシーンですよ、ということなんですね。そしてト書きは、例えば「よし子 (36) と高夫 (30) がいる。よし子、落ち着きがない」という風に書きます。これがト書きです。そうすると、よ

し子役の女優さんが落ち着いた芝居をするわけです。それは役者の演技力にかかります。貧乏揺すりをするのか、キョロキョロ辺りを見回すのか、イライラしながらマッチ棒を折っているのか、これは役者の演技力です。それでさらにト書きは「教室は300人ほどの生徒で埋まっている」と続きます。そうすると、この教室はよし子と高夫の他に、300人の生徒で埋まっているということになります。そのために300人のエキストラを準備するわけですね。でもお金がない時は100人くらいで、後ろは撮らないようにするとか、このあたりはプロデューサーの力なんです。

それで次は台詞です。例えば、「よし子『あの計画、そろそろ』」と書く。そして「高夫『待て、まだ早い』」。こうやって延々と書いていくんです。文章ではないんですね。現代劇でも時代劇でも、全てこの書き方です。私は、大河ドラマ『毛利元就』を書きましたけど、大河ドラマだと約1万枚、それから朝のテレビ小説も半年間で1万枚。次から次と毎日、毎日書いているんですが、毎日、毎日撮影がありますから、どんどん追っかけられるんですね。

そして、さらに「同大キャンパス(日替わり 朝)」と続く。そうすると、第2シーンは同じノースアジア大学のキャンパス、戸外になります。日替わりは別の日ということですので、別の日の朝。これがシーンですね。そして、ト書きに「警官が3人走ってくる」とあれば、警官役の3人が走ってきます。またシーンが続きます。「ノースアジア大学教室」。ト書きは「よし子と高夫が血みどろになって死んでいる。ドアが開き警官が入ってくる」。こういう風なやり方でやっていくんです。

これが小説の場合だと、ノースアジア大学はどこそこにあって、その時期はどんなで、青空があったとか、曇っていたとか、よし子がどんな人間であったとか、文章で書くわけです。ですから、文章のままでは撮影出来ません。こうやって書いていきます。これを書くのが脚本家の仕事なんです。今日のテレビドラマ『白虎隊』の話ですと、これは歴史のドラマではあるんですけども、私達作る側は歴史ドラマではなく、人間ドラマという風に考えて作っていきます。常に生きる、死ぬ、老いる、それから病むということが頭にあるわけですけれども、まずこうやって脚本家は内容を作っていきます。

それで、プロデューサーという人達がいます。そのプロデューサーという人は何をやる人かという、テレビドラマの現場というのは、脚本家を含めてひとりひとりがアーティストなんです。ですから、お金のことなんて全然考えてはいません。例えば10人しか映らなくても、300人埋まっているかどうかというのはすごく大事だから、300人のエキストラを平気をお願いするわけです。それから、例えばここにお花を生けてくれというシーンがあった時に、私はバラにしてくれと書くわけです。でもバラは高いとなると、ちょっとカーネーションにしようかなとか、そういうお金の問題を判断するのが、1つにはプロデューサーの大きな仕事なんです。赤字を出すわけにはいかないんですね。視聴率が悪くて赤字が出ますと、プロデューサーは首が飛びます。ですから、プロデューサーはまずお金の計算をする人。

それから、脚本家や俳優さん達の心理状態や体の状態に常に目配りをして、ちゃんといいチームワークでやっていけているとか、主演女優はくたびれていないか、そろそろ休ませた方がいいんじゃないとか、それから内館の原稿が急に遅れ始めた、何で遅れたんだろうという時に、「頑張れ、頑張れ」と言う、内館はよりいっそう頑張ってる書くタイプか、「飲みに行こうか」と言う方が反省して書くタイプか、「1日休暇あげるから大相撲見ておいでよ」と言った方が書くタイプか、人間をきっちり見ていって、チェックしなければいけないというのがプロ

デューサーなんです。ものすごく大変な仕事です。ですから、スタッフとキャストは全部横一列の仕事なんですけれども、私達は自分のことだけ考えていればいいんです。でも、プロデューサーはある意味では全部を上から見ていなくてはいけない。これがプロデューサーの仕事なんです。

あと、キャスティングというのがありますけれども、誰に出てもらうのか決めるということなんですが、キャスティングもプロデューサーの仕事です。例えば、プロデューサーが誰々でやりたいと言った時に、脚本家のイメージとあまりにも違うと「ちょっとそれでは書けないかもしれない」と言うこともあります。基本的にはプロデューサーの仕事。それからお金の問題でいえば、ギャランティーを決めるのもプロデューサーの仕事です。「いくらで出て下さい。いくらで書いて下さい」というのもプロデューサーの仕事なんです。つまり、全体的な管理監督者がプロデューサーです。

ですから、プロデューサーの出来が悪いと絶対に上手くいきません。プロデューサーには大局から細部に至るまでの能力が必要なんです。私があるドラマを書いていた時に、視聴率がどんどん下がったんです。毎日、毎日下がっていったんですね。さすがにめげまして、それでどうしようかなあと思っていたんですけれども、下がる理由が段々分かってきたんですね。今までのものとはあまりにもタッチが違いすぎて、視聴者が付いてくることが出来ないんだと気が付いたんです。それで、私がプロデューサーに「何が悪いが分かったから、ちょっと微調整をしましょう」と言いました。視聴者にある意味では媚びるといえるか、「微調整をして、視聴者が待っているようなドラマに直しましょう」と言ったら、プロデューサーは「一切直す必要ない。このままで行こう。絶対に上がる」と言うんですね。私も直したいわけじゃないから、「じゃあ、このまま行こう」と行ったら、途中から上がったんです。これが『私の青空』なんです。

ドラマのスタートから2ヵ月くらいは落ちて、落ちて、プロデューサーは髪が真っ白になって、私は目眩がしてぶっ倒れまして、監督は顔面神経痛になって3ヵ月休んだという、それぐらいやっぱり数字というのは、視聴率というのは大きいんですね。

だから、いいものさえ作ってれば視聴率なんてどうだっていいじゃないかと言いますけれども、例えばノースアジア大学がどんなにいい学校だって、学生が入って来なかったらしょうがないわけですし、どんなにいい大根を並べたって、買ってもらわなければ八百屋さんの意味がないのと一緒です。そういう意味で、私達はプロデューサーとがっちり一体になってやるわけなんです。ある意味ではアーティストの気持ちがあつて、ちょっとずる賢い管理監督者というのがプロデューサーです。

それから、ディレクターという人がいます。ディレクターというのは映画で言うところの監督で、撮影する人です。ただ、実際に撮影するのはカメラマンですが、ディレクターというのはどう撮ったらいいのか、ということを徹底的に考える人なんです。ここにディレクターのセンスがものすごく出てくるんですね。この台本でこんな短いシーンでも、ディレクターが100人いれば、100通りあるんです。例えば、「よし子と高夫がいる」と脚本家は書きます。あるディレクターは、よし子と高夫が真ん前に座っていて、2人をアップで撮った。何故アップで撮るのかというと、「『あの計画そろそろ』『待て、まだ早い』」というやりとりが、この後であることをディレクターは分かっているわけですから、2人の何とも言えない顔をアップで撮る。そうかと思うと300人を全部撮って、それからカメラがずっと寄って行って2人の顔を撮るとい

うディレクターもいます。

ですから、ディレクターはお芝居を指導します。「芝居を付ける」と言いますが、女優さんや俳優さんに芝居を付ける人ですから、ディレクターは私が書いたこの台本を読みながら、「よし子と高夫がいる。よし子落ち着きがない」という時に貧乏揺すりがいいのか、あるいは顔を突っ伏して寝てくれとか、それから自分達の心の中がばれないように、かえってハイになって2人でキャーキャーとここで笑ってくれていてとか、それはディレクターのセンスなんですね。私がどうしても笑っていて欲しい場合はト書きに書きます。「よし子と高夫がハイテンションで笑っている」という風に書きますけれども、普通はそこまで書きませんので、ディレクターのセンスになるわけです。そうすると、「教室には300人の生徒が待っている『あの計画そろそろ』」と言うよし子の顔をばちっと映すディレクターもいれば、教室全体を映して一切よし子の顔を映さずに、「あの計画そろそろ」という声だけを300人の生徒の上にかぶせるディレクターもいるんですね。それでカメラがぱっと高夫に寄って、「待て、まだ早い」と言わせる。

どうやったら茶の間に流れた時に一番効果的か、ということ徹底して考えるのがディレクターです。ですから、下手なディレクターと組むとすごく大変なんです。出来上がったビデオが放送日前に家に届きますけれども、見ていて「何でこうなるわけ」ということがしょっちゅうあります。逆にディレクターの方がすごくて、脚本より遙かに上だったという時もあるんです。その一番分かりやすい例が、先程の『私の青空』なんです。

『私の青空』で未婚の母親から生まれた、太陽という7歳の男の子がいました。その子がいる時、学校の友達の家遊びに行くっていうシーンがあるんですね。それで学校の友達は、太陽にお父さんがいないってことをみんな知らないんです。ですから、「今度の日曜日さ、家でゲームやろうよ」と、トシヒコ君という男の子が言うわけです。そうすると太陽が「うん、いいよ。行く、行く」と、ヨシオ君という子が「じゃあ、僕もパパと行く」と言うんです。「じゅあ、3人のパパと3人の子供で対抗しようぜ」という台詞を友達は言うわけです。太陽は、パパがいらないとは言えないんですよ。「うん、いいよ」と言った後、シーンが変わって道になって、とぼとぼ、とぼとぼ歩いて帰る太陽がいて、家に帰ってお母さんに「明日、3人のパパと3人の子供でゲームをやることになったんだけど、僕どうしよう」と言うわけですね。そうするとお母さんは「何故、そういうつまらないことに見栄を張るんだ。パパがいなくても別に恥ずかしいことじゃない。あんた1人で行ってらっしゃい」と言うわけなんです。太陽は励まされて、「分かった」と言って、1人で行くわけです。

それで、次がゲームのシーンだったんです。私はどのような台詞を書いたのかというと、シーンは「トシヒコの家・リビング」。「トシヒコとトシヒコの父親、ヨシオとヨシオの父親、太陽がゲームを楽しんでいる。」ト書きです。台詞として、「トシヒコ『うちのパパすごい上手いだよ！』ヨシオ『うちのパパ見てな。もっと上手いよ』太陽『……………』」なんです。これをディレクターがどう撮ったか。下手なディレクターだったら、おそらくみんながゲームをしているところを普通に撮っちゃうんですね。ところが、NHKの柴田さんというチーフディレクターはものすごく上手かったんです。(板書しながら説明) どうやって絵面(えづら)を撮ったのかといいますと、真ん中に太陽が座っていて、その右側にトシヒコパパが座っているんです。太陽の左側には、ヨシオ君のパパが座っているんです。ちょうど、川の字です。太陽だけがうんと小さいんです。それで、トシヒコ君はパパの背中におんぶしているんです。そして、

ヨシオ君はパパのあぐらに入っているんです。太陽だけが真ん中に1人小さくて、片一方はお父さんが大きくて背中に乗っていて、片一方もお父さんが大きくてあぐらの中に入っている。そして、「うちのパパ上手い」とか、「見てな、うちのパパもっと上手いよ」とか、そういう台詞を言うんです。そうすると、あの撮り方で画を撮りますと太陽がものすごくかわいそうなんです。それで段々、段々、視聴者は太陽を1人で行かせたお母さんのことが憎らしくなってくるわけです。こういう撮り方というのは、明らかに私の台本をきっちり読み込んで、私よりも遙かによく考えて作って下さったという、ディレクターのセンスになるわけです。そうすると、のっぺらぼうにただ映すだけというのが、いかに力がないかということになってきます。

それから、デザイナーという人がいます。これは、洋服のデザインという意味ではないんです。全てをデザインするんです。一番大切なのが、ドラマに匂いとか香りを出すことなんです。抽象的で分かりにくいんですが、例えば『白虎隊』であれば会津です。ですから、現代の会津で構わないので、デザイナーは会津に行きます。そして行って、ずっと歩いたり、ご飯を食べたり、色々なことをしながらしばらく会津にいるわけなんです。それで会津の匂いみたいなものを自分で感じるわけです。そうやって感じたものでセットをデザインします。セットというのは白虎隊士の家であったり、それから庭であったり、そういうデザインをします。それはデザイナーの仕事なんです。

このデザイナーの仕事というのはとても大きくて、現代劇の台本を読んだ時に、例えばOLが主人公だったとすると、どんなに考えても年収が200万円くらいということが分かってくる。ところが、デザイナーによってはそれが読み切れないと、ものすごいマンションに住まわせちゃったりするんです。「これじゃあ、年収1500万円だろうよ」と、こういうのはプロデューサーがまずチェックします。それでデザイナーは、「1500万円の年収で、この40畳のリビングに住むOLがどこにいるんだよ」とプロデューサーに言われます。そうすると、そこでデザイナーはある意味では失格です。結局そう考えると、「脚本を読める」という言い方をしますけれども、脚本を読めるか否かということがすごく大きくなってくるわけです。この脚本家もデザイナーも、まあ、デザイナーは美術大学出身という人が多いですけれども、脚本家もプロデューサーもディレクターも、理学部の人であれば工学部の人、法学部も文学部もいますから、まったくどこの学部でどういう勉強をした人が向いているというわけではないんです。やっぱりその仕事が好きで、逆境に強いかということが1つのポイントかと思えます。

それから、技術という人達がいます。この技術というのは、台本にも書いてありますけれども、音声、カメラ、編集、照明、そういった仕事の人達なんです。先程、よし子と高夫の話をしましたけれども、ディレクターはどういう風に撮るのかということカメラマンに指示します。その時に、カメラマンはどのようにやったら一番良く撮れるか、というのを徹底的に考えて撮るわけです。

それで、音声というのはマイクなんですね。例えば、曇り空の今日撮影をしたとします。「途中で撮影が終わりましたので、残りは明日撮ります」ということになった時に、そういうことはしょっちゅうあるんですけれども、翌日は晴れていた。そうなる音声は違うんですよ。晴れた時と曇った時では、マイクの拾う声が違っちゃうんです。ですから、続けて撮るとするのはすごく難しくなる。そうすると天気予報を見ながらなんですけれども、そういう時はどういう風にしたら前の日の曇り空と同じように拾えるか、ということ常々考えなければならぬのが音声さんです。あと、胸のところにピンマイクを付けたりしますけれども、ピンマイクが

見えていたのでは興奮めです。『白虎隊』でも付けていましたが、全然分からなかったと思うんです。それは体にガムテープで貼って付けていたり、鎧の裏に忍ばせてあったりするんですけども、それでどのくらい音がきちっと拾えているかチェックします。ロケなんかの場合、風がすごく吹いたりしますので、きちっと音が拾えるかということを音声さんがちゃんとチェックするわけです。

そして、照明があります。例えば、私はシーンに「夜」と書きました。夜は昼と照明が違うので、夜の照明をしなければいけない。それから女優さんによっては「べっぴんライト」と冗談で言ったりしますが、べっぴんに映るライトを当ててくれという場合もあるんです。ハイビジョンになってから、ないシワまで映るとある女優さんが嘆いているんですが、そういう場合でも「べっぴんライト」をいかにして当てるかというのはすごく大事なことです。大物の女優さんになりますと、「照明をあの人にしてくれ」と指名してきいたり、ということさえあります。これが技術ですね。テクニカルスタッフです。

それからアートスタッフ、美術の人達があります。まず大道具があります。大道具は、例えば部屋、教室で撮影をする時に、いつもノースアジア大学の教室をお借りして撮影するというのは、授業もあるわけですし、大学側にもすごく迷惑がかかるわけです。だから、「夜だったらいいですよ」と言われても、昼も撮らなければならないという時だってありますし、しょっちゅうノースアジア大学に来るわけには行きませんので、スタジオにセットを作ります。この教室とそっくりに作りますが、天井はありません。天井は全部上から照明がぶら下がっていますから、天井はないんですがセットを作るんです。その時に美術の大道具のデザイナーが、どうやったらノースアジア大学に一番近く再現出来るか考えて作ります。でも、こんなに大きなものは入りませんから狭く作ります。こんなに大きくないんだけど、どうやったらいいセットを作れるか考える。大道具も作る。それから OL よし子の家、年収200万円の OL よし子の部屋だったらどんな部屋かを考える。堅そうな木のベッドで2段ベッドを切ったようなものかなとか、ですね。

それと小道具というのがあります。小道具というのは、例えばよし子の部屋に、よし子が趣味で集めている人形があった。その時にそういう人形をそろえておいたり、小さい道具、装置、それを常に考えているのが小道具さん。部屋にはジャンプのポスターを貼ってあった方がいいかなとか、テーブルクロスはあるだろうか、ないだろうかということを全部考えるというのが小道具さんの仕事です。

それから、手に持てる「持ち道具」という係があるんです。持ち道具というのは手に持つ物、ハンドバッグだったり、鞆だったりします。そういうのは持ち道具さんというのがそろえます。

また、履物というのも専門家がいます。これは時代劇だったら、草履（ぞうり）なのか草鞋（わらじ）なのか、その当時の草履というものは、草鞋というのはどういうものだったのか、というのは履物さんが考えてそろえます。

それから、「消え物」という専門家がいます。消え物というのは、例えばコップの中に入れる水です。水は飲んじゃうと消えます。だから消え物。それと、食事のシーンが多いんですけども、ご飯を食べる時のご飯類、おかずとかおみそ汁とか、ああいうものは全て消え物です。それを消え物さんがそろえます。その時も、例えば毛ガニのみそ汁や豪華なメニューは、年収200万円以下では無理となるとワカメと大根にするとか、そういったものを全部彼らが考えているわけです。ですから、美術というのも本当に細かいんです。

そして、結髪さんという人がいます。結髪さんは髪を結うんです。これが現代劇だったならば、どの程度茶髪にしたらいいのか、どんなカツラがいいのか考えます。逆に時代劇だったならば、当時の武士はこういう髷（まげ）だった、というのを全部勉強して結髪さんが常に結います。

あと、衣装さんもいます。スタイリストとしてどんな衣装を用意するのか。ですから、昭和初期の物語を書きますと、昭和初期風の洋服だけを集めてきます。それは全部衣装がやります。

それら全てを統括して上から見ているのがチーフデザイナーです。こういうある意味では全部プロの集団です。そして、そこに俳優さんが加わります。俳優さんはやっぱりすごく大変です。忙しいスケジュールの合間を縫って、膨大な台詞を覚えてくるわけですから。俳優から、デザイナーから、脚本家から、それら全てをチェックして見ていっているのがプロデューサーなんです。こうやって、この人達がまずドラマを最初に作っていくわけです。

そして『白虎隊』ですが、私は放送する3年くらい前からやりたいという思いがずっと気持ちの中にありました。これはあちこちでは言わないんです。言うと他局で先にやられちゃいますから。それで、白虎隊の話をつかやろうという思いがあって、その理由はいくつかあるんですけれども、1つには東北地方の人達が実直に、ものすごく頑張ったのに、その部分に関して結構損したのかなっていうのがありました。それと、死ぬということ、生きるということに対して、あの時代はどうであったのだろうかという思いがありました。今は簡単に自殺したりしますけれども、生きてたくても生きられないという時代があって、15、16歳、二本松少年隊なんて12、13歳で死んでいったわけです。死を国家が決めてしまうという時代に、生きるとはどういうことだったのだろうか、ということもあったんですね。

それでもう1つ大きな理由というのが、あまりにも現代が教育も含めてタガが緩みすぎているか、ということがありました。当たり前なことなんです、挨拶ひとつ出来ない。よく犯人なんか捕まって、ご近所の人インタビューで、「すごくよく挨拶をきちっとしてくれる人でしたのに」というコメントを聞くんですが、挨拶は普通するものなんです。だけれども、それがコメントとして成立するというほど、日本の国がおかしくなっているのがありました。それで、白虎隊士みたいな人達というのは、ものすごくきっちりと躰を付けられていたんですね。今の日本は私達大人のせいなんですけれども、何が悪いかというならば、規範意識を若い人達に伝えることをさぼってしまった、ということがものすごくあると思ったんです。やっぱり、最近の日本から一番欠けたものは規範意識だろうなというのがありまして、いつの日か白虎隊をやろうと当てもなく思っていました。

そうしましたら、ある時にテレビ朝日から新春スペシャルドラマをやらないかということで、『黒革の手帖』ですとか、ヒットドラマをたくさん作った女性プロデューサーでしたけれども、声を掛けてきたんです。その時に、新春ドラマだと長時間ドラマがやれる、それから結構お金（予算）を使えると思ったものですから、「実はやりたいものがあるんだけど、多分そちらが考えているものとは一致しないと思う。そちらは多分派手な、トレンドーなものを考えているであろうから一致しないと思うんだけど、私はやりたいものがある」と言ったら、そのプロデューサーが「実は私もやってもらいたいものがある」と言うんですね。「内館さんが考えているものとは合わないと思うんだけど、ちょっとやってもらいたいものがあるから、話がしたい」と言うので、テレビ朝日の近くで2人で会ったんです。それで、これが信じられない話なんですけれども、2人とも白虎隊だったんです。私はプロデューサーが「白虎隊」

と言った時にびっくりしまして、「あなた何で白虎隊なの」と聞いたら、これがまた見事なプロデューサー的発想なんですけれども、プロデューサーはやっぱり視聴率をとらないと困るんです。それで彼女が言ったのは、「ジャニーズにたくさん出てもらおう」と。ジャニーズ事務所というのは徹底して厳しいですから、ジャニーズのあの子達は非常に規範意識の強い、鍛えられた子達です。人気もあるし芝居も上手いし、「よし行こう」ということになりまして、それで進み始めました。

これは2007年の1月に放送しましたけれども、だいたい1年くらい前から準備に入ります。プロデューサーは直ちにジャニーズを抑えにかかったんですが、1年前のオファーではとてもジャニーズの人気スターを抑えられませんか。特に山下智久君とか田中聖君とか、あのあたりを1年前に抑えることは不可能です。ところが抑えたということは、プロデューサーはその前から抑えにかかっているんですよ。私が「やろう」と言うが、言うまいが抑えにかかっているんです。東山紀之君も出ているくらいですから、これは相当前からやっていたなと思ったんですが、プロデューサーのキャスティング能力です。

そして、私は白虎隊という以上、戊辰戦争のことを調べながらどういう話にしていったらいいのか、ということを考えるわけです。先程申し上げましたように、歴史ドラマというよりも人間ドラマなんですね。「どう生きて、どう死んで」ということを考えて、茶の間に楽しんでもらって、テレビ朝日でやっている時に途中でフジテレビやTBSにチャンネルを切り替えられないようにするにはどうするかということは、脚本家の使命なんです。そういったことを考えながら戊辰戦争の勉強をひたすらしていたわけです。そうやって準備をしていって、途中でプロデューサーやディレクターも、もちろん戊辰戦争の勉強を始めるんですが、こうやって台本が出来ました。

今日お持ちした台本は決定稿として俳優さんに渡したものですけれども、ここまでの間に書き直しというのは結構あるんですよ。ですから、1万枚の原稿でも書き直しを入れると1万3000枚くらいあるかもしれません。1.5倍くらいは書いているということになるんです。そして出来上がってキャスティングも全部済んだ時に、全部の俳優さんが集まって、脚本家、プロデューサー、スタッフ全員が大きな部屋に集まって、顔合わせというのをやります。そうすると、山下智久君が「主役をやる山下です」と言って、所信表明じゃないけど挨拶します。薬師丸ひろ子さんが「山下君のお母さん役をやります」という風に決意を述べ合うのが顔合わせです。その後、本読みというのがあります。本読みというのは、全員が台本を持っているわけですから、松平容保なら東山紀之君が容保役の台詞を読む。台本を読みながら、お互いに様子を見るわけです。その時にタイムキーパーというのがいて、だいたい何分かかるということをチェックします。それがあった後で、今度は立ち稽古というのに入ります。この立ち稽古というのは、大道具も小道具も何にもないんですよ。何にもないところに俳優さんがジーンズにTシャツで、本番と同じようなことをやるわけです。セットも何にもないから結構恥ずかしいと思うんですけども、「殿」と言いながらだあっと走ってきたりとかして、その立ち稽古というのをやります。その後で収録です。

それで、収録が結構誤解されがちなんですけど、お芝居の場合は舞台の上でお客さんを前にしてやりますから、頭から最後まで順番に進みます。ところが映画とかテレビ、映像の場合は、お金の問題もあるんですけども、順番には撮らないんですね。(板書しながら説明)例えば、これが「ノースアジア大学の夜の教室 同大学キャンパス」そして、ここで再び「ノースアジ

ア大学の教室」それで次のシーンが一転して、「東京駅」があって、「同駅長室」となったとします。本当は第1シーンから順番に撮っていきばいいんですけども、これだとものごくお金がかかってしまうわけです。俳優さんの拘束時間もすごく長くなります。ですから、教室のシーンはまとめて同じ日に撮っちゃうんです。第1シーンと第48シーンと離れていてもです。それからキャンパス。それも、まとめて同じ日に撮ります。それから、東京駅でやる時に駅長室を借りることが出来なかった場合は、大道具さんとデザイナーがセットを作りますから、駅長室はいいんですけども、駅というのは東京駅を撮らなきゃいけないわけですね。そうすると東京まで、スタッフも俳優さんも行かなければいけない。そうすると東京駅のシーンは、東京で撮影がある時にいっぺんにまとめて撮っちゃうんです。ですから全く順番じゃないんです。それを全部繋ぎ合わせるのが、編集という人の仕事なんですね。

極端な例で、これはよくある話なんですけれども、撮影初日に夫と妻が離婚して別れたというシーンから入るとします。それで次の日に出会いの撮影があって、それから1週間後に夫の浮気のシーンを見た妻との大喧嘩のシーンを撮ったりする。順番がメチャクチャですから、俳優さんにしてみれば全然繋がらないんですね。だけど、それを繋いでくれと指示するのがプロデューサーであり、ディレクターであり、繋がなきゃいけないというのが俳優さんなんです。「先に別れのシーン撮ったから、今更出会いのシーンって言われたって困るよ」と言う俳優さんは、次から仕事はありません。ですから、そういう風に撮って行って、あたかも繋げた時にちゃんと順番通りに出会いがあって、喧嘩があって、別れがあったようにするということなんですね。

結局、こうやって撮っていくんですが、これがもう1つだけお話ししますと、俳優さんのスケジュールというのが当然あります。例えば『白虎隊』だったならば、お母さん役の薬師丸ひろ子さんとお父さん役の高島政伸さんと白虎隊士の山下智久君の3人が、お部屋でしみじみと語り合うシーンを私が書いたとします。それで、その日に薬師丸さんと高島さんのスケジュールが合わなくて、山下君だけが良かったという時には、そのシーンは撮れません。それで、「じゃあ別の日にしよう」ということになって3人でしみじみ語り合うシーンを撮る時に、午前中は山下君がOKだった、午後は高島さんがOKだった、夜は薬師丸さんがOKだったということになると、みんな同じ日にOKなんだけど時間が違うということは撮れないんです。「それじゃあ、やっと3人の合う日が出来たから、この日にやりましょう」ということになったら、今度はセットのスケジュールがあるんです。その日はスタジオに部屋のセットが建っていなかった。そうすると、どうしても撮らなきゃいけない時は、脚本家のところにアシスタントプロデューサーが走ってきます。それで、「内館さん、申し訳ないけどもセットのスケジュールが合わなくて、部屋では語れません。だから、どこか別のところで語らせて下さい」と言ってくるわけです。そうすると、「しょうがないから3人で飯盛山に登らせようか」ということになるんです。そういう時、部屋でしみじみ話させる以外は急に書けないという人は、脚本家にはちょっとなれませんね。「もう、どこでもいいわよ」というくらいの機転が利かないといけません。

そして、いよいよ『白虎隊』を作る時に、この「生き方、死に方」なんですけれども、少なくとも『白虎隊』の場合は「病む、老いる」ということよりも、「生きる、死ぬ」この2つです。そして、見てもらう上で工夫がいるというのが私の中であつたんです。それで、まずサンドウィッチにしようと思ったんです。ドラマの冒頭に、山下君が演じたいいわゆる規範の全然な

い、今時の主人公が出てくるんです。裸みたいな服を着たガールフレンドを連れて、外でバクバク物を食べながら、足を広げて、携帯をかけている。ご近所の人が挨拶しても全然知らんぶり。黙って部屋に帰ってきて、「お前、朝帰りか」とお父さんに怒られると、「関係ねえだろう」と言って、お母さんは困って「はい、はい、朝ご飯食べなさい」と言うと、「俺、パン嫌いだって、言ってるだろう。飯がいいって、いつも言ってるだろう。食べねえよ、パンなんか」というところから入るんです。それで、その少年の先祖が白虎隊士だった。

そこに、少年のものすごく苦手なおばあちゃんが会津から遊びに来ちゃうんです。会津木綿を着たそのおばあちゃん役は野際陽子さんで、少年の首根っこを捉まえるんですね。「お前、なんだ。白虎隊士の末裔ともあろうものが、飯がどうか言えるか、馬鹿もん」と、おばあちゃんはカンカンに怒るんです。そこに女の子をナンパしに行こうと、KAT-TUNの田中聖君が演じたもう1人の白虎隊士の末裔が遊びに来たんです。「おお、いいとこに来た。お前ら、そこに2人とも座れ。これから白虎隊教育をいたす」とおばあちゃんが言うんです。それで、この2人は「白虎隊教育を、ばあちゃんにやられちゃたまらないから、逃げようぜ」という話になって、どこに逃げるかといったら、おばあちゃんが絶対に来ない会津。会津から来て、東京にいるんだから、会津なら安全だというんです。そして2人で会津に逃げます。会津に逃げたらおじいちゃんがいて、「今、旨いもん食わしてやるから、どこかで時間つぶせ」と言って、白虎隊記念館で車から降りしちゃうんです。行きたくもないのに、白虎隊記念館に行くわけです。ズボンをずっと下の方までずり下げ、ピアスをあちこちいっぱい付けて、「やってらんねえよな」と言いながら入って、白虎隊記念館の中を見て回るんです。そうすると、白虎隊記念館にはいっぱい遺品が残っています。その中に、田中聖君と山下智久君にそっくりな祖先の絵を小道具として置いたんですね。2人はその絵を見て「何か俺たち、やっぱ似てねえか」という話になって、祖先の顔と金髪、茶髪の本人達の顔が重なって、「白虎隊～よく死に、よく生きた少年達～」というタイトルが入って、音楽が入ってスタートです。

その後は全部白虎隊の話で、さっきの2人が2役でやるわけですね。このやり方でやったならば、きっと面白いと思ったんです。最初は現代の男の子、そして間は140年前の白虎隊の話をつらつらやって、いかに教育されていたのかということとをみっちりやって、また現代に戻る。現代に戻った時に最初と同じシーンなんです。帰ってくると近所の人達が「あら、新ちゃん、おはよう」と言うと、冒頭では「関係ねえよ」と言っていたのが、「おはようございます」と挨拶する。近所の人びびっくりしちゃって、「挨拶出来るんだ」というわけですね。帰ると、同じシーンですからお父さんが「また朝帰りか」と言うと、「すいません」と。お母さんが「ご飯、出来ているわよ」と言うと、「俺の嫌いな物ばかりですけど、あの時代のひでえ飯考えると、何でもいただけます。いただきます。」というシーンで終わる。そういう構成を考えただけなんです。これが脚本家の仕事です。結果的には、このサンドウィッチが分かりやすいということと現代のジャニーズも見られるということで非常に上手くいったんです。

それと並行して、戊辰戦争のこともつらつらと調べていくわけなんです。戊辰戦争については皆さんもご承知でしょうけれども、非常に乱暴に言ってしまいますと、京都の政情がものすごく不安定だった時に、今の山口県にある長州藩が京都でものすごい幅を利かせていた。首斬り事件は起こるは、放火は起こるはどうにもならないというので、ついに会津藩へ京都を守って欲しいということで、守護職を引き受けてくれないか、と言われたというわけなんです。これは貧乏くじでどこも引き受けなかったんです。だって、そんなものすごく危ない京都に殿様

が行かなくてははいけない。そうなると会津は空いちゃうわけですよ。そして、誰も引き受けなかったんですけれども、松平容保は受けたんです。これは、1つには会津士魂といわれていますけれども、会津の侍魂というものがあったんですね。

それで、どういうキャラクターのお殿様にするか、どういうキャラクターの登場人物にするのかを考えるのが脚本家の役目です。お殿様の台詞が今もテーブルコーダーに残っているわけではありませんので、全部脚本家が考えなければいけないんです。この松平容保があえて貧乏くじを引いた。これには会津の教えがすごく関わってあったんですけれども、松平容保が「人間は同じことをずっと繰り返していれば、間違いなく安全で安泰だ。だけれども、場合によっては危険を顧みずに討つて出ることが人を大きくするし、会津を大きくする。だから拙者は参る」と言って、みんなの反対を押し切って京都へ行くというキャラクターに作りしました。そして、実は非常に大変な目に遭ったんですけれども、京都では会津の人はものすごく実直に頑張るわけです。天皇に仕え、一生懸命頑張るんですけれども、段々、段々、長州藩にとっては邪魔になるわけです。会津藩にとっても長州藩はいらないと思っていますから、そこで両方がぶつかりあって、会津藩もひどい目に遭い、長州藩もひどい目に遭い、ついに裏切りやら何やらがたくさんあって、そして会津藩が長州藩と薩摩藩によって、朝敵、つまり朝廷や天皇に刃向かう賊軍と決めつけられてしまったんです。一方で薩長は官軍になってしまった。そして、ここで薩長は自分達が仕組んだ部分もあったんですが、良くない会津藩を討つと、天子様のために我々は会津藩を討たねばならんと、いうことになったんです。

ただ、資料を丁寧に読みますと、やっぱり、会津藩はそんなにひどいようには思えないんですね。研究者によっては、長州藩側から見た時に会津藩がどうだった、ということはあるとは思いますが、会津藩は薩長と戦わざるを得なくなりました。結果、東北地方や新潟の各藩が全部味方してくれまして、会津藩と一緒に戦うということになったんですけれども、何分にも武器や兵力が全く薩長とでは勝負にならなかったんです。それで、次から次へと東北の各藩が脱落していき、官軍に寝返りということになってきます。新潟なんかは最後まで頑張ってくれたんですけれども、とてもとても、西洋型の薩長の鉄砲にはかなわなかったし、全くの負け戦だったわけです。

それで、全くの負け戦であると分かっているのに、ついに8月22日に白虎隊が動員されます。白虎隊は35人いたんですけれども、そのうちの20人が喉を突いたり、腹を切ったりして、自刃します。自害ですね。数え年の16、17歳の男の子達がそうやって死んでいった。明らかに負け戦です。これは負け戦だというのは、白虎隊士の中でも分かっていたことなんですけれども、資料を読むと、「会津のために、会津魂のために私は行きます」と彼らは言うて行くわけです。それで、その事実をずっと調べていくうちにちょっと面白いことに気が付いたんです。つまり、35人の白虎隊士がいて、そのうちお腹を切ったり、喉を突いたのが20人。1人は生き返りましたけれども20人いた。ということは、残りの15人は生きていたんですね。生き残った白虎隊を今まで扱ったものは見たことがなかったので、その生き残った白虎隊を主役に出来ないだろうかと考えました。つまり、白虎隊というのは常に「死」のイメージでしたけれども、「生」という角度から白虎隊士を書けないものだろうか、ということを考えてんです。それで、生き残った15人を会津の研究者にもお願いして丁寧に調べていったんです。

どういう人が生き残って、今どうなっているのかとか調べていく中で、信じられない事実が出てきたんです。それが、酒井峰治という生き残った白虎隊士なんですけれども、この人を調

べましたら、末裔が旭川に住んでいることが分かったんです。それで、その旭川に住んでいる夫婦の夫が峰治のひ孫なんです。そのひ孫の奥さんが「仏壇の掃除はしょっちゅうしているんだけど、平成2年のある時に奥の方までやってみよう」ということで、丁寧に後ろの方までお掃除したんだそうです。そこの仏壇には酒井峰治の位牌もあるんですけど、仏壇の奥の方まで掃除をしていたら巻物が出てきたというんですね。見たことのない巻物だった。「何だろうこれは」ということで、ひ孫の奥さんが奥から巻物を引っ張り出してみたんす。そうしましたら細かい文字で、4000文字、生き残った白虎隊士 酒井峰治の思い、それからどうやって自分は死なずに生き残ってしまったかということが、びっしり書いてあったそうなんです。それで、「お父さん、大変だ」ということで峰治のひ孫であるご主人が見たならば、これはどう考えても遺書というか、大変な資料だということ、いい決断だったと思うんですけども、会津の白虎隊記念館にそれを持っていったそうなんです。そうしましたらものすごく貴重な資料ですから、向こうはすごく喜んで、それが「生存白虎隊士 酒井峰治の手記」という資料にまとめました。記念館に行きますと無料配布されています。酒井峰治が遺した4000文字のままなんです。ここにはものすごく細かく書いてあるんですよ。慶応4年8月22日、どうやって、どこまで行った。そしてどんな風にお腹が空いた。そして「自分も自殺せんとのみ決心して」とかの心の動きや、農夫に助けられたとか書いてあるんですけど、この中で一番驚いたのは、やはり、自殺しようとしたことですね。

これを読むと、彼は死んだ20人と一緒に班で歩いていたんですが、草鞋の紐が何かを直そうとして、深い草むらにしゃがみ込んで直すんです。締め直して、もう1回立ち上がったならば、誰もいなくなっていた。「おーい、おーい」と叫んでみたんだけど、全然分からなくて、慌てて追いかけていったら道が二股に分かれていた。その一方に行ったみんなは死んでいる。お腹を切っている。彼は別の一方に行ったんですね。ところが行けども、行けども誰もいなくて、それで8月といっても陰暦ですから、今の10月です。土砂降りの雨で、ものすごい寒い日だったそうです。そのうち自分も力が尽き果てて、食べる物もろくに食べていないし、これはもう駄目だということで、資料に書いてある通り「自殺せんとのみ考えた」と。そして、隠し持っていた小刀を出してこれからお腹を切ろうという時に、ここにしっかり書いてあるんですが、突然、犬が飛びかかってきたんですね。小さな犬が、お腹を切ろうとする瞬間に飛びかかってきたんです。これは私が作ったんじゃないで、書いてあるんですけども、彼がびっくりして見たならば、自分が飼っていたクマという犬だったんです。それで「クマ公」と呼んだら、クマがものすごく吠えて回って「ワン、ワン、ワン」ともう喜んで、興奮している。それで、クマが彼の衣服をくわえて引っ張っていくんですね。彼はその後をよろよろしながらついて行きます。すると、いつもクマがお散歩に来て、餌をもらっていた農家に行ったんです。そこで農家の夫婦が「峰治様じゃございませんか。まあ、まあ、まあ、座って下さい」ということで、傷の手当てをしておにぎりを食べさせてくれた。

ものすごく死にたいという時の理由は、笑い事じゃないんですが、空腹っていうのがすごく大きいんです。これに書いてあるんですけども、おにぎりをもらって食べたことが、峰治が死を思いとどまったことに非常に大きな影響を与えているということです。それから、考えもしなかったことなんです、飼犬が飛びかかってきた。峰治に飼犬が飛びかかってきている銅像が白虎隊記念館の入口に立っています。こういうことによって峰治は生き残ったんですね。

私とその女性プロデューサーはすぐに旭川に飛んで、そのご夫婦に話を聞きました。そうしたら、ご夫婦が資料をいかようにも使ってくれということでしたので、この生き残った白虎隊士を主役にしようということで、普段は死んだ方を主役にするんですが、「生」の方を主役にしました。しかし、立派に死ぬということが一番素晴らしいと教えられていた時代です。どういう教え方を会津藩でしていたかということ、「義に比べれば命は軽い」と教えていたんです。ですから、お殿様に忠義を尽くすこと、そして会津のために義を働くことは、人間の命よりずっと重いんだ、ということをお教えしていました。

さらに、会津藩では非常に独特な教育をしていて、日新館という有名な藩校がありました。この日新館に入る前の6歳から9歳の少年達を集めて、地域が教育をしていたんです。その教育というのが「什(じゅう)の教え」と言います。この「什の教え」は、先程お話ししたみたいに、現代の若い人達から最も消えてしまった規範です。つまり、大人達が教え伝えなかったという証拠なんですね。「什の教え」とは、6歳から9歳の男の子がみんな袴を履いて並んで、大きい声で唱えていたそうです。「1、年長者の言うことに背いてはなりません」と1人がそれを言いますと、みんなが「はい」と言うんです。「2、年長者にはお辞儀をしなければなりません」「はい」「3、嘘を言うてはなりません」「4、卑怯な振る舞いをしてはなりません」「5、弱い者をいじめてはなりません」「6、戸外で物を食べてはなりません」と続きます。今は戸外で食べまくりですね。それから、「7、戸外で婦人と言葉を交えてはなりません」この1から7までを子供達は毎日唱えるんです。そして、最後に「ならぬことはならぬのです」と言っています。例えば、今は「先生、何で人を殺しちゃいけないんですか。何ですか、何でいじめちゃ駄目なんですか」と言う。つまり、こういうことに対して「ならぬことはならぬのです」と言うんですね。

これについては、会津出身の早乙女貢さんが書かれていますけれども、先程申し上げた7つの「全ての訓戒に何故という疑問は許されない。それが人間の道だからである。この『ならぬことはならぬ』という教えを守ることが強固な信念となり、武士道を全うさせた。朝敵と蔑まれ、身を立てることすら難しい明治時代に、会津の柴五郎は陸軍大将にまで上り、山川健次郎は東京大学の総長として教育界の最高峰を極めた。それも全て日新館教育で培われたからであった」と。この「ならぬことはならぬ。理由はない。何故なら人の道だからだ」と、がつんと教えることが完璧に消えてしまったわけですね、今は。ところが、この「什の教え」と「ならぬものはならぬ。それが人の道だからである」ということによって、お国のためにというか、会津のために立派に死ぬということがいかに大事なことが教え、そして義は命より重いものであることを徹底して教えられた。これによってお腹を切ったということもあるし、ある意味では怖い思想だと言われれば、怖いことなんですけれども、そういう時代だったわけです。

そういう時代に生き残るといのはどれくらい辛いのか。峰治という主人公が自分に合った生き方とか、自分が生き方を選ぶことが出来るといいなあって、今の世の中と照らし合わせて、ふと考えるわけですね。そして、峰治がお母さんに言うわけです。「母上は峰治が選んだ生き方ならば、いつでも味方になって下さいますか」と。そうすると、お母さんがものすごい怖い顔で言うわけです。「人には幾通りもの生き方があると思うているのか。何といううつけ者。日新館であれだけ学んでも、何も分かってはおらぬ。今の世、人の生き方はたった1つ。立派に生きて、立派に死ぬこと。立派に死ぬことは、立派に生きた者だけが出来る。峰治のように、己が選んだ生き方なんぞと言うような軟弱な者には、生きる資格も、死ぬ資格もないわ。今は

どのような世の中か、よう考えよ」と。これはもちろん私が考えた台詞ですけども、多くの資料を読んだ時に、やはりそういう言葉が出てくる時代だろうと思いました。

少年達は8月22日に戦地に出発して、23日にはもうお腹を切っちゃうわけですけども、出陣する時にお母さんは自分の息子に必ずお金を持たせたんですね、金子（きんす）を。このお金は何かというと、何かを買って食べなさいというお金じゃないんです。子供の埋葬代ということなんです。お金が懐にあれば、死骸が転がっていた時に村の人がそのお金で埋葬してくれる。だから、「埋葬代を持ってお行き」ということなんです。数え年でいう16歳くらいの、今で言えば中学校3年生か高校1年生くらいの男の子達が、自分の埋葬代を親からもらって、「立派に死んでいきます」と言って行ったわけです。それが正しいとされた社会の中で、生きていなければならないことの辛さ、どういものだろうかということがありました。そして、この埋葬代をもらった男の子達は、ことごとく死んでいくんですね。でも、母親は実際に息子が立派に死んで、本心から嬉しいだろうかという問題も出てくる。ドラマではお母さんはその時につぶやくわけです。「自分の息子が若いうちに、一生懸命、己の信念の通りに生きて、そして若いうちにいい死に場所を見つけられたことは幸せだったかもしれない」という風に。つまり慰めながら生きていくお母さんというのがあったわけですね。

こういったことから、「生」をテーマにして生きていく白虎隊士を書こう、と思いました。これは「死」の象徴のような物語なのに、あえて「生」に光を当てるということになるわけです。結局、生きることや生き抜くことってというのがどんなに大事か、分かってもらえるといいなと思いました。ただ、それが露骨に生き抜くことが素晴らしいと書くと嘘くさくなるので、これだけ「死」が重要視されている時にどうやって生きていくか、ということを考えてんです。結局、そこをずっと突き詰めていって、峰治はどういうところに到達したかということ、「生きることで立派な死に値するだけ働く。それしかない」という地点です。それでそうやって生きた峰治は、立派な死に値するだけ働こうと思って働きます。

そして、自害した20人の中でたった1人だけ蘇生してしまった、飯沼貞吉という人がいます。この人は80何歳まで非常に立派な生き方をして生き抜いて、今でいう電信技術の仕事をしていたそうですが、危険なところには率先して行ったそうです。それで、「そういうところは危ないから行かなくていい」と言われますと、「いや、私は白虎隊で一度死んでいますから」ということで行った。そして、彼らの死ということに対する思いが明確に見えるのが、飯盛山に行くこと分かるんですけども、白虎隊士の墓が19並んでいますが、1人だけ生き残った貞吉は一生懸命生きて頑張ったにもかかわらず、貞吉自身がそこにみんなと一緒に墓を建てるのは恥ずかしかったんでしょうね。かなり離れた奥の方に、貞吉の墓だけ1つぽつんとあります。だいたい白虎隊士のお墓参りをする人は、生き残った貞吉のお墓参りもするんです。

白虎隊士は飯盛山の上で燃えているお城を見ながら、お城に一礼して死んでいくんですけども、何故こんなに早く死んだのかということ、彼らはとにかく城に戻って、お殿様の周りで自分達が命を張って戦おうということだけを生きがいにして、頼りにして、ものすごい苦難の道を歩きながら城を目指して戻っていったわけですね。先程、小泉先生がおっしゃったみたいに、ものすごい水の入った洞穴とかをずっと通りながら、ほとんど何も食べずに歩き詰めで、ずぶ濡れになって、それも怪我を負って、「城へ、城へ。城にさえ行けばみんながいる。殿もいる」という思いで行ったんですけども、飯盛山のとっぺんまで来た時に城が燃えているのが見えたんです。「あっ、城が燃えている。殿様も燃えただろう、みんな燃えただろう。母上も父上

も燃えただろう。もう私達は会津を守ることは出来ない」と言った。緊張の糸が切れて、自害したということもあったかもしれませんが、でも、実はお城は燃えていなかったんですね。その時に燃えていたのは町だったんです。ところが、もう疲れ切っていた少年達の目には城が燃えていたように見えたんです。それで全員が並んで、辞世の句を詠んで、1人が詩吟を歌って、そして「お先に」って1人が腹を切ると、友人が介錯した。そして、一番最後に死んだ子は「武士は死んでも桜色」と言って、先に死んでいった少年達に紅をさしてやった。こんな話が僅か140年前なんですよ。それが140年経ったら、「何で人殺しちゃ駄目なんすか」の時代になった。これは恐ろしいものがあるんですね。もちろん、その間には第二次世界大戦とか危ないこともあったんですけども、それにしても日本はひどいことになっているな、という気が私はすごくするんです。それで、そうやって武士道をまっとうして、みんな死んでいって、最後の子は介錯もなく死んでいったということになります。

そういった中で、峰治と残りの人達は生きなければなかった。ところが、あれだけ「立派に死になさい」と教えていたお母さん達がやっぱり生きて帰ってきた息子が、本当はどこかで嬉しいわけですよ。生きて帰ってきた以上、立派に働いてとにかく徹底的に人のため、会津のために頑張ってくれと言うわけです。その時、お母さんが息子に言うんです。「分かっておろうが、生きての方が人は大変なんだ。死んでしまえばそこで終わるから楽なんだけれども、お前、生きての方が大変なんだよ。だけれども、生きて以上は徹底して生きてくれ」ということを、ドラマの中でも言うんですけども、会津藩はその後でより大変な目に遭います。白虎隊の死後、さらに多くが死に、ついに松平容保が降伏します。降伏する時に長州藩に謝らなければいけないんです。その謝る時の様子があまりに屈辱的で、リアルに書かないでくれと言われてまして、リアルに書いていないんです。

色々な資料を調べましたところ、殿様は会津のお城を全部明け渡して、長州藩へ謝るということをします。その時に、籠城戦をやってはずたはずたになったお城を会津の女達は綺麗に掃除して渡したというんですが、渡す時の様子にこう書かれてるんですね。(板書しながら説明)ここまで真っ赤な絨毯が敷かれています。こっちはござ、筵(むしろ)なんです。そして絨毯の上に床几(しょうぎ)という椅子があって、長州藩の人間が足を投げ出してふんぞり返って座っているんです。会津の殿様はお付きの者を2人か3人連れて謝りに行くんですけども、全員が丸腰、一切刀などを付けていない。袴(かみしも)を付けて、筵の上を歩いて行くんです。長州藩はふんぞり返っているんです、赤い絨毯の上で。会津の殿様は、筵に正座して土下座をするわけです。そうすると相手は椅子にふんぞり返っていますから、ちょうど股間のあたりに目がいくような屈辱です。これは史実をみると、私は謝る必要はないと思うんですけども、でも戊辰戦争に負けて、これ以上犠牲者は出せないのので殿様はここで謝って、もう何でも言うことを聞きます、と決断したわけですね。

そうした時に、この時点で会津藩の人達というのは一度死んだに等しいわけです。命はあるんだけど、私は死んだと思った。そして、長州藩の人達が帰った後で赤い絨毯が残されました。長州藩が帰った後で、会津藩の民がだあっと走ってきて、この絨毯をちよっとずつ、小さく切っていったんです。この時、「俺達は一度死んだ。二度とこういう思いを忘れないで、力一杯生きよう」ということで、これを泣血氈(きゅうけつせん)と呼んでいます。この泣血氈の氈は毛氈の「氈」で、そして「泣く」「血」。だから、泣いて血を流したその悔しい思いを忘れないということで、小さく切った物をみんな持っていたんです。それが会津に行くと未

だに残っています。泣血氈が展示してあります。もう、そうとう色あせているんですが、泣血氈が残っている。その泣血氈を懐に持ちながら、そして徹底して生きようとなった。

しかし、ここからが地獄で、天子様に逆らった賊軍ということで、会津の人達は今の下北半島まで追いやられちゃうんです。斗南藩というのを作らされて、下北半島にまで追いやられて、そこでものすごい苦難の道を歩いた。食べる物はない、土地はやせている、そして雪は深い、という苦境の中で会津藩が最初にやったことは何かというと、日新館を作ったんです。斗南藩のその雪の中に、ものすごい小さなぼろぼろの廃屋みたいなところなんですけれども、そこに日新館を作ったんです。生きるためにはもっと現実的な何かをするのが普通でしように、学校を作ったというのはすごいことです。当然ながら、下北の地で子供達も生まれるでしょうし、何よりも教育を与えなければならない。きっと生きるということは教育だ、ということで、芋の蔓さえないような、食べる物は雪しかないような状態の中で日新館を作った。そして、その会津藩の一連の動きについて、「生」と「死」の動きについて司馬遼太郎は、「会津のことを考えると、日本民族も捨てたものではない」ということを言っているんです。ですから、会津藩のことをずっと考えていくと、確かに「死」が表に出てきているんですけれども、その「死」にも等しい状態で生きていくことを敢然と選んだ強さ、というのも出てきているわけです。

それで、私がこの5時間のドラマの最後のショットで、死んでいった人達、生き残った登場人物達の顔を次から次へと出して、そこにナレーションをかぶせました。「白虎隊士が死んでから約140年。会津の歴史は辛い歴史かもしれませんが、でも、思い出す顔はいつでもみんな笑っています」というナレーションです。それで、そのおかげで涙を絞って頂いて、視聴率も大変に良かったという突然下世話な話になるんです。そんなわけで、会津の話というのは大変面白いし、悲しいけれども、非常に前向きな話だったなと思います。それで今回、前半にテレビドラマの話をしてしまったので、「生」と「死」の話が少し短くなってしまったんですけれども、これにちなんで、また次の時に別のドラマと重ねながらお話し出来れば、と思っています。本当に長い時間ありがとうございました。

阿 部 どうもありがとうございました。せっかくの機会ですので、会場からご質問を受けたいと思いますが、どなたか、いらっしゃいますでしょうか。

本 田 ノースアジア大学准教授の本田と申します。今日のご講演、現代の若者が普段あまり考えないような「死」というものについてお話し頂き、白虎隊のあの時代は非常に「死」というものが身近にあって、それだけに生きるということがとても貴重で重みのあることなのだ、ということが思い起こされまして、大変為めになりました。

質問がお相撲の話で恐縮なんですが、最近新聞を賑わせております、相撲部屋の中で若い力士が亡くなったという痛ましい事件がありましたけれども、後から分かったことで稽古の名を借りたリンチのようなものが起きてしまっていて、しかもそれを部屋の親方も実は分かっていたという、こういう事件に関しまして、先生からコメントを頂けたらなと思うんですけれども、お願い致します。

内 館 時津風部屋の時太山という、17歳の少年が集団暴行にあって死んだということに対して、どういうお考えかということですが、格闘技においては手荒い稽古が、相撲に限らずある

と思います。ただ、時太山の死んだ時の写真をイラストで再現したものなんかを見ますと、どう考えても普通の通常の稽古ではああいうことにはならない。それは素人が見ても思います。ですから、おかしかったのは何故最初に心不全という診断書が出たのか。心不全と出れば誰もが病死だと思う。つまり、警察が遺体をろくにチェックもしなかつたろうということになるのは当然でしょう。そして、素人である親がおかしいと思って行政解剖をしたわけですね。素人である親が見てもおかしな遺体に対して何故そういうことが出たのか。これはやっぱりどう考えても納得がいきません。

それで、私が考えているのは、また「死」ということになるんですが、この事件は相撲界そのものも死んでしまうというほどの事件なんですね。相撲そのものは1350年の歴史があって、大相撲という興行になってからは僅かに250年くらいなんですけれども、相撲界が今まで相撲界であるがために、伝統文化を守り抜くがためにやってきた色々なことがあるわけです。ところが、時津風部屋事件によって、多くの人達がもっともっと近代的にして、外部の人をどんどん入れて、経営もプロを入れて、全て情報を開示せよというような話になってきたわけですね。それをやることはやぶさかではないのですが、全部外の意見を聞いてしまうと、相撲界は潰れる、死ぬと思っています。私はあえて週刊誌に大々的に書いたんですけれども、部外者になんと言われても「守るべきものは守れ」と書きました。それで、「鉄の女」なんて書かれてしまったんですけれども、やっぱり断固守るところは守ってもらいたい。外部の意見というのは時にものすごく無責任なんですね。思いつきを言って、その通りにして、ふっと振り返ってみたら、言った本人が消えていたということが結構あるんです。

ですから、例えば激しい稽古、例えば怪我の恐れがあろうと、やっぱりまっとうな激しい稽古は当然必要だと思います。ただし、それがリンチであってはいけない。そうすると、当然部屋制度が悪いということになってくるわけです。ママやパパにかわいがられて、個室を与えられた少年が大部屋の中で住めるわけがない。これは下手すると、外部の人の意見だと、通いにせよということになってくるんです。もし、通いにした場合、取り組みの方法が全部変わってくるんです。今のところは同じ釜の飯を食うというのをやっているのだから、同じ部屋同士は当たらないんです。けれども、外から、ママのところから力士が通ってくるということになりますと、濃密度というものが薄くなっていくから、今度は全員と当たるという方法を考えなければいけなくなるかもしれない。つまり部屋制度はいらなくなってくる。茶屋制度もいらなくなってくる。ということになってきますと、伝統という部分が危なくなってくるんです。

それで、極端なことを言うと、重量別制にせよとか、髷（まげ）はいらないとか、今更お尻を出して廻しはみっともないから、おしゃれなスパッツみたいなものを履いて、花道を自分のテーマソングと一緒にレスラーみたいに、K-1みたいに上がって来い、という意見だっただけとは限らないですね。現実には、大橋巨泉さんは重量別にせよと言っているわけです。そうすると、最重量の雅山と最軽量の海鵬が戦う。2人の体重差は最大の時に60kgあったんですから。体重別を取り入れれば2人は戦うことがなくなるわけですね。そういう風になってきて、協会が、人が1人死んじゃっているから言うことを聞かなければならなくなっていくって、「はい、はい、はい」とみんな言うことを聞いていった時に、これはもう相撲ではなくなるんです。そうするとK-1でもない、プロレスでもない、妙な不思議なレトロなスポーツというのが残る。その時にさんざん言った、有識者と呼ばれる人達はどうしているかということ、もう言い放しでどこかに消えてますよ。だから、全部他人の言うことを聞きゃいかんと、「絶対守るべ

きものは守れ、鉄の意志で守れ」と言ったものだから、私は「鉄の女」と言われてしまったんです。

私は今回の少年の死ということに関しては、おかしなところがいっぱいあると思います。診断書のこともそうです。もっとおかしいのは、親代わりになりますと言って連れて行っておきながら、親方も女将さんも付き添わずに葬儀業者が遺体をバスタオルにくるんで帰したって、こんなことは絶対にあってはいけないことです。このあたりを突かれて部屋制度を止めようと言われると、下手すると「はい、はい」となってしまう怖さがあるんですね。私はやっぱり何があっても絶対を守るものは守り、変えるべきところは変えるという、ぶれない鉄の意志があらゆることに必要じゃないかと思います。それじゃないと、色々な人の意見を聞いていたら、全部おかしくなってしまうから。

それで、私がいつも考えているのは正の伝統ですね。正の伝統と負の伝統があって、例えばかわいがりでいじめて殺してしまうというのは、負の伝統です。そういう前時代的な闇という部分は当然無くさなければいけないですけども、正の伝統というのは今回のような死亡事故があっても守らなければいけないという、そのところを私自身が一番感じています。それは私の仕事なんかでもそうですね。台本を読んだ時にプロデューサーの方から色々な意見を言われます。ここは、白虎隊士はこんな台詞言わないだろうとか、この時の白虎隊士は内館さんの脚本のようではなくて、こういう態度をとるべきじゃないのかとか、もう色々な意見を言われるんです。最初、デビューしたての頃は、全部聞いていたんです。それで、全部聞いて、その通りに直していたら訳が分からない台本になってしまって、岸恵子さんと菅原文太さんが出るドラマだったんですけども、お二人が「降りる」と言い出してしまったんですね。それは私のせいだったんです。それで元に戻したんですけども、その時に私が思ったことは、ここは譲れないというところは断固譲らない。もう、鉄と言われようが、鉛と言われようが譲らないという部分です。

だから、今回の死亡事故に関しても、負の遺産というのは当然なくさなければならぬけれども、コメンテーターとか有識者という人達は、自分が愛していなくてもいかに激しい意見を言うことがあります。それは、アイデンティティの見せ場ということもあるんでしょうね。「私って、すごい鋭いこと言うでしょう」とか、「俺って、鋭くメス入れてるよな」とか、外にアピールしたいというだけの人達の意見を聞いていたら、メチャクチャなことになります。だからそこは、これから北の湖さんが一番守らなければいけないことだろうと思います。表に出てきて、謝罪をするとかしらないとか以前に、そのところだと思います。

それと同じことが亀田家にも言えると思います。実は、私は亀田兄弟に非常に好意的なんですよ。パパにも好意的なんですけれど。亀田兄弟はああいうダーティなやり方で、世界戦で敗れたわけですね。それに関して謝罪すべきところについては、絶対に謝罪しなければならない。内藤選手もそれについてもう十分に分かったと言って、許しているんですね。1年後に大毅が復帰した時、3ヵ月後に興毅が復帰した時に、これがグリーンでさわやかな亀田兄弟になったら、誰が見たいか。そうではなくて、やっぱり守ってきた亀田スタイルというのは、法的な部分やモラルに触れない部分であれば、キャラクターとしてあっていいと思っているんです。それを「さわやかにせよ、さわやかにせよ」と国中が言うでしょう。だけどビッグマウスっていうのは、モハメド・アリなんてがががやっていたんですよ。アリと亀田を比べるのは、それはもちろんひどい話ですけども、亀田も守るべきものは守って、ちゃんとすごいヒールで出

てきた方がいいと思っているんです。

だから、そういう意味では私は世の中の無責任な人達ほど、「さわやかに行け、さわやかに行け」と言う気がしてならないんですけれども、聞く度に、うんざりしますね。もうさわやかは、さわやかな人に任せておいて、そういう人がいた方がヒールが浮きますからかえっていいんですけれども、やっぱりさわやかばかりじゃ駄目ですよ。つまらないですもん。だから、どんな男の人が好きですかって聞くと、若い女の子は「嘘つかない人」と答えるので、私は「嘘つかない男なんて3日も付き合ったら飽きるわ」と言いたくなる。ともかく、最も考えなければいけないのは、保守すべきものと変革すべきものをきっちり考えるということだと思えます。

阿 部 どうもありがとうございました。内館先生、貴重なご講演をありがとうございました。これで、本日の講演会を終わらせて頂きます。(拍手)

[講 演]

ノースアジア大学 総合研究センター主催 講演会

「2008年 日本の国はどうなるのか」

講 師	白鷗大学教授・立命館大学客員教授 ノースアジア大学総合研究センター客員教授	福 岡 政 行
挨 拶	学校法人ノースアジア大学理事長・学長 本学総合研究センター長	小 泉 健
司 会	ノースアジア大学総合研究センター副参与	橋 元 志 保
日 時	平成20年 1月 9日 午後 2時30分～	
会 場	カレッジプラザ講堂 (秋田市中通)	

橋 元 それでは、定刻となりましたので始めさせていただきます。今日は、ノースアジア大学総合研究センター主催の公開講座、シテカレッジにお越し下さいまして、誠にありがとうございます。白鷗大学教授、立命館大学客員教授、本学総合研究センター客員教授、福岡政行先生のご講演に先立ちまして、学校法人ノースアジア大学、小泉 健理事長がご挨拶申し上げます。どうぞご静聴下さいませ。

小 泉 ノースアジア大学の小泉でございます。新年明けましておめでとうございます。この総合研究センターは、講演会、あるいは様々な講座、シンポジウム等をやってきましたけれども、今年で4年目を迎えました。市民の皆様、そして学園関係者の皆様に支えられて今日まで来られたことを、本当に嬉しく思い、皆様に感謝申し上げたいと思っております。

今日は、待ちに待った今年初めての講演会です。しかも、講師は福岡政行先生でございます。今日は、福岡先生に大変貴重なお話をし頂けるわけでございますけれども、皆様に私の方から改めてご紹介するまでもありませんが、先生は日本を代表する、本当に著名な政治学者でいらっしゃると思います。様々な論文、著書等がありまして、皆様もお読みになったことがあるかと思えます。先生は、政治学者は現場を踏まえた議論をしなければならないと、常々おっしゃっております。今日のテーマも、現在我が国が抱えている様々な問題を踏まえ、鋭い切り口でお話を下さるのではないかと思っております。

それでは、これからご講演、そして勉強会があるということですが、先生、どうぞよろしくお願い致します。

福 岡 明けましておめでとうございます。この2008年は非常に大きな問題を抱えており、後ほど触れますが、来週の連休明けに、大きな出来事が2つ起こるかもしれません。1つは防衛省スキャンダルで、もし政界にことが及ぶとなれば、国会は15日臨時国会が終わります。そして18日に、通常国会の開会式が行われます。国会議員には不逮捕特権が認められているため、国会会期中に現職の国会議員を逮捕する場合、衆議院か参議院どちらかの議長に逮捕の許諾請求をしなければいけません。この時、東京地方検察庁はどういった理由で逮捕し、証拠はどの程度あるのかといった手の内を、ある程度見せなければいけないんです。

色々な問題が出てくると嫌ですので、昨年12月上旬、東京地方検察庁は全国の地方検察庁から、若い優秀な検事を50数名引き上げました。おそらく秋田地方検察庁からも、1人ぐらいは行ったかと思えます。その連中は明らかに守屋問題ではなくて、その先に起こるかもしれない問題に備えています。東京地方検察庁特捜部長は八木宏幸といって、大阪はだんじりで有名な岸和田の出身者です。前任者は、昨年6月30日の講義でお話しました大鶴基成です。ご案内の通り、六本木ヒルズを叩いています。若き学生の頃から悪を正すと言っていました。やり過ぎたかどうかは別にして、村上世彰という大学の後輩、それからホリエモンを叩いて、今は函館地方検察庁に飛ばされています。そして、去年の1月7日だったと思いますが、八木宏幸は記者会見で、政・官・業の癒着を正すという発言をしました。その時から、林野庁関係で亡くなった松岡農林水産大臣にターゲットを当てていたのが、結果はご案内の通りです。それはそれとして、その後おそらく防衛省スキャンダルがあのような段階で、この八木宏幸ですが、岸和田のだんじりというのは結構危ないお祭りだそうです。こういったことを含めて、少し緊張するというのが1点です。

もう一つは、1月15日、日本時間では16日未明に、シティコープの10月から12月までの決算が出ます。1兆8千億円のサブプライムローンでの焦げ付きがあって、アプダビかどこかの中東のアラブマネーから、8千億円の資金援助を受けています。金利はいくらだと思いませんか。11%だそうです。1年に880億円の金利が付けば、私だって8千円くらい出してみたいと思います。ちょっと情けないですね、8万円くらいは出しますが、そういうことです。それから、住宅株の約45%、この5～6年で上がったものが、下がり始めて1年程です。どうしてもどこかで並みにはなりませんから、それがもし、16日の朝にニュースになった時はどうでしょう。兜町は、今日も頑張って50円くらいまで値下げを縮めていますが、今日は一旦270円も下がり、1万4千円をきるような段階までいきました。それはそれとして、この時にもしかすると、もう一部の新聞に出るように、暴落もしくは大暴落で、一気に1万3千円代に落ちてしまうような話も含めて、この連休明けは成人式だそうですけれども、これでは可哀相なのでお祝いをしあけて下さい。そして、平成も今年で20年目を迎えるということでもあります。

それで結論ですが、総選挙はないかもしれません。秋田2区では金田勝年が出るようですが、総選挙の前に総辞職、福田はもうもたないのではないかと、そういうような話が年末年始にありまして、私は3割方解散すると思っています。

福田という人は、汗をかかず御輿に乗るタイプです。これは一番嫌われるタイプだと思います。それからもう一つ、プライドが洋服を着ているような人です。「安倍のようなみっともない辞め方だけはしたくない。どうせ辞めるんだったら、親父も出来なかつた解散をして辞める」というような性格の悪いタイプだと思います。後で理由は言いますが、今年は齒に衣を着せず、徹底的に批判をしようと思っています。

こういうようなことを含めて考えると、福田康夫の薬害肝炎問題の時の動きは、これは笹川堯という方がテレビ朝日のインタビューに答えて、その時に触れています。厚生労働省の事務次官幹部数人が総理官邸に来て、「肝炎の患者は全国で300万人を超えており、本当にそういった人達のバックアップをすれば、1人1,000万円という金額だけでも3兆円です。そんなお金はとてありませんから、とりあえず一律救済は出来ません」といった感じの話をして、後手後手に回れば内閣支持率が1週間で10数ポイントは下がるでしょう。そうではなくて、国家がこのフィブリノゲンという薬を認可・許可して、アメリカから「これは問題がある」と言われても使用し続けるというのだったら、国家はいくらかかろうとも救済するべきです。あの原告患者の皆さんは、1人当たりの金額は下げても良いとしていますし、亡くなった方や重症の方は4千万円ですから。原告以外の皆さんも、約1万数千人の人がフィブリノゲンを常用したということが問題です。この会社は、今は名前が違っていますが、元はミドリ十字です。厚生大臣菅直人の時の、薬害エイズと同じ輸入血液製剤に関する問題ですから、それを2度もやって隠蔽するような体質ではいけません。このミドリ十字の歴代の社長は誰かという、厚生労働省厚生省薬務局長です。私は、こういったことは、どんなことがあっても国家が責任を持つべきだと思います。金額的には嫌でしょうけれども、消費税を使って、皆で救済方法を考えるしかないと思います。

このことを含めて、福田さんが予算の通った段階で4月解散に打って出るには、内閣支持率が35%から40%近くなければ無理です。今はもう、大体その40%前後です。しかし、彼が今後3ヵ月上がる理由はまずなく、下がる一方です。おそらく30%をきり、20%近く、もしくは20%をきるようなケースになると、もうイエローカードからレッドカードになって、ポスト福田

は麻生太郎にするのかということが出てきます。また、古賀誠と谷垣禎一が、来週早々か週末かは分かりませんが、新中宏池会を作ります。その段階でやるのかは別にして、自民党もおそらく、人材がなくなってきたのかなという感じがします。このことも含めて、まず福田がもたない可能性があり、解散総選挙の前に総辞職というケースもあるかもしれないということで、今の論調とは違う形でやっていきたいと思っています。

それで、連休明けの大物政治家逮捕の問題と、補足を1点だけします。田中森一という人が書いた『反転』という本がありますが、既に30万部近く売れています。元々、ノースアジア大学の学長と同じで検事という仕事をしていましたが、その一方で、彼は闇の世界の弁護士になりました。それで、ヘリコプターに乗っている弁護士なんて言って、中国人の許永中容疑者と詐欺事件に関与し、被告の身で懲役何年を求刑されました。今は最高裁判所で争っていて、そのことをちょうど1年程前から文藝春秋で書き続けていたんです。その『反転』という本の中に、「誰かを捕まえようと思えば、いかなる理由であっても捕まえることが出来る。自分はその立場にいたし、今は逆に何もしていないのに捕まっている」という非常に説得力のある一説があります。

そのことを含めても、大鶴基成と八木宏幸の2人続いた東京地方検察庁特捜部長は、相当志の高い検事であったと言われていまして、彼らは本当に新橋のガード下で、若い検事と酒を酌み交わしながら、日本の国は六本木ヒルズで歪んでしまった等と話したのでしょうか。政・官・業の癒着によって、防衛関係の調達費が年間2兆数千億円ですから、下手な建設工事よりもはるかに額が多いということです。私は検察をあまりどうこう褒めたくはないのですが、こういった部分もあるようです。

それから、サブプライムローンについては、前期にかなり詳しくお話ししました。その後、ハゲタカと言われていいますが、ゴールドマン・サックスという世界最大のファンドが、原油は1バレル105ドルでもおかしくないというレポートを、2年半前に書いています。原油は最近、ついに100ドルになりました。既にドイツの経済研究所では、130ドルでもおかしくないと言っています。おそらくゴールドマン・サックスは、2年前にサブプライムローンから金を引いたと思います。ですから焦げ付きはなく、逆にプラスになったと言われていまして。この話は初めて知ったと思いますが、昨年12月の中旬に、財務省に務めている後輩と、アメリカのファンドから戻ってきた何人かで、食事会がありました。話を聞いてみたかったので出席しましたが、今年度4月に入社した国家公務員 種、つまり高給エリート公務員ですが、試験に受かったベスト10は、1人も財務省に来なかったそうです。どういうことかと言いますと、皆ファンドの方へ行ってしまったんです。国家公務員 種に受かった証明書をアメリカのファンドに持っていくと、「成績優秀ですね、東大の経済学部卒業ですか。うちの会社なんてどうですか、基本給50万円で、年間600万円です。ボーナスはそれぞれ200万円で、年間で400万円、それから1千万円の保障をします。こういうことで、あなたの31歳の先輩は、既に年収3千数百万円です」と、こういう話になるそうです。そうしたら、アメリカのファンドから戻ってきた友人が、「福岡先輩、もう1つあるんです。彼らは入社した途端に、アメリカンエクスプレスのゴールドカードかプラチナをもらえるんですよ。会社で自動的に落ちますので、飲み食い接待は全部それで支払いが出来るんです。それからもう1つ、タクシーチケットも自由に使えます」と言いました。まあ、それを見せられたら誰でもぐらぐらときて、日本のエリートもついに霞ヶ関に行かなくなったというのが結論です。

次に、環境サミットについてです。石油の値段が上がるのは当然のことなので、むやみに使わずに大切にしようということと、温暖化の問題があります。今日の朝刊にありましたが、日本は今世紀末になると気温が4.7度も上がって、秋田県はほとんど雪が降らなくなるそうです。環境は大事で、夏頃刊行になると思いますが、今、その本を書いています。

そのことを含めて、どうもこの環境サミットの後ろに、石油1バレルが100ドルになれば、先物の原油を買い占めている世界中のお金が全部そこへ行って、日本のガソリンは1ℓ120円台だったものが、150円台になるということがあります。ガソリン税の特別加算が、1ℓあたり24円20銭あるそうですが、これを3月末に、民主党は打ち切ろうとしています。自民党・公明党は、これは大事な税源なのでこのまま残すと言っていますが、もう暫定措置から50年ですからね。1兆数千億円の揮発油税は減税というか、少なくともなるかも知れませんが、こういう時にこれをやるのか。このことについては、どちらの政党が正しいのかはコメントしません。このサブプライムローンの先に、もう原油の高値を見越していたファンドが儲かっていて、去年の投資信託は赤字だったそうです。竹中平蔵に騙されないよう、皆さん気を付けて下さいね。「何で投資信託を買わないんですか」なんて言って、結局はこうです。そのことを含めて、この環境というキーワードと、原油1バレル100ドルと、私達が使う揮発油や灯油、それからガソリンが1ℓいくらだということ等、これら全てが繋がっているという風に、ニュースの背景の部分をぜひ見て頂きたいと思います。それが大事なのかなと思います。

それで、本論1点目ですが、政変は4月だというふうに考えています。桜政変という形になりますが、それは総選挙解散というよりも総辞職というケースが濃厚であり、内閣支持率が30%をきるかどうかポイントだと言いました。それで、福田康夫という人についてです。この人とともに食事をしているという政治家は、ほとんどいません。1人だけ挙げるならば、山崎拓という政治家が大学の同期でありまして、この2人は、東京の麻布高校と福岡県の修猷館高校という、秋田県で言う秋田高校のような高校から早稲田大学に入りました。森喜朗さんや竹下登さんといった、とにかく早稲田大学に入って何となく雄弁会で遊んできたというようなメンバーとは違います。そういうことで、この2人には学生時代からの付き合いがあります。大蔵官僚の息子である福田康夫から見れば、政治の最初にやらなければいけないことは、予算を成立させることなんです。国民の生活に直接関わる83兆数千億円の国家予算を決める。それだけやれば思い残すことはない。それで、おそらく民主党も道路財源、いわゆる特別加算24円20銭をなしにして、国民に喜んでもらうというようなことで、年金の問題もあることから4月解散となります。そして、ゴールデンウィーク明けかそれ以前かは分かりませんが、選挙をしようということになっているだろうと思います。しかし、自民党の中ではもうそれが分かっているようです。福田では選挙は出来ない、今やれば、おそらく壊滅的な打撃を受けるだろうということで、おそらく予算の編成が衆議院を通った辺りの段階で、福田下ろしというものが出てくるのではないかと思います。それで、慌てて森喜朗元総理が、「サミットをやるのに、解散や選挙なんて言っている場合ではないだろう。とにかくサミットだ」と先日どこかで発言をしました。これは、裏を返せばサミット花道論です。安倍晋三のような辞め方はしない、男らしく辞めたいというのが、福田康夫の特色であろうという風に思います。

2ヶ月程入院をしている間に、色々な本を読み、色々なことを考えた中で、何故安倍晋三さんがあんな形で辞めて、その後福田さんがこうなってしまったのかということがあります。皆さんも、何かやってくれるかなと一時的に思ったかもしれませんが、福田康夫は同じ政治経済

学部の政治学科で、私の10年先輩になりますが、昔からよく分かっていました。この人ぐらい付き合いのない人もいませんし、政治なんか全然やる気がないことも分かっていたんです。

一方で、小沢一郎というブツツン政治家がいます。彼なんかに日本の政治を任せたいとは、私は思いません。安倍晋三、福田康夫、小沢一郎の3人の政治家についてですが、この3人の違いを少し考えて下さい。それは、皆さんが政治家を選ぶ時にも必ず出てきます。

安倍晋三、彼は船場吉兆のバカ息子と経歴が似ています。安倍晋三は、東京の三菱財閥が創った武蔵野吉祥寺にある名門、成蹊学園の幼稚園から大学までを出ています。船場吉兆の息子は、甲南大学の幼稚園から大学です。関西で甲南大学と言えば、神戸にある名門です。「関関同立」という有名な大学がありますが、甲南大学は別格だと思います。

山口県下関市で、市民ボランティア大学の学長をやりましたが、1万円ずつ皆さんから集めて、地域振興のために色々な方々を呼んで、年間10回程、講演会を開催しました。私自身、年何回も行きました。その時に駅前のシャッター街を見て、そして某ホテルの隣のデパートに入って、昼食を職員と一緒に食べようと思ったら、お客さんよりも店員のほうが多かったということがありました。本当に下関は苦しんでいます。また、それと同じような秋田駅前のデパートも見ました。しかしそのことを、山口県を選挙区にしているこの若い政治家は、生活実感がないので分からないんです。それが7月、前回石川好さんが同じ話をして、彼も街頭に立ったそうですが、あのKYというか、空気の読めない安倍晋三だったんです。やはり生活感覚が下関にない、中山間地域や商店街のシャッター街の実感がないということです。大学生時代、黄色のスポーツカーで成蹊大学に通っていた「首相の話」です。

次に、福田康夫についてです。昨年12月に、群馬県の政治家の会に呼ばれて講演に行きました。まだ体調が十分ではなかったので、それを理由に懇親会は逃げようと思っていたんですが、どうしてもと言うので、仕方なく1時間くらい出席しました。その時に、福田康夫とかなり親しいご近所の方がいたんです。その方が言うには、「やっちゃんは泣き虫やっちゃんと言われていてね、いつも泣いていた。彼は東京で生まれ育って、群馬ではほとんど生活していないんだ」ということでした。なるほど、小学校は東京学芸大学付属世田谷小学校という名門です。そして麻布中学・高校を出ています。もうこの辺から、群馬にいる理由が見当たらないんです。戦争中も、お父さんは大蔵官僚で後に政治家ですから、ずっと東京にいたということになります。それから奥さんは大変立派で、面倒見の良い方です。実質上、選挙になって弟が病気になる、一緒になって政治家になったのが53歳の時です。それから約19年くらいで内閣総理大臣になりました。この人も、やはり生活感覚がありません。

そして、問題の小沢一郎です。小沢一郎の略歴を調べると、彼は文京区の東京大学の脇に住んでいましたが、昭和20年3月10日の東京大空襲で焼け出され、すぐに岩手県の水沢に移ります。その後、中学校2年生で東京に戻るまでの約10年間、彼は岩手県の水沢に住んでいました。何kmかあるそうですが、歩いて行ける範囲には宮沢賢治の家があり、資料館に遠足にも行っているそうです。それから、こちらは歩いては行けませんが、小学校か中学校の遠足で、彼は石川啄木を知りました。岩手県の郷土の人です。「はたらけどはたらけど猶わが生活楽にならざりぢつと手を見る」という歌がありますが、この一番苦しい昭和20年代の10年間、彼は昭和17年生まれですから、ある程度色々なことが理解出来る、小学校高学年から中学校位だったと思います。それが、生活第一という民主党のスローガンになるのでしょうか。このスローガンは戦術かもしれませんが、小沢一郎と話をする時に、気持ちの中にそういうものが残っている感

じがしました。それが、安倍晋三、福田康夫との決定的な違いです。

私は、政治家はもう少し国民の目線を持たないと、本当にダメになってしまうと思います。2日程前に、東京駅前の書店で本を見てきました。ドイツのナチズムという、大政翼賛会のような大連立がどうなったのか、昔少し勉強しましたがよく分からないので、友達が書いた本を買いに行っただけです。そうしたら、70代くらいの男性が側に来て、福岡政行先生でしようと言うんです。そして、「もっと国民の側に立った政治をしてもらいたいです。何で長妻さんが年金特命大臣にならないんですか」と言いました。それは政党が違うからそうなんですよ、なんて私も答えます。そういう国民の目線が、今の日本の政治にはないと感じます。今は色々と周りを見ても、辛口で言う人がいないので、一度切腹をした身ですから怖いものはほとんどないということで、そういった方向でいきたいと思っています。

それで、4月の政変についてですが、全ては世論です。福田さんがもうダメだと言って、自民党が気付いて辞めさせるか。もしその時は、次は麻生太郎のような気がします。ただ、流れは麻生太郎や中川昭一といった、安倍晋三のタカ派ではないんです。古賀誠が谷垣禎一を担ぐという問題もあります。しかしどちらも、「帯に短したすきに短し」という言葉はありませんが、どちらも足りないと思う部分があって、結論は、自由民主党は民主党共々人材がいないということです。

こんなに日本という国が危機的状況の時に、日本はファンダメンタルスは悪くないのに、来週の頭に株が下がってってしまうのかということがあります。これについては、日本経済団体連合会の、新春の賀詞交換会の席上で、トヨタの張富士夫会長が言った通り、「ファンダメンタルスが株価に反映しないんですよ」ということなんです。それは世界のお金ですし、日本の株売買は57%が外資ですから。この人達が、こうなったら BRICs と VISTA に全部流してブラジルの株を買おうなんて言えば、みんな飛んでいってしまうのが現状だと思います。まあ、この4月政変がどうなるかは、内閣支持率で私達が判断出来るという風にお考え頂いて結構です。

2点目ですが、昨年7月29日からの日本の政治史を、簡単に時系列でお話します。7月28日は選挙の前日だったので、私はある程度丸く語りながら、自由民主党が負けそうだと、もしかすると政変になるかもしれない、1人区は秋田県を除いて(?) 大変に厳しいというような話をしていました。そして、とんでもないような結果になって、1人区29のうち、自民党が勝てるのは5つか6つだという話を当時して、結果は6勝23敗の惨敗でした。私は29日、夏の選挙と次の総選挙は、テレビ朝日でも選挙速報や解説をしませんでした。実を言うと、個人的に教え子達の応援に回るということで、自民党、民主党双方の、特に郵政民営化の反対をした方々には協力をするというような立場で、中立を守るために家にいました。すると午後4時過ぎ、教え子の記者から私の携帯電話に、「今、麻生が総理公邸に入りました」「赤坂プリンスホテルには森喜朗と青木幹雄、それから中川秀直幹事長が入りました」という連絡が複数入りました。教え子は優しいので、私に情報をくれるんです。森喜朗・中川秀直・青木幹雄の3人は、5時過ぎから出口調査の結果を持っています。テレビ朝日でも、大体午前中、11時までの出口調査がコンピューターにかかって、1時頃結果が出ます。当時、久米宏さんや田原総一朗さん、政治部の記者7~8人、そして私の10数人が会議室に入って、その場でコンピューターから出てきたデータを見ました。その中に、判定不能というのがいくつかあります。「福岡先生、どう判断されますか」と聞かれるので、ここがどうなって、現場の声がこうだからこっちにしよう

というような感じで判断します。そうすると自由民主党38プラス・マイナス2、36プラス・マイナス3といった結果が出てきます。この時は携帯電話を取られますが、会議が終わった3時過ぎ、開放される時に携帯電話を返してくれます。新聞記者なんていうのは、その場ですぐに安倍晋三の秘書や森喜朗に、朝日新聞朝日テレビ系列はこういう数字で、共同やNHK、読売新聞はこうなっているということを伝えます。そして4時前には、各社のデータが一覧表になって出てくるんです。

この時、麻生太郎が安部晋三に呼ばれたそうです。先日彼に会ったら、「先生、俺から行ったんじゃないからね、それだけは言うておいてくれ。総理から電話があって、来てくれないか、選挙の結果が厳しいのでと言われたんだ」ということでした。同じ頃、森喜朗は中川秀直に、「どうだ、総理はどう考えているのか、ちょっと聞いてみる」という話をしており、中川秀直は総理公邸に電話をします。出てきたのは秘書官で、「ただ今、麻生外務大臣がおりますので、お見えになれるようでしたら、6時過ぎにお願い致します」と言いました。こんなバカなことを言う秘書は、ちょっといいですね。「来客中です」なんて言って誤魔化すべきところを、秘書が自ら言うようではいけません。麻生太郎外務大臣がいるので6時に来てくれないと言われてたら、やはりムツとします。中川秀直が、「電話したところ、今は麻生が入っているそうです」と森喜朗に伝えると、「まず俺達に話を聞くべきじゃないのか、何で麻生なんだ」となります。おそらくこの瞬間に、麻生の芽はなくなったように思います。その上、青木幹雄さんと野中広務さんは、麻生さんのキザったらしいところが嫌いですから。

そうやって、6時過ぎに麻生太郎がジャンパーを着て、ライトバンに乗って出入りしているにも関わらず、周囲には全部ばれてしまいます。そして、次に中川秀直が総理公邸に入ります。安倍晋三は、選挙結果は厳しいですねと問われた瞬間に立ち上がり、「いかなる結果でも続投します。幹事長、よろしく申し上げます」と言ったそうです。こうなると、もう子供のおつかいみたいなもので、何も言えなくなってしまいます。5分程して、「そうですか、各社厳しいですが続投ですか」と中川秀直が言います。それはいくら後輩であっても、総理が言うのでは仕方ありません。赤坂プリンスホテルまでは500m、車でもものの3分程ですが、森さんと青木さんはもう食事を始めていました。続投の話が伝わると、「そうか、安倍と麻生はそう判断したのか。それはしょうがないな、お手並み拝見だ」ということになりましたが、刻々と開票が進むにつれて、自由民主党惨敗が明らかになります。宇野宗佑は35議席で辞め、橋本龍太郎は44議席で辞めました。安倍晋三の結果は37議席で、誰が見ても辞めなければいけません、この頃から体調は悪かったようです。

そんな中、8月の中旬、お盆の頃に東南アジア旅行に行き、インドを訪れました。そこで彼は、晩餐会でカレーを勧められて食べました。お腹をこわしているところにインドカレーなんか食べたら、健康でかなり元気な体育会系の人以外は、まず体調を崩します。結局、帰国後は慶応義塾大学病院の医者が総理公邸に入って、点滴をしていたといいます。そして、満を持して8月の末、インド洋の給油の話があるにも関わらず、国会を開かずに組閣をしたら、遠藤農林水産大臣が不適切な献金により、8日間でクビになってしまいました。これをクビにしたのは、麻生太郎幹事長と与謝野馨官房長官でした。また、安倍晋三は体調が悪いということで、副大臣、政務官の人事は全て麻生太郎がやりました。この様子を見て、「これでは安倍内閣ではなくて麻生内閣だ。安倍晋三は、どこかで麻生太郎に禅譲する気だな」と、森喜朗や青木幹雄をはじめとする皆が思いました。7月29日の件があるので、もうそれがずっと見えていたん

です。そして9月10日に、所信表明演説がありました。個人的なことですが、私は9月11日に手術をし、一日中集中治療室にいて、ほとんど麻酔がかかっていたんです。そして、12日の午前11時過ぎに自分の部屋に戻り、ぼんやりとテレビを見ていたら、安倍晋三辞任のニュースが流れました。記憶にはありませんが、それを見た瞬間、私は側にいた息子に、「遅い、辞めるんだったら選挙の後だ」というようなコメントをしたらしいです。

それから9月12日の朝9時33分、アメリカのシーファー駐日大使が安倍晋三と会っています。秋田魁新聞13日の朝刊に載っている総理の1日を見て頂きたいのですが、30分くらい会っています。これはインド洋の給油艦についての話なんですけど、裏は違うんです。6者協議が遅れていますが、アメリカと中国は去年の暮れに、北朝鮮からテロ支援国家という名称を外し、重油と経済支援、そして食料援助を開始しました。安倍晋三は、「いつまでも拉致問題にこだわんな、乗り遅れるから共同歩調をとれ」と言われたんです。安倍晋三の唯一の成功体験は、飯島勲の『官邸秘話』の中に出てくるように、2001年10月の拉致被害者5人を日本に留めるかどうかという、福田康夫は官房長官、安倍晋三は副官房長官だった時の激しい怒鳴り合いなんです。それで安倍晋三は、日本政府は責任を持って皆さんのお子さんを日本に連れ戻すから、このまま日本にいてくれということで、蓮池さん達は彼の言葉を信じ、子供を残して日本に留まったんです。これが唯一の成功体験です。体調が悪く選挙にも負け、後で触れる大連立の話は既に永田町に広まり、さらに福田をという話もありました。こうしたトリプルショックの後、最後の決め手がアメリカからの最後通告でした。もう拉致問題は止めておけということです。これで、プツンと切れたのが9月12日です。奥さんが週刊文春で、「私も知らずに友達から電話があって、『ご主人辞めるのね』という電話で、何をしていたかその後分からなくなった」という余計なコメントをしています。そして、それが結果的には9月12日の10時過ぎ、国会対策委員長の大島理森を呼んで辞めます。2時間後には野党の代表質問で、所信表明の件で鳩山由紀夫が待っていました。所信表明を衆議院でやった後、30分間隔を置いて参議院でも同じものをやるんです。しかし、衆議院は自党が圧倒的であるのに比べ、参議院は逆に野党のほうが多いんです。特に民主党には、アナウンサー出身が何人もいます。彼らは声がよく通り、野次を飛ばします。それによって安倍晋三は2行を読み飛ばしてしまっていますが、その辺りから疲れが目立っていたということで、これが9月12日の真相です。

私は9月12日の午後8時過ぎ、麻生太郎に電話を入れたんですが、繋がりませんでした。その後、10時前に電話が鳴ったので見てみると、それは麻生太郎からでした。「先生まだ寝てませんか。病気のほうは大丈夫ですか」と、こんな感じでした。私は麻酔が効いていたのでぼーっとしていましたが、「麻生さん、談合はダメだよ。自民党は開かれた党なんだから、総裁選だね」という感じのことを言いました。彼は、「分かっていますよ。どういう結果であれ、私は戦います」と言いました。詰めを甘くしないように、というようなことを私が言ったら、結局翌13日、一日で状況が変わりました。

私の先輩である森喜朗さんは、前立腺ガンを患って5年が経過しているんです。私の病気のことを知って、昨年11月中旬に、何人かの政治評論家も交えて快気祝いの食事会を開いてくれました。その時に森さんが話されたことなんですけど、9月12日、フランスのパリで開催されたラグビーのワールドカップ、日本対フィジー戦を見に行っただけなんです。日本から色々な電話があったのですが、その中に2本の重要な電話がありました。1本は参議院の青木幹雄からで、「森さん戻って来い、あなたの意中の人物（恩師福田赳夫の息子）が総理総裁になれるぞ」と

いうものでした。けれども、そこはラグビー大好き人間ですから。それに、向こうはもう夜です。ところが、もう1本の電話がありました。私は上座のほうに、森さんと隣り合いで座るんです。それで、前の方にベテランの政治評論家が座ります。前の席に3人並んだ真ん中には、TV タックルに出てくる方が座っていました。その方に、ミスターXから電話が入りました。「根回しをきちんとやるから戻って来い。大連立が出来るかも知れない」という電話だったのですが、間違いなくミスターXは、日本のプロ野球をダメにした渡辺恒雄であろうと思われます。にやりと笑って、そこにいるメンバー全員が気付きました。

別れ際、私は車まで森喜朗をお送りしました。「福岡、体に気を付ける。しばらくは無理をするな」ということだったので、「分かりました」と答えました。それから、福田康夫が総理総裁になることについて森さんは、「俺は肩の荷が下りた。自分も総理をやり、恩師の息子さんも総理総裁になる。政治家として肩の荷が下りた、そう思っているんだ」と言われたので、「先輩、福田は長くないですよ。まだまだこれからですから、そんなこと言わないで下さい」なんて言ったら、バカ野郎と言われてしまいました。彼も薄々は気付いていたかもしれません。森さんは9月13日に、慌ててJALの一番機でフランスから日本へ戻り、着いたのが午前11時半でした。それから夜の9時、赤坂プリンスホテルを出る時には福田で決まっていた。赤坂プリンスホテルでは、町村信孝や中川秀直といった関係者を呼びました。「麻生クーデターの怪文書が出ています。流したのは中川秀直と言われていますが、分かりません」ということで、麻生が全てこれを仕組み、安倍を倒して自分がやろうとしたことで、みんながムツとしているということです。

夕方の5時半から6時頃、渡辺恒雄の読売時代の盟友である日本テレビの氏家齊一郎会長が、日本テレビ32階の一室に入りました。そこには、森喜朗、青木幹雄、古賀誠、山崎拓、もちろん渡辺恒雄も入りました。そこで1時間半程、話し合いになりました。「どうなってるんだ、額賀が手を上げると言っているじゃないか」と誰かが言うと、青木幹雄は「10年早いと抑えました」と答えます。それから、「古賀さん、谷垣も手を上げるのか」という質問に対して、古賀誠は「いやいや、谷垣は次で結構ですから。中宏池会を創るまで彼にはやらせません。ただ、党三役で優遇をして下さい」ということでした。「二階や高村のところは10何人で、伊吹文明は何かやれば大体付いてくるだろうから、9大派閥のうち8つはその場でOK、福田でいこう。それで、大連立を含めて自民党の建て直した」これを書いたのは渡辺恒雄さんだと思います。

11月の下旬、ある政治家のパーティーがありました。私も呼ばれていましたが、麻生太郎が遅れてやって来ました。彼は挨拶をして会場を出ようとしたのですが、日本テレビの氏家齊一郎がいたので、彼は寄って行って、「色々やってくれましたね」と突っ張ります。一方、氏家齊一郎はもう79歳ですから、「いやいや、そんなことはない。麻生君の誤解だよ」と、こういうふうに言ったんです。すると、麻生太郎はにやりと笑って、「5階ですか、32階でしょう」と言ったんです。この間、彼と忘年会をやった時に、「ああいうことは、分かっている先輩にはやっちゃダメだよ。ギャグ以上のものになったらギャグにはならないよ」という風に言ったら、麻生は「ちょっと腹に色々あったから」なんていうことを言っていました。おそらく、これが福田政権誕生の背景だろうと思います。

小沢一郎が辞任の記者会見の2ヵ月程前に、ある人物と会っています。9月12日の安倍辞任の前ですから、8月の下旬、もしくは9月の中旬のことです。8月16日の読売新聞社説には、渡辺さんの署名入りで「民主党も政権責任を分担せよ」ということが書いてありますが、お盆

の前に軽井沢のゴルフ場で、平沼赳夫と綿貫民輔がゴルフをしていた時、メンバーではないのに渡辺さんが別のコースからやって来て、「大連立だ。やろうよ綿貫さん、平沼さん。ねじれ国会は大変だ、もう何も出来ないぞ」という話をしていたことが報道されています。

そしてお盆明けの8月21日に、渡辺恒雄さんが主催しているホテルオークラ山里の会に、鳩山由紀夫が呼ばれました。ブログにも書いていますが、彼は渡辺さんに「どうだ、民主党で大連立をやらないか」と言われました。鳩山由紀夫は、「それは出来ませんよ、それじゃあ大政翼賛会じゃないですか。私の祖父である鳩山一郎は、あの翼賛選挙の時、非推薦で戦った1人ですよ。あまり知られていませんが、安藤正純、尾崎行雄、斎藤隆夫らが肅軍演説をした。当選した10数人のうちの1人が鳩山一郎ですから、そんなことは出来ません。日本をあんな戦争に持ち込んだ新体制、大政翼賛会だからです」と断ります。安倍晋三が、病気等の色々な理由で辞め、福田が作った本格的な連立、連立の話が出てきました。小沢さんは、福田の話でOKなのですが、福田康夫を担保とするために森喜朗に会いたいのでしょう。森喜朗と、おそらく10月の下旬に会っています。それで、最終的に話をしています。

もう1点、小沢一郎が森喜朗と会ったのは10月25日だと言われていますが、この日の夜、与謝野馨官房長官お疲れ会を、中曽根康弘さん、氏家齊一郎さん、渡辺恒雄さんの4人でやったそうです。与謝野馨は元々中曽根康弘の秘書ですから、非常に優秀な人です。また、喉頭ガンで少し声がかすれていますが、本当にお元気な方です。この時に中曽根康弘が、「渡辺さん、大連立の話はどうなっているんだ？」という風に聞きます。すると渡辺恒雄は、「近々面白いことが起こりますよ」と答えます。これを聞いて慌てた中曽根さんは、与謝野馨に小沢と囲碁を打つように言いました。ところが、囲碁をやられる方は分かるかと思いますが、与謝野馨と小沢一郎の力量では、横綱と序三段くらいの違いがあるんです。それでも10何目で小沢が勝ったなんて言っていますが、適当に石を置いただけでしょう。テレビには、対局の最初と最後しか入りませんから。そして2時間、中曽根康弘はこの時に、「大連立なんていうのは、総選挙の後だ」と渡辺恒雄にも言っています。ドイツの場合がそうで、総選挙でわずか4議席しか変わらず、結局メルケル首相になったというあのケースです。こうして、小沢の頭の中に引っかかりました。

そして11月2日、小沢一郎は国会で福田康夫と2度目の会談の後、「決めてきます」と言い残して、民主党の党本部に入ります。しかもその2日前に、小沢一郎は役員を集めておいてくれと言っています。勘の良い政治家は、岡田克也も渡辺さんに呼ばれて大連立はどうだと言われているので、役員を呼ぶということは小沢が何かやる気だと思い、皆身構えていたんです。そして大連立の話だった場合は、反対しようと思っていたんです。小沢一郎は8時過ぎに戻ってきて、「福田総理と大連立を組むということで、集団的自衛権を含めての政策協定を行い、大臣ポストは自由民主党が10、民主党が6、公明党が1で話をつけてきた」というような趣旨の話をしました。鳩山幹事長が「皆さんのご意見は」と言うと、立て続けに発言した6人は全員反対でした。3ヵ月前に、「自公の政権では国民の側に立っていない」と言って国民の支持を得た民主党が、舌の根も乾かないうちに自公と一緒に組むなんて、自殺行為だということでした。皆がそうだといいました。小沢一郎も勘は良いので、「そうか、みんな俺の言うことは聞かないのか。今までとは違う。そう言えば、俺は自由党から民主党に入ったんだ」ということで、すぐに自分の部屋に戻って電話をして、「ダメです」とあっさり引いてしまいました。

翌11月3日には、腹に据えかねて辞表を書きました。元国会議員の秘書が早朝から東名高速

を飛ばして、名古屋駅前のマリオットアソシアというホテルの、鳩山由紀夫が滞在している部屋のドアを叩きました。彼は7時の特急ひだ号に乗るために起きていて、「小沢一郎代表の辞表を預かってきました」と言うと、「もらえない。何だこれは」と言って受け取りませんでした。鳩山由紀夫は、岡田克也と一緒に特急に乗ろうとしていましたが、「それは受けちゃダメだよ、必ずこれはやめさせなければいけない。俺が行くから、鳩山さんは戻って菅さんと相談して慰留をしてくれ」ということだったので、東京に戻りました。

11月4日の日曜日、昼頃から私の携帯には、小沢一郎が辞めるというメールが入ってきました。そして4時から記者会見でしたが、30分程遅れて4時半に始まりました。これはどういうことかと言いますと、小沢は4時に入りましたが、菅と鳩山に30分間、執行部に一任するという1行を書き加えてもらいたいと言われ、書き加えていたんです。その時に、ダメかと思いつつも、小沢一郎は何をやったかと言いますと、参議院議員を17人連れて、小沢新党を30~40人で創るといいます。模索しましたが、7月の選挙でいくら小沢さんに義理がある議員でも無理です。実際に合流しようと思った人間は数名で、衆議院議員が2人、参議院議員が3~4人くらいだったそうです。それで、小沢一郎はこれにショックを受け、断念します。彼は、新政党として細川政権を創り、それが国民福祉税で潰れた歴史を覚えていると思います。自由党で自自連立に入り、自自公になった後、小淵恵三と4月1日に連立離脱で争いました。小淵さんはその後の記者会見で、脳梗塞のせいもあったのか、質問に答えることが出来なかったんです。その日の9時過ぎ、テレビを見ている最中に倒れ、奥さんも気付くのが1時間ほど遅れました。その結果、総理公邸に救急車を呼べず、1時過ぎに順天堂大学医学部附属病院に運び込まれ、ご存知の通り1ヵ月後に亡くなります。

3度目の小沢大連立騒動で、彼は初めて刀を一旦下ろします。辞めるのを止めた、みっともないブツツン記者会見です。そしてその時に、与謝野馨の「大連立は総選挙の後だ」という言葉を思い出します。おそらく、11月3日から6日のどこかで渡辺恒雄とも話をしていた、「リハーサルは終わった。小沢さん代表のままでいてくれ、本番は次の総選挙だ。予算が通った段階で選挙をやろうじゃないか。結果次第だ」ということだったと思います。この時に渡辺恒雄は、民主党の方が上だったら「民主自民」の大連立で良いというような、美味しい言葉を言ったのでしょうか。「自民主民」の大連立ではないんです。ですから、11月中旬に小沢一郎は、最善は民主党単独過半数、2番目に良いのは今の参議院のような野党全体で過半数。そして3番目は、比較第一党で構わないということで、その時に、大臣ポストの代わりに自民党から30人かっぱらってくるんです。それで、今のところはテロ新法で問責決議を出さず、3月に予算が通れば福田康夫もOKなんですから、解散総選挙をします。けれども、私が気付くくらいですから、自民党は皆気付いているんです。こうなったら首を切ってしまう、予算が通ったら辞めさせるんです。そして、黙って後2年間、任期満了まで305議席あると思って下さい。公明党を含めれば3分の2以上の議席があるんですから、憲法59条が適用されるということです。おそらく、そういうシナリオだと思います。それをTVタックルで言おうとしても、きっと邪魔されて言えないと思いますから、この場で触れておきました。それが大連立騒動です。

3点目は格差問題についてですが、これは必ず6月ぐらいに本を出します。去年は年内に出ると言ってしまいましたが、病気で遅れてしまったので、6月に講談社から出そうと思います。それと同時に、『ねじれ国会と大連立』という本を昨日書き上げましたが、小学館からそれも

出ると思いますので、格差問題については少しだけ触れます。

ワーキングプアーの特集を、NHK が年末頃にやりました。釧路市の自立支援課の女性が、100人近いワーキングプアーの女性達をバックアップしているという話です。働けど働けど、頑張りきれずに引きこもりになった人達がありました。そういった人達に、最初は「ボランティアで良いから、一緒に公園の掃除に行かない？」と声をかけるんです。段々と出てきてくれるようになりますが、彼女達は生活保護をもらっている身です。そこで、「でも、そういうわけにもいかないからアルバイトしない？月・水・金の週3日、朝の10時から2時までの4時間で良いから」と声をかけます。時給は700円から800円くらいですから、月に2～4万円になります。生活保護は、減額はしますが打ち切りはしません。そのうちに、「じゃあ、非正規社員、パートとして働いてみない？週5日間働いて、月12万円くらいになるけれども」と提案します。そういう段階を経て、成功して12万円稼げるようになった時点で生活保護を打ち切り、住宅補助といった、色々な補助の部分だけは出すんです。そうやって、100何十人の人が頑張ってきてきたというのが、NHK の「特集ワーキングプアー」に新しいものとして出ていました。すごいなと思って、現在は学生達と釧路に行こうという話をしています。

一方で北九州市のように、52歳の男性の生活保護を打ち切り、「あなたは働けるんだから頑張てね」ということで放置した結果、結局「おむすびが食べたい」と言って死んでしまったケースもあります。順番が違おうでしょう。仕事が見つかった段階で、生活保護を打ち切ればいいんです。釧路はこれと全く逆のケースで、状況に応じて、その人の社会復帰能力を見ながら進めています。これが行政というものだと思います。秋田県庁はやっているかどうか分かりませんが、私は今、それを全国に広めようと学生達に言っています。それから、坂出のお婆さんと孫2人の殺人事件の原因となった、身内での金銭トラブルという問題も含め、本当に生活が切迫し始めました。これだけの値上げラッシュが続くと、たまったものではありません。格差はもっと深刻になり、夏の参院選の頃よりもひどくなっています。ですから、ああいう何ともいたたまれない事件が立て続けに起きているということで、格差問題は、より真剣に検討すべき課題だと思います。

4点目は、総選挙についてです。仮に総選挙になった場合の予想は、年末に週刊朝日でやりました。現在、週刊ポストからやってくれと言われてはいるんですが、選挙はないと思っているので、あまりやりたいとは思いません。結論ですが、自民党、民主党共に勝てないだろうと思っています。衆議院議員の定数480人のうち、おそらく自民党210±15、民主党も210±20で、過半数に達しないと思います。秋田でも2区が余ったり、3区はどうなるかは少し分かりませんが、とにかく色々なことがありました。

公明党は、全国的に組織力が弱まりました。1月27日の大阪の府知事戦も、少し見ておいて下さい。それで、私は昨日大阪に行って、テレビ局の関係者と3人の知事候補の討論を見ました。やはり橋下徹弁護士は、言葉が浮いています。それから、大阪大学の熊谷貞俊教授のお兄さんが大阪大学総長だったものですから、関西の財界人は経済界の関係上、どうも半分ぐらいはこちらに流れるような発言をしていました。もしかすると市長選に続いて、民主党系の候補が勝つ可能性が出てくるとなると、自民党はとても選挙は出来ない上に、自民党と公明党も、党本部は推薦しないでしょう。そして、大阪の自民党府連だけが応援するというケースになると、橋下徹弁護士になるかも分かりません。こういうようなことで、公明党も弱く、共産党、社会民主党も伸びる理由がありません。1つだけ挙げるとすれば、平沼赳夫についてです。

この不器用な人間がどう行動するかがポイントですので、それも今の段階では触れませんが、少し見ておいて下さい。

5点目は、平沼新党についてです。この平沼新党の中で、亀井静香と綿貫民輔はもともと一緒でしたので、ここで一緒になる可能性があります。自民党から10数人、民主党からタカ派12人の大体30~40人で、格差問題と郵政の見直し、そして靖国神社のA級戦犯の分祀といった問題に取り組むでしょう。平沼赳夫の祖父である平沼騏一郎はA級戦犯ですが、彼は既に分祀のことで動きました。しかし、選挙にも出ていた東条由布子という東条英機の孫が、1人だけ分祀に反対したんです。それで、この話は何年か前に立ち消えました。250数万人の英霊の中には、クリスチャンの方や日本籍でない方も大勢おいでです。しかし、時の総理大臣よりも、年に1~2回、春と秋の例大祭が8月15日に、天皇陛下にご参拝頂きたいというのが、靖国で会おうと言って散っていった方々のお気持ちだろうと思います。そう考えると、3点くらいの政策協定で平沼赳夫の言うカードに対して、慶応義塾大学の後輩である小沢一郎は手を差し出しますから、可能性はあるということも、少し補足をしました。

それで、大連立については、私は基本的にノーです。私は秋のテレビで、2回は渡辺恒雄の批判をしました。私の兄は、秋田県ではありませんが、日本テレビ系列のテレビ局の社長をしています。兄にもさすがに「お前、言い過ぎじゃないの」と言われましたが、日本のプロ野球をダメにして、さらに政治家ではないメディアの人間がああいう形で口を挟むということは、政治家もだらしがないですが、やはりやってはいけないことだと思います。

大連立が致し方ないという場合はあります。それは国内が戦争中であつたり、経済恐慌であつたり、国民が仕方がないと思った時は、イギリスの挙国一致内閣チャーチルのようなことも出来るんです。10年間選挙をやらずに、チャーチルはやり遂げましたが、これは許される範囲だと思います。しかし、もしも大政翼賛会やナチスのケースになれば、大連立は反対派がいなくなるということです。講演会においても、「政権を批判する福岡政行はもうクビにしろ」と、ノースアジア大学に圧力がかけられるでしょう。もしそうなれば戦い続けますけれども、こういったことを含めて、大連立は本当に慎重にやるべきだと思います。国民がある程度はしょうがないということで納得して、消費税10%で良いから、その代わりに公務員の給料は一律2割カットというようなことを実施します。また、渡辺喜美（行革担当大臣）に好きなようにやらせて、天下りなんか認めるな、というようなことをやってくれるなら、了解だという風に思います。

それで、結論です。これからの政治の課題は、年金と格差。私は、これだけで良いような気がします。もちろん、経済のファンダメンタルスは悪くはないんです。トヨタやキャノン、シャープなんかは頑張っていて、その他にも、皆が頑張っているんです。TDKも頑張っていますね。また、日本はサブプライムローンで焦げ付きましたが、野村みずほは1千数百億円です。しかし海外では、メリルリンチはもう2兆円で、来週早々のシティコープはどうでしょう。シティグループは33万人の社員を抱えていましたが、1割の3万人をカットしました。こういったことから、2兆円を超える赤字はまだ続くと思います。そう考えていった時に、私は年金と格差の問題を解決し、安心出来る老後と最低限の生活保障を、何とか実現出来ればという風に考えています。

それから、来年は学生達と一緒に、秋田県の限界集落を何箇所か見に行こうと思っています。一応、長野県と岩手県の方にも行こうと思っていますが、人口の過半数が65歳以上になってし

まった集落が増え、消滅集落という言葉があちこちで出てきました。こういった中山間地域のお年寄りを、どうバックアップするかという問題があります。こういった問題について、前に質問された際には簡単に答えられないと言いましたが、高齢であってもご夫婦で暮らしているうちにはいいんです。しかし、問題はどちらかが亡くなった後なんです。何年後かに、「お婆ちゃん10日くらい見ないね」なんて言って、100m以上も離れた隣の家の人が見に行ったら亡くなっていたというケースのないよう、街中にバリアフリーのシルバー集合住宅を造るべきです。そして従来とは逆に、車で山路の段々畑の手入れに行くというような形に変えられないかということも含めて、現場の声を利用しながら考えていきたいと思っています。

それでは最後になりますが、質疑応答の時間に入ります。2ヶ月程入院していましたが、とにかくカレンダーを見ながら、あと1週間で退院出来るなんていうことを考えていました。お腹を切ってから1週間は水しか飲めませんでした。そんな中、教え子の中畑清が来ました。東京大学医学部附属病院の特別病棟の上にはレストランが入っていて、ルームサービスが取れるんです。ワインなんかのお酒も取れます。うちの女房もいい加減で、私は水しか飲めないのに、夕方の5時半ぐらいに「お腹空いたでしょう」と言って、お見舞いに来た連中にルームサービスを取ったんです。中畑清が頼んだのは、てんぷらそばの大盛りでした。車も運転手がいますから、ワインとビールも飲んでるんです。人が水を飲んでいる横で「結構美味しいですね、これ」なんて、殴ってやろうかと思いましたが、管が4本くらい付いていたので身動きが取れませんでした。けれども、そういうことを感じながらも、政治はもっと真剣に、1日1日大切にやっていかなければならないと思っていました。

そう考えてきて、私は今、松下政経塾で講師をしていたということを履歴書から外しました。何かもう、最近は恥ずかしいんです。それで、30~40代で国会議員のバッジを付けると、まず5年経つとダメで、初心を忘れてしまいます。松下幸之助は「君達のキーワードは、現場と数字だ。それ以外でものは語るな」と、松下政経塾で世界を語り、政策を語りました。毛沢東は、「調査なくして報告なし」と言いました。それが、現在は全くないと思います。

長妻昭という男を見ますと、彼は日経BPの記者として、転職を4回経験し、その中であの調査能力を身に付けるんです。山井和則は松下政経塾の教え子ですが、「先生、福祉の問題をやりたいんです」と言うから、「福祉をやるなら、よく分からないがスウェーデンなんかの北欧へ行け」ということで、彼は3年留学をしたんです。そして日本に戻って、岩波新書から『世界の高齢者福祉』という本を刊行し、40万部のベストセラーになりました。私の著書で1番売れたものが10万部ですから、この野郎と思いつつも、何となく嬉しいものでした。山井和則は、長妻昭と一緒に、介護保険のグループホームをスウェーデンから導入した男です。派手さはありませんが、こういうようなことをしていくべきだと思います。

そこで、私が今、新しい日本国政府を創るとしたら、総理大臣は誰とは言いませんが、不器用な人が良いと思います。それから副総理は3人で、外務担当は麻生太郎にします。日米関係が崩れていますが、オバマとクリントンのどちらになるのか分かりませんが、吉田茂の孫に、もう1度日米関係を修復してもらいます。次に、財務担当は谷垣禎一とします。消費税は10%、ただし介護、福祉、教育、環境、基礎食料費は税率ゼロということでどうでしょうか。スーパーマーケットの食料品は、全て税率ゼロです。松坂牛も、一部インチキもありましたが比内地鶏もゼロです。そうすれば、逆進性というのは消えます。その代わりに、ルイ・ヴィトン等は税率20%なんてどうでしょうか。友人が1本8万8千円のゴルフクラブを買って、「福岡やろうよ」

なんて言うんですが、こういった高級品は、欲しい人に買ってもらえば良いんです。その次に、鳩山由紀夫副総理には対中対露問題を担当してもらいます。彼のお爺さんがロシア問題をやっていたので、とりあえず北方領土を半分返還してもらおうというのはどうでしょうか。半分というのは、全部返してくれるわけがないからです。こういうのは政治的だと言われますけれども。それから、厚生労働大臣は菅直人にやってもらい、旧ミドリ十字のあの会社をどうにかしてもらおうと思います。

そして、これは私の悲願でもありますが、長妻昭に年金特命大臣をやってもらいます。政権がどうなるうとも、向こう5年は彼にやってもらうんです。舛添要一は、テレビではゴミ出しまでやっていますが、彼の財産が公表されたらとんでもないことになります。自慢ではありませんが、私はゴミ出しなんてほとんどやりません。私は、ああいう言葉に責任を持ってないのが嫌で、長妻に「先生、9月31日生まれがいるんですよ」なんて言われれば、どんなバカだって、パソコンを打ちながら、この日はカレンダーにはないと気付きますよね。2月29日はあるかもしれませんが、大体の場合、親が可哀相だからと言って、3月1日か2月28日生まれということにするんだそうです。ですから、実際はほとんどいないそうです。そんなことをやって、山井和則には介護特命大臣なんかをやってもらいます。それから、格差問題は後藤田正純君にやってもらおうと思います。それからタウン方式は岡田克也に任せます。

ということで、何か夢のあることになるように、ダメだと言っているものでも、これからは「諦めない」ということを今年のモットーに、病気も何とか乗り切るために、私も考えていきたいというところで、質疑応答に入りたいと思います。質問がなければ、来年度の講義はなくなりますよ。はい、どうぞ。

田 口 私は、ここから車で30分くらいのところで百姓をしております、田口と申します。まさに先生のおっしゃった、限界集落の真っ只中にあるような感じで生活しております。私達のような米作りを生業とする農家は、時給に換算しますと256円、ワーキングプア—どころか、明日の生活をどうしたらいいのかというぐらい、厳しい状況に置かれています。米を1俵、60kg生産するごとに5千円の赤字が出る、そういうようなところしております。けれども、私は10年前までは上場企業に勤めておりました、サラリーマンをやっておりました。そういうところで生きた時のような、自分の人生というのは金儲けですとか、勝った、負けたとかいう世界ではなくて、次の世代に伝えるにあたって、自分達の住む環境がどのようなものであればいいのかと思ひ、頑張っております。もう少し、日本の国が第1次産業の再生という形で農林漁業を甦らせ、そして自然を甦らせるような社会になって欲しいと思っています。それで、ぜひ先生のお知恵をお借りしたいと思ひまして、質問させて頂きました。どうぞよろしくお願い致します。

福 岡 私には、おそらくあなた以上の知恵はないかと思いますが、今の時給256円という数字について言えることは、色々な職業の年収一覧表というのが、『プレジデント』という雑誌に載っています。5月14日号だったと思いますが、バックナンバーを見てみて下さい。なお、1番下は林業で、年間26万円だそうです。おそらく農業も、100万円に届くかどうかというところだと思います。

200万円以下の所得の人が、今年は1,000万人を超えるそうです。ただ、福岡県のトヨタの工場が出た地域で、結婚ラッシュが起こっています。つまり非正規社員を正規社員として採用し

た結果、皆結婚して子供を産むようになったということで、平安閣も繁盛していることでしょう。労働分配率、つまり儲かったお金が、どのくらい給料として労働者に支払われているかということについては、20年前までは利益の75%を、企業は労働者の給料に当てていました。それが最近では10%ほど下がって、66%をきりました。つまりその分、株主の配当に回っているということです。株の配当は特別措置として、税金分は現在、10%しか天引きされません。しかし、住民税は一律最低1割で、所得税は5%です。どんな貧乏人でも、15%は自動的に税金を払うことになっているんです。けれども、お金に余裕のある人達が買った株の配当益については、税金を10%しか払わなくても良いということが、継続されようとしています。これは違うだろうというようなことを含めて、小沢民主党の言い方をすると、農家の所得保障の問題については、1兆円の農家の所得保障があります。またばら撒きかと思うかもしれませんが、そこがやはり岩手県で生活していたことによる考え方なんです。

それで、麻生太郎が私に言った点は1点です。これは、農林水産省だけにやらせる問題ではないということです。厚生労働省と環境省、そして環境保全も含めて考えるべき問題です。その時に、自分が生まれ育った中山間地域に、70歳を過ぎた老夫婦が暮らしているとします。両方が頑張っていられるうちは良いのですが、どちらかが倒れた時に、出来れば町の中心部でケアをして、介護付きのバリアフリー住宅で暮らしてもらうんです。日本人は、村やふるさと意識があるのでなかなか移れないんです。けれども、そこを何とか考えないといけません。アメリカがこういったことに成功しているのは、彼らが移動民族であり狩猟民族であったため、ふるさと意識がないからです。五木ひろしの歌ではありませんが、生まれたところがふるさとではなくて、住んでいるところが都なんだという、その部分をどうするかが問題です。

それから、最低の環境の問題も含めて、農業・林業の人達の生活をどう考えるかという問題があります。秋田県は、過去30年間人口が減り続けており、従業員300人以上の大企業も、27しかありません。1,000人を超える企業というのは、県庁と秋田市役所しかないという状態です。この辺を、やはり真剣に続けて考えていくべきです。自主ゼミもやっていますから、ぜひ参加をして下さい。

他に質問はありませんか。それでは、去年は講演会を病気で1度飛ばしてしましまして、深く反省しております。4月以降に秋田魁新報にも協力してもらって、色々な形でこういった勉強会を続けていくつもりでありますので、ぜひご参加下さい。今日はどうもありがとうございました。

橋 元 福岡先生、素晴らしいご講演をどうもありがとうございました。それではこれもちまして、本日のご講演会を終了させていただきます。ご静聴、誠にありがとうございました。(拍手)

[資料紹介]

セミヨーノフ連隊叛乱顛末

(メシチェルスキーよりキセリョフ少将への書簡)

松村 岳志

以下に訳出するのは、2007年9月から10月にかけてノースアジア大学より短期海外研究員としてロシア連邦ペテルブルグに派遣された際に、ロシア科学アカデミー付属文学研究所文書館（プーシキン会館）で見出した1820年11月1日（露暦）付けのメシチェルスキー某より第二軍（南方総軍）参謀長キセリョフ少将¹⁾あての書簡²⁾である。内容は同年10月の近衛軍セミヨーノフ連隊³⁾での叛乱に関するものであるが、いくつか注目すべき点があるので、訳出を思い立った次第である。なお本稿の和訳においては、ノースアジア大学講師 橋元志保先生の協力を得た。

パーヴェル・ドミトリエヴィッチ閣下

セミヨーノフ連隊での出来事についての誤った噂や偏向せる話を予防せんがために、この出来事の主な箇所の目撃者となりたる小官は、これに関しての詳細なる記述を閣下に報告することが肝要なりと考えるに至れり。17日土曜日、第一大隊第一中隊は午後8時に、あたかも点呼のあるがごとくに勝手に集合せり。曹長いまだ点呼の時至らずと言ふや、彼らの異口同音に曰く、中隊長に面会したし、彼を我等が面前に連れ出すべし、なんとなれば彼に対して申したき訴へあり、と。中隊長カシュカロフを求むるも在宅しあらず、町中探し回りにようやく11時にカシュカロフ、兵らの面前に出でたり。兵のカシュ

1) 後に伯爵、陸軍大臣となったパーヴェル・ドミトリエヴィッチ・キセリョフである。彼はミロラドヴィッチ大将の副官、第2軍参謀長、第4予備騎兵軍団長を経て、1828-29年の対トルコ戦争後ワラキア、モルダヴィア（現在のルーマニア）の軍政官になり、農民改革を精力的に進めた。これが皇帝ニコライ一世に認められ、国有財産大臣に任じられ、同帝時代の農民改革を担う。同帝の死後、大臣を解任され、駐仏ロシア大使となる。第2軍参謀長時代には、デカプリスト秘密結社のメンバーらと親交があり、部分的には彼らの主張の一部に共鳴していた。そればかりか、秘密結社の存在そのものも知っていて故意にこれを放置したとすら言われることがある。甥のミリューチン兄弟はそれぞれ農奴解放、軍制改革で活躍しており、彼らを通じてキセリョフの理想が一部実現したとも考えられる。

1, 1882, v-ix, 6, 8-9, 296 :
, 1946, 245-248..

2) 現物は以下の通り。 () , .265
() , .2. No.1638.
() 1820 , .1.

3) ピョートル一世が設置した近衛軍のうちの1連隊。名称はペテルブルグの街路から取られたという。1801年現在、擲弾兵一個大隊（5個中隊）、マスケット銃兵2個大隊（各5個中隊）からなっており、戦闘員だけで2777人の兵員を擁していた。
() : : .IV, .I,
.2, .2, - , 1902, .3-5.

4) シュヴァルツ大佐は1820年3月の人事異動でセミヨーノフ連隊連隊長に着任した。この人事には当時から第1軍当直将官のザクレフスキーが懸念を示していた。というのは、シュヴァルツ大佐はいわゆるドイツ学派に属す軍人で、射撃や突撃よりは行進を重視し、軍隊を戦闘用というよりはむしろパレード用に訓練し、しかも教育の手段として説得ではなく、暴力を用いて

カロフに曰く、もはや我らの連隊長シュヴァルツ⁴⁾の横暴に耐へるは不可なり、曰く、全連隊をあけて他の指揮官を迎へんと運動することを決したり、曰く本中隊が斯くの如き訴への先駆けとなるべし、曰く、中隊長殿は我らよりも賢明なれば、上層部に我らの訴へを知らしめ、我らが悲惨なる有様を上聞に達すべく、良しと思わんところをなすべし。カシュカロフ答へて曰く、連隊長を差し置きて斯くの如きをなす、我あはず。されど我、諸子の訴へを上聞に達せしめんことを約すべし。兵これを聞きて就寝せり。カシュカロフ直ちにこれをシュヴァルツ大佐とワシリチコフ將軍⁵⁾に報告し、陛下御自らの中隊が叛乱を起こせりとの恐ろしき言葉を大音声にて伝へたり。ワシリチコフ午前1時にベンケンドルフ⁶⁾に人を遣はし、いかがやせんとぞたずねける。而して曰く、叛乱兵、起き出でて返答を求めたり。兵らの言ひけるに、シュヴァルツの横暴、忍耐の限度を越えたり、曰くその窮状を知らしめんとあらゆる手を尽くせども、聞く耳あるものなし。曰く、いく足りかの下士官および兵はすでに野戦軍法会議にこれを訴へるも、転属されしのみにて連隊長はその地位にとどまりし。然れば兵は上に訴へんことを中隊長に願うに至れり。なほまた全連隊がこれを望めり。將軍曰く、良し。我、すべてを軍団司令部に打ち明けん。諸子は休むべし。叛徒これを聞きて就寝せり。翌日曜早朝兵らは彼に同じことを言へり。而して月曜の衛兵交代にあたりて、兵らは装具の清掃を始めり。ワシリチコフ、大公ミハイル・フェドロヴィッチ殿下を呼び、叛徒の鎮定と軍事規律のいかなるものかを彼らに教えるべし、と依頼せり。殿下、中隊に向かへども、兵らは同じことを繰り返すのみ。彼らをいかにすべきか談義始まれり。パヴロフ連隊⁷⁾二個中隊は練兵場に送られし。されどセミヨーノフ連隊の諸中隊は非武装のまま、夕刻6時にそこに行くことを命じられたり。されどパヴロフ連隊の中隊は銃と実包各三発を有して、宮殿広場に向かへり。中隊は到着し、包囲され、要塞に幽閉されたり。これ直ちに全連隊の知るところとなり、全連隊が叛乱に参加せり。兵共就寝致さず、全員夜中の2時に連隊兵營の前に集結し、第一中隊の戻るまで衛兵任務致さずと決したり。これ全連隊が第一中隊と同罪なるが故なり。ここに至りてワシリチコフ登場し、整列を命ぜり。されど従ふは第二、第三大隊のみなり。第一大隊はと言へば、かしらたる第一中隊のなかりせば整列するあたはずと言へり。これを聞くや第二第三大隊も第一大隊にならひ、我らに第一中隊を戻すべしと叫べり。兵らは軍帽軍服に身を固め、武器は一切有さず。ワシリチコフ、夜中の2時にミロ

いたからである。 . . . , .I, ., 1882, . 86, 123.

5) イ・ヴェ・ワシリチコフである。アルヒボヴァによればアレクサンドルー世の治世の後半、ニコライ一世の治世の前半におけるもっとも先見の明ある政治家の一人である。 . . . 1831-1848 (. . .)

. . . , . 28, . . . , 1970, . 520. なおまた、セメフスキーによれば、ワシリチコフはニコライ一世が農民政策改革案の作成のためにたびたび設けた秘密委員会の最初のものである1826年の委員会に参加しており、さらに、1835年の委員会では議長を務めている。 . . . XVIII

XIX . . . , . II, . . . , . 1888, . 3, 22. ミロネンコによればその後彼は1839年の秘密委員会でも議長を務めた。 . . . 1839-1842 . . .

. . . , No.3, 1977, . 26. したがって、ワシリチコフはニコライ一世時代の農民改革の多くに関与していたことになる。

6) アレクサンドル・フリストフォロヴィッチ・ベンケンドルフ (. . .) である (1783 - 1844)。ドイツ系ロシア貴族の出身で、ナポレオン戦争にあたっては自隊の数倍の敵兵を捕虜にするという奇功をたびたびたてる。ニコライ一世の即位直後から皇帝官房第三部 (秘密警察) 部長、憲兵隊総司令官となる。プーシキン、レールモンツフなどの文学者を迫害したとして有名な人物である。 . . . , 1997, . 353-354.

7) パヴロフ連隊はセミヨーノフ連隊と同じく近衛軍だが、騎兵部隊である。 . . . (. . .), . . . , . IV, .I, .2, .2, - . . . , 1902, . 6.

8) ミハイル・アンドレーエヴィッチ・ミロラドヴィッチ (. . .) 伯爵である (1771-1825)。セルビア系の貴族で、ケーニヒスベルグ大学に4年、ゲッチンゲン大学に2年留学した経歴を有する。ナポレオン戦争ではポロチ

ラドヴィッチ伯⁹⁾を訪なひ、これを自ら揺り起こし、彼に兵との対話を求めて曰く、「兵は貴官を愛せり。貴官をおいて我らが窮状を救ひうるものなし」。ミロラドヴィッチ伯直ちに連隊に向かひ、兵と対面せり。曰く、「兄弟よ。これ何ぞや。斯くのごとき有様の兄弟らを我が見慣れしと思うか。斯くのごとき大軍にて語れば何をか聞かん」兵ら答へて曰く、「閣下。閣下は我らを知るものなり。斯くの如き有様はかつてなし。さりながら我らは今塗炭の苦しみのうちにあり。我らの言葉に耳を傾けるものなく、また我らのために弁じるものなし。我らの立場を知り、我らを守りたまへ。神と君主の知る如く、圧制我らが上にあり」ここまで言ひて後、兵は第一中隊を求め、第一中隊を我らのもとに戻すためなれば、いかなることも致すべしとぞ言ひける。すべての兵、將軍のもとに集まりて斯くの如く乞ひ願ふ。なほ、この間いく足りかの兵、シュヴァルツ大佐の屋敷に忍び寄り、押し入り、ガラス三枚と鏡を破壊せり。おそらくはさらに多くの兵、これに押入れり。さりながら屋敷の衛士ら、シュヴァルツ大佐の不在を告げ(衛士はこの後隠れひそみ、事件後三日間隠れたままなりし。),'兄弟よ。国の財産を破壊せるものは罰せられん」とぞ言いける。「そは真なり」とぞ言ひ捨てて兵士らは去りぬ。その数13とぞ言ふ。さて、本営にてはすでに審議始まり。軍服軍帽の叛徒3000に対してペテルブルグ守備隊全部が武装せり。砲車12台に散弾30発が整へられ、騎兵隊は乗馬して待てり。このときオルロフ⁹⁾の曰く、「斯くの如くして主のため、帝のため、軍規律のため、はたまたシュヴァルツのため、セミヨーノフ連隊が兵士らを、喜びもて撃ち、斬るの用あり。」近衛二個大隊は実包を装填して要塞近くに伏せられたり。竜騎兵隊によりてペテルホーフに送られし第一中隊を救出せんがため出かけるものと考へられたり。突如壁面に伏せること命ぜられり。騎兵隊に前進命令が出るや否や、ワシリチコフ、ベンケンドルフの両将官、兵士らの面前で砲車の上に立ち、服従を要求せり。されど兵士らは以前の如く、第一中隊についての訴へを繰り返すのみなり。ここに至りて両将官の曰く、「貴連隊の第一中隊は要塞内にあり。解き放つことあたはず。欲する者はいつなりとも彼らに加わるべし」答へて曰く、「閣下に感謝申し上げ、我らはみな要塞にて作業せん」その通りいたせり。士官らは規律を維持せんと彼らに従へり。この時近衛騎兵隊は完全武装にてオプーホフ橋を渡りてセミヨーノフ連隊が兵営に無事至れり。我を除きてこれを見しものなし。近衛騎兵隊は斯くてセミヨーノフ連隊が兵営の横をば通りてセミヨーノフ橋をすぎて、一人たりとも傷つけることなく、おのが兵営に戻れり。この時、近衛騎兵縦隊指揮官カブルコフ將軍に報告あり。曰く、敵軍団はすでにトロイツキー橋に向かひしあり、然れば、カブルコフの隊に与ふるのは、脱落して友軍を捜し求むる兵を脅かすことのみと。このためカブルコフ將軍自らの隊に、將軍の傍らを小隊ごとに行進し、而して我がもとに戻るべしとぞ言ひける。これ、全てただの演習と思はせんがためなり。されど雨と泥濘のため、意図するところ果たさず、全て大衆の知るところとなれり。この間將軍らは本営に戻り、事後の措置を論じたり。ミロラドヴィッチも彼らのもとに至れり。警察により、あらゆる武器が準備されたり。されど、ミロラドヴィッチ、ザクレフスキー¹⁰⁾とともに、ほかの將軍らに対して、

ノの戦いなどで活躍した。兵士に絶大な人気があり、後にはペテルブルグ総督になった。デカブリスト反乱時には元老院広場に結集した反乱軍1万の只中に徒手空拳で乗り込み、下士官兵に投降を呼びかけて、デカブリストの指導者の一人、カホフスキーの凶弾に倒れた。

XIX : , 1997, . 137-139.

9) アレクセイ・フョードロヴィッチ・オルロフ () である (1786 - 1861)。青年時代はキセリョフの友人であって、 , .I, ., 1882, . 21, 44, 45, 64, 65. には両者の往復書簡が多数引用されている。しかし、オルロフは一般にはニコライ一世時代の秘密警察長官としての活躍で有名である。

10) 第1軍直将官のアルセニー・アンドレーエヴィッチ・ザクレフスキー () 中将である。フィンランド総督、内務大臣を歴任した。ユリー・ミハイロヴィッチ・ロートマン著、桑野隆・望月哲男・渡辺雅司訳『ロシア貴族』筑摩書房、1997年、85頁。

このような考への不可なるを説けり。即ち、トーリの提案せる如く、連隊内のたかが三人のために兵士らを撃つは不可なりと。ミロラドヴィッチの言ひけるは、まず、大隊ごとにわけん、と。斯くて全員が要塞に入れり。兵士ら、すでに要塞にあり。ミロラドヴィッチ将軍、近衛擲弾兵の要塞内にあるを見るや、これを前進させり。而してミロラドヴィッチ、ザクレフスキーと共に兵士らの押し込められたる拘禁室に入りて、彼らの誤りを説き始めたり。さりながら、叛徒に対して語るが如くはなさず、ただ彼らに服従を呼びかけ、帝に彼らの訴へを伝へんことを約束せり。而して哨兵を戻し、自分たち自身のうちより哨兵を出すべし、とのたまひて、最後に貴官らはすでに逮捕されあると伝えり。兵らは叫べり。「閣下。仰せの通りに致すべし。我らは自分自身で見張りをなし、保護者はなきものと思ふべし。」実際、要塞の門より出でしものなし。

一個大隊はケクスゴリムへ、いまひとつの大隊はスヴェアボルグに向かふことが命ぜられたり。一部はここに残れり。19日、月曜日には執行命令出でたり。火曜早朝には、要塞内部にて部隊任務伝達のための移動の準備なされたり。兵士らが自らの意思にて軍法会議に赴くのか、あるいは強制的になさざるを得ぬかを誰も知らざりし。将官ら出でし。ワシリチコフは兵と言葉を交わさず。ポチョムキン¹¹⁾は大いに説得をなし、兵士らもまた彼に語り、「上官殿のもとでは斯くの如き出来事はあるべからず」兵士らはトーリをあざ笑ひ、彼の話は聞かざりし。トーリ¹²⁾よりもずっとうまくいけるはミロラドヴィッチとザクレフスキーの両名なり。ザクレフスキーは厳しく、さりながら理性的に、また哀れみ深く語り。されどミロラドヴィッチは驚くべき修辭を示しつつ兵らと語り、彼らのうちに不運の意思を遂行する心構へを搔き立てたり。拘禁室より出でし一兵士、これに抗して曰く、「第一中隊の戻るまで我ら行くべからず」。伯、自らこの兵の袖を捕らへ、扉に押し付けて曰く、「ここに叛徒あり。斯くの如きものが諸子すべてを汚す。まだ斯くの如きもの諸子の間に多くあるべし。これらは根絶せざるべからず。この者ども、汝らの間にある価値なし」かの兵士横に飛び、叫べり。「兄弟よ。我を助けよ」さりながらその場を動く兵とてなし。ザクレフスキーとミロラドヴィッチ、この兵を捕らへ、厳重に見張るべく命ぜり。とそのとき、数名の兵まるびいで、帝の怒りより守らんこと、彼らの妻子を見捨てざることをミロラドヴィッチに乞ひ願へり。伯、これを聞くや蹶を返し、副官フレデリクスに命じて曰く、兵らの妻のもとに行きて、伯が彼らを特別の保護のもとに置きしこと、彼らがいつまでもその妻子らのものであること、伯が約束を守ることを信ずべきこと伝へよ、と。兵士ら、すべて伯に従へり。士官らも兵と共にあり。残りしはオブレスコフおよびナルィシキンのみなり。オブレスコフは□□¹³⁾の故に残りしものにて、ナルィシキンは病なりし。ナルィシキンは4日後仲間に従へり。

兵士らの行状は模範的なりし。誰に向かひても無礼なる言葉を吐きしものはなし。自らの士官たちに対して、また、出会ひし人らに対して常に礼をもって振舞い、制服を着用せり。要塞へ行く道すがら露店にて購入せしものに対しては、いずれも支払いをすませり。これ何ぞやとたずねしものらに向かひては、「我らは要塞に向かふものなり。なんとなればそこにてなすべきことあるゆえなり」と応へし。将官団との談判にあたっては、いずれの時も、神と帝とに対しての忠勤の誓ひを覚へており、そのために

11) 有名なエカチェリーナ二世の愛人とは別人のヤ・ア・ポチョムキン (1778 - 1831) である。セミョーノフ連隊の連隊長としてはシュヴァルツの前任者 (1813 - 1819在職) で下士官兵には人気があった。Keep, John L. H. Soldiers of the Tsar: Army and Society in Russia 1462-1874, Oxford, 1985, p.209-210.

12) 第1軍の宿営担当将官である。粗暴であったとされ、兵士だけでなく、第2軍参謀長のケセリョフ少将や第1軍当直将官のザクレフスキー中将、さらにピョートル大帝時代の権臣メンシコフ公の唯一の孫で、後に海軍大臣となったメンシコフ公らにも嫌われていた。粗暴だということである。1882, . 105-106, 129-130.

13) 数字分判読不能

己が血をささぐる覚悟も持てり。

兵士らの訴へるところによれば、シュヴァルツは、兵士らに、お互いの顔に唾を吐き合ふこと、隊列を組み、互いに殴り合ふことを命ぜり。また、鼻の下に付け髭を付けたるものどもの付け髭を自らむしれり¹⁴⁾。さらに、新たに導入されたる行進歩調の指導を行ふに際し、槩杖にて兵士の足を打たんとて裸足にて行進するを命ぜり。その上、兵士の姿勢を正すべく革帯にて彼らを縛り、終ひに軍装品の手入れに兵士の給金を当てることを命ぜり。

兵士らは軍法会議に渡され、レヴァシヨフ¹⁵⁾は議長に、グリエフとスフチェレンおよび数名の大佐、判事に任じられたり。大佐共のうちにはヴァロパノフとゲレマンこれあり。これまでのところ、罰せられたるものなし。22日にはチャアダーエフ¹⁶⁾、帝に報告を上奏せり。29日の綸旨により、審理の遅れについてオルロフに譴責あり。恐怖か希望か、いまや全てが帝の裁決次第なり。帝都はいまやミロラドヴィッチへの賛辞に満てり。ワシリチコフには我慢ならずと兵らは言ふ。なんとなれば、ワシリチコフは、かの8月のセミョーノフ連隊の閲兵においてしかるべく振舞はず、開口一番に、兵士らがシュヴァルツに対して発した不満を封じるべく怒鳴りし故なり。

不幸にも余が証人となりし事件のもっとも詳しき事情は上記の如きなり。その後いかなることが起こりしかは余は知らず。なんとなれば、事件三日後にクルベルに送られし故なり。

頓首

1820年11月1日
メシチェルスキー

解 題

セミョーノフ連隊の反乱はナポレオン戦争終了後のアレクサンドル一世の反動化に伴って生じた事件であって、この事件によって帝の反動化がますます強まったとされている。これは、セミョーノフ連隊が近衛軍の中でも最も歴史ある連隊であって、なおかつ反乱の主導権を握ったのが、「陛下ご自身の中隊」と呼ばれる第一中隊であったことによるものであろう。事件の経緯は上記からわかるとおり、単なる抗議運動とこれに対する弾圧であるが、ザクレフスキーが第2軍長ヴィトゲンシュタイン大将に送った1820年12月14日付けの手紙¹⁷⁾が伝えるところもほぼ同じである。ただこれを記録したメシチェルスキーは、兵の行動がいかに秩序だっていたかを強調したいかのようである。

14) ロシア近衛軍においては、口髭は男性のシンボルとして重要視されており、1832年までは非貴族出身の兵は近衛兵以外、口髭を生やすことを許されなかった。1736年に近衛軍イズマイロフスキー連隊に出された命令は、「向後非貴族の出身なる擲弾兵は、口髭を伸ばすべし」とわざわざ命じている。Keep John L. H. Soldiers of the Tsar: Army and Society in Russia 1462-1874, Oxford, 1985, p.189.

15) ワシーリー・ワシリエヴィッチ・レヴァシヨフ () 伯爵である (1783 - 1848)。大変珍しいことに文官としてキャリアを開始しているが、途中で武官に転じ、対仏戦争では数々の殊勲をたて、1815年には近衛驃騎兵連隊長に任じられた。本稿で扱ったセミョーノフ連隊の反乱にかかわる軍法会議の議長を務めたほか、デカブリスト反乱に際しても軍法会議のメンバーにもなっており、1830年代には右岸ウクライナ、左岸ウクライナの総督を歴任し、国家評議会、大臣委員会の議長まで務めた。 , . X, reprinted by Kraus, NY 1962, . 122-123.

16) かつてセミョーノフ連隊に勤務した経験があり、当時、ワシリチコフの副官であったピョートル・ヤコブレヴィッチ・チャアダーエフ (, 1794-1856) のことである。この報告の直後に退役し、「哲学書簡」を表して思想上有名になる。ユーリー・ミハイロヴィッチ・ロートマン著、桑野隆・望月哲男・渡辺雅司訳『ロシア貴族』筑摩書房、1997年、477 - 485頁。

17) - . . . , .I, ., 1882, . 125-126. にその全文が引用されている。

しかし、この資料の重要性は、反乱の経緯そのものよりも、反乱という非日常の中での高官たちの行動、特に下士官兵とのやりとりである。ザクレフスキーは、大量に残っている書簡から想像できるように温厚篤実な君子であり、同時代の士官たちから小うるさい事務屋として煙たがられていたトーリは、やはり下士官兵からも煙たがられ、疎んじられている。最も注目に値するのは、ミロラドヴィッチによる兵士のなだめ方である。ドストエフスキーは、かつてロシアの平民は主人が残酷で気まぐれであればあるほど主人に心服すると述べたことがあったが、熱弁をふるいつつ兵士どもを監禁してしまい、拳銃、弁舌と駆け引きだけで兵士たちの反省の言葉を引き出したミロラドヴィッチの人心収攬方法は鮮やかである。このような人物であったからこそ、彼はデカブリスト反乱に際して兵士に投降を呼びかけたのであって、彼の横死の遠因はすでにこのとき生じていたと考えられる。

Comparative Studies on the Masked and Costumed Visitors : The Formative Background to the Rituals of the Namahage Type

Tatsuhiko Taira

Intorduction

Animal-like sounds echo in the late snowy evening. It is New Year's Eve. On the night of December 31, the people in Oga Peninsula (男鹿半島) are visited by the Namahage.

Young men disguised in masks and straw coats cried like animals "Wa-aw, wa-aw" and rushed into a house. They search every room for new brides and children, whom they catch. They try to make themselves as fearsome as possible. They act according to images of the Namahage they learned in their own childhood. Children and women are threatened and given disciplinary advice.

In the guest room the head of the household, wearing the formal dress, acts as a host to the Namahage. He sits quietly in front of the hearth (炉) while waiting for the visitors. He regards them as both supernatural and human. The host humbles himself and asks them to drink sake (酒).

The masked vistorers are received courteously by the household head and his wife, and are served sake and several dishes on wooden trays. The Namahage rarely touch the food they are offered, but drink the sake by quickly lifting their masks.

After a short conversation with the host, the Namahage leave the house, and dash on to the next house.

This scene is reenacted each time the Namahage enter a house.

In this article, I will explore how the rituals of the Namahage type are formed by using results I obtained during my fieldwork; the emphasis is placed on the formative background to the rituals of the Namahage type from a theatrical perspective.

The Origins of the Namahage

To provide background on the ritual tradition of the Namahage, I survey various studies written in Japanese. The Japanese scholars who have written about the rituals of the Namahage type (ナマハゲ系儀礼) have been interested primarily in what they may reveal about the origins of Japanese culture.

The masked and costumed visitor custom is generally referred to as the Koshogatsu visitor custom⁽¹⁾, although the ritual has a variety of names in different regions (See Figure 1). In most cases the visitors call at villagers' homes and receive treats or money in exchange for giving words of luck to the householders.

Figure 2 shows the variations in name. These observances can be divided into three main types on the basis of atmosphere.

- (1) A being intimidating children and women like a demon: Namahage, Nagomehagi, Nagomi, Namomi, Nagamehezuri, Suneka, Amahage, Amamehage, Amamehagi, Amahagi
- (2) A sacred being like a deity (Toshigami-sama): Tosidon, Tositoidon, Toinokansama
- (3) A being like a devil expeller: Yamahage, Pantu

Kazuhiko Komatsu points out the following characteristics of the Namahage ritual, and names its ritual "the ritual of the Namahage type⁽²⁾."

1. The disguised persons use the masks of "oni" (鬼)⁽³⁾ or the fearful masks like "demons".
2. The disguised persons wear woven straw hats and coats.
3. The disguised persons appear in the Small New Year's late evening.

These observations agree with my own investigations in Oga Peninsula, but they have changed so as to produce many varieties. Indeed, the dates of observance range from late December to early February.

There has been intense scholarly interest in the observances, and a number of hypotheses about them have been proposed. Some of these are reviewed below.

A. The Visitor of Koshogatsu (The Small New Year)

The founder of folklore studies in Japan, Kunio Yanagita (1875-1962), offered the first historical interpretation of the visitor customs. In his *Yukiguni no Haru* (『雪国の春』・1928) he suggested that basic Japanese culture spread from the southern Islands of Japan over the sea. His visit to the Oga Peninsula convinced him of the relationship of the Namahage with Akamata-Kuromata in Yaeyama Islands⁽⁴⁾. According to him, these customs have the same

origin and differ now because they have changed in different ways in the various regions⁽⁵⁾.

The intention of the ritual is to create tangible images of kami (神)⁽⁶⁾ so that the people will have visual proof that at the end of each year the kami do come from distant lands to visit their villages.

Yanagita believes that the original form is derived from the Ryukyus (琉球・Okinawa Prefecture) and that the Namahage ritual is the closest to it of the Japanese forms. He reasons that the north-eastern part of Japan has retained the older customs.

B. Marebito (Foreign Visitors)

Shinobu Origuchi (1887-1953) suggests a similarity between the Japanese beliefs underlying the visitor custom and the beliefs found in the western Pacific islands, where people believe in demi-gods who visit and bring foreign cultures. According to Origuchi, visitors are believed to be marebito, "foreign visitors." It is defined by Origuchi in the following way⁽⁷⁾.

The first meaning seems to have been that of a kami who visits us periodically. The kami comes from heaven and distant seas, and he brings with him wealth and happiness for another year, and listens to the requests of the villagers Originally the kami came from the distant sea in early spring. His visit was not merely imagined, but in the old days people could actually listen to the knocking sounds of the kami when he came to the door The kami comes from "the land of Tokoyo (常世の国)."

This belief, he maintains, is historically based on the Japanese idea that the ancestors were the recipients of favors from foreign travelers. As evidence for the existence of this idea, he cites an example of a northeastern Japanese custom⁽⁸⁾: The man who still keeps a traditional house not only welcomes travelers who are strangers, but also treats them hospitably and is proud of receiving them even if their stay is long.

Origuchi believes that this attitude reflects more than just the simplicity of farming people. The marebito are explained as the kami who visit a village to foretell rich harvests for the coming year. The time of their visit is restricted to either the end or the beginning of the year. A costume, such as the straw coat and hat, symbolizes a kami. The kami needed proper clothes to withstand the wind and rain when coming from a distant land hence the image of the kami with their straw hats and coats.

Marebito bless the villagers' lives, assure the lasting strength of the household and health for its members, promise rich harvests, and give advice for personal actions during the coming year. Origuchi believes that the Namahage retain the original form of the marebito.

C. Ijin (Strangers)

The concept of Ijin (異人), "strangers" is investigated more concretely by Masao Oka (1898-

1982). These outsiders of society, with names such as yamauba (山姥), tengu (天狗), and oni, are greeted with mixed feelings of respect and fear. The people receive them hospitably, but keep their distance since the strangers are believed to be the souls of the dead, or spirits, to whom the people must show hospitality.

To discover the origin of such strangers, Oka examined ethnographic instances in Melanesia and elsewhere in Oceania that exhibited a similar character, but were more highly structured. According to Oka, secret societies exist because an immigrant society with a different culture has entered into a mutual relationship with the local people. Oka bases this hypothesis on his comparison of the Namahage ritual and similar customs in Japan with observances of the Ryukyu Islands. He claims that the Namahage ritual is an outgrowth of customs that are very much like secret society activities in Melanesia⁽⁹⁾.

D. Hitogami (Man-god)

Ichiro Hori (1910-1974) studied historically the belief in visiting strangers who arrive on a designated day and the process by which divergent customs were produced. He classified the belief found in the Namahage observance and similar customs as the belief in the man-god⁽¹⁰⁾. In these customs, men act for the kami, using his language, words, and behavior.

The folk belief in kami in the form of a man-god is very old, for stories telling of strangers who wear straw coats and hats as symbols of the visiting kami appear in the Nihonshoki (『日本書紀』).

According to Hori, if a visiting kami is received at the end of the year, he is expected to remove peoples' misfortunes; if he comes at the beginning of the year, he will predict rich harvests for the coming year. Therefore, the Namahage who visit houses on New Year' Eve could be performing a double function.

The main functions of the the Namahage are to guarantee a rich harvest, to give blessings, to drive out evil spirits. Hori points out that the existence of the visitor custom is supported by these functions.

E. Sakugami (The Kami of Crops)

Mikiharu Ito considers the custom of Koshogatsu visitors to be an agricultural ritual⁽¹¹⁾. He classifies the Koshogatsu visitors found in the main islands into the following eight types, on the basis of names with similar origins⁽¹²⁾.

- (1) Namahage ... Namahage, Nagomehagi, Nagamehezuri, Namomi, Nagomi, Suneka, Amamehagi, Amahage, etc.
- (2) Chasego ... Chasego, Chasen, Chasenko
- (3) Kasedori ... Kasedori, Kasadori, Kasegitori, Kaseodori
- (4) Totataki ... Kapakapa, Totataki, Kotokoto, Hotohoto, Pakapaka

- (5) Kayutsuri ... Kayutsuri, Kayuzuri, Kaitsuri, Kahitsuri
- (6) Torohei ... Torohei, Toroho, Torihei
- (7) Oiwaiso ... Oiwaiso
- (8) Others ... Harukoma, Kekkoro, Kaneuri

He compares the Namahage with the seven others, and classifies these types in the following way⁽¹³⁾:

- (a) Intimidating (威圧的) ... (1)
- (b) Playful (遊戯的) ... (2) ~ (8)

Although the playful aspect of the other types contrasts with the attitude of the Namahage, all types share some elements. In every variety, the disguised persons, carrying noisemakers, visit the villagers only on a certain date in January. The Namahage are believed to be the kami of crops and to possess power to assure a rich harvest, in the Hotohoto ritual, the topic of conversation between the masqueraders and the villagers is always the rich harvest. In the Kasedori, Totataki, and Oiwaiso types, the visitors carry imitation farming tools. From these similarities Ito infers that the customs are probably of the same origin, and that anticipation of a rich harvest was involved in all. Ito further points out that in Japan most agricultural rituals are performed for the success of paddy rice cultivation (稲作). He classifies these rituals by month into five categories⁽¹⁴⁾.

- (A) Rituals of the anticipation (予祝儀礼) of a rich harvest in the coming year, performed in January.
- (B) Rituals for the seeding of rice (播種儀礼), performed in either April or May.
- (C) Rituals for planting the young rice plants (田植儀礼), performed in May or June.
- (D) Rituals of magic (呪術的儀礼), to prevent any unexpected disaster from occurring, performed in September through November in the rice-growing period. These include Mushiokuri (虫送り), or sending away the insects; torioi (鳥追い), or driving away the birds; amagoi (雨乞い), or rain making.
- (E) Rituals for the harvest (収穫儀礼), performed in September through November.

Ito infers that a close relationship might have existed in Japan between the harvesting rituals and the rituals of anticipation⁽¹⁵⁾. And Ito explains that the rituals of anticipation, including the Namahage ritual, are conducted by a particular age group in both Japan and the Ryukyu Islands. Thus Ito maintains that the Namahage ritual practice bears the closest relationship to the rituals of the Ryukyus.

Origuchi and Yanagita described the early Japanese belief that the spirits or man-gods come from a land called either tokoyo or nenokuni (根の国). In Ryukyus this land is called niraikanai. In this case the origin of the man-gods is imagined to be not only the world

where the spirits or souls of the dead reside, but also the world from which resources for the living originate. Origuchi describes this as the paradise beyond the sea.

Because of the presumed antiquity of ideas about the nature of kami retained in the Namahage observance, the atmosphere or conditions under which the ritual is enacted, and the nature of the performers, many scholars have been interested in investigating this ritual. Most of them arrived at their opinions by comparing the customs found in the Ryukyu Islands with those in Japan.

In the case of the Namahage, however, the villagers of Oga Peninsula believe that the Namahage have come from the mountains.

I infer from these beliefs that the Namahage ritual is a combination of the belief in the visiting man-god and the belief in the sacred mountains, or sangaku-shinko (山岳信仰).

The Rituals of the Namahage Type in Japan

Among the Koshogatsu visitors, the Namahage type presents the most theatrically interesting performance. Therefore I sought an area in which a ritual of the Namahage type was still observed. From past records I selected those areas in which events with the name Namahage or a similar name had been reported (See Figure 2)⁽¹⁶⁾. Rituals of the Namahage type were reported to exist in 18 locations.

- | | |
|------------------|---|
| (A) Namahage | (Oga City, Akita Prefecture) |
| (B) Namahage | (Kyu-Wakami-machi, Oga City, Akita Prefecture) |
| (C) Nagomehagi | (Noshiro City, Akita Prefecture) |
| (D) Yamahage | (Yuwa-machi, Akita City, Akita Prefecture) |
| (E) Amahagi | (Kisakata-machi, Nikaho City, Akita Prefecture) |
| (F) Amahage | (Yuza-machi, Yamagata Prefecture) |
| (G) Amamehagi | (Murakami City, Niigata Prefecture) |
| (H) Amamehagi | (Wajima City, Ishikawa Prefecture) |
| (I) Amamehagi | (Monzen-machi, Wajima City, Ishikawa Prefecture) |
| (J) Nagamehezuri | (Kazamaura-mura, Mutsu City, Aomori Prefecture) |
| (K) Namomi | (Iwaizumi-cho, Iwate Prefecture) |
| (L) Namomi | (Taro-cho, Miyako City, Iwate Prefecture) |
| (M) Nagomi | (Ootsuchi-cho, Iwate Prefecture) |
| (N) Suneka | (Yoshihama, Sanriku, Oofunato City, Iwate Prefecture) |
| (O) Toshidon | (Shimokoshiki Island, Kagoshima Prefecture) |
| (P) Toshitoidon | (Tanega Island, Kagoshima Prefecture) |
| (Q) Toinokansama | (Yaku Island, Kagoshima Prefecture) |
| (R) Pantu | (Miyakojima City, Miyako Island, Okinawa Prefecture) |

The existence of Yamahage of Akita Prefecture (D) is of special interest. The ritual of the Yamahage (D) is called “Akumabarai (Devil expeller).” Yamahage means literally “peeler from the mountains,” which does not clearly indicate the peeler of red spots; but I consider it similar in meaning to Amamehagi and Nagomehagi.

Namahage, Nagomehagi, Nagamehezuri, Amahage, Amahagi, Amamehagi, Namomi, Nagomi, Suneka⁽¹⁷⁾ have the same meaning. They mean “to take off red spots” or “a being who takes off red spots.” The red spots here refer to a mottled skin condition known medically as *cutis marmorata* or in severe cases *livedo reticularis*⁽¹⁸⁾. It is a disorder of the blood vessels caused by overheating certain parts of the body. In Japan this condition occurs because of the way people keep warm indoors during the severe cold of winter.

The red mottled skin condition is the result of prolonged warming and inactivity. Thus the names for the malady sometimes carry the pejorative connotation “inactive, lazy, avoiding

work.”

Hidako (火斑) is the generic word for this skin mottling in the northeast and neighboring areas. Suneka or Namomi in Iwate Prefecture, Nagomehagi or Amahagi in Akita Prefecture, are dialect words for the same. The other parts of the ritual name, - hagi, - hage, are dialect forms of the verb “to peel off” or of “a being who peels off.”

In the full context of the ritual, the complete name not only signifies the being who peels off the red spots, but implies that this is done to teach an indolent person not to be idle and sit by the hearth too much of the time.

These names of the Namahage rituals seem to emphasize certain attributes of the visitors; they are beings like demons who take off red spots. They are known as oni. Oni is a general term in Japanese. It is the equivalent of “demon” in the West. It could be identified by the horns on their heads and the fangs in their mouths. The children fear the Namahage the most. Before television and advertisements publicized the Namahage, the children really thought of them as oni. Oni are considered to be merciless and fearsome and to have strong power, but they are also seen as messengers of the kami.

The Legend of the Namahage

The Namahage ritual remains most vital in the Oga City area. It was because there is more documentation of the ritual there than elsewhere.

The oldest document that describes the Namahage ritual was written by Masumi Sugae (1754-1829) in 1804 (See Figure 3). According to his drawing and description, in the old days the Namahage had a rather simple appearance and were not invited into the house, but just stood in front of the door. The head of the household welcomed them by offering them a wooden tray of rice cakes through the half-opened door. The costumes of the Namahage as well as their performance seem to be getting more and more elaborate in the course of time.

There are several stories concerning the origin of the Namahage ritual, one of which is as follows⁽¹⁹⁾.

Once upon a time the Emperor Fu (武帝) of the Han Dynasty brought five oni to Oga Peninsula. He worked them so hard without giving them a day off that they threw up their hands in despair. One year the emperor finally gave them a day off on January 15. He told them that they could do whatever they liked in the villages. The exited oni ran down to the villages crying “Wa-aw, wa-aw, oro-oro,” and kicked the snow of Shinzan (Mt. Shin).

“Wa-aw, give us sake,” they cried and rushed into the houses. The trembling villagers treated them to as much sake as they had in their homes. The children cried and would not stop crying.

“Bring the crying children here. We will take them to the mountains and pierce them with long skewers, roast them on a big fire, and eat them,” said the oni.

“Please spare us, please spare us,” begged the trembling mother, putting their children into closets to keep them quiet.

The oni spared them, but then their eyes brightened again. They said to an idle fellow, “What are those red namumeyo (red mottled skin) on your legs? I see you were warming your legs all day long without doing your job. While we were working hard, what were you doing? Stick out them and we will peel them off for you.”

The oni stuck his knife into the mat and stared at the idle fellow. The fellow, paralyzed with fear, lost his head and cried, “please spare me, please spare me. I will work hard from now on.” The oni spared him.

It was not unbearable as long as they behaved like this, but the oni got very drunk and went out in the night, kidnapping girls, did violence to them.

Emperor Fu left for China, and the oni remembered their day of freedom and rushed back to the villages. They appeared crying “Wa-aw, wa-aw, oro-oro,” and drank the villagers’s sake and ate their roasted chickens, and then they took the girls with them. These ravages of the oni lasted for many days until the villagers could bear it no longer. They tried to fight with axes and hoes, but they could not defeat the oni.

At last the villagers hit on a good idea and said to the oni, "Try to make a thousand stone steps overnight up the hill toward the yard of Goshado (五社堂) Shrine. If it is done we will offer you a girl every year for a treat. If not, we will forbid you to enter our villages".

The oni agreed and started to work. In front of the surprised villagers the oni fetched large stones and rocks from Kanpuzan (Mt. Kanpu) and began making the steps. The villagers then hired a man who was a good mimic, and when the steps reached 999 he cried like a rooster. This made the oni think the night was over. They trembled with anger and yelled. Their hair bristled up. All of a sudden one of the oni took hold of a big cryptomeria (杉), pulled it out by the roots, and threw it on the ground with the roots sticking up. They were content for now, and went back to the mountains.

The supposed cryptomeria is now kept in a small cottage at Goshado Shrine, with more than 999 steps leading up to it. The villagers in Oga explained that because of this legend a few villages considered it taboo to eat roosters.

One old man in Oga told a similar story, with Akagami (赤神) of Shinzan (真山・Mt. Shin) substituted for Emperor Fu. Some persons explained that the oni lived at Honzan (本山・Mt. Hon). The people of the villages close to Shinzan and Honzan usually explain that the Namahage come from these two mountains, whereas those close the Hachiro Lagoon (八郎瀨) explain that the Namahage cross the ice (shiga) on Hachiro Lagoon from Taiheizan (太平山・Mt. Taihei). The Namahage of Iwakura (岩倉)⁽²⁰⁾ are believed to come from Taiheizan⁽²⁰⁾.

According to another tale, the Namahage originated from a giant, stranded on the coast of Oga, who had a big mouth, a high nose, and glittering eyes. He spoke a strange language and was thought by the local residents to be an oni. Some described the stranger as a stranded Russian.

Although Sugae mentioned the Namahage several times, he did not record this legend reported by the recent inhabitants. It is possible that during the nearly 200 years since Sugae's description of the Namahage the legend has developed many versions and has been elaborated on to create complete stories such as the one above mentioned by Segawa and Matsutani.

Conclusion

To attract tourists in Oga Peninsula, the tourist bureau of the Japan National Railroad Lines advertises the Namahage ritual as a strange custom of this district. Many souvenirs of the celebration are sold to visitors to this area. Semi-professional, part-time Namahage are hired by hotels to entertain guests year-round. In cooperation with the tourist bureau, in 1964 Oga City has held a special Namahage festival ("Namahage Sedo Matsuri") in February to attract tourists during the period when there are no agricultural activities. In this event the stereotyped Namahage surround a large bonfire and perform a dance ("Namahage Odori") that was invented for the tourists in 1961. This is a performance of dancing rather than a traditional ritual, for it is called "the Namahage of tourism⁽²¹⁾."

The Namahage festival as a commercial attraction seems to be performed in the overt tourist space, while the Namahage ritual as a traditional custom is basically a drama for insiders only; it is a series of intimate scenes in which actors and audience participate.

Many scholars of drama suggest that regional festivals such as the Namahage are primitive forms of the Japanese Noh plays⁽²²⁾. Unquestionably a visit from the Namahage creates a dramatic scene. The scene represents a mystic authority, and it is instead a reinforcement of established authority.

The participants, however, are not professional players, only people of a hamlet who share traditions and beliefs.

In each hamlet of Oga Peninsula the main role in the ritual is played by a group of disguised young men, using dwelling places for their stage. Its use of masks of the Namahage ritual may be considered one of the most effective in the creation of dramatic atmosphere.

It is clear that the Namahage ritual has changed during the past 200 years, the period for which we have historical information. One apparent change has been the increasing emphasis on masks, which heighten the dramatic effect of the event. Each mask has its own original features.

Behind their masks, the young men become strangers to their villagers. The young men in disguise experience a spiritual change. To them the mask is not only a concealer of identity, but also a symbol of an ancestral spirit and a representation of a supernatural being.

Thus the ritual of the Namahage type has become more and more a conscious theatrical production.

Notes

- (1) The “Shogatsu,” or the beginning of a new year, is the most important holiday in Japan. It can be divided into two periods: one is called “Daishogatsu” (the Big New Year), during which various rituals to welcome the New Year’s god are conducted, and the other is “Koshogatsu” (the Small New Year), during which the emphasis is placed on the prayers for a harvest. The first three days of January are the most important part of the Big New Year, while January 15 is the center of the Small New Year.
Koshogatsu literally means “the Small New Year,” which is the New Year according to the Lunar Calendar. The observances seen during the Small New Year are closely associated to our daily living, when compared with the rituals for the Big New Year.
Originally, the word Shogatsu meant a religious ritual, which was performed to welcome the New Year’s deity called “Shogatsu-sama” or “Toshigami-sama.” “Toshigami-sama” was believed to be a deity who came out from a high mountain where he lived and brought happiness to the human beings. See Masako Kurachi and John MacDowell (1998), *Eigo de shoukaisuru Nihon no nenjyugyouji* [The Japanese Customs, Traditions, & Annual Events], Natsumesha, p.10, p.35.
- (2) Kazuhiko Komatsu (2000), “Mino kite, kasa kite kuru mono ha mouhitotsu no ‘marebito’ ron ni mukete,” *Kaii no minzokugaku oni*, Kawadeshoboshinsha, p.106.
- (3) Yoshihiro Kondo (1966) analyzes the “oni” as a demon derived originally from the wonders of nature, such as thunder, earthquakes, and other awe-inspiring phenomena. See *Nihon no oni* [Oni in Japan], Oufusha, p.14.
- (4) According to Yanagita, Akamata is derived from “aka” (赤), meaning red, and Kuromata from “kuro” (黒), meaning black. Thus, Akamata-Kuromata is a being appearing in two colors. But Origuchi infer that Akamata is derived from “aka hebi,” meaning a red snake, and Kuromata from “kuro hebi,” meaning a black snake. Akamata and Kuromata wore masks. These deities visited every house of the village. Before sunrise they left the village.
- (5) Kunio Yanagita “Ogasaberi,” *Yukiguni no haru*, Yanagita Kunio zenshu, [Complete Collection of Essays by Kunio Yanagita], Tsukumashobo, 1997, pp.733-734.
- (6) The “kami” are numerous, even innumerable, as is suggested by the phrase “yaoyorozu no kami” (“a myriad of kami”). Originally any form of existence that possessed some extraordinary or awe-inspiring quality was called kami.
- (7) The “marebito” is defined by Origuchi. See Origuchi Shinobu zenshu [Complete Collection of Essays by Shinobu Origuchi], ed. Origuchi Hakase kinen kodai kenkyujyo, Vol.2, Tokyo; Chuokouronsha, 1982, pp.33-35.
- (8) Origuchi, “Haru kuru Oni,” Origuchi Shinobu zenshu [Complete Collection of Essays by Shinobu Origuchi], ed. Origuchi Hakase kinen kodai kenkyujyo, Vol.16, Tokyo; Chuokouronsha, 1982, pp.402-406.

- (9) Masao Oka (1994), *Ijin sonota* [The Stranger and Others], ed. Taryo Oobayashi, Tokyo, Iwanamishoten, 1994, p.132.
- (10) Ichiro Hori, *Waga kuni minkanshinko shi no kenkyu* [Studies on the History of the Folk Beliefs in Japan] (2), Tokyo Sogensha, 1953, pp.731-739.
- (11) Mikiharu Ito (1963), *Inasakugirei no ruikeiteki kenkyu* [A Topological Study of Agricultural Rituals], Kokugakuin University Nihonbunka kenkyujyo, Tokyo, p.148.
- (12) Ito (1963), p.154. See Figure 1 (Quoted from Ito, 1963, p.155).
- (13) Ito (1963), pp.151-152. He describes the characteristics of the Namahage as follows:
 - (a) They appear at night on a certain date.
 - (b) Only adults can participate.
 - (c) They wear masks of the dreadful oni.
 - (d) They carry sticks, knives, or other weapons.
 - (e) They make sounds like animals.
 - (f) They threaten children and women while visiting the houses.
 - (g) They are believed to be man-gods who predict a rich harvest.
- (14) Ito (1963), p.24.
- (15) Ito (1963), p.55.
- (16) The illustrated book, *Koshogatsu no houmonsha* (Koshogatsu Visitors), *Oni no yakata* (The house of oni) of Kitagami city, 1997, p.20.
- (17) Although this ritual is called "Suneka," other information indicates that the name probably means "Suneka-takuri."
- (18) *Cutis marmorata* (大理石様皮班) is considered by some people to be almost a normal response to cold and hardly a disease at all. *Livedo reticularis* (リベド血管炎) is the more severe form.
- (19) Takuo Segawa and Miyoko Matsutani (1958), eds. *Akita no minwa* [Folk Stories in Akita], Tokyo: Miraisha, pp.178-181.
- (20) *Nihon kaiikibunka kenkyujyo*, ed. *Namahage sono men to shuzoku* [The Namahage: the Masks and Customs], *Nihon kaiikibunka kenkyujyo*, 2004, p.72.
- (21) See Tatsuhiko Taira, "Akita no minzokugyouji to kankoubunka no hikaku kenkyu" [Comparative Studies on Folkloric Events in Akita and the Culture of Tourism], *International Tourism Review*, Vol. 14, 2007, pp.34-40.
- (22) Chales · J · Dan. "Geinou no hattatsu dankai," ed. *Geinou shi kenkyukai*, *Hikaku geino ron* [The Theory on the Comparative Performing Arts], Tokyo: Heibonsha, 1971, pp.265-276.

References

- Geinou shi kenkyukai, ed. Hikaku geinou ron [The Theory on the Comparative Performing Arts]. Nihon no koten geinou [The Classical Performing Arts in Japan]. Vol.10. Tokyo : Heibonsha, 1971.
- Hori, Ichiro. Waga kuni minkanshinko shi no kenkyu [A study of the History of the Folk Beliefs]. Vol.2. Tokyo :Tokyo Sogensha, 1953.
- Ito, Mikiharu. Inasakugirei no ruikeiteki kenkyu [A Topological Study of Agricultural Rituals]. Tokyo : Kokugakuin University Nihonbunka kenkyujyo, 1963.
- Komatsu, Kazuhiko. "Mino kite, kasa kite kuru mono ha Mouhitotsu no 'marebito' ron ni mukete," Kaito no minzokugaku [The Folklore of the Mystery]. Tokyo : Kawadeshoboshinsha, 2000.
- Kondo, Yoshihiro. Nihon no oni [Oni in Japan]. Tokyo : Oufusha, 1966.
- Kurachi, Masako and John MacDowell. Eigo de shyoukaisuru Nihon no nenjyugyouji [Japanese Customs, Traditions, & Annual Events]. Tokyo : Natsumeshya, 1998.
- Nihon kaiikibunka kenkyujyo, ed. Namahage sono men to shuzoku [The Namahage : the Masks and Customs]. Nihon kaiikibunka kenkyujyo, 2004.
- Oga no Namahage hozonkai, ed. Oga no Namahage [The Namahage in Oga]. Oga no Namahage hozonkai. Vol.1 · 2 · 3. Akita : 1980, 1981, 1982.
- Oka, Masao. "Ijin sonota" [The Stranger and Others], ed. Taryo Oobayashi. Tokyo : Iwanamishoten, 1994.
- Oni no yakata of Kitagami City, ed. Koshogatsu no houmonsha [Koshogatsu Visitors]. Oni no yakata of Kitagami City, 1997.
- Origuchi, Shinobu. Origuchi Shinobu zenshu [Complete Collection of Essays by Shinobu Origuchi], ed. Origuchi Hakase kinen kodai kenkyujyo. Vol.2 & Vol.17. Tokyo : Chuokoronsha, 1982.
- Segawa, Takuo, and Miyoko, Matsutani, eds. Akita no minwa [Folk Stories in Akita]. Tokyo : Miraisha, 1958.
- Sugae, Masumi. "Oga no Samukaze". Republished in 1973 in Sugae Masumi zenshu [Complete Collection of Essays by Masumi Sugae], edited and annotated by Uchida, Takeshi, and Tsuneichi Miyamoto. Vol.4. Tokyo : Miraisha.
- Taira, Tatsuhiko. "Akita no minzokugyouji to kankoubunka no hikaku kenkyu," [Comparative Studies on Folkloric Events in Akita and the Culture of Tourism]. International Tourism Review. Vol.14. Tokyo : Japan Foundation for International Tourism, 2007.
- Yanagita, Kunio. "Ogasaberi," Yukiguni no haru [Spring in the Snow Country]. In Yanagita Kunio zenshu [Complete Collection of Essays by Kunio Yanagita]. Vol.3. Tokyo : Tsukumashobo, 1997.
- Yoshida, Saburo. Oga fudo shi [Customs and Folkways in Oga]. Akita : Akitabunkashupan, 1977.

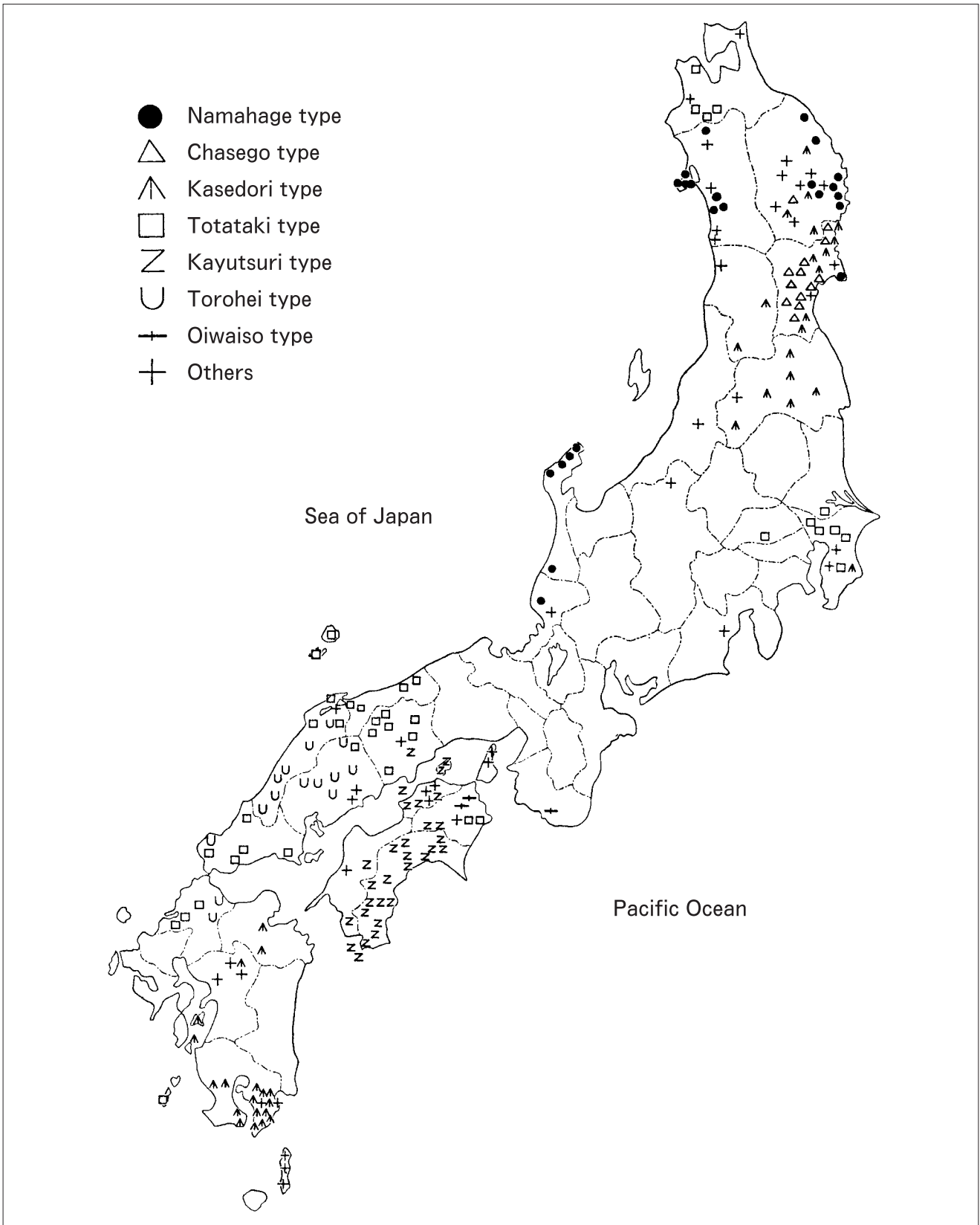


Figure 1 Distribution of Koshogatsu visitor customs in Japan
(Quoted from Mikiharu Ito, 1963, p.155).

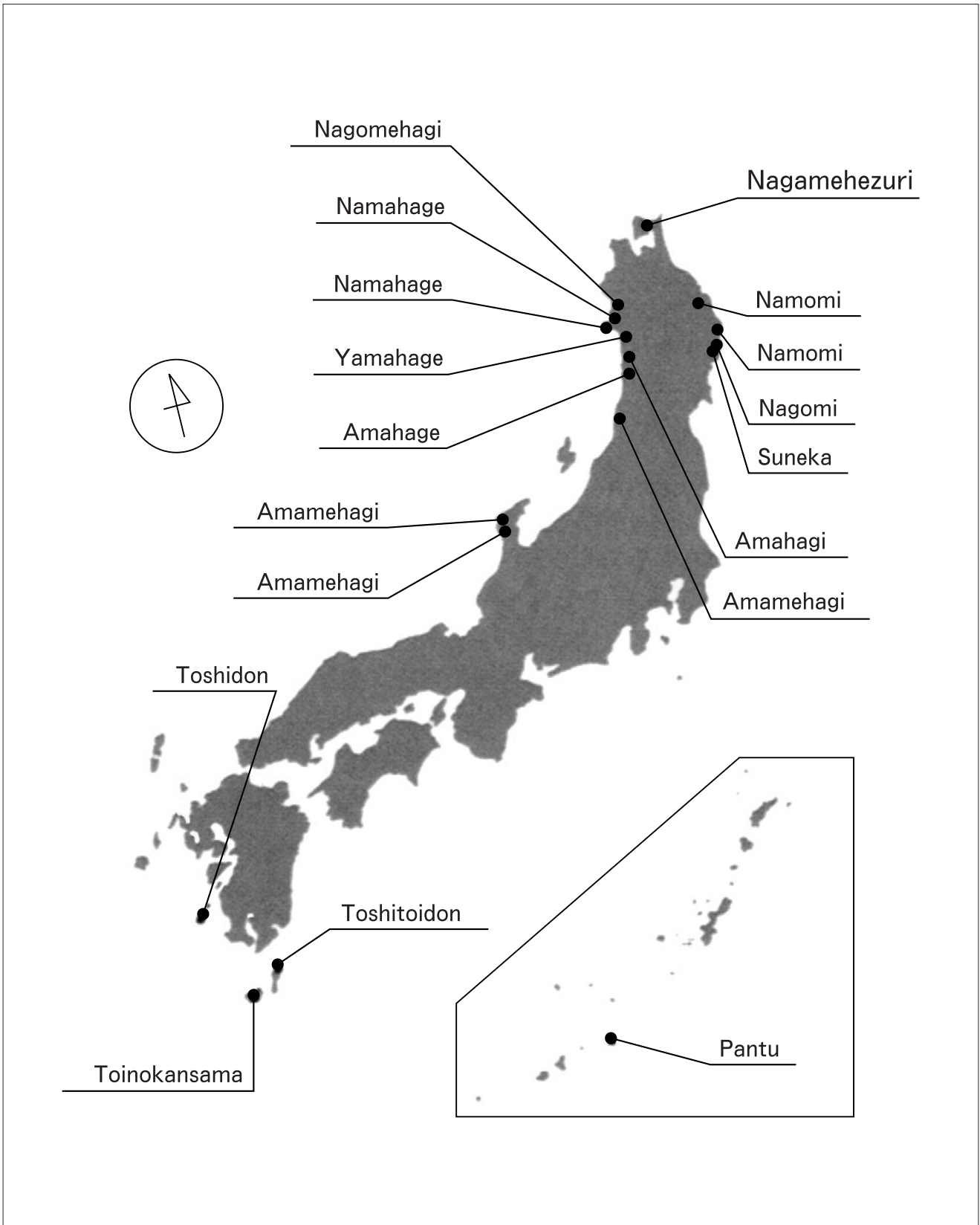


Figure 2 Distribution of rituals of the Namahage type.
 (Quoted from *Koshogatsu visitors*, 1997).



Figure 3 The oldest document that describes the Namahage ritual by Masumi Sugae in 1804.
(Quoted from *Oga no Samukaze*, Akita Prefectural Museum).

[実践報告]

地域ぐるみの健康づくり活動機運を盛り上げるために行った 住民聞き取り調査と報告会の実施効果（下）

横手市増田町西成瀬地域における「健康の駅」活動の普及に向けた取り組みを事例に

高橋和幸* 願法廣典** 佐藤 学**
松川 敬**

Keyword

秋田県横手市、健康の駅事業、地域介入調査、調査報告会の実施効果

緒 言

執筆者らは、横手市増田町西成瀬地域で「健康の駅」活動の普及に向けた取り組みの一環として住民聞き取り調査と報告会を行った。この取り組みは、当該地域住民に対して聞き取り調査を実施したり、その結果について報告会を開催したりすることによって、地域ぐるみの健康づくり活動について考える機会を作り、それによって住民の間で健康づくりへの意識が高まることを期待した試み（介入）である。

2段階の介入からなるアクション・リサーチで得られた情報を報告すべく、前稿（上）¹⁾ではとくに住民聞き取り調査の結果について報告を行った。本稿（下）では、調査報告会の実施効果について報告したい。

研究方法

1. 研究の進め方

本研究は、図1（再掲）に示すとおり2段階の介入からなるアクション・リサーチである。横手市増田町西成瀬地域への一連の介入をつうじて「地域ぐるみで健康づくり活動が活性化、あるいは健康に注意する意識が高まっていく機運を作ること」を最終目標にしている。なお、当該地域に関する詳しい情報は、前稿（上）を参照していただきたい。

2. 前稿（上）を受けて本稿の課題設定

西成瀬地域住民に対して聞き取り調査を実施した結果に基づき、現地で調査報告会を実施した効果を探る。なお、その方法としては、調査報告会後に参加者に対して行ったアンケート調査結果をもとに効

*学校法人ノースアジア大学 秋田看護福祉大学

**横手市福祉環境部 健康の駅推進室

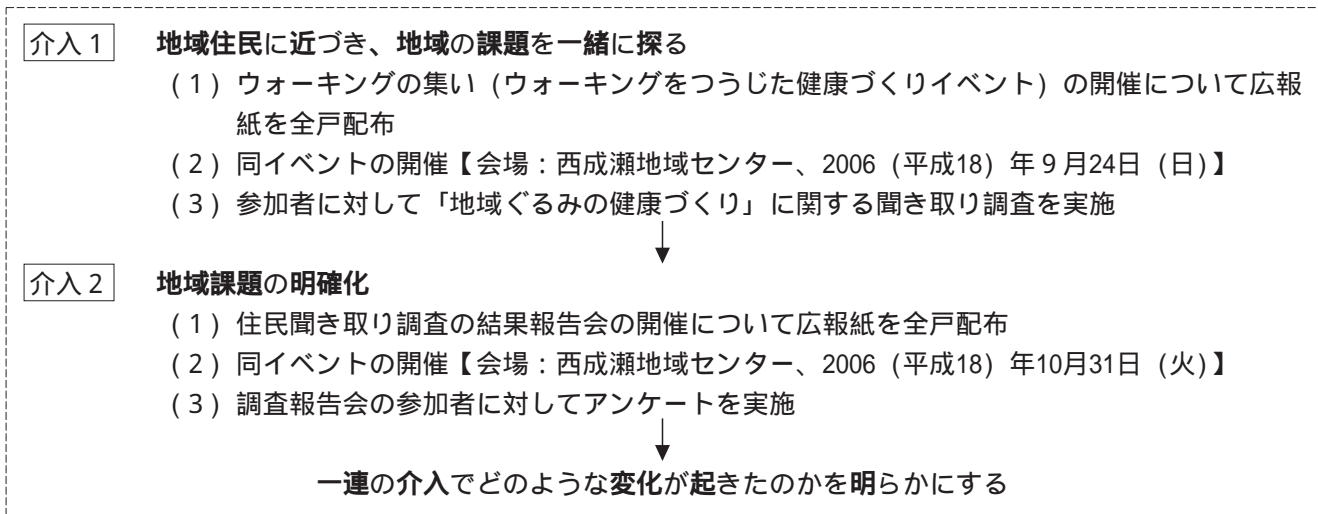


図1 本研究の進め方

果を探ることにした。また、聞き取り調査の結果と報告会参加者のアンケート結果、そして調査及び報告会への参加者の動向などから総合的視点で一連の介入効果についても少し掘り下げてみていくことにする。

3. 調査報告会の実施

調査報告会は2006（平成18）年10月31日（火）19：00～20：30の日時で西成瀬地域センターにおいて開催した。この調査報告会の開催にあたっては横手市健康の駅推進室の協力を得て「健康の集い」と称したイベントを開催し、その中で調査報告会を行う形をとった。報告会は、開会の挨拶に続き筆頭執筆者の調査報告が60分、健康の駅推進室保健師の指導による健康体操20分で構成された。また、「健康の集い（調査報告会）」の開催については、地域センターだよりを作成し全戸に配布して知らせ、合わせて同センターの運営役員となっている住民リーダーからの呼びかけもしてもらい、出来るだけ多くの住民が地域センターに集まるように働きかけを行った。

報告会の現場では、ウォーキングの集いに参加した17人に対して行った聞き取りの結果をもとに話題を進めつつ、出来るだけ堅苦しい場とならないようにとの配慮も行った。具体的には、聞き取り調査への協力（回答）者17人の男女別、年齢構成など基本属性の紹介のほか、ウォーキングの集いに参加した理由、参加者が現在行っている生きがい活動について、各自の健康意識などの回答結果も話題とした。身近な人たちが健康づくりに対してどのように考えているか、生きがいづくりをどうしているかという話題には興味を示しやすいものと期待し、こうした面も加えながら報告を行った。

またその一方で、報告会の実施効果が現れるように、聞き取り調査ではどんなことを質問したのか、そしてその質問の意図は何だったかを説明しながら、報告会参加者に対して以下の動機付けを行った。「調査と報告会を実施したねらいは、実際に質問に答えることをつうじて地元を見直すきっかけを作ったり、それらの意見がまとめられた調査報告を聞くことで改めて地域の良さについて考えていただくことになったりする。一連の学習活動から地域ぐるみの健康づくり活動の活性化に向けて意識を高めるきっかけが作られるのではないか」といったようにである。

4. 調査報告会で話した内容

調査報告で取り上げた中心的話題は、地域にあるもので健康づくりのために活用できそうなものは何かに対する回答結果、地域の社会資源を活用して、西成瀬地域ではどんな健康づくり活動ができそうかに対する回答結果、地域ぐるみの健康づくり活動を行う際に、自分はどのような協力ができるかに対する回答結果の3つであった。これらの回答結果については既に前稿（上）の表1、2、3で示しているとおりであるが、調査報告会ではそれらから抜粋して代表的な意見を取り上げて紹介したり、回答が集中したりして現れた傾向などを紹介する形をとった。

具体的には、地域にあるもので健康づくりのために活用できそうなものは何かに対する回答結果としては、西成瀬地域センターの室内・体育館やグラウンドが健康づくり活動に活用できるといった意見が多かったこと、真人公園²⁾や吉乃鉾山跡³⁾などがウォーキングコースとして活用できるといった意見があったということなどを報告した。また、地域の社会資源を活用して、西成瀬地域ではどんな健康づくり活動ができそうかに対する回答結果としては、現在も室内テニスや卓球、バレーボール、ウォーキングなど各種のスポーツ活動が西成瀬地域センターで行われているのでその活性化を図ること、地域センター行事や地域センターで行われている各種文化活動と連携し、例えば料理教室のテーマを「健康に良い食事づくり」としたり、集まった際に健康体操をするなどちょっとした工夫も必要だという提案があったことなどを報告した。さらに、地域ぐるみの健康づくり活動を行う際に、自分はどのような協力ができるかに対する回答結果では、健康づくり活動に参加していきたいという人が7人、活動をする際には出来る範囲で準備など手伝をしたいという人が3人、健康づくり活動のことについて情報を広めたり友達を誘って参加したいという人が7人というように前向きな意見で占められたことなどを報告した。

研究結果

調査報告会に集まったのは地域住民19人であり、前回のウォーキングの集い参加者が17人であったことから、2人の増加に留まった。なお、今回の参加者19人のうち12人までは前回に引き続いての参加者で占められた。報告会参加者の男女比は男性7人、女性11人、記載漏れのため不明が1人となり、年齢別では40歳代3人、50歳代7人、60歳代6人、70歳代3人となった。休日の日中に開催したウォーキングの集いの参加者は高齢者層が多いのに対して、平日の晩に開催した調査報告会では中年層の参加が多かった。調査報告会参加者を住んでいる集落別にみると、ウォーキングの集いでは地域センター付近の集落からの参加が多い傾向を示したのに対して、調査報告会では同センターから遠い集落からの参加者も多く分散傾向がみられた。

なお、報告会参加者19人に対し報告会後にアンケートを実施し、調査報告を聞いて気付いたことや考えさせられたことがあったかを質問した結果から、今回の調査報告会の実施効果について評価することにした。その結果は表1に示すとおりで、19人中14人が「はい」と回答し、調査報告を聞いて気付いたことや考えさせられたことがあった人が7割を超えた。また、「いいえ」や無回答だった人の理由についてみていっても否定的な意見や批判は見当たらなかった。以上のことをふまえると、調査報告の内容についても参加者の共感をよぶものであったこと、その学習効果もある程度現れた結果になったといえよう。

表1 調査報告を聞いて気付いたことや、考えさせられたことがあったか

No	はい・いいえ・どちらでもない別	その理由
1	はい	調査結果を聞いて地域の健康づくり活動を進めるための課題、それへの取り組み方が見えてきた。地区住民の「健康づくり」に対する考えや意識を高める良い機会になったと思う。
2	はい	地区住民は地域センターをいつでも利用できる。また、同センターは学校だったので、広い教室や体育館などどこでも健康体操をやれる環境にある。
3	はい	地域センターの事業の際に、健康づくりも合わせてやった方がいいと思いました。そのほうが参加者も多く集まるのではないかと思います。
4	はい	学校だった建物を最大に活用し、日常的な健康づくりを。参加しにくいセンターから離れた集落には出張（出前）して運動推進を、と考える。
5	はい	調査報告を聞くうち身近なところにあるのに気が付かなかった事がいろいろある事を発見した。
6	はい	地域センターで活動しているグループが現在もあります。これらの参加人数を多くするためにはどうしたらいいのかと考えさせられました。
7	はい	地域センターがこの地区にとって素晴らしい宝であることを改めて考えさせられました。
8	はい	地域センターでウォーキングのグループ活動をする際には30分程度歩いています。足が痛いと言ってウォーキングの活動に参加したとらない人もいますが、センターに徒歩で来るだけでもいい運動になるはずで。友達を誘いたいと思っています。
9	はい	地区の皆が多く集まれるよう、友達を誘いたいです。
10	はい	皆が健康になったら介護保険料が減少するかなあと思います。
11	はい	皆さん思っていたよりも健康には注意しているんだなあと思った。
12	はい	健康は自分で作るものだと思います。
13	はい	無回答
14	はい	無回答
15	いいえ	無回答
16	いいえ	無回答
17	どちらでもない	無回答
18	無回答	工夫をして、集まってくる人の人数を多くすることに力を入れてもらいたい。私は地域センターに夜に集まってウォーキングの活動をしています、1ヵ月のうち1回くらいは日中に開催してみたらいいと思っています。
19	無回答	先生の説明が大変分かりやすかった。

19人から寄せられた回答結果を、「はい」、「いいえ」、「どちらでもない」別に分類した

考 察

西成瀬地域において住民聞き取り調査の報告会を開催した効果と一連の介入によって現れたと考えられる効果について述べていきたい。

第1に、西成瀬地域の住民は、聞き取り調査で回答したり、回答結果を調査報告会で聞いたりすることで、「地域にある人的・物的資源を活用すればこんな健康づくり活動ができる」といった視点から発想する経験ができたと考えられる。また、回答した住民にとってはその後もこうした意識を持続していくものと期待できる。聞き取り調査の実施によって、地元住民だからこそわかっていることや地域の課題といったものも出やすく、これらの意見を拾い集め、報告会で共有できた意味は大きいといえる。とくに農村的性格を有する西成瀬地域こそ、実はこうした介入が必要だと考えられる。それは以下による。純農村的な同一の感情にもとづく相互扶助や連帯意識が強いといった面では、地域ぐるみの住民活動を行う上で西成瀬地域は優位性をもっている。しかし、岡村重夫が農業集落という「共通の価値や態度、行動様式から同一性の感情が生まれ、そしてそこからは様々な規則も生まれる。この規則があまりにも強い場合、個性を認めず、過度の一律性を生む危険をもっている」⁴⁾と指摘しているとおり、農村的性格の濃い西成瀬地域では、普段なかなか地域の人たちの前では意見を表明しにくい。だからこそこの調査によって、地域ぐるみで健康づくり活動を活性化させるためにはこんな工夫が必要だ、といった提案を代弁できた意味は大きいのである。

第2に、地域に存在する社会資源に目を向け、それを活用して地域ぐるみの健康づくりを考えてもらうといった観点で行った介入は、一定の効果があったと思われる。具体的には、本稿（下）の表1に示されたとおり報告会に参加した7割以上の住民が何らかの気付いたことや考えさせられたことがあったという反応や、前稿（上）の表1、2に示されたとおり調査をつうじて地域の社会資源を住民が見直していることから確認できたためである。また、一連の介入によって、地域センターである廃校施設を有効に活用しようという機運の盛り上がりや、こうした施設はどの地域にもあるわけではなく西成瀬地域は恵まれた環境にあることを、調査を行った外部の人からも肯定的に評価されることで、再認識することができたはずである。このように聞き取り調査に協力あるいは報告会に参加した経験者は、今後も地域センターで行われる健康づくり活動に参加したり、その活動の輪を広げる協力者になってくれると、前稿（上）表3の結果からみても期待できるのではないかと。

第3に、住民聞き取り調査と報告会による介入の結果をとおしてみると、まず、聞き取り調査（ウォーキングの集い）は日曜日の日中に、調査報告会は平日の晩に行っただが、それによって、参加者層に変化がみられた。夜に開催すると高齢者の参加が少なくなり、むしろ中年層の方の参加が増えた。また、聞き取り調査（ウォーキングの集い）参加者にも中年層の参加が数名みられたが、平日の晩に開催した調査報告会では、中年層の参加者の割合が一段と高くなった。やはり、健康づくりを共通話題にすると幅広い年齢層が参加しやすく、そういった面では活動のしやすさがあるという有効性も示唆された。

第4に、調査報告会参加者19人のうち12人は聞き取り調査の協力者（ウォーキングの集い参加者）で占められており、こうした活動意欲の高い人には固定化の傾向がみられた。また、健康づくりに関心がない人については、例え繰り返しイベントを開催したとしても参加の伸びが思うように大きくならないことを実感させられた。とはいうものの、聞き取り調査（ウォーキングの集い）には日程が合わなくて参加できなかったのだが、調査報告会を聞きに参加してくれた人（報告に興味をもってくれた人）が7人いたことは、地域センターだよりを全戸配布したり、同センター運営役員や聞き取り調査に協力した人からの呼びかけの地道な成果であると前向きに評価したいものである。

第5に、一連の研究をつうじて経験的に学んだことは、健康づくりの行事を開催した際に参加している人の動機は運動したい人ばかりでなく、知識を学びたい、友達と話をしたいという人も含まれていて多様だったことである。そして、運動・スポーツに固執せず、地域センターでの文化活動との連携を図ったり、健康づくりのための料理教室にするなどの工夫によって住民活動の際に副次的に健康体操を取り入れることも含めて、多様な活動方法があるということを住民の回答から再認識させられた。これら幅広い健康づくりニーズに対応していくためには、今回住民から提案された工夫策のようなものに耳を傾けながら、そしてそこに暮らす人たちの生活の知恵を借りながら進めていく必要性を大いに感じる。

なお、西成瀬地域では、調査報告会后に大腸がん予防活動とウォーキング活動を組み合わせた健康づくり活動を本格化させていくための検討に入ることができた。そういった面からも本研究のかかわりが住民の健康意識に少なからず影響を与えることができたと思われる。

一連の介入によって得られた情報や反省点が、今後類する保健活動を行う地域において役立つことがあれば幸いである。

謝 辞

学術研究のため、聞き取り調査や調査報告会参加者アンケートに快く応じてくださった横手市増田町西成瀬地域の住民の皆様にご心から感謝申し上げます。

注

- 1) 高橋和幸他「地域ぐるみの健康づくり活動機運を盛り上げるために行った住民聞き取り調査と報告会の実施効果(上)」ノースアジア大学教養文化論集第3巻第1号2008年2月, pp151~160.
- 2) 真人公園は調査報告会場となった西成瀬地域センターの近くにある比較的大きな自然公園であり、ウォーキングの集いの散歩コースとしても利用された。
- 3) 吉乃鉦山跡は西成瀬地域センターから少し離れた吉野集落にある。
- 4) 岡村重夫『地域福祉論』光生館1974年, p22.

地球温暖化防止策による地域づくり

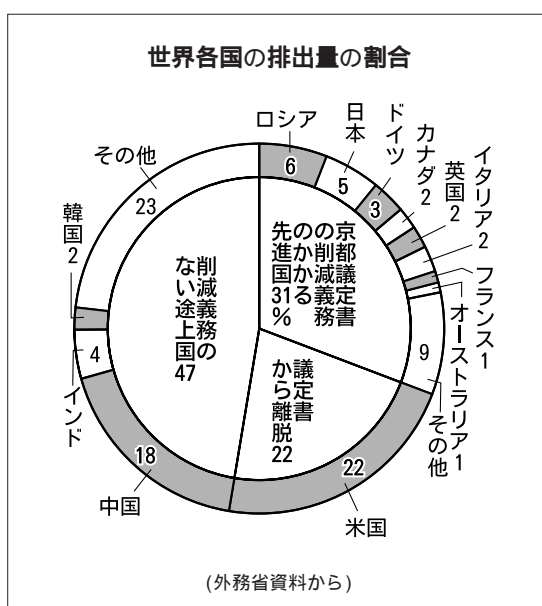
秋田県内の取り組みを検証

奈良 洋

はじめに

21世紀は環境の世紀といわれる。18世紀の産業革命以来、化石燃料をひたすら使い続けて炭素社会にどっぷり浸かってきた先進工業国は、深刻な地球温暖化のツケをいま払わせられている。さらにBRICsと呼ばれるブラジル、ロシア、インド、中国の経済成長著しい国々は地球温暖化ガスを大量に排出し出している。これらの国は京都議定書¹⁾で示された削減義務はないものの中国は世界一排出量が多く全体の実に18%、インド4%など途上国で合わせて全地球での温暖化ガス排出量の47%を占めているのである。日本は先進工業國中アメリカの22%に次いで多く5%を排出している。地球温暖化防止は待ったなしなのである(図1)。

地球温暖化が温暖化ガス排出によるかどうかはこれまで懐疑的だった。実際、研究者の中では10万年周期で氷期と間氷期が繰り返され、現在は間氷期に当たり温暖化傾向にあると主張する研究者がいるのも事実。しかし、2007年2月にまとめられた気候変動に関する政府間パネル(以下IPCC)²⁾の第一作業部会(自然科学的根拠)は地球温暖化は「人為的な温室効果ガスの増加によってもたらされた」と結論付けているのである。その発生源については多岐にわたる。産業活動、運輸、IT機器使用を含めた



	削減目標	削減状況 (2004年/1990年)
アメリカ	- 7 %	+ 15.8 %
EU 15 カ国	- 8 %	- 0.9 %
ドイツ	- 21 %	- 17.5 %
イギリス	- 12.5 %	- 14.1 %
イタリア	- 6.5 %	+ 12.1 %
フランス	0 %	- 0.8 %
ロシア	0 %	- 32.0 %
日本	- 6 %	+ 8.1 %
カナダ	- 6 %	+ 26.6 %

(出典：環境省)

図1 二酸化炭素の国別排出量 (2004年) 及び温室効果ガスの削減状況

オフィスなどの活動、家庭さらには一次産業も例外ではない。地球温暖化ガス排出規制は地球的規模で取り組まなくてはならないのである。

これに先立ち1992年、国連の会議で「気候変動枠組条約」を制定し、この条約に基づき具体的な温暖化ガス削減計画を定めた京都議定書が2005年にロシアが批准したことで発効した。同議定書で議務づけられた温暖化ガス削減が2008年から実施に移された。しかし、わが国の削減目標達成は極めて厳しい。同様に秋田県内においても困難視されている。わが国は2008～12年に1990年度比で6%削減しなければならないのに、2006年度は同6.4%増加しているのので、合せて12.4%減らさなければならない。この数値は至難のことである。

一口に温暖化ガス削減と言っても産業面、運輸、オフィスなどの業務用、家庭、一次産業ごとに削減目標を定め実行に移さねばならない。どのセクションをとっても目標達成は容易でない。故に本稿では同じ状況下にある秋田県における温暖化ガス削減の方策を地域づくりとの関連において考察する。

地球温暖化の実像とその防止への動き

地球温暖化が紛れもなく、人為的な行為に由来することを明らかにしたのは2007年2月にIPCC第一作業部会が、「温暖化は人間活動が原因」だとする研究を公表し、地球自体の温暖化ではないとする見解を発表した。IPCCは地球温暖化についての科学的な研究の収集・整理のため、世界気象機関(WMO)と国連環境計画(UNEP)を88年に設立した。世界の科学者が参加し、最新の研究成果をもとに、ほぼ5年ごとに評価報告書を発表してきた。同年2月の研究発表は4回目で、その後、同年4月には第2作業部会が気温上昇による深刻な影響を、同5月には第3作業部会が温暖化を緩和させる方法を示す報告書を出した。同11月の総会で統合報告書にまとめられ、京都議定書後の国際的な対策の枠組みづくりを話し合うための土台になっている。

このような息の長い活動が高く評価され、IPCCは07年のノーベル平和賞を元米副大統領のアル・ゴア氏(59)とともに授与されたのである。授賞理由は両者ともに「人為的に起こる地球温暖化の認知を高めた」と高く評価された。温暖化問題への取り組みで同賞が贈られたのは初めてのことである。環境分野では04年にケニアのワンガリ・マータイさんが受賞した以来である。地球温暖化防止への取り組みが、人類の生存に不可欠で喫緊の課題であることを強く世界に、人類にアピールしたのである。

クリントン政権の副大統領を務めたゴア氏は2000年の大統領選でブッシュ氏に大接戦の末敗れた後、地球温暖化問題に傾注する。2006年に制作された「不都合な真実」に出演し、地球の変化を映像やグラフで解説した。2007年アカデミー賞の長編ドキュメンタリー映画賞を受賞し、現在も世界各国で上映されている。「不都合な真実」は豊富な記録写真を使って出版され、世界各国でベストセラーになっている。「人類にとって平和に勝るものはない。しかし、近年の地球温暖化による生活環境の破壊が深刻になっている」と温暖化問題にいち早く着目したのがゴア氏である。鳥インフルエンザ、SARSのような奇病、猛威を振るったハリケーン・カトリーナは地球温暖化の産物であることを教えてくれた。いわば「不都合な真実」は温暖化防止の入門書の役割を果たした。ノーベル賞委員会が「世界で最も気候変動の理解を広めることに貢献した人物」と評価したのである。

一方、IPCCの同報告書の内容は今後の地球温暖化防止活動の根底をなすものだけに、ここにその要約を記述する。

主題1 気候変化とその影響に関する観測結果

気候システムの温暖化には疑う余地はなく、大気や海洋の全地球平均温度の上昇、雪氷の広範囲にわたる融解、世界平均海面水位の上昇が観測されていることが明白である。地域的な気候変化により、多くの自然生態系が影響を受けている。

主題2 変化の原因

人間活動により、現在の温室効果ガス濃度は産業革命以前の水準を大きく超えている。20世紀半ば以降に観測された全地球平均気温の上昇のほとんどは、人為起源の温室効果ガスの増加によってもたらされた可能性がかなり高い。

主題3 予測される気候変化とその影響

現在の政策を継続した場合、世界の温室効果ガス排出量は今後20～30年増加し続け、その結果21世紀には20世紀に観測されたものより大規模な温暖化がもたらされると予測される。分野毎の影響やその発現時期、地域的に予想される影響、極端現象の変化に伴う分野ごとの影響など、世界の気候システムに多くの変化が起こされることが具体的に予測される。

主題4 適応と緩和のオプション

気候変化に対する脆弱性を低減させるには、現在より強力な適応策が必要とし、分野ごとの具体的な適応策を例示。

適切な緩和策により、今後数十年にわたり、世界の温室効果ガス排出量の伸びを相殺、削減できる緩和策を推進するための国際的枠組み確立における気候変動枠組条約及び京都議定書の役割、将来的に向けた緩和努力の基礎を築いたと評価された。

主題5 長期的展望 = 第3次報告書で示された以下の5つの「懸念の理由」が強まっている

- 1 極地や山岳社会・生態系といった特異で危機にさらされているシステムへのリスク増加
- 2 旱魃、熱波、洪水など極端な気象現象のリスクの増加
- 3 地域的・社会的な弱者に大きな影響と脆弱性が表れるという問題
- 4 地球温暖化の便益は温度がより低い段階で頭打ちになり、地球温暖化の進行に伴い被害が増大し、地球温暖化のコストは時間とともに増加。
- 5 海面水位上昇、氷床の減少加速など、大規模な変動リスクの増加。
これらは今後20～30年間の緩和努力と投資が鍵となる。

IPCCの報告は以上のように温暖化防止策は一時の猶予も許されず、放置すれば温暖化は取り返しのつかない事態に陥ると警告しているのである。これを受けて、気候変動枠組条約第13回締結国会議（以下COP13）及び京都議定書第3回締結国会議（以下COP/MOP3）が2007年12月3日から15日（会期は1日延長）までインドネシア・バリ島で開催された。

参加者は192カ国、国際機関・非政府機関（NGO）など413機関、それにメディア531など総数10,828名と過去最多の参加者となったのである。京都議定書の10周年の記念であり、同議定書の約束期間（2008年～2012年）を目前に控えていることや2013年以降のポスト京都議定書に関する論議が高まっていること、そのうえ IPCC やゴア元米副大統領のノーベル平和賞受賞ともあいまって会議は世界的に関心が高

まったことによる。

同会議の主要な議題はポスト京都議定書（2013年以降）の将来枠組みをどうするかにあった。合意に達したものは2009年までの工程表となる。

ポスト京都議定書の協議は難航をきわめ、会期を1日延期して議論を継続しユドヨノ・インドネシア大統領、バン・ギムン国連事務総長が各国に歩み寄りを呼び掛けた結果、ようやく合意に達した。

それは IPCC 第4次評価報告書（以下 AR4）から「気候システムの温暖化は疑う余地がない」や「排出削減の遅滞はより低い安定化レベルを達成する機会を制約し、より激しい気候変化影響のリスクを増大させる」を引用しながら、「温室効果ガスの全地球排出量を今後10～15年間でピークにし、2050年までに2000年比半分以下にする必要がある」や「先進国は2020年までに1990年基準で全体として25～40%の大幅な排出削減をする必要がある」など数値にかかわる表現は削除された。しかし、米国を含む先進国も、インド、中国を含む途上国も2009年までに策定することが合意された。そのための途上国の持続可能な開発への技術協力を取り込むことでようやく合意した。

今回の協議では具体的な数値目標は削除されたが、米国もインド、中国を含む途上国も将来枠組みを2009年までに策定することが合意されたことは一定の成果といえよう。この合意事項は2008年7月に北海道洞爺湖サミット（主要国首脳会議）でも主要議題になることは必至である。議長国となるわが国のリーダーシップが問われる。

今回の COP13・COP/MOP3 で米国が数値目標を設けることに反対し、インドや中国も途上国への規制に反対したことをどうさばくか、困難な課題を背負うことになった。削減義務を課されている先進各国が占める排出ガスの割合は3割程度。インド、中国などの大排出国の参加が大きな課題となっている。

秋田の厳しい脱炭素社会への道程

以上のように地球温暖化防止への各国の対応は国益、成長への影響などから各国の利害が深く絡み、高度の政治問題となっている。環境問題はとりもなおさず、国際政治問題、そして具体的 CO₂ 削減問題は経済問題でもある。数値目標をあくまで拒む米国、これまでの地球温暖化は先進工業国の責任であるとして、発展途上国は経済発展のブレーキになるとして、合意を得ることは一筋縄ではいかない。その説得には先進工業国がその技術力を駆使した環境協力が不可欠である。

翻って秋田県はどのような対応を進めているかを検証する。

秋田県は総面積の70%以上が森林で自然豊かな県土と言われているが、環境対策面では必ずしも全国に誇りうるものではない。象徴的なのが、八郎湖の水質汚濁である。閉鎖水域であることから年毎に水質が悪化し、2007年12月に湖沼水質保全特別措置法にもとづく指定湖沼になった。同法による指定は全国で11番目、東北では宮城県の釜房湖に次いで2番目である。八郎湖の水質は昨年全国ワースト3の不名誉を記録した。アオコが大発生し、水源としている八郎潟町の水道水が使い物にならなくなり、近隣の町からの応援で切り抜けたことは記憶に新しい。汚染源は大潟村の耕地から流入する汚濁水、及び湖底に蓄積している窒素、リンからの汚染によるものの複合だが、その一つ一つを根気よく除去していくしかない。干拓前の八郎潟の水質を取り戻し、さしあたり環境・秋田のシンボルにすることから始めるべきであろう。秋田県農業こそが、環境保全のエースと言えるようになることだ（図2）。

さらに日本を代表する国立公園・十和田湖の水質が年毎に悪化している。COD（化学的酸素要求量）は昭和61年以降環境基準を超過し続けている。透明度も低下の傾向を示している。周辺からの汚濁物質

の流入の結果なのだろう（図3）。

悩みはまだある。県の調では、2003年の温室効果ガスの総排出量は10,847千トンで基準年度（1990年度）に比べ23.2%（全国7.7%）も増えている。このうち二酸化炭素 = CO₂ の構成比が89.7%（全国94.6%）を占めており基準年度の82.6%（全国90.7%）と比べると構成比は7.1%増加している（表1）。

また2003年度のCO₂の排出量は基準年度比33.6%の増加で全国の増加率12.3%を大きく上回っている。部門別では廃棄物部門を除く、エネルギー転換部門、産業部門、民生部門、運輸部門の4部門での増加が全国を上回っている。このことは削減努力がまだまだ足りないことを物語る（図4）。

秋田県は環境対策に本腰を入れるため、2007年4月、環境あきた創造課内に「菜の花バイオエネルギーチーム」を設置した。植物由来のバイオエタノール³⁾を県内で生産することを目的に設置したもので、チームのネーミングに「菜の花」をつけ

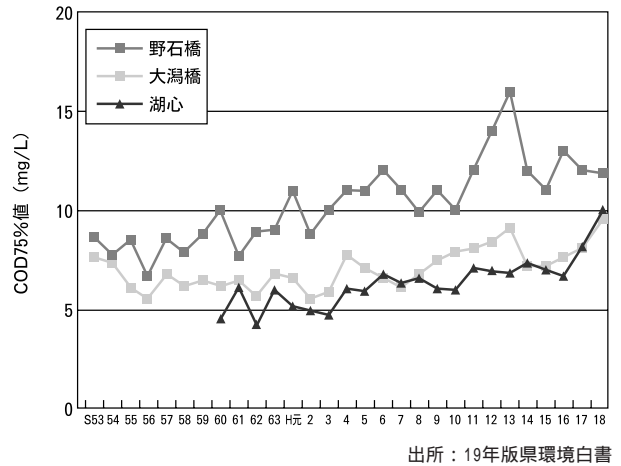
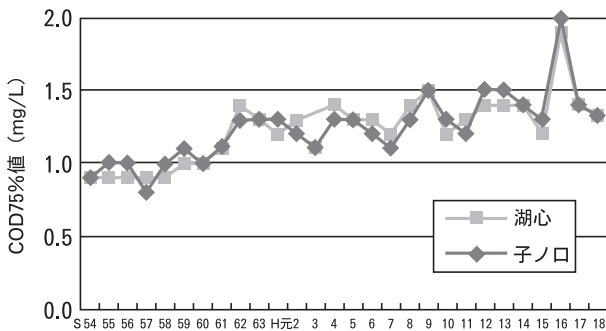
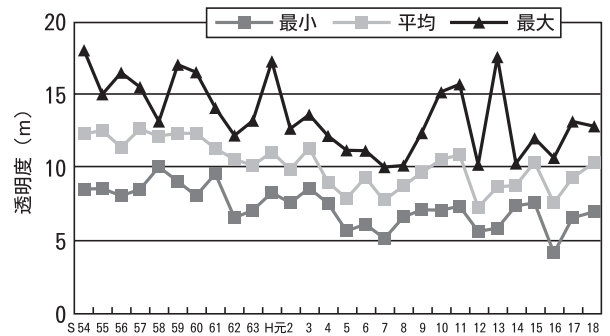


図2 八郎湖のCOD75%値の経年変化



十和田湖のCOD75%値の経年変化



十和田湖（湖心）の透明度の経年変化

図3 十和田湖の経年変化

表1 秋田県の温室効果ガス排出量の推移

(単位：千トン CO₂)

	基準年度	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	基準年度比
二酸化炭素	7,279	7,279	7,572	7,897	8,472	8,990	8,953	9,050	10,104	9,358	9,642	10,032	9,613	9,659	9,724	33.6%
メタン (CH ₄)	623	623	632	648	663	666	625	587	560	535	523	515	494	503	482	-22.6%
一酸化二窒素 (N ₂ O)	458	458	474	476	471	462	462	462	452	457	448	451	438	432	430	-6.1%
ハイドロフルオロカーボン (HFC)	111						111	105	106	103	110	105	82	64	58	-47.7%
パーフルオロカーボン (PFC)	143						143	165	189	193	187	177	146	124	100	-30.1%
六ふっ化硫黄 (SF ₆)	193						193	189	165	155	114	88	72	67	53	-72.5%
合計	8,807	8,360	8,678	9,021	9,606	10,118	10,487	10,558	11,576	10,801	11,024	11,368	10,845	10,849	10,847	23.2%

HFC、PFC、SF₆の基準年度は1995年 出所：秋田県

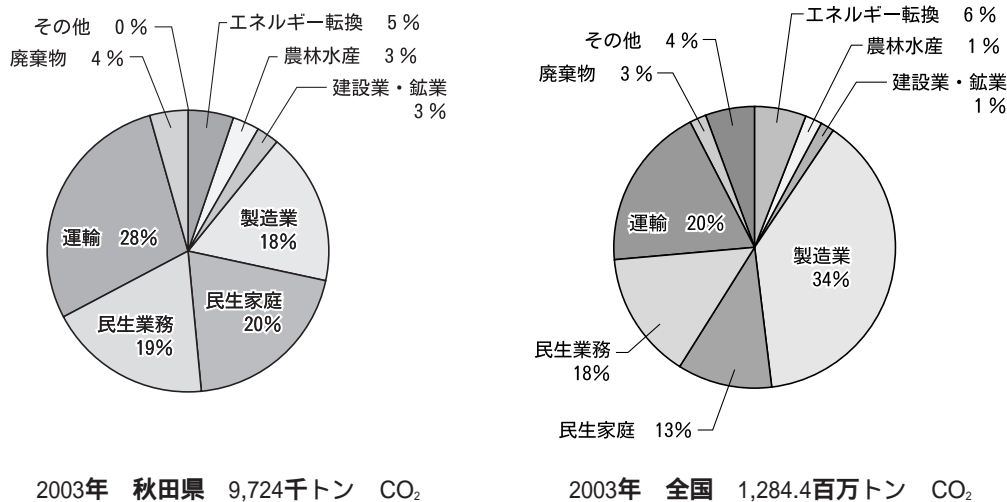


図4 部門別二酸化炭素排出量の構成

たのは菜の花をシンボルにして、循環型社会の形成を目指そうというものである。その具体的目標として 家庭内の廃食油の回収システムを構築してバイオディーゼル燃料 (BDF) の利活用を推進 菜の花栽培と菜種油の利用拡大 バイオエタノールの推進戦略の検討 県内バイオマス資源活用のバイオ燃料の地産地消技術の開発 等である。つまり、世界的な脱化石燃料からバイオ燃料の生産体制の確立を目指しているのである。その萌芽は小坂町で既に見られる。菜の花由来のバイオエタノールの生産システムである。

同町は小坂鉱山の企業城下町とも言えるほど鉱山の果たす役割は大きい。製錬の難しい複雑鉱 (黒鉱) の製錬技術を駆使して採掘をやめた後も海外鉱の製錬を続けており、内陸型製錬としては国内唯一のユニークな製錬事業である。この技術を駆使して、近年は産業廃棄物、IT・家電製品からの金属リサイクル、いわばアーバンマイン (都市鉱山) と呼ばれる事業に乗りだしている。世界的に需給が逼迫している金、銀、アンチモンやリチウムなど希少金属 (レアメタル) の回収事業もスタートさせた。携帯電話1台には金が6.8^{ミリグラム}使われており、金鉱石より含有量が高い。そのうえで、鉱山廃棄物以外の廃棄物をも一切町外に出さないシステムを目指している。その町内リサイクル、つまり、町内の家庭、農業、畜産などでも完全リサイクルを実現するまちづくり (バイオマスタウン) に取り組んでいる。その一環が菜の花プロジェクトである。

2006年から転作田など遊休農地約30^{ヘクタール}に菜の花を植え、菜種から採油し、油粕は家畜の飼料や肥料に。菜種油は食用に回し、使い終えた油を回収・精製してBDFに加工し農業機械の燃料に使う完全循環型農業確立を構想。既に菜種の搾油施設が2008年1月に完成、町産菜種油の販売を始めている。事業費は約2200万円。生産 消費 回収 BDFとして再利用が動き出している。問題はいかに能率的に菜の花を栽培し、菜種油を精製できるかにある。海外産に比べかなりのコスト高を低減させるかが問われている。

小坂町以外でも、菜の花に魅せられて菜の花栽培に取り組んでいるケースが目立つ。例えば秋田県立大学の菜の花プロジェクトと県トラック協会を中心とした秋田菜の花ネットワークの共同作業として2007年9月、秋田市飯島の秋田湾産業新拠点地8^{ヘクタール} (大王製紙進出予定地、既に撤回) に菜の花を植えた。現地は埋立地で養分は少なく、塩分が多い。海が近く強い潮風にさらされる植物栽培には不向きな土地。そこで大仙市にある県畜産試験場から堆肥を大量に運び込み、化学肥料を入れての栽培となった。

「循環型社会」を目指しての、限界農地での挑戦、さらには菜の花で市民に潤いを与える効果をも含め、というが、こうなると本来の目的からはずれた「お遊び」ともとれる。

言うまでもなく、バイオエタノール製造・利用の真の狙いは温暖化ガスの削減にある。つまり菜の花栽培に消費した化石燃料による温暖化ガス排出量と菜の花由来によるバイオエタノール使用による温暖化ガス抑制量のバランスシートは如何に、との視点である。換言すれば、温暖化ガス削減に確固たる道程・目的設定がない限り、それは「お遊び」と批判されても致し方ない。啓蒙時期はもうとっくにすぎているのである。事実を持って示すことが何より肝心であり、安易に取り組むことは、温暖化ガス排出量を増やすだけである。

この視点は本論文の核心に据えている重要な論点である。安易な見せ掛けのいとなみは環境問題に対する批判のマトをふやすだけになってくる。事実、バイオ燃料化政策を先行させている EU では食物から作った燃料で自動車を走らせることに矛盾を感じ、さらに BDF の価格高騰から批判の声が高まっている。BDF 生産の 8 割が菜種油から作られている EU では生産コストの高騰や BDF 生産で土地が痩せ食品価格に影響が出ると反発。エタノール生産が農業用地にかかる負担は、それをもたらす CO₂ 排出量のささやかな削減に見合うかどうかという論議が始まっているのである。わが国でもこうした視点によろやく目が向けられて、論議に発展していることに注視すべきである。

米と木質バイオマス

菜の花由来のバイオ燃料は菜の花畑を観光資源としても活用できることからバイオ燃料作りを副次的にとらえての取り組みが目立つ。特に前述したごとく、県が「菜の花バイオエネルギーチーム」を設置してからは菜の花こそバイオ燃料の主役ととらえがちである。しかし、米作主体の秋田県農業では菜の花はなじまない。何故なら菜の花は連作障害があり、しかも畑作の作業体系に慣れていない農民にはとっつきにくい作物である。それよりも、得意技を生かした米作りにかけたほうがこの上なく合理的である。しかも、県内には転作田、耕作放棄地が年ごとに増えている。この農地保全のためにも食料以外の米作りに取り組んだ方が得策である。耕作不適地に労多くして菜の花を植えるより数倍温暖化防止に役立つであろう。

「日本におけるバイオ燃料の原料としては米が一番適している」との東京大学院農学研究科の森田茂紀教授の主張を持ち出すまでもなく、冷静に秋田県農業を直視すれば、自ずと米が浮上するであろう。ブラジルがサトウキビを、米国がトウモロコシをバイオ燃料の主役に据えているように、日本での主役は米をおいてほかにない。バイオ燃料を生産する場合、国内生産食料と競合しないなど、ほかに悪影響を与えないことが大前提である。米国やブラジルを教訓にしてのことである。米はわが国では長年過剰生産に悩まされている。政府が作付け制限を始めてから実に40年近くになる。政府は毎年、多額の転作奨励金を交付して米の生産抑制に努めているが、在庫は増加一方で、米価も低落の一途である。このような米過剰を背景に国内ではよろやく、米由来のバイオ燃料づくりに取り組むケースが見られるようになってきた。

日本一の米どころ新潟県では08年5月、全国農業協同組合連合会（JA 全農）が米を原料とするバイオ燃料製造工場建設に着手する。09年からの製造・販売を目指す。原料は多収米の「北陸193号」など。本来は家畜の飼料用に開発されたが、将来のバイオ燃料生産のため06年から低コストで量産する試験栽培を進めてきた。年間1000^{キログラム}の生産を見込んでいる。北海道では北海道農業協同組合中央会（JA 道中央会・札幌）などが60億円をかけて清水町に製造工場を建設する。当初はてん菜や規格外の小麦を原

料とするが、軌道に乗れば米を原料とすることを視野に入れている。年間生産高は1500*₁₀、08年末の操業を目指している。全国3位のコメ生産県である秋田県では、菜の花づくりは盛んだが、米由来のバイオ燃料製造の動きははまだ見られないのはどうしたことが。実に歯がゆい。

稲作は菜の花と違い連作障害がないことが有利な点である。2000年にわたり連綿として続けてきた稲作だが、いまは減反政策、農山村の高齢化に伴う過疎化が追い討ちをかけ、水田が消え、里山が荒れるに任せているのが現状である。このような農山村を再生させて農山村に元気を呼びもどす方策の一つが食料用以外の米作りである。それは環境を守り、雇用を創出し、地域に再び明るい展望を拓くことになるに違いない。秋田の水田比率は藩政時代に75%を超え、米余りの現在でも80%に及んでいる。米こそが秋田の最高・最適の生物資源であるのだ。豊富な栽培ノウハウ、確立された稲作体系、十分に装備された農機具。稲作は畑作に比べ圧倒的に比較優位性を有しているのである。

安い米を得意の多収技術（過去に幾度も多収日本一を記録）を駆使し、多収米を非耕起、直播などの省力化を徹底してコストダウンをはかる。これこそが、米作県・秋田の真骨頂発揮のときなのである。バイオ燃料の原料ばかりでなく、飼料作物としても有効である。秋田県は畜産不振にあえいでいる。海外に依存している飼料が高騰し追い討ちをかけている。海外産に引けを取らない価格にまで下げることにより、畜産振興の起爆剤にする絶好の機会なのである。こうして保全された農地はいったん食糧危機に陥った場合には即座に、食糧生産に転換することが出来る。

米とともに秋田が有する有力な資源に森林がある。県土の70%以上が森林である。京都議定書では日本に義務づけられたCO₂ 6%削減のうち3.8%分を森林が吸収することを認めている。森づくりはCO₂削減につながるのである。森林のCO₂吸収機能にもっと目を向けるべきである。「もっと木を切れ」と森林研究者はいう。エツと思う発言だが、真意はそこにすぐ木を植えよ、と続く。CO₂吸収力は樹齢10~20年が最大となることがわかっている。特に杉やヒノキは顕著で樹齢20年以降は急速に吸収力が落ちてくる。ブナは例外で35年がピークでその後は80年近くまで持続する。しかし、更新が遅れているため、林野庁の調査では森林によるCO₂の吸収分は2.6%しかないとのことだ。森林の更新、手入れがいかに大事か理解できよう。間伐や下刈りをして、光合成を高めて不足分の1.3%分をカバーしなければならないのである。CO₂吸収機能ばかりか、土壌保全機能を維持する上でも森林の手入れは重要である。しかし、海外からの安い木材が輸入されて、国産材を圧迫し、木を切っても採算取れない、と放置されるケースが多い。何しろ食料自給率が40%を切ったとって大騒ぎしているが、木材自給率はたった18%に過ぎないのに、こちらを問題視する人が限られているのは不思議である。

このようなCO₂吸収機能のほかに森林には木質バイオマスの利用の側面もある。それも立派な木材利用でなく、廃材や製材に伴って出る端材の有効活用なのである。07年に国内有力企業16社がバイオ燃料技術革新協議会を発足させた。建築廃材などを集めてエタノールを製造しようというもので、技術的にはクリアーしているものの、コストとなると、まだ遠く及ばない。現在、国内でのバイオエタノールの生産コストは最も効率のよいサトウキビからでも1*₁₀140円程度である。新技術開発により15年までに同40円を目指すという

国内では活発に動いているが県内では米由来のバイオ燃料同様動きはない。ようやく07年11月、県立大学木材高度加工研究所木質バイオマス研究会が秋田市で講演会を開催し県民の理解を深めた程度である。講演会の講師は2人。1人はNEDO（新エネルギー・産業技術総合開発機構）の研究者による「NEDOにおけるバイオマスエネルギー技術開発の動向」のテーマで全国のバイオマス製造の実態を紹介した。もう1人は「建築廃材利用の燃料用エタノール製造」と題する大阪で行っている建築廃材を用

いたエタノールの生産の実際を説明した。

NEDO 研究員の講演はバイオ燃料開発の展望、製造目標を示したもので、それなりに理解は得られた。もう1人の建築廃材を用いたエタノール製造の実際は国の助成による事業だが、その製造原価は示されず隔靴搔痒の域を出なかった。自社の製造の実態の他に一般論では「都市部では建築廃材が原料だが、秋田のような農山村では、稲わらを土に返すことなく、すべて原料にすべきだ。そして木質系のエタノール原料として、風倒木や間伐材を用いることだ」と強調した。このような提案は全くコストを無視した認識である。国の補助制度にどっぷり浸かって起業化した方には、農山村での労働力がどのような状態にあるか理解していない。例えば風倒木をだれがどのようにして集めるのか、を知らない。都市部での建築廃材を重機で運ぶとはわけが違うのである。さらに、水田から稲ワラを根こそぎ除去したら、水田の土壌はどうなるかも関係なしである。最後に、「食料か、エタノールかの選択でもある」とおっしゃる。米国、ブラジルでのエタノール生産が、食料価格を押し上げている現実をみての言及だと思いが、日本では、休耕地が38万^{ヘクタール}と東京都の面積の1.8倍に達していること、米余りの現在エタノールの原料として使用しても、米の価格上昇にはつながらないことが理解できていないようだ。エタノール生産、つまり、温暖化防止策が、複眼的な目配りが必要であることを如実に示している好例であった。

地球温暖化防止策への批判を受け止めよ

地球温暖化防止は IPCC の報告にあるように今世紀における喫緊の課題である。問題解決が遅れば遅れるほど解決の道は険しくなることは衆目の一致するところである。上記のように自らバイオエタノール生産に携わっている人間でも、それが、真に温暖化ガス削減に貢献しているかの検証をしているかどうか疑問である。それ故か近年、「CO₂ 温暖化説は間違っている」とか「環境問題はなぜウソがまかり通るのか」などきついタイトルの書が新聞広告欄等をにぎわしている。著者はれっきとした大学教授である。アル・ゴア氏のノーベル平和賞受賞対象となった「不都合な真実」の内容にさえ、事実と違ふと真っ向否定する研究者さえ現れている。勿論環境問題についての研究書、啓蒙書はそれに数倍する数が出版されている。どれが真実か、は将来予測の側面があるだけに黒白はつけがたいところがある。

しかし、啓蒙書などのなかには温暖化防止の手段そのものを目的にしたような書き方が多いのも事実である。たとえば、バイオエタノール生産についてみても生産そのものが目的化されて、その製造過程でどれほど CO₂ が排出されるか、頓着なく取り組んでいるケースが見られる。

つい最近、問題になった古紙混合率をごまかした製紙会社や再生品の配合率を偽って出荷した再生樹脂（プラスチック）偽装事件などは、資源リサイクルを考えさせる好例である。

古紙の混入率を偽装した製紙会社は大手5社のほか、中堅企業など日本製紙連合会加盟の主要製紙会社が軒並み偽装していたと発表した。発覚のきっかけはテレビ局への内部告発だった。日本製紙が年賀はがき用紙に古紙の混入率を規定（契約）の40%を大幅に下回って製造したと発表せざるを得なくなったのである（08年1月16日）。その後偽装は日本製紙に留まらず最終的には18社にまで及び（自発的発表）業界全体に蔓延・恒常化していたことが明らかになった。古紙混入率は平均で1~20%だということから古紙混入を信じて購入した消費者を欺瞞した罪は大きい。年賀はがきにとどまらず、ほかの用紙全般でも偽装が行われていた事が白日の下にさらけ出された。

何故このようなことが業界ぐるみで行われていたか、を追及すると環境問題の核心に迫る事実が明らかにされる。紙の原料は木材パルプであることから、製紙会社は森林伐採 = 自然破壊の元凶とのイメージが付きまとう。その払拭のため、植林に励み（勿論原料確保策でもある）資源の循環・リサイクルの

優等生の役割を果たさなければならない。しかし古紙混入率を高めるためにはさまざまなハードルをクリアしなければならない。リサイクルされたパルプ繊維はバージンパルプ（新しいパルプ）より繊維が短くなりその分品質が低下する。加えて古紙の印刷墨、不純物を取り除くための高度な技術が要求される。古紙100%の紙は古紙を全く混入しない紙に比べて白さなどの品質面で劣る。にもかかわらず、国などの行政機関に環境配慮製品の購入を義務付けたグリーン購入法に則った製品を製造するには、コスト面や技術面での壁を乗り越えなければならない。しかも「再生紙」の法律上の定義はない。となれば混入率1%でも再生紙と銘打つことも可能である。そこに偽装の余地が生じてくるのである。「再生紙」を規定する定義の確立、その紙質についての消費者との合意形成が不可欠であろう。

再生樹脂についても品質保持のため再生原料の混入率の表示を下回る製品を出荷したと、メーカーは説明する。リサイクルの落とし穴といってもよいであろう。このような矛盾を抱えたまま「環境優先」を掲げての取り組みは環境問題の専門家と称される人々の絶好の餌食にされているのである

循環型社会形成のための基本概念として、国、県、自治体あげて Reduse（発生抑制）Reuse（再利用）Recycle（再生利用）の3R運動を展開している。すべての主体による3Rの推進及び適正処理によって温暖化ガスの発生を抑制しようというものだ。この運動に異議を唱えるつもりはないが、徹底的なリデュースを図ることにより資源の無駄使いをなくし、リユースにより効率的に資源が利用されることを念頭に入れての推進が求められる。問題はリサイクルである。前記の製紙、塩化ビニールの例でも分かるようにリサイクルにはかなりの化石燃料を必要とする。やみくもにリサイクルをすればよいというものではない。そこにはリサイクルによって得られるCO₂の排出削減量とリサイクルに必要な化石燃料使用によるCO₂の量を天秤にかけることが必要だ。これについて既に研究者は客観的な数値を示している。EPR⁴⁾である。

EPRとはEnergy Profit Ratioの略である。つまり出力エネルギーを入力エネルギーで割ったものである。一言で言えばエネルギー利益率のことである。EPRが1以上であればエネルギーの質がよいということを意味する。1998年に世界の学会で公表されたという。

石井吉徳・東大名誉教授（もったいない学会長）によると、巨大油田ではEPR比率は60倍程度、オイルシールドは0.7程度。今、脚光を浴びているエタノールはサトウキビ由来が0.8から1.7。トウモロコシは1.3。ブラジルのサトウキビが8と高い。何故高いかといえばあまり機械化していないうえ、化学肥料もほとんど使用しないで栽培しているからである。もう一つサトウキビが有利なのは絞れば糖が出るのでそのまま発酵させてアルコールになるが、トウモロコシはいったん糖にするプロセスが必要で、サトウキビより化学的なプロセスが一つ多くなるからである。菜の花由来のバイオエタノールは栽培・精製・廃油の集荷・精製の過程を経ての製造だけにEPR数値がどれほどなのかは見当もつかない。栽培に取り組んでいる当事者は試算すらしていないと考えられるし、そのような視点も持ち合わせていないのではないかと思われてくる。だからこそ、菜の花の観光資源としての側面、或いは限界農地への実験などと逃げをうっているのではなかろうか。

実験段階から即座にEPR指数を1以上にせよというのは酷かもしれないが、環境対策上の試みというからにはこの視点を重視し、1以上にレベルアップする道程を示してから取り組むべきである。そうでないと、やっていること自体が、環境へ逆に負荷を与えることになるのである。自然エネルギーについてもEPRの概念を導入して実施すべきなのである。

結びにかえて・地産地消が地域をつくる

環境問題を考える時、最も必要なのは入力エネルギーを如何に少なくするかにあることが理解できたであろう。そのための一方法として生産地と消費地が限りなく近いことが必要である。

生産物を消費地まで運ぶ輸送コストが削減されるからである。京都議定書で義務付けられた温暖化ガス削減で最も困難な部門は輸送部門であることを考えてもよく理解できよう。それ故に、近年とみに強調されているコンパクトなまちづくりの実現が待たれる。しかし、一旦無秩序に広がった街をコンパクトにまとめるのは大変なエネルギーを必要とする。

その意味では平成の大合併で非合併を貫いた町村はおしなべて環境保全にマッチしたまちづくりをしていることが分かる。小坂町については前述したが、世界遺産にわが国で初めて屋久島とともに指定された白神山地の裾野に広がる藤里町は実にエコロジカルなまちである。

町内に入ると家々のそばには薪がうずたかく積み上げられている。一冬に焚く燃料である。白神山すそ野に広がる里山から切り出したもので、切った跡にはすぐ植林するのは言うまでもない。町民のほとんどが現在も熱源はまきストーブだという(写真1、2)。住民のほとんどが山持ちなので、自宅を新築する時は自分の山から切り出した木材で新築する。見事なまでの地産地消である。現在、新築用の木材の多くが海外から運ばれてくるのだが、藤里町は町内の木材でほとんどを賄うというから温暖化ガスの放出は薪ストーブの使用とあいまって、町全体のEPRの数値は極めて高いことがうかがえる。

県内の山から切り出した木材で住宅を建設するケースは藤里町以外でも各地で見られるようになってきている。例えば秋田市雄和地区の建設会社では、住宅の建築依頼主に自山の杉を選ばせて、用材を切り出して使用するシステムを採用している。

村の面積の92%が森林である上小阿仁村は人口約3000人と秋田県一少ないが、自立を選択した。明治時代から植林に精を出し、立派に育った秋田杉を計画的に伐採し、村の財源に充てるとの計画からである。森林の恵みを十分に享受している。平成8年、湧き出た山ぶじ温泉は冷泉のため、当初は加熱の熱源を石油に頼っていたのを、木質ペレットに切り替えて村内自給を果たすなど、ペレットボイラーの導入により村内のCO₂の発生を極力抑えている。村内の森林から発生する酸素供給量を丁寧に確保する村づくりをしているのである。

農業県・秋田において農産物の地産地消が着実に増えてきていることにも注目したい。道の駅などに



写真1 白神山地の里山に近い藤里町の集落の家々の前にはマキが積み上げられている



写真2 町の集会所でもマキストーブが使われている

直売所を設け、近隣の農家が野菜類を持ち寄り売りさばく。新鮮さと生産者の顔が見えるのが受けて売り上げを伸ばしている。そこでは輸送コスト、包装代、ましてや冷凍・冷蔵代ともゼロに近いのである。中国産の冷蔵ギョーザ事件に見られるリスクとも無縁である。あくまでも有機農業を徹底して循環型地域社会を構築することにより、温暖化ガスの排出が抑制される。3Rについても、EPRの視点を常に念頭に置きその数値を高めることが地域づくりにつながることは間違いない。森の文化、農文化を守り育てることがこれからの秋田県における環境保全の道なのである。

[注]

1) 京都議定書

1992年の国連の会議で温暖化防止を目的とした基本的な条約である気候変動枠組条約が締結され、京都議定書はこの条約に基づき1997年に京都で開催された温暖化ガス排出削減の枠組みを定め、2005年ロシアが批准したことで発効した。地球の温暖化防止のため、二酸化炭素(CO₂)や代替フロンなど熱を閉じ込める効果がある温暖化ガスの排出抑制を先進国に義務付けた国際的な取り決めである。米国は議定書から離脱したが条約にはとどまっている。批准国は1990年比で2008～12年の間に国ごとに決められた排出抑制目標の達成が求められている。日本は6%減だが、我国のCO₂排出量は04年度に90年度比で13%増えた。特に家庭と運輸(自動車など)の伸びが大きく目標達成は厳しい状態。世界最大のCO₂排出国である米国が参加していないため、実効性に問題がある。CO₂の排出抑制は経済活動の制約につながるため、各国の取り組みの合意は難しい。早くもポスト京都議定書の論議が始まっているが、海外では京都議定書を単に「京都」と略称して論議を高めている。先進国と中国やインドなど排出量が急増している途上国との利害調整がむずかしく、新たな局面を迎えている。

2) IPCC = intergovernmental panel on climate change の略。

人為起源による気候変動化、影響、適応、及び緩和方策に関して科学的、技術的、社会経済学的な見地から包括的な評価を行うことを目的にして、1988年に世界気象機関(WMO)と国連環境計画(UNEP)により設立された組織。議長、副議長と三つの作業部会及び温室効果ガス目録に関するタスク・フォースから構成されている。第一作業部会は気候システム及び気候変化の自然科学的根拠についての評価。第二作業部会は気候変化に対する社会経済及び自然システムの脆弱性、気候変化がもたらす好影響・悪影響、並びに気候変化への適用のオプションについての評価。そして第三部会は温室効果ガスの排出削減などの気候変化の緩和のオプションについての評価、温室効果ガス目録に関するタスク・フォース：温室効果ガスの国別排出目録作成手法の策定、及び改定を担っている。

これまで三回評価報告書を発表してきた。世界の専門家や政府の査読を受けて作成されたもので、「気候変動に関する国際連合枠組条約(UNFCCC)」をはじめとする地球温暖化に対する国際的な取り組みに科学的根拠を与えるものとして重要な役割を果たしている。1990年から四次にわたり評価報告書を作成しているが、2007年11月に発表された第四次評価報告書は3年間の歳月をかけ、130を超える国の450人以上の代表執筆者、約800人の執筆協力者、2500人以上の専門家の査読を経て順次公開された。

わが国の多くの研究者の論文が数多く引用されたほか、32人の研究者が執筆した。

3) バイオエタノール

ガソリン代替燃料として近年急速に脚光を浴びているバイオエタノールは原料の植物が成長過程で二酸化炭素(CO₂)を吸収するため、燃やしてもCO₂を排出したとみなされない。また軽油に混ぜるバイオディーゼル(BDF)もある。菜種、大豆、ヤシなどを原料とし、日本では廃食用油などの再利用も進められている。政府は2030年度までにガソリン消費量の10%を国産バイオ燃料で賄う方針である。

バイオ燃料は、ブラジル日系人のシゲアキ・ウエキさんが鉱山動力相時代に考え出し、エタノール燃料の元祖といわれている。化石燃料の乏しいブラジルでは国策としてサトウキビ由来のエタノールを生産し、年間(06年)1,783万*₀ℓを生産している。20～25%を混合することを義務化。米国はトウモロコシを1,985万*₀ℓ、EU各国も免税措置で普及に乗り出している。日本は緒についたばかりで、生産量は30*₀ℓ。サトウキビ、糖蜜や建設廃材などが原料。植物由来のバイオ燃料は食物と競合し、価格を高騰させたばかりか、ブラジルでは熱帯雨林がサトウキビ栽培のため急速に失われている。同国立宇宙研究所の調べによると、07年8月～12月の5ヶ月間に東京都の面積の約1.5倍に相当する約3200平方*₀が消滅した。

アマゾンの森林劣化は地球規模の温暖化を加速させるばかりでなく、北米の穀倉地帯や東アジア、インドまで降雨量を減らすなど広範囲に影響を及ぼすとされている。米国ではトウモロコシ価格が高騰し、小麦栽培から転作する農家が増えて、穀物価格が暴騰しそれに依存している日本の畜産農家の経営を圧迫している。環境問題の権威のレスター・ブラウン博士は「米国が04年に自動車用エタノールに使った3千万*₀のトウモロコシで、平均的な消費水準の1億人に食料を提供できる」と警告している。このように世界的にはバイオ燃料生産が各方面にひずみをもたらしており、温暖化防止の難しさを浮き彫りにしている。

4) EPR (Energy Profit Ratio)

出力エネルギー ÷ 入力エネルギーのこと。入力エネルギーは石油、地熱など物を動かすエネルギー源。入力エネルギーは石油を例にとるとエネルギー源になるまで、物理探査、掘削、輸送、精製、販売など多くのエネルギーが使われるが、この合計。EPRは必ず1より大きいことが必要。1より小さいことはエネルギーを作れば作るほどエネルギーの総量が減少することになる。EPRは輸送手段、利用形態、利用技術、環境に与えるコストなどを考慮して算出ことが出来るのでエネルギーの評価に優れた指標である。

参考文献

- ・気候変動に関する政府間パネル (IPCC) 第4次評価報告書統合報告書
- ・気候変動枠組条約第13回締約国会議 (COP13) および、京都議定書 第3回締約国会合 (COP/MOP3) 出席報告 地球環境フロンティア研究センター・近藤洋輝
- ・不都合な真実 = ECO入門編 アル・ゴア k k ランダムハウス講談社 2007年
- ・平成19年度版・秋田県環境白書 秋田県
- ・秋田県地球温暖化対策地域推進計画 秋田県 2007年
- ・石油ピークが来た 崩壊を回避する「日本のプランB」 石井吉輝 日刊工業新聞社 2007
- ・環境問題はなぜウソがまかり通るのか 武田邦彦 洋泉社 2007

秋田県の高齢者施設および福祉施設における栄養支援の実態調査

法 吉 千佳子

要 約

近年、高齢者施設および福祉施設で利用者のQOL（Quality of life：生活の質）を向上させることが求められており、栄養支援はその重要な役割を果たす。高齢者施設および福祉施設におけるQOLの向上を考慮した効果的な栄養支援を行うため、秋田県内の高齢者施設および福祉施設における栄養支援の実態を調査した。秋田県内の高齢者施設および福祉施設へ勤務する栄養士と管理栄養士の多くが所属する秋田県栄養士会福祉栄養士協議会会員を対象にアンケート調査を行った。その結果、QOLの向上を考慮した効果的な栄養支援を行うためには、特に非経口栄養法（経静脈栄養および経腸栄養）の投与栄養量と嚥下障害に対する支援および薬物の副作用や相互作用が及ぼす影響についての対応で改善が必要であることが明らかになった。

緒 言

高齢者の増加により種々の施設も増え、高齢者施設および福祉施設における入所者のQOLの向上がより一層求められるようになってきた。QOLを向上させるには、多くの労力と長い時間を必要とする。よって、QOLを向上させることは容易なことではないが、入所者のQOLの向上を考慮した栄養支援^{注1)}を行うことで、入所者の全身状態にも良い影響を与えたとの報告がある¹⁾。高齢者施設および福祉施設において、QOLの向上に効果的な栄養支援を行うためには、その実態を包括的かつ系統的に調査する必要がある。しかし、現在のところ栄養支援に関する研究は、特定の栄養素と疾病の関連性などを施設単位で調査したものが多く、包括的かつ系統的に調査されたものは少ない。2004年3月に高齢者の栄養・食生活ガイドライン作成事業^{注2)}で行われた「高齢者福祉施設等における栄養および給食管理の実態調査」が、最初の大規模な系統的な全国調査のようだ²⁾。したがって本研究は、秋田県の高齢者施設および福祉施設における栄養支援の実態を把握し、QOLを考慮した効果的な栄養支援を行うため、その改善すべき点を明らかにすることを目的とした。

注1) 栄養支援：栄養管理に関わる全てのサポート

注2) 高齢者の栄養・食生活ガイドライン作成事業：独立行政法人国立健康・栄養研究所（厚生労働省請負事業）

方 法

アンケートの調査対象と実施方法

平成19年11月、秋田市内にて行われた秋田県栄養士会福祉栄養士協議会^{注3)}研修会参加者へ、アンケート（自記式）を依頼し研修会終了後回収した^{注4)}。アンケート調査に回答いただいた栄養士および管理栄養

養士が所属する施設の詳細は表1に示した。本調査においては、アンケートに施設の名称や記入者名を記載しない様式とし、施設の特がされないよう個別情報の保護に配慮した。

注3) 秋田県栄養士会福祉栄養士協議会：秋田県栄養士会会員のうち、高齢者・福祉施設等へ勤務する会員が所属する協議会

注4) アンケート配布は85で回収は53。(回収率は62%)

表1 アンケート調査に回答いただいた栄養士および管理栄養士が所属する施設

施設の種類	アンケート協力者人数 (人)	比率 (%)
1. 介護老人保健施設 ^{a)}	12	23
2. 特別養護老人ホーム (介護老人福祉施設) ^{b)}	24	45
3. 養護老人ホーム ^{c)}	4	8
4. 障害者施設 ^{d)}	8	15
5. その他の施設 (短期入所生活介護事業所 ^{e)} 、デイサービス ^{f)} 、保育所など)	5	9
合 計	53	100%

a) **介護老人保健施設**：医学的な管理が必要な病状安定期の要介護者が入所する施設で介護保険法による都道府県知事の開設許可を受けた施設。規定により、医師、看護師及び介護その他の業務に従事する従業員数が「介護老人福祉施設」より充実している。

b) **特別養護老人ホーム (介護老人福祉施設)**：65歳以上で、身体上又は精神上著しい障害があるために常時の介護を必要とし、かつ居宅にてこれを受けることが困難な者を入所させ、養護する施設。(介護保険法による都道府県知事の指定を受けると介護老人福祉施設とも呼ばれる。)

c) **養護老人ホーム**：65歳以上で、身体上又は精神上又は環境上の理由及び経済上の理由により、居宅において養護を受けることが困難な者を入所させ、養護する施設。

d) **障害者施設**：社会復帰を目的に機能回復訓練や職能訓練を行う更生施設、雇用されることの困難な者に必要な訓練を行い自活させる授産施設、常時介護を要する者に治療及び養護を行う療護施設がある。

e) **短期入所生活介護事業所**：家族等が(旅行・冠婚葬祭・介護疲れ・病気等のために)一時的に在宅介護ができなくなった場合等、短期間の入所をして生活全般のサービスを受けられる施設。

f) **デイサービス**：身体上・精神上の障害があるため日常生活を営むのに支障がある65歳以上の者に、入浴、機能訓練、給食(昼食)等のサービスを提供する施設。

アンケートの調査項目と評価方法

主観的包括的評価 (SGA)^{注5)}を基に栄養および食事量、身体状況、自覚症状の確認、薬、身体計測、主観的問題について調査項目 ~ を作成した(表2)。回答は、「はい」、「いいえ」、「どちらとも言えない」、「分からない」、については「実施なし」も加え、このうち1つを選ぶ形式とした。回答が「はい」ならば適切を、「いいえ」ならば不適切を、「分からない」ならば状況の確認ができない環境、または知識不足のため状況を判断できないことを意味すると解釈した。

注5) 主観的包括的評価 (SGA: Subjective global assessment)：臨床的問診と身体検査の2本柱で構成されており、特殊な装置を使用せずに栄養評価の総合的な情報を得ることが可能。

表2 調査項目

経口栄養量は適切だと思いますか。

PPN（末梢静脈栄養）、TPN（中心静脈栄養管理）、EN（経腸栄養補給）の投与栄養量は適切だと思いますか。

嚥下障害の状態を把握し、それに適した食事や栄養を提供していると思いますか。

食欲不振の時、（入所者に）消化機能の不調、便秘の有無などを確認していますか。

食事の時の姿勢と食欲の関係なども考慮し、その改善に努めていますか。

消化機能の状態に適した食事を提供していると思いますか。

薬物の副作用や相互作用が及ぼすことについて適切な対応をしていると思いますか。

体重や体重変化率をアセスメント（評価）し、食事や栄養の提供に反映させていますか。

利用者の体調を、生化学的検査の数値以外（皮膚の状態、主観的な事柄など）からも観察はしていますか。

利用者の全体の様子、普段の食生活等を踏まえて食事を提供していますか。

結果と考察

『調査項目 経口栄養量は適切だと思うか』については、「はい」が全施設で62%、介護老人保健施設と養護老人ホームで各75%、障害者施設で62%、特別養護老人ホームで58%であった。その他の施設では40%に留まったが、その他の施設には昼食のみの提供や個人対応が定められていない施設が含まれていることが影響していると考えられる。不適切を意味する「いいえ」は全施設で0%であった（表3）。例えば、高齢者には消化吸收能力の低下や体調の不安定さがあり、毎食、一定の食事量を摂ることは容易ではない。しかし、管理栄養士または栄養士が身体状況および喫食状況などを詳細に把握したうえで食事等の提供をすれば、適切な経口栄養量を摂取する施設利用者の割合は更に高まると考えられる。

表3 調査項目の結果

		はい	いいえ	どちらとも言えない	分からない	無回答
全施設 (n=53)	(人)	33	0	15	1	4
	(%)	62	0	28	2	8
1. 介護老人保健施設 (n=12)	(人)	9	0	2	0	1
	(%)	75	0	17	0	8
2. 特別養護老人ホーム (n=24) (介護老人福祉施設)	(人)	14	0	10	0	0
	(%)	58	0	42	0	0
3. 養護老人ホーム (n=4)	(人)	3	0	0	0	1
	(%)	75	0	0	0	25
4. 障害者施設 (n=8)	(人)	5	0	0	1	2
	(%)	62	0	0	13	25
5. その他の施設 (n=5)	(人)	2	0	3	0	0
	(%)	40	0	60	0	0

『調査項目 末梢静脈栄養^{g)}、中心静脈栄養管理^{h)}、経腸栄養補給ⁱ⁾の投与栄養量は適切だと思うか』について、これらは非経口栄養法といわれ、利用者の身体状況により口からの栄養補給が不可能あるいは不十分な場合に実施される栄養補給法である。回答者、全53人中「実施なし」と回答した12人を除く41人の回答を対象とした。結果は「はい」が全施設で37%、介護老人保健施設で33%、特別養護老人ホームは41%であり、これらは「どちらとも言えない」より低かった。障害者施設は「はい」が67%であった。注目すべきことは、全施設で適切を意味する「はい」は37%に留まり、残りの63%が適切とは言えない状況にあることである（表4）。

g) 末梢静脈栄養：末梢の静脈から点滴する低カロリー輸液で1日に必要なエネルギーを与えることはできない。2週間未満で行う。

h) 中心静脈栄養管理：心臓に近い大静脈（中心静脈）までカテーテルを挿入して生命維持に必要なほとんど全ての栄養素を含有する高カロリーの輸液を補給する方法。カテーテル挿入による感染症の危険性が高く、腸管の廃用性萎縮の心配もある。

i) 経腸栄養補給：腸管の消化吸収能力は保たれているが、経口摂取ができない場合などに、消化管内にチューブを挿入して栄養を注入する方法。

表4 調査項目の結果

		はい	いいえ	どちらとも言えない	分からない	無回答
全施設 (n = 41)	(人)	15	1	20	1	4
	(%)	37	2	49	2	10
1. 介護老人保健施設 (n = 12)	(人)	4	0	8	0	0
	(%)	33	0	67	0	0
2. 特別養護老人ホーム (n = 22) (介護老人福祉施設)	(人)	9	1	11	1	0
	(%)	41	5	50	5	0
3. 養護老人ホーム (n = 2)	(人)	0	0	0	0	2
	(%)	0	0	0	0	100
4. 障害者施設 (n = 3)	(人)	2	0	0	0	1
	(%)	67	0	0	0	33
5. その他の施設 (n = 2)	(人)	0	0	1	0	1
	(%)	0	0	50	0	50

『調査項目 嚥下障害の状態を把握し、それに適した食事や栄養を提供していると思うか』について、「はい」は全施設で52%、最も高い割合だった特別養護老人ホームでも63%に留まり、養護老人ホームと障害者施設で各50%、介護老人保健施設で42%、その他の施設で40%であった。「いいえ」は介護老人保健施設で17%、特別養護老人ホームで4%であった。「どちらとも言えない」が介護老人保健施設で42%、養護老人ホームと障害者施設で各50%であり「はい」と同じ割合であった（表5）。嚥下障害の状態を正確に把握するためには、食事の時の姿勢および薬の副作用等も考慮する必要がある。嚥下障害への対応は、多職種連携が特に不可欠と考えられる。

表5 調査項目の結果

		はい	いいえ	どちらとも言えない	分からない	無回答
全施設 (n=53)	(人)	28	3	20	2	0
	(%)	52	6	38	4	0
1. 介護老人保健施設 (n=12)	(人)	5	2	5	0	0
	(%)	42	17	42	0	0
2. 特別養護老人ホーム (n=24) (介護老人福祉施設)	(人)	15	1	8	0	0
	(%)	63	4	33	0	0
3. 養護老人ホーム (n=4)	(人)	2	0	2	0	0
	(%)	50	0	50	0	0
4. 障害者施設 (n=8)	(人)	4	0	4	0	0
	(%)	50	0	50	0	0
5. その他の施設 (n=5)	(人)	2	0	1	2	0
	(%)	40	0	20	40	0

『調査項目 食欲不振の時、(入所者や患者に)消化機能の不調、便秘の有無などを確認しているか』については、「はい」は全施設で77%、障害者施設で87%、特別養護老人ホームで79%、介護老人保健施設と養護老人ホームで各75%であり、その他の施設(60%)を除き75%以上であった。「いいえ」が全施設で4人の8%であった(表6)。他の調査項目に比べ「いいえ」と回答した者の割合が比較的高かったが、この中には疾病や障害のために意志の疎通が難しい利用者が入所しているケース等も含まれると考えられた。

表6 調査項目の結果

		はい	いいえ	どちらとも言えない	分からない	無回答
全施設 (n=53)	(人)	41	4	7	1	0
	(%)	77	8	13	2	0
1. 介護老人保健施設 (n=12)	(人)	9	1	2	0	0
	(%)	75	8	17	0	0
2. 特別養護老人ホーム (n=24) (介護老人福祉施設)	(人)	19	1	4	0	0
	(%)	79	4	17	0	0
3. 養護老人ホーム (n=4)	(人)	3	1	0	0	0
	(%)	75	25	0	0	0
4. 障害者施設 (n=8)	(人)	7	1	0	0	0
	(%)	87	13	0	0	0
5. その他の施設 (n=5)	(人)	3	0	1	1	0
	(%)	60	0	20	20	0

『調査項目 食事の時の姿勢と食欲の関係なども考慮し、その改善に努めているか』については、「はい」は全施設で65%、その他の施設で80%、特別養護老人ホームで75%、障害者施設で62%、介護老人保健施設と養護老人ホームで各50%であった。「はい」が50%の介護老人保健施設と養護老人ホームで「どちらとも言えない」も同じ割合の50%であった。「いいえ」は「はい」の割合が最も高かった特別養護老人ホームの8%と、その他の施設の20%で、全施設では6%であった(表7)。食事の時の姿勢は、食欲や嚥下の状態に大きく影響する。ベットの上でする食事を止め、椅子に座って食事をするだけでも腹部への圧迫がなくなり食欲が増すことは多い。やむなくベットの上で食事をする場合でも頸部の位置やベットの角度を調節することで食欲増進や誤嚥防止の効果がある。ただし、高齢者や障害者では、見守りや食事介助を必要とする場合も多く、また、食事に要する時間が長いので、それに対応できる人的資源が必要となる。よって、食事の時の姿勢と食欲の関係なども考慮し食事支援を安全に行うためには、人的資源の不足を解消することが不可欠と考えられる。

表7 調査項目の結果

		はい	いいえ	どちらとも言えない	分からない	無回答
全施設 (n=53)	(人)	35	3	13	0	2
	(%)	65	6	25	0	4
1. 介護老人保健施設 (n=12)	(人)	6	0	6	0	0
	(%)	50	0	50	0	0
2. 特別養護老人ホーム (n=24) (介護老人福祉施設)	(人)	18	2	4	0	0
	(%)	75	8	17	0	0
3. 養護老人ホーム (n=4)	(人)	2	0	2	0	0
	(%)	50	0	50	0	0
4. 障害者施設 (n=8)	(人)	5	0	1	0	2
	(%)	62	0	13	0	25
5. その他の施設 (n=5)	(人)	4	1	0	0	0
	(%)	80	20	0	0	0

『調査項目 消化機能の状態に適した食事を提供していると思うか』について、「はい」は全施設で58%、最も割合が高かったのは障害者施設で75%、最も低かったのが介護老人保健施設の42%で、特別養護老人ホームは62%、その他の施設は60%、養護老人ホームは50%であった。全調査項目の中で唯一「いいえ」、「分からない」、「無回答」の全てが0%であった(表8)。消化機能の状態は日内でも変化しやすく、それを把握するためには、ある程度の時間と労力を要する。適切な対応には的確な判断力と十分な人的資源、業務のスリム化が必要だと考えられる。

『調査項目 薬物の副作用や相互作用が及ぼすことについて適切な対応をしていると思うか』について、「はい」は全施設で57%、最も高い割合だったのは養護老人ホームの75%、次いで特別養護老人ホームは63%、介護老人保健施設と障害者施設は各50%、その他の施設は40%であった。「いいえ」は全施設で2人の4%で、特別養護老人ホームの2人であった。「分からない」は、全施設で5人の9%で、

全調査項目の中で最も割合が高かった（表9）。病状を安定させるには投薬が欠かせない場合も多い。しかし、食欲や味覚への影響もあるので、その相互作用および副作用を考慮したうえでの対応が必要である。適切な対応には薬に関する知識を習得することと医師や薬剤師等との連携が必要だと考えられる。

表8 調査項目の結果

		はい	いいえ	どちらとも言えない	分からない	無回答
全施設 (n=53)	(人)	31	0	22	0	0
	(%)	58	0	42	0	0
1. 介護老人保健施設 (n=12)	(人)	5	0	7	0	0
	(%)	42	0	58	0	0
2. 特別養護老人ホーム (n=24) (介護老人福祉施設)	(人)	15	0	9	0	0
	(%)	62	0	38	0	0
3. 養護老人ホーム (n=4)	(人)	2	0	2	0	0
	(%)	50	0	50	0	0
4. 障害者施設 (n=8)	(人)	6	0	2	0	0
	(%)	75	0	25	0	0
5. その他の施設 (n=5)	(人)	3	0	2	0	0
	(%)	60	0	40	0	0

表9 調査項目の結果

		はい	いいえ	どちらとも言えない	分からない	無回答
全施設 (n=53)	(人)	30	2	16	5	0
	(%)	57	4	30	9	0
1. 介護老人保健施設 (n=12)	(人)	6	0	6	0	0
	(%)	50	0	50	0	0
2. 特別養護老人ホーム (n=24) (介護老人福祉施設)	(人)	15	2	5	2	0
	(%)	63	8	21	8	0
3. 養護老人ホーム (n=4)	(人)	3	0	1	0	0
	(%)	75	0	25	0	0
4. 障害者施設 (n=8)	(人)	4	0	2	2	0
	(%)	50	0	25	25	0
5. その他の施設 (n=5)	(人)	2	0	2	1	0
	(%)	40	0	40	20	0

『調査項目 体重や体重変化率をアセスメント（評価）し、食事や栄養の提供に反映させているか』については、「はい」は全施設で69%、最も高い割合だったのが特別養護老人ホームの79%、次いで介

介護老人保健施設の75%、最も低い割合だったのが養護老人ホームの25%であった。「いいえ」は「はい」が75%および79%と比較的高い割合だった介護老人保健施設および特別養護老人ホームの各1人であった(表10)。介護老人保健施設や特別養護老人ホームで「はい」の割合が高かったのは、介護保険制度による栄養ケアマネジメント^{注6)}を行っていることによると考えられる。

注6) 栄養ケアマネジメント：傷病者・高齢者等に対し栄養・食事の治療計画に基づいたケア実施および評価を行うこと。

表10 調査項目の結果

		はい	いいえ	どちらとも言えない	分からない	無回答
全施設 (n=53)	(人)	37	2	12	1	1
	(%)	69	4	23	2	2
1. 介護老人保健施設 (n=12)	(人)	9	1	2	0	0
	(%)	75	8	17	0	0
2. 特別養護老人ホーム (n=24) (介護老人福祉施設)	(人)	19	1	4	0	0
	(%)	79	4	17	0	0
3. 養護老人ホーム (n=4)	(人)	1	0	2	0	1
	(%)	25	0	50	0	25
4. 障害者施設 (n=8)	(人)	5	0	3	0	0
	(%)	62	0	38	0	0
5. その他の施設 (n=5)	(人)	3	0	1	1	0
	(%)	60	0	20	20	0

『調査項目 利用者の体調を生化学的検査の数値以外(皮膚の状態、主観的な事柄など)から観察はしているか』について、「はい」は全施設で63%、最も高い割合だったのは特別養護老人ホームの75%、次いで介護老人保健施設の66%、障害者施設の62%、その他の施設の40%、養護老人ホームでは0%であった。「いいえ」は、全施設で9%と全調査項目の中で最も高い割合だった(表11)。

『調査項目 利用者の全体の様子、普段の食生活等を踏まえて食事を提供しているか』については、「はい」は全施設で79%と全調査項目の中で最も高い割合であり、養護老人ホームでは100%、介護老人保健施設で92%、特別養護老人ホームと障害者施設で各75%、その他の施設で60%であった。「いいえ」および「分からない」は全施設で0%であった(表12)。

表11 調査項目の結果

		はい	いいえ	どちらとも言えない	分からない	無回答
全施設 (n=53)	(人)	33	5	14	1	0
	(%)	63	9	26	2	0
1. 介護老人保健施設 (n=12)	(人)	8	2	2	0	0
	(%)	66	17	17	0	0
2. 特別養護老人ホーム (n=24) (介護老人福祉施設)	(人)	18	0	5	1	0
	(%)	75	0	21	4	0
3. 養護老人ホーム (n=4)	(人)	0	1	3	0	0
	(%)	0	25	75	0	0
4. 障害者施設 (n=8)	(人)	5	1	2	0	0
	(%)	62	13	25	0	0
5. その他の施設 (n=5)	(人)	2	1	2	0	0
	(%)	40	20	40	0	0

表12 調査項目の結果

		はい	いいえ	どちらとも言えない	分からない	無回答
全施設 (n=53)	(人)	42	0	9	0	2
	(%)	79	0	17	0	4
1. 介護老人保健施設 (n=12)	(人)	11	0	1	0	0
	(%)	92	0	8	0	0
2. 特別養護老人ホーム (n=24) (介護老人福祉施設)	(人)	18	0	5	0	1
	(%)	75	0	21	0	4
3. 養護老人ホーム (n=4)	(人)	4	0	0	0	0
	(%)	100	0	0	0	0
4. 障害者施設 (n=8)	(人)	6	0	2	0	0
	(%)	75	0	25	0	0
5. その他の施設 (n=5)	(人)	3	0	1	0	1
	(%)	60	0	20	0	20

回答が「はい」ならば適切を意味するので、回答が「はい」以外ならば適切とは言えないことを意味する。よって、回答の「はい」以外の割合が高かった調査項目ほど改善の必要性が高いと考えられた。

全施設の結果で「はい」以外の割合が最も高かったのは『調査項目 末梢静脈栄養、中心静脈栄養管理、経腸栄養補給の投与栄養量は適切だと思うか』の63%であった。2番目は『調査項目 嚥下障害の状態を把握し、それに適した食事や栄養を提供していると思うか』の48%、3番目は『調査項目 薬物の副作用や相互作用が及ぼすことについて適切な対応をしていると思うか』の43%であった。これら、

、 の「はい」以外の割合には、「分からない」と回答した者も含まれている。「分からない」は、状況が確認できない環境、または知識不足のため状況が判断できないと解釈されるので、状況が確認できる体制の整備と知識および技術の向上を図ることも必要だと考えられる。以上の結果から、秋田県の高齢者施設および福祉施設における QOL を考慮した栄養支援を行うためには、特に非経口栄養法（静脈栄養および経腸栄養）の投与栄養量、嚥下障害に対する支援および薬物の副作用や相互作用が及ぼす影響への対応で改善の必要性が高いことが明らかになった。これらには、高齢や障害、疾病および心理的問題など様々な要因が複雑に関連している。よって、全身の状態や施設利用者の人生観なども十分に考慮した上で対応しなければならない。また、近年 NST (Nutrition support team : 栄養サポートチーム)^{注6)}の編成が増加するに伴い、管理栄養士や栄養士が多職種と連携し関与する機会が増えている事でもある。ただし、これまで栄養士が関与する機会が非常に少なかった事でもあるので、十分な知識および技術を習得し適切な対応ができるよう万全を期しておく必要がある。

注6) NST (Nutrition support team : 栄養サポートチーム) : 医師、薬剤師、看護師、理学療法士、作業療法士、管理栄養士等でチームを編成し患者に対して適切な栄養管理を行うチーム医療。

・ 結 語

今回の調査では、施設の種類により調査対象者数にばらつきがあったが、秋田県の高齢者施設および福祉施設における栄養支援の実態をおおむね把握でき、また、改善すべき点を知ることができた。今後は今回の調査結果を基に、施設や利用者の特性に合わせた具体的対策を検査値等も用いながら客観的に検討していきたい。

謝 辞

アンケート調査を行うにあたりご協力くださいました秋田県栄養士会古宇田靖子会長および秋田県栄養士会福祉栄養士協議会会員の皆様、貴重な情報²⁾をご提供くださいました独立行政法人国立健康・栄養研究所草間かおる先生、調査結果をまとめるにあたりご指導ご助言くださいました秋田栄養短期大学佐藤実先生およびノースアジア大学総合研究センター橋元志保先生へ心より感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 瓦林信子, 巴 美樹, 小松龍史, 山本 茂 : 後期高齢入所者における栄養状態の評価に基づいた栄養管理の効果に関する研究, <http://www.dietitian.or.jp/topics/topics020731-0100.html>, (2002)
- 2) 独立行政法人国立健康・栄養研究所 : 高齢者福祉施設等における栄養および給食管理～その課題と今後のあり方～ (平成15年高齢者の栄養・食生活ガイドライン作成事業 : 厚生労働省請負事業), p.1, p73-92, (2004)

教養・文化研究所所員名簿

教養部

堀川 静 夫 (所長)
福山 裕 (運営委員)
稲本 俊 輝
伊藤 護 朗 (運営委員)
遠藤 純 男
小山内 幸 治 (編集委員)
瀬田川 昌 裕
和田 寛 伸
庄 司 信 (編集委員)
松村 岳 志 (運営委員)
湯川 崇
ランディ・ケイ・チェケツツ
渡部 勇
佐々木 久 吾 (編集委員)
橋元 志 保 (運営委員)

法学部

吉野 篤
上村 康 之 (編集委員)

総合研究センター

西山 亨

2008年 (平成20年) 3月31日現在

執筆 者 紹 介

講 演			
小 泉	健	ノースアジア大学理事長・学長・総合研究センター長	
道 端	忠 孝	ノースアジア大学法学部長・総合研究センター国際観光研究所長	
小 沢	健 市	立教大学観光研究所長・観光学部教授	
泉	正 史	ノースアジア大学総合研究センター国際観光研究所顧問	
本 山	茂 樹	ノースアジア大学総合研究センター客員教授	
田 口	久 義	ノースアジア大学総合研究センター国際観光研究所顧問	
福 岡	政 行	ノースアジア大学総合研究センター客員教授	
石 川	好 子	ノースアジア大学総合研究センター客員教授	
内 館	牧 子	ノースアジア大学総合研究センター客員教授	
資 料 紹 介			
松 村	岳 志	元ノースアジア大学教養部准教授	
論 文			
平	辰 彦	秋田栄養短期大学准教授	
実践報告			
高 橋	和 幸	秋田看護福祉大学看護福祉学部社会福祉学科講師	
論 文			
奈 良	洋	ノースアジア大学総合研究センター主任研究員	
研究ノート			
法 吉	千佳子	ノースアジア大学総合研究センター研究員	

(掲載順)

教養・文化論集 第3巻 第2号 (通巻第5号)

2008年(平成20年)3月31日印刷・発行

編集・発行 ノースアジア大学 総合研究センター 教養・文化研究所

秋田市下北手桜字守沢46-1

電話 018-836-6592

FAX 018-836-6530

URL <http://www.nau.ac.jp/center/>

印刷 秋田活版印刷株式会社

秋田市寺内字三千刈110-1

電話 018-888-3500(代)

THE BULLETIN OF CULTURAL SCIENCES

Vol.3, No.2 (5) March, 2008

CONTENTS

- Lectures**
 Proceedings of the Symposium :
 "Putting a Prefecture on the Map as a Tourist Destination and Human Training"
 Keynote Address :
 Tourismology will change the Present State of Affairs in Akita.
OZAWA Kenichi
- Proceedings of the Panel Discussion :
 The Advancement of Tourism and Human Training KOIZUMI Ken
 MICHIHATA Tadayoshi
 IZUMI Masashi
 OZAWA Kenichi
 MOTOYAMA Shigeeki
 TAGUCHI Hisanori
- On the Relations with China KOIZUMI Ken
 FUKUOKA Masayuki
 ISHIKAWA Yoshimi
- The Life Cycles (Birth, Sickness, Old Age, Death) of Men and Women :
 The Way of Life and the Way of Death as seen on TV Plays
UCHIDATE Makiko
- Whatever will become of Japan in 2008?FUKUOKA Masayuki
- Material Introduction**
 A Revolt of Semenovskii Guard RegimentMATSUMURA Takeshi
- Articles**
 Comparative Studies on the Masked and Costumed Visitors :
 The Formative Background to the Rituals of the Namahage Type
TAIRA Tatsuhiko
- Investigative Reports**
 Report of Investigation through an Interview with Inhabitants to Perform
 Positively 'Health Promoting Activities' Involving all the Dwellers of Local
 Community & the Effects Memoir Assembly Has on their Awareness of the
 Activities (Part2)
 Taking as an Instance the Activities to Spread 'Kenko no Eki', or Network
 of Health Care Station, in Nishinaruse, Matsuda Town, Yokote City
TAKAHASHI Kazuyuki
 GANPO Hironori
 SATO Manabu
 MATSUKAWA Takashi
- Articles**
 An Approach to the Community Reactivation by the Possible Countermeasures
 to the Global Warming
 Verification of the approaches in Akita PrefectureNARA Hiroshi
- Research Note**
 The investigation into the actual condition of the nutrition support in the
 advanced age person institutions and welfare institutions in Akita Prefecture
NORIYOSHI Chikako

The Institute of Cultural Sciences
 North Asia University, Akita, Japan